

BLEACH ~Higher Than
That Moon~

虹搜索隊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生、ハーレム、チート、クロスオーバーなし。

ただのBLEACH続編オリジナルストーリーです。

オリ主タグ付いておりますが、オリ主ではなくオリ敵が出ます。

原作最終回以降の続編になります。

平穩が訪れた尸魂界、現世、虚圏。その平穩を揺るがす新たな勢力《ノヴァディオ》。過去から現在へと物語を繋げる一人の研究者。そして新旧世代を巻き込む事件が物語を加速させる。

B L E A C H 　　↳ H i g h e r 　　T h a n 　　T h a t 　　M o o n 　　↳

原作、小説、アニメ既読推奨ですが、わからない方も楽しく読んでいただけるよう改定していく予定です。

外伝も書いています。

評価、感想等頂けると嬉しさでブーストがかかって投稿頻度が上がる可能性があります。

よろしくお願い致します。

卍解のバーゲンセール。

目次

プロローグ

The other Mad Moon

1

第1章 反逆の研究者

第1話 The Mad Dust

Rebellion 8

第2話 The Deathber

y and The Quince

27

第3話 Quince To 15

Quince) 53

第4話 Re : Turn Back

k The Pendulum 75

第5話 UNMASKED 92

第6話 Monster and a

transformation

109

第7話 悪意沸沸(アクイフツフツ)諧

謔(カイギヤク)ノ極(キワ)ミ

126

第8話 The Third Moon

n 145

第9話 Bleach my hor

row soul 162

第10話 Lance with S

270	第3話	Memories of	245
	第2話	Born from the	225
	第1話	The Moon high	
	第2章	第三の月	
		THE STORM	219
	第12話	GET BACK FRO	
197	第11話	The Battle	182
		now white	

	第9話	Passing thro	360
	第8話	Whose Memorie	342
	第7話	Sword of origi	329
	第6話	Time Limit	310
	第5話	Princes and	290
	第4話	時雨(しぐれ)・鉄球(てつきゅう) う)・柘榴(ざくろ)・黒猫(くろねこ)・群 狼(ぐんろう)	
		Dragon Swallow	
		3 days	
		n, Hole in my hear	
		s ?	

ACH WARRARE	第1話 Start THE BLE	449	gh t s	第10話 鬼道の始祖と呼ばれた死神	374	gh o n e t h o u s a n d n i
	第3章 空座町迎撃戦(前編)	444				
			登場人物く現世く	436		
			登場人物く虚圏(ウエコムンド)	426		
			登場人物く尸魂界く	415		
			登場人物く現世く	397		
			第1話 Before THE B			
			第2話 The Blade is			
			第3話 霊王の右手と右脚	479		
			第4話 仇敵(きゆうてき) 憎し海淵	458		
			(かいえん)の如し			
			第5話 その花振(はなねじ)れど咲き	499		
			て勇(いさ)まし			
			第6話 Swear by the	519		
			honor of the Quinc			
			第7話 A Road the Wh	544		
			ite Ogre Walked			
			Me			
			You and You are			

第8話	Pride of nobility	681	第14話	寄り添う心	706
第9話	慟哭のバウント	595	第15話	八代目剣八の誇り	718
第10話	LAMEJOR SUE	617	第16話	Cien to Octa	732
RTE (史上最高にツイてる)		617	第17話	My Spirit Is	753
接続章			No Longer With You		
Extra I		649	第18話	集いゆく星々の為の幻想曲	763
Extra II		662	第19話	神の視座にて記憶を論ず	769
第11話	0°C	681	第20話	Vice it agai	
第12話	雷鳴の彼方へ	769			
第13話	Fade to Reva				

Extra III	864	接続章	856	第三勢力	846	第24話 進化の定義	828	登場人物	814	第23話 Re:Re:Turn	798	第22話 Can't Fear My Own World	786	第21話 DECIDE
-----------	-----	-----	-----	------	-----	------------	-----	------	-----	-----------------	-----	------------------------------	-----	-------------

第6話 Bloom of Death	932	第5話 新芽の開花	923	第4話 血に染まらぬ道の先	914	第3話 ノヴァディオと滅却師	900	第2話 お前の希望は背後に迫る	891	第1話 No one can change my world	884	第5章 救世	878	Extra IV	870
--------------------	-----	-----------	-----	---------------	-----	----------------	-----	-----------------	-----	--------------------------------	-----	--------	-----	----------	-----

h b e r r y | 939

外伝く戦場に咲く蓮華草く

第7話 Gear | 948

戦場に咲く蓮華草①

外伝

戦場に咲く蓮華草②

The Rain Dragon a

戦場に咲く蓮華草③

nd The Thunder Wit

戦場に咲く蓮華草④

ch① | 956

戦場に咲く蓮華草⑤

The Rain Dragon a

nd The Thunder Wit

ch② | 983

The name of our

a u g h t e r | 1013

外伝く剣術大会く

戦力外副隊長達の憂鬱① | 1023

プロローグ

The other Mad Moon

隠密機動第三分隊檻理隊。

澁霊廷内で罪を犯したものを投獄・監督する。

檻理隊にはもう一種類、『特別檻理隊』というものがある。

それは護廷十三隊に入隊したものの思想や行動において他の死神に危険を及ぼす、又は隊の業務に支障を来す恐れがあると判断される隊員を調査・捕縛し管理下に置くこと。

つまり、護廷十三隊内の危険分子を閉じ込めておくことである。

その施設は地下特別管理棟と呼ばれ、二番隊隊舎敷地内北西、幅三十間の巨大な堀の

奥に位置する。

通称『蛆虫の巢』である。

く 蛆虫の巢、独房く

「なぜ私ではないんだ。」

「やつより私の方が優れているはずだ。」

「浦原喜助め、私ではなくやつを選ぶとは万死に値する。」

「ずつと考えていた。なぜやつなのか。」

「なぜ蛆虫の巢出身のあいつなのか。」

「そして修多羅千手丸、藍染惣右介、お前らもだ、、、」

「ずつと考えていた。なぜ自分がここにいいのか。」

「なぜ忌み嫌っていた蛆虫の巢に閉じ込められているのか。」

「復讐してやる。」

その願いがどこぞの神に届いたからなのか、約80年の時を経てその機会がやってきた。

後に霊王護神大戦と呼ばれる死神と滅却師の戦争。

滅却師は瞬く間に尸魂界全土を攻略し死神を殲滅していった。

そしてここ、蛆虫の巣も襲撃を受けこの男は息子とともに逃げる事ができた。

彼の妻は蛆虫の巣に一家全員で収容された1ヶ月後、生活に慣れることが出来ず自ら命を絶っていた。

「滅却師に感謝せねばな。こんなところまで襲撃してくれるとは。」

男は戦死した滅却師の服を奪い、まず息子に着せその後自分も身に纏った。

向かうところは決まっていた。

十二番隊隊舎技術開発局。

かつて自分もいた隊舎を見て妙な高揚感を覚えた。

「十二番隊舎もこの有様か。変わり果てたな。いい気味だ。」

崩れた隊舎を見渡しながら歩みを進める。

「さあ、涅の資料だな。」

男は局長室前まで来ると手慣れた様子で局長室の鍵を開ける。

部屋へ入ると無傷のまま生き残っていた局長室内のパソコンをつける。

そして必要なデータを探し始める。

面白いデータはいくつか見つけた。

「ほう、王印移遷中に襲撃を受けたのか。」

「このデータも使えそうだ。」

そのファイルは《王印による虚圏への再構築》と題されていた。

さらにデータを探ると、《浦原喜助送信データ》というファイルを発見する。

「これは浦原喜助からの資料か？」

藍染惣右介の反乱後、浦原と涅は協力関係が僅かながら構築されていた。とは言ってもほとんどが浦原からの一方通行だったのだが。

《崩玉データ涅さんへ》

男は怪訝そうな面持ちでファイルを開く。

「浦原喜助、こんな物を開発するとは、、、なるほど。」

「境界を取り払う、、、」

「それが、、、崩玉。」

「復讐だ。」

「なぜだ！なぜうまくいかない!!」

「死神と滅却師との境界は取り払っても魂魄が耐えきれず消滅してしまう。」

「どうすれば、、、。」

その時あるフアイルを思い出す。

《王印による虚^{ウエコムンド}圈への再構築》

「消滅する前に光を浴びせ再構築できれば。」

「成功だ!!!」

「やはり王印と魂魄の強さが鍵だったか。」

「強魂魄を集めなければ。」

「滅却師の残党か。やってみる価値はある。」

「あとは、この虚^{ホロリ}、破面^{アランカル}、思念珠^{しねんじゆ}か。」

「面白くなりそうだ。」

「待っている涅マユリ。」

「この仙波逸ノ将がお前を必ず地に墮とす。」

B
L
E
A
C
H
 \
H
i
g
h
e
r
 T
h
a
n
 T
h
a
t
 M
o
o
n
 \

第1章 反逆の研究者

第1話 The Mad Dust Rebellion

すっかりと日が落ち一部屋だけぼつりと明かりが灯る隊長執務室で、十三番隊隊長朽木ルキアは隊長印を押し終えた書類を手に取り整える。

「今日も遅くなってしまったな。恋次はもう帰っているだろうか？」
「梅花も寂しがっていなければいいが、。」

ルキアの夫、阿散井恋次は六番隊副隊長、自身の義兄であり六番隊隊長の朽木白哉を支える六番隊のナンバー2だった。

隊長格夫婦である阿散井夫妻は帰宅が遅くなることも少なくなき、遅くなる際は娘の

蓼花を朽木家の侍女、ちよに任せていた。

「明日は蓼花の誕生日だと言うのに、。。。」

この忙しさの理由はつい先日、護廷十三隊総隊長の京楽春水がしたある提案によるものだった。

～1週間前～

「あ、ルキアちゃん！」

一番隊隊舎廊下で呼び止められたルキアは声のする方に振り返る。

「総隊長殿！」

総隊長と呼ばれる無精髭に眼帯、そして女物の花柄の羽織、長い髪を簪かんざしで止めた男が困ったように答えた。

「殿はいらぬいよ。こつちもかしこまつちやうからねえ。」

「は、はあ。すみません。」

「それでね、ルキアちゃんにお願いしたいことがあつてさ。」

「なんででしょう?」

「今まで現世の有事は十三番隊隊士と死神代行で対応してただろう?」

くるまだにぜんのすけ
車谷善之助

まだらめしの
斑目志乃

ゆきりゆうのすけ
行木竜之介

そして自分。

言いたくはないが、自分を含め歴代空座町担当からくらちやうは実力的に任務を全うしきれていたかどうか疑問が残る戦力だった。

「空座町は重霊地だし、色々と事件が多いところだし人数とある程度の戦力は必要だ。」

重霊地とは平たく言えば霊的なものが多く集まる場所のことだ。

アランカル
破面の襲撃

空座町での藍染との決戦

八代目剣八や元エスパーダとの戦闘

クインシー
滅却師側破面の襲撃

そして四大貴族綱彌つなやしろ代家の騒動

ルキアはかつて空座町で起きた戦闘を思い起こしていた。

「それで、十三番隊の直轄で現世部隊を作ろうかと思ってるんだ。」

「な、なぜ十三番隊が、？」

「浮竹は死神代行のことを誰よりも気にしていたからね。浮竹の意志を継ぐルキアちゃんに適任じゃないかなと思つてね。」

「まあ一護くんたちと一番仲がいいのもルキアちゃんだしね！」

「それでルキアちゃんにお願いできないかな、と思つて。」

浮竹の意志を継ぐという言葉がルキアは嬉しくて誇らしくてたまらなかつた。

「は、はい！是非やらせてください！」

隊長に就任してまだ経験の浅いルキアは、隊長としての初の大仕事に胸を躍らせていた。

と、快諾はしたものの、やはり前例のないことをするには多大な労力が必要となつた。

各隊長からの部隊長推薦書や現世の虚による被害データなど揃えなければならない書類は山のようにある。

「推薦書は隊長7人からか、、、。」

一通は僕が書くからさ！

ルキアは京楽の言葉を思い出していた。

「兄様、平子隊長、鳳橋隊長、六車隊長、矢胴丸隊長は推薦書を作ってくださいるとは言っていたが、、」

「あと1人か、、、。」

「日番谷隊長ならきつと引き受けてくれるはず、、」

「それか更木隊長に現世部隊も隊対抗剣術大会に参加するようになる、と言えばきつ

と、！」

「ふう、。。。」

ついたため息が漏れる。

「俺ならいいぞ。」

「うわあああああ！ひ、日番谷隊長!？」

日番谷は腕組みをし、隊長執務室入口にもたれかかっていた。

「すまん、戸が開いていたからな。」

「黒崎の現世部隊の件だろ？引き受けよう。」

日番谷はルキアの事務机に近づく。

「草冠くさかの件でやつには世話になったからな。」

草冠宗次郎くさかそうじろうとは日番谷の中央霊術院時代の同期であり、氷輪丸を巡って二度も日番谷と対峙した男である。

「あ、ありがとうございます!!」

ルキアは深々と頭を下げた。

「日番谷隊長はどうしてこちらへ？」

「それも草冠の件と少し関係があるんだが、、、。」

「今年は王印移遷の年だ。この間は十番隊が、いや、俺が失敗させたからそれを取り戻そうとな。」

王印は10年に一度保管場所を移遷することとなっていた。

前回は日番谷率いる十番隊が警備を担当していたのだが、そこを草冠に襲われ王印を奪われたのだった。

「では今回も十番隊が警備をされるのですね!」

「いや、四十六室の許可は下りなかった。」

「だが京楽が掛け合ってくれたおかげで、2つの隊が主に警備をし、その補助という形で十番隊も就くことになった。」

「俺のせいでこんなことになったからな。警備に当たってくれる隊を探してるんだ。」

「朽木は忙しそうだな。」

「申し訳ありません、！」

ルキアは深々と頭を下げた。

「いや、いいんだ。朽木に頼んでみる。」

「日番谷隊長、それはそろそろややこしいのでは、、、？」

日番谷は誰に頼もうかと考えにふけり始める。

「後一人は、、、」

〜王印移遷警備本部〜

「ほんでなんでおれらなんや！」

「隊長！駄々こねないでください！」

五番隊副隊長の雛森桃は金髪おかつぱ頭の隊長、平子真子ひらこしんじと言い合いをしていた。

「なんやと桃！お前が幼馴染のなんやらで依頼受けたんやろ!？」

「幼馴染なのは今回は関係ありません!!」

「しろちゃん、いや、日番谷隊長は」

「いや、しろちゃん言うてるやん。思いつきし幼馴染のよしみやん。」

「なあ白哉坊!?!」

同じ警備部隊となった六番隊隊長、朽木白哉に賛同してくれと言わんばかりに話を振るが、

「貴様にそう呼ばれる筋合いはない。」

「なんでや! 夜一やったらええんか! お前実は夜一嫌いやないやろ!?!」

「それにお前こそ《貴様》て、俺大先輩やぞ!?!」

「隊長、もうよしてください!」

両手で変顔を作り白哉を威嚇する平子を雛森が必死に制止していた。

「てかお前いつまで恋次手放さへんねん! 普通に考えたらあいつ隊長やろ! 俺引退させろや!」

面倒くさいと思ったのか白哉はそそくさとその場を後にする。

「もう！朽木隊長怒っちゃったじゃないですか！」

雛森は呆れたように平子を責めている。

「へーい、すまへーん。」

またもや平子は変顔をしていた。

「隊長!!!」

そんなやりとりをしていると十番隊の松本乱菊が平子の元を訪れる。

「平子隊長、雛森！」

「乱菊さん!!!」

「おう、松本！どしたんや？俺に会いに来たんか？」

「配置完了しました。」

「華麗にスルーしよったで。」

無視された平子は雛森の方に向き直り助けを求めるが、

「しろちゃ、日番谷隊長は？」

「すぐく気合入ってるわよー！」

「うちとしても今回はきちんとやり遂げたいしね！」

雛森にも完全に無視され平子は空気と化していた。

「おれ、大先輩で隊長のはずなんやけどな、…。」

そして警備が始まり3時間が経とうとしていた。

「順調ですね。」

平子は呑気に小指で鼻くそをほじっていた。

「普通はなんも起こりよらんねん。」

「なんやあの草冠とかいうのんが、」

「!!」

能天気には喋っていた平子だが、不穏な霊圧を捉え目の色を変える。

「なんやこの霊圧、、？」

次の瞬間、遙か彼方から一閃の光が走る。

「うそ、、、やろ、、？」

何が起こったか理解できてはいなかったが、王印を運ぶ神輿が無残にも燃え上がっていることだけは認識できた。

そして上方に目をやると、燃え上がる神輿の上に死覇装で虚化のような仮面をつけた者が佇んでいた。

その仮面は左右対称に6本の黒い線とも、穴ともとれるような横線が伸びていた。

「お前誰やー！」

「平子ー！」

一瞬で日番谷が駆けつける。

「こいつが神輿やりよったんか!？」

平子は既に斬魄刀を抜いていた。

「此奴は一体、？」

白哉も一歩遅れて平子たちの元へ来る。

日番谷はその姿に目を疑う。

見たことのある仮面と状況。

「お前、その姿、。」

うそだ。

あいつはおれの目の前で消滅したはずだ。

「そう。私は、」

「草冠宗次郎」

「久しぶりだな、日番谷。」

To be continued...

死神図鑑ゴージャス

「今日はこの私朽木ルキアが現世担当を紹介するぞ！」

「まずはこの私、十三番隊隊長朽木ルキア！」

「そして朽木女史が霊力療養に入ってから藍染投獄までがこの私、現十三番隊第五席車
谷善之助だ！」

／よっ、イモヤマさん／

「誰だ今煽ったのは!? わかった! 黒崎一護だな!」

「そして滅却師との戦争前くらいからが私たち、斑目志乃と、
「行木竜之介です!」

「お早う! 土鯨!」

「黒崎一護! 私をイジるのはやめろ!!」

「え? アフさんじゃないの?」

「黒崎! お前達、夫婦でまともに覚えてないのか!」

「以上が現世担当だ! それではまた次回に!!」

「おい! 待てこの私で笑いを取る感じで終わるな!」

「さよなら」

〈収録後楽屋〉

「おれも現世担当（鏡野市）だったんだけどなあ、」

「あ—————！」

〈 f i n 〉

第2話 The Deathberry and The Quince

〔黒崎医院〕

「え？おれが護廷十三隊に？」

白衣を着た一護は驚きのあまり聞き返してしまう。

「護廷十三隊と言っても現世部隊だ。今までの死神代行の権限が昇華したものになる。」

「やだね。めんどくせえだろ。それにおれはここも経営してんだ。一勇もいるし。」

ルキアは現世部隊組織政策のため黒崎家を訪れていた。

一護は快諾してくれると予想していたが、思った以上に食いつきが悪かったためルキ

アはある切り札を使うことにする。

「現世部隊には石田や茶渡、銀城、月島、そして破面たちも入ってもらおうと思つて
いる。」

「あいつらも!?!」

「護廷隊に入るということは、我々はあやつらにも不利益は与えられない、ということ
だ。」

「てめつ、人質みたいにしやがって、、、。」

「あく、わかつたよ!やりやいいんだろ!」

一護は観念したように短い髪をガシガシと掻き毟っている。

15分程が経ち、一護とルキアは病院から自宅の居間へと場所を移し手続きをしてい
た。

「ではここに署名押印しろ。」

一護は言われるがまま名前を書き終えると、印鑑を手にとった。

「ちなみに現世部隊は十三番隊の直轄だ。」

ルキアは満面の笑みを浮かべている。

一護は印鑑を押す瞬間集中していたせいか、理解するのに時間がかかってしまった。

そして押し終えてルキアの言った意味を理解する。

「それっておまえ、」

「そう、私の部下ということだ！」

「フハハハハ！」

「ルキアてめえ！」

織姫がお茶を淹れ居間に入ってくる。

「どうぞ、ルキアちゃん。これリルカちゃんがプロデュースしてる紅茶なの。」

かつて一護は完現術者フルプリンガーと呼ばれる《物質の魂を操る能力》を持つ人間の集まり、エクスキューションXCUTIONに出入りしていた。

その中の完現術者の一人、毒ヶ峰どくがみねリルカはデザイナーとなり、色々なものをプロデュースしていた。

「どうしたの？紅茶嫌いだった？」

紅茶を差し出されそう言われたルキアは織姫の目を見ることなく、、、。

「い、いや、そんなことはない。すまん、お、お、織姫、、、。」

「なんだルキアおまえ、まだ恥ずかしがってんのか？」

ルキアと織姫はお互い結婚で名字が変わったことをキツカケに下の名前で呼ぶようにしていたのだった。

「まだ違和感が、、、。」

「たしかに！ずっと朽木さんだったから、ちゃん付けは変な感じするよ。」

織姫は一護の手元にある署名押印した書類に目をやる。

「あ！あなた結局現世部隊やるの？」

「仕方ないだろ、。他の奴のことも考えたらやるしかねえ。」

「頑張ってね！」

織姫は全力のガッツポーズを一護に向けた。

「それでそっちはどうなんだ？」

一護としても最近の尸魂界の情報は気になっていた。

ルキアは肩をすくめ、一呼吸置くと呟くように話し始めた。

「実は、。また王印が奪取された。」

「またかよ！もしかしてまた、」

日番谷冬獅郎が一護の頭に浮かぶ。

「少し複雑だな。草冠を名乗る草冠ではない者が首謀者だと言われている。」

「草冠のフリをしてやがるのか！それで冬獅郎は、、、。」

「日番谷隊長は草冠を侮辱するようなことをされたんだ。らしくないが激昂して犯人を探している。」

「冬獅郎も一人で突っ走らなきゃいいが、、、なんだ、、？この霊圧は、、、」

感じたことのない霊圧が空座町に走り渡る。

「これは、、、滅却師に近い？」

ルキアは感覚を鋭くし霊圧を探っている。

そして一番最初に気づいたのは母親だからだろうか、織姫だった。

「一勇もいる！」

く公園く

「うわっ、なに？」

死覇装姿の一勇は突然目の前に現れた見知らぬ霊圧の男に戸惑っていた。

その男は白を基調としたコートと軍服を合わせたようなものを身につけており、胸のあたりにには十字架の模様があしらわれている。

「力を試して来いと言われてもと思っていたが、ちょうどよく死神に会うとは。」

「子供だが力試しにはいいだろう。」

男は手を顔の方に当てがうと、引っ搔くように手を上へと動かす。

「これが虚の力か、！力が湧き出る!!」

男の顔を虚の仮面が覆い、まるで水の中で喋っているかのような声となる。

男は青色の弓を発現させ霊子で矢を作る。

「やはり虚の力も入っているのか。」

そう言うと男は矢を一勇に向け放つ。

「わわわっ?」

速度のある矢は一直線に一勇へと向かう。

一勇はその速度に対応できず、直撃すると目をつぶった。

もうダメだ！当たる！

あれ？

一勇は気づくと誰かに抱えられていた。

「石田のおじさん!!」

「おじさん、ゝ？か、一勇君、大丈夫かい？」

石田はおじさんと呼ばれたことに少しショックを受けつつも一勇を気遣う。

「うん！大丈夫だよ！」

石田は一勇を抱えたまま上空に佇む敵を見上げた。

「(あの軍服、ゝ。)

「一勇君、一旦降ろすよ？」

「うん！」

一勇に見せた優しい顔を一変させ男に向き直る。

「お前滅却師か？」

石田が弓を引きながら問いかける。

「その通りだ、滅却師の裏切り者石田雨竜。」

「なるほど、残党か。」

「それでその仮面は何なんだ？虚の真似事かい？」

「ふつ、今やおれは一番進化した滅却師だ！」

「これがわかるか!？」

男は石田に向かい矢を放つが、石田はその靈圧に違和感を覚える。

「虚閃!？」

石田は矢を放ち相手の攻撃と相殺させる。

「これはどうだ!？」

さらに相手は攻撃を仕掛けてくる。

「くっ、速い、！虚弾か、！」

何発も放たれた虚弾が一勇に当たると判断した石田は一勇を抱え飛廉脚で逃げ回る。

「おらおらおらああ!!」

矢の形状をした虚弾が石田達を襲う。

「いつまで逃げてんだ？オラ!!」

「こっちは湧き出るほど霊子があるんだ、我慢比べなら受けて立つぜ!!」

石田は一勇を持ち上げ頭の上を通し背中に移動させる。

「一勇君、僕の背中に捕まって!」

手が空いた石田は腰の後ろにある一本の矢を取り出し弓に充てがう。

「逃げてるだけだと思ったか?」

そう言うと石田は男に向け矢を放つ。

「虚弾の間を縫ってくるとは流石だ、、、が、残念だったな!」

男の皮膚には大きく輝く青い線模様が走っていた。

「静血装だろ?分かってるさ。どうせそれも強化されているんだろ?」

石田の放った矢は男に直撃する寸前で止まり四方に光の線を放ち始める。

「ゲルトシユランク封庫滅陣！」

光の線は立方体となり、青い半透明の霊子の箱が男を包み込む。

そして石田はその様子を見ながら銀筒を取り出し手の上で転がしていた。

「霊子が溢れすぎて使ってくださいと言ってるようなもので、虚の力に飲まれた元滅却師。」

手から弾かれた銀筒は立方体を形作る矢に当たり、霊子の箱は収縮を始める。

「クソがつー！このまま潰されてたまるか!!」

男は収縮する霊子の箱に潰されないよう霊圧を放ち続ける。

「オラアアアアアアアア！」

霊子の箱を包む青白い光が増していく。

ドゴーーーーー

轟音を立てて大爆発を起こす。

そしてあたりに白煙が立ち込める。

白煙が晴れると満足そうな顔をした男が仁王立ちしていた。

「こりやすげえ、全く効かないなあ。」

「なかなか硬いじゃないか、。」

石田は額から冷や汗を流している。

次の策を思い巡らせていると、石田の後方から聞きなれない関西弁が聞こえてきた。

「おらあ！ハゲ喜助！早よこんかい！」

「分かってますつてば、。。。」

「おまえ一勇がやばいねんぞ!?気合い入れんかいポケエ！」

そばかすに八重歯、そしてツインテールの少女が浦原商店店主、浦原喜助の背中を小突いている。

「あ、痛つ、、、すみませくん、石田さん。遅くなりましたして。」

「どうやら滅却師の生き残りさんみたいですねえ。」

浦原はその時折見せる鋭い眼光で相手を観察していた。

「浦原喜助か、。。。」

その男も滅却師の首領であるユーハバツハから聞かされていた。

死神側特記戦力の一人浦原喜助。

用心しなければならぬことをこの男は心得ていた。

「浦原喜助か、、、。ちやうわ!!!」

「なんでこいつだけやねん!!ウチは無視かコラアア!!」

無視されたことに苛立ちを隠しきれないその少女、猿柿ひよりは霊圧を上げ斬魄刀を抜いた。

「ぶった切れ! 鹹大、」
くひきりお

「月牙十字衝!!」

ひよりのはるか頭上で十字型の斬撃が相手に向かっていく。

「イ・シエンク・ツアイヒ盃よ西に傾け、ヴオルコール緑杯！」

男は咄嗟に銀色の筒を投げた。

ぶつかった銀筒は霊子の衝撃波を起こし月牙十字衝と相殺する。

「黒崎一護に朽木ルキアか。」

特記戦力の黒崎一護に、星十字騎士団のエス・ノトを一撃で破った朽木ルキア。

男はさすがに勝てないと察した。

「これは分が悪い。」

「あれは、、！」

男の横に出現した“もの”は本来滅却師が出現させることのできるものではなかった。

「黒腔、、ですか？」

浦原もその挙動を慎重に見つめている。

「じゃあな、裏切り者。」

男は石田にそう告げると暗闇の中へ消えていった。

「何者なんだ、、？」

ルキアには皆目見当もつかなかった。

浦原に聞くしかない、そう思っていたのだ。

「一勇！」

一護はすぐ様一勇のもとに駆けつけようとするが、

その横から猛スピードのなにかが一護にぶつかり、くの字に吹っ飛ばされる。

「おいコラ！一護！おまえウチがぶっ飛ばすところやったんやぞ!!」

「それをいいところ取りしやあがつて、なめくさつとつたらあかんで!!」

「痛えな!!!うるせえよ!!」

「だあれがうるさいじゃボケエ!!」

ひよりは解放途中で邪魔されたのに腹を立てていた。

「おい黒崎！一勇君を一人にするなといつも言ってるだろう！」

「次から次にやいやい言うな！」

「それはそうとあいつ滅却師とは微妙に違う霊圧してたな。あいつ見たことねえのか？」

一護は真剣な面持ちで石田に問う。

「星十字騎士団にはいなかったが、」

浦原は誰かと連絡を取った様子で携帯電話を耳から離していた。

「その話はうちでしましうか。駄菓子でも食べながら。」

（浦原商店）

「お帰りなさいませ店長。今日はまたたくさん来られましたな。」

「鉄裁さん、皆さんにお茶を。」

「かしこまりました。」

メガネをかけた筋骨隆々の男、握菱鉄裁は台所へと向かう。

「で、今回の相手ですが、おそらく虚化した滅却師でしょう。」

「崩玉を使ったのか、それとも別の何かを使ったのかは分かりませんが。」

浦原は先に座布団に座ると各人にも座るよう手で促した。

「つまり今回は魂魄の中の境界を取り除くということが鍵となります。」
「なので調査のためにある方々を呼んであります。そろそろ来る頃だと。」
「かつて崩玉で複数の境界を取り除いた人です。」

「複数の境界？」

一護は聞きなれない魂魄の中の境界という言葉が引つかかっていた。

「黒崎さんは死神、虚、滅却師、完現術のすべてが混ざり合っています。要するにもともと境界はなかったんです。」

「また平子さん達には崩玉を使い、死神と虚の境界を無くしました。」

浦原は以前まで崩玉は魂魄の中の境界を操ることのできる物だと思っていた。

しかし真の力は

自らの周囲に在るものの心を取り込み具現化する能力
であったのだ。

浦原はさらに説明を続ける。

「しかし中にはそれぞれの霊圧に枠組みがあり、境界線によって魂魄の中で区切られている人もいます。」

「1つの能力だけが開花し、他の能力が埋もれたままの可能性が。」

「おれの滅却師の能力みたいにか？」

「いえ、話を聞く限り黒崎さんは昔からありましたよ。」

「影の力や、月牙天衝も滅却師の霊圧を放つという点でも一致してますし。」

斬月から影の力や静血装の話は聞いていた。

しかし月牙天衝については言われてみればそうだと今更になって気づく。

「じゃあどうい、う、」

一護の言葉を遮るように鉄裁が戸から顔を出した。

「店長、お客様です。」

「着いたようですね。説明するより見たほうが早いかもしれません。」

「アタシはまた黒崎さんに謝らなければなりません。」

「だから一体誰なんだよ。」

一護はゆつくりと戸の方に振り返った。

その人物を見て一護は自身の目を疑う。

「なっ、っ、」

浦原は帽子を深く被り直し肩をすくめていた。

「か、夏梨、、、？」

T o b e c o n t i n u e d . . .

死神図鑑ゴージャス

ーークイズ メガネの中身はなんじやろなー

「やあやあみんな久しぶりだね。」

「石田雨竜復帰記念、まあいつもの通りここは初めて見た感じで僕の正体を当ててくれ。」

ピンポーン（二護）

「服が白いから白玉団子。」

「黒崎！いきなりふざけるな!!」

ピンポーン（チャド）

「メガ、」

ピンポーン（二護）

「服が白いから医者」

「そうなんだ、そうなんだけど、それじゃないんだ！」

ピンポーン（マユリ）

「外道」

「言われたー！先に言われたー！」

「ていうかなんでお前がいるんだ！そこは井上さんのほっこり回答だろ！」

ピンポーン（二護）

「服が白いからレンコン」

「黒崎！お前10年前と変わってないじゃないか！」

「完全にバカにしてるだろ！」

「銀嶺孔雀!!!」

ドカーーーーーー

〜 f i n 〜

第3話 Quince To 15 (Quince)

「か、夏梨、、、？」

「一兄、、、」

一護は浦原の胸ぐらを掴み鋭い語気で問いたです。

「どういふことだ!!」

「やめて一兄!!」

「これはあたしが頼んだことだからさ。」

「浦原さんには無理を言っちゃってやってもらってたし、親父にも許可は取ったんだ。」

浦原を掴む一護の手が少し緩む。

「親父が、？」

「二人ともに反対されたよ。あたしが力を持つこと。」

「けどあたしが親父に頭下げてお願いしたの。」

「戦いの最前線に立たないっていう条件でね。」

浦原はずれた帽子を被り直しながら夏梨に続く。

「その姿を見て一心サンも夏梨サンの望む通りにしようよ。」

「それでアタシがお貸ししたんです。崩玉を。」

「なんで親父は!!」

「自分の無力感に思い悩む夏梨サンを見て昔の自分と重ねたのでしょうか。」

浦原は一心がグラウンドフィッシャーを斬った後の事を思い出していた。

「夏梨が無力感、、、？」

「あの藍染ってやつとの戦いの後の一兄、正直見てられなかった。」

「一兄はあたしが霊見えるの気にしてたでしょ？」

「自分も見えれば虚と戦えるのに、みんなを守れるのにつて。」

「できることならあたしの霊力を一兄にあげたかった。一兄がルキアちゃんから死神の力をもらったって親父から聞いて、、、。」

「それで浦原さんから崩玉っていうのを借りて一兄の力になりたいって願ったら死神の力が開花した。」

「まあ結局別の方法で一兄は霊力が戻ったんだけどさ。」

ルキアはあの時一護に霊力を戻すため尸魂界を奔走したことを思い出す。

「実はさ一兄に霊力が無かった時、浦原さんに鍛えてもらってたんだ。死神として。」

「その時あたしの斬魄刀と対話して気づいたの。あたしの魂魄は区切られてるって。」

「その境界を取り除くために再度アタシが崩玉をお貸ししたんです。」

「なんで取り除くんだよ!?!」

「滅却師との戦いで役立つと踏んだからです。」

「意味わかんねえよ!」

「アタシは星十字騎士団から卍解を取り戻すため《侵影葉》という薬を開発しました。」

事実日番谷はこの薬のおかげで星十字騎士団の蒼都を破ることができた。

「これを使えば強制的に虚化させることができます。」

「実はこれ、夏梨サンの始解の能力を応用して作ったものなんです。」

「夏梨サンは斬魄刀との対話でその能力と、自身の魂魄には他の能力が眠っていると聞かされました。」

一護にはその他の能力がなんなのか分かっていた。

「虚と滅却師、、、」

「あたしの斬魄刀の能力は、自分の属性を他人に付与できる能力。」

浦原が夏梨の後に続く。

「つまり夏梨サンの虚の属性を付与する能力を参考にして作ったんです。」

「しかしそのためには境界をなくして霊圧を流し、死神以外の能力を目覚めさせなければならぬ。」

「そういう理由です。」

「だから一兄、浦原さんを責めないで。全部あたしが決めたことだから。」

一護は全身の力が一気に抜けた。

まさか自分の妹もこの危険な世界に入っていたとは。

そしてそれを知るのが10年も経った今だとは。

「そうか、、、すまねえ浦原さん、、、」

一護の手はすでに浦原から離れていた。

「ということ、これから夏梨さんの魂魄データを調べてみます。」

「それで黒崎サンと朽木サンに頼みたいことがあります。」

「蛆虫の巣で仙波という人を探してほしいんです。」

「蛆虫の巣でお前、、、」

ひよりは初めて蛆虫の巣に入った時のことを思い出す。

暗く不気味な雰囲気。

いきなり襲ってくる精神錯乱者。

今思い出しても異質な空間だった。

「蛆虫の巣？聞いたことないが。」

「二番隊とは無縁のルキアはその単語すら耳にしたことがなかった。」

「二番隊の管轄内にある危険分子たちが収容されてるところです。」

「夜一さんから碎蜂サン、あと看守の三席にも連絡してもらいますので。」

「わかった、今から向かおう。」

「よろしくお願いします。」

2人にだけ役割が振られひよりは面白くなさそうに喜助に問う。

「おいコラ、ウチはなんかないんか！」

「ないっす。」

「ん〜、〜、」

ひよりは少し考えて、

「よっしゃー！じゃあウチが蛆虫の巣を案内したるわ！」

「一番隊隊舎」

「日番谷くん、気にするなって言っても気にしちゃうと思うけどさ。日番谷くんの責任じゃないからね。」

京樂は一番隊に状況報告に来た日番谷を気遣う。

「やつは、、草冠じゃない、、。」

「日番谷君、、？」

「草冠は自分を私とは言わないし、俺を日番谷とは呼ばない。」

「そうかい、、。」

京樂は少し考えて、

「じゃあ犯人探しと行きますかあ！」

「涅槃長のところへ行ってみよう。」

「京楽、。。。」

京楽と日番谷は技術開発局へ向かう。

～技術開発局～

「たしかに霊圧自体は草冠のものとは違うネ。この瀧霊廷に該当者はいないヨ。」

「じゃあやっぱり日番谷君の言う通り、。。。」

「失礼します！」

局長室に凜とした女性の声が響き渡る。

「京楽隊長！行き先くらい教えてください！」

一番隊副隊長の伊勢七緒は少し息を切らせていた。

「七緒ちゃん、どしたの？そんな慌てて。」

「四十六室から呼び出しです。緊急で。」

「ええ、。。。」

く 一番隊隊舎く

「いや、悪いねえ、急に集まってもらって。」

「上が王印の奪還部隊を作れってうるさくてさあ。」

「こつちで指定させてもらったから呼ばれた人は奪還部隊として頼むよ。」

「平子隊長、六番隊朽木隊長、更木隊長、涅隊長、大前田副隊長、雛森副隊長、斑目副隊

長、四楓院三席、綾瀬川三席の9名、部隊長は平子隊長で。」

「ええ〜！うそやん!!」

「おれ綱彌代の時も出たやん！なんでおればつかやねん！ずっと暇なやつおるやろ！」

「やいやい言いなや真子。あんたが一番暇なんやからしやあないやろ。」

隊首会にもかかわらず八番隊長矢胴丸リサは雑誌を読んでいた。

そしてそれを平子の雑音で邪魔されたためイラついていたのだ。

「リサお前隊長の地位利用してエロ本売りさばいとるだけやんけ！」

平子はさらに畳み掛ける。

「お前のほうが暇やろが!!」

リサは雑誌を地面に叩きつけ平子に向き直る。

「やかましい！アタシは護廷十三隊の士気上げとるだけやないの！」

「まあまあ頼むよ、平子隊長。一番隊長歴長いんだからさ。」

京楽が両手で二人を制している。

「こういう時だけ先輩風吹かしたないわ！」

「おれは絶対にやらへんからな!!!」

く五番隊隊舎く

「御機嫌よう。平子部隊長殿。」

「その呼び名やめろや、しばらくぞ白玉団子！」

「フン、全く、なんとも品のない男だヨ。」

「そんでなんやねん！」

「あの時と同じ霊圧が逆骨で検出された。」

マユリはバインダーにはせられた資料に目を通している。

「逆骨ってお前、。」

「そう、《霊王の右腕》があつたところだよ。」

霊王の右腕。

ミミハギ様と呼ばれ奉られていた霊王の一部。

東流魂街の逆骨地区でミミハギ様は土着神として崇められていた。

「あの地区は以前から《霊王の一部》がないか探索されていた場所だね。」

「てことはあいつ霊王の一部を味方につけようとしとるっちゆうことか？」

「さあ。」

マユリは護神大戦で戦った《霊王の左腕》ペルニダを思い出していた。

「ただあのレベルがまた来るのは勘弁してもらいたいところだよ。」

「おそらく草冠もどきもその周辺にいるだろうね。」

「既に更木が向かっている。奴のことだ、草冠もどきに何の考えも無しに斬りかかるだろう。」

「まずいんか？」

「それが分からないから不味いんじゃないかネ？」

二人の会話に大声で悪口の横槍が入る。

「おう！妖怪白玉団子にハゲ真子！今日もえらいハゲとんなあコラ！」

「げ!!ひより！なんでお前こんなところおんねん!？」

「せっかく尸魂界来たし、お前のうっすい平らな顔踏んだらなと思ってな！」

その妖怪白玉団子はひよりを一瞥する。

「面倒臭いのが来たから私はこれで失礼するヨ。」

マユリはすでに背を向けて歩き始めている。

「お前聞こえとんねんマユリ！」

「君のような知能指数の低い雌猿と話しているとこちらまで退化しそうだからネ。」
マユリは立ち止まり振り向くことなくひよりに口撃を浴びせる。

「ウチかてお前みたい顔面真っ白にするまで頭良うなりたくないわ！」

お互い言葉に棘はあるものの懐かしんでいる様にも見えた。

言葉を交わすのはひよりが十二番隊にいた時以来のことだ。

「その白い頭どうにか、!!」

これから蛆虫の巣に向かうからか、ひよりは蛆虫の巣で初めて会った時のマユリを思い出してしまった。

「ぶっ……」

「あはははははははは!!」

「なんやひよりいきなり、お前ついに頭おかしなつたんか!？」

「いや、こいつの蛆虫の巣おつたときくらいの顔思い出して、あははははは!」

「お前あの時スツカスカの白玉団子やったなあ!!」

さすがのマユリも振り返り怒りを爆発させる。

「やかましいヨ!!!」

「なんでお前いきなりそんなこと思い出すねん、」

ひよりは笑い涙を拭きながら答える。

「これから蛆虫の巣行くねん。喜助がなんや仙波を探せとかなんとか。」

その名前にマユリは顔色を変え、ひよりに迫る。

「仙波と言ったかネ？」

「なんやお前も聞き覚えあんのかい。ウチもどつかで聞いたことある気がすんねんなあ。」

「三下の研究者、私も手を焼かされたものだヨ。」

「奴と関わるのはお勧めしないがネ。」

「では私は行くとするヨ。君たちと違って人類は忙しいのでネ。」

「猿ちやうわ!!!」

平子とひよりのツツコミが五番隊隊舎にこだまする。

く流魂街逆骨地区く

「なんだよ、誰もいねえじゃねえか。」

更木は辺りを見回し敵を探している。

「隊長———!!」

後ろから斑目一角が追いかけてきていた。

「おめえも来たのか、邪魔だから来んなつったろ!？」

「可愛い部下にも斬らせてくださいよ。」

「うるせえ。」

更木の中の野生の勘が後ろに何かがいると警鐘を鳴らしている。

咄嗟に振り返るとこの間の草冠の様な男が立っていた。

「やあ更木剣八。」

「おめえそれどうやってんだ？ 霊圧全く感じねえが。」

「さあどうでしょう。」

「おめえが草冠もどきか。」

「何を言ってるんです、私は正真正銘の、。」

「もう一遍言うぞ。おめえが草冠もどきかって聞いてんだ。」

「斬って確かめたらどうです？ 得意分野では？」

「はっ！ それもそうだ、行くぜ！」

劍八が斬りかかると、男は軽やかな身のこなしで斬撃を避け劍八の胴を斬り抜く。

「やるじゃねえか。」

「楽しめそうだ。」

劍八は相手の脳天めがけて突きを繰り出すが、またすんでのところで躲され間合いを詰められる。

ほぼ同時に劍八は斬魄刀を横にして守るが、男は読んでいたかのように横から斬りつける。

鮮血が飛沫となり宙を舞う。

「隊長!!」

一角が駆け寄ろうとするが、

「邪魔すんじやねえ！」

更木は不敵な笑みを浮かべている。

「面白えじやねえか。」

「呑め、野晒。」

更木の斬魄刀は巨大な斧となり、とてつもない霊圧を放っている。

「更木剣八の始解か。さすがに解放なしでは無理ですかね。」

男は斬魄刀を抜き、胸の前で水平に保ち左手を刀身に当てる。

さかのぼ
「遡れ、渺渺分岐。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:

第4話 Re : Turn Back The Pendulum

「先日の浦原喜助の邪悪な研究により空席となった席官を臨時任命する。呼ばれたものは前へ出よ。」

二番隊隊長代理 同隊副隊長 大前田希ノ進

三番隊隊長代理 同隊副隊長 射場千鉄

五番隊隊長代理 同隊副隊長 藍染惣右介

七番隊隊長代理 同隊副隊長 小椿刃右衛門

九番隊隊長代理 零番隊 麒麟児天示郎

十二番隊隊長代理 零番隊 修多羅千手丸

二番隊副隊長代理、、、、」

「そして、以前から空席であった十番隊隊長であるが、十三番隊隊長浮竹十四郎の推薦により、十番隊副隊長志波一心を召喚。隊長3名立会いのもと隊首試験を行い、能力・人格共に申し分ないと判断した。志波一心、前へ。」

「志波一心っす！よろしくお願いします!!」

定例会も終わり各隊長、副隊長は各々の隊舎へ戻っている。

そんな中八番隊隊長の京楽は新人隊長の一心に声をかける。

「いやあ、志波家は流石名家だねえ。零番隊、隊長、副隊長が現役でいるんだから。」

京楽は自分が総隊長になる頃にはその全員がいなくなっているとは想像もしていなかった。

「そうすかね？」

「隊長〜！」

金髪の巨乳美人、松本乱菊が一心のもとへ駆け寄ってくる。

「おう、乱菊！」

「これからは副隊長としてお願いします。」

乱菊は三席から副隊長に昇進したのだった。

「乱菊、お前お辞儀すると見えそうで、いいな。」

乱菊からの鉄拳が一心の顔面にめり込む。

「上手くやっついていけそうだねえ。」

京楽は微笑みながら一心と乱菊のやり取りを見守っていた。

く十二番隊隊舎く

金色の髪飾り、そして幾つもの骸骨の手。

姫君といったような雰囲気のある美女。

臨時任命式を終え、零番隊の修多羅千手丸は隊舎内確認のため歩き回っていた。

「ここが技術開発局か。」

技術開発局入口の前に白塗りの不気味な男が。

「副隊長代理はそちか？」

その不気味な男は柔らかい口調で、しかし威圧的に修多羅に忠告をする。

「いいかい？ 私は副隊長代理とはいえ今や局長だヨ。零番隊だろうと私の指示に従って
もらおう。」

「妾は隊長としてここにいるわけだが。」

「ここでは護廷隊の席次よりも局内の地位がものを言うんだヨ。」

「それでは改めて、君の上司になる技術開発局局長、涅マユリだ。」

「それでは失礼するヨ。」

「なんじゃあの白玉のような男は。」

修多羅は、パーティーションで区切られた研究机に座って機械を弄っている少年に声をかけた。

「阿近とやら。」

「はい、なんすか隊長代理。」

「ここで把握している零番隊に関する資料はどこじゃ?」

零番隊もただで隊長代理に貸し出しているわけではない。

浦原喜助や涅マユリは零番隊にも発信機など何かしらをつけている可能性が高く、それを探るために派遣されたと言っても過言ではなかった。

「それはわかりませんが、局長室じゃないすかね?」

「では行ってくる。」

「局長いないっすよ、今。」

阿近はパーテーションから顔をのぞかせる。

「構わん。」

それから6時間。

流魂街調査から帰局したマユリは、帰局早々怒り狂うこととなる。

「マユリや。まさか妾の御殿廊下にも霊蟲とやらを仕掛けているとは趣味の悪い男よ。」

「貴様、、、！私の部屋に入ったのかネ、、、!?」

「妾が手をかざすと勝手に開いたのでな。もっと施錠を強化した方が良くぞ、局長殿。」

「この、、、！巫山戯た真似をしてくれるじゃあないかネ、、、！」

マユリはタダでは置かないという面持ちで施錠の強化を思い巡らせる。

「次はせいぜい死なないように気をつけることだね、…!!」

すると横から、白衣を着ているやせ細った長髪の男が修多羅に声をかてきた。

「隊長代理！四席の仙波逸ノ将と申しますが、少しお時間よろしいでしょうか？」

「お話ししたいことがあります。」

「分かった。1時間後に隊長執務室で良いか？」

「ありがとうございます！」

仙波は頭を下げその場をあとにする。

マユリはその男、仙波を見て修多羅に忠告した。

「気をつけた方がいいと思うがネ。」

「奴は滅却師研究の担当だが、正直取り憑かれているように研究していてネ。」

「今滅却師の死体を使って研究をしているのだが、奴は生きてまま頭蓋に穴を開けたり、自身の子を殺させたりして研究している。」

「何をしたいのかがわからなくてネ。目的なき研究は三下がやることだよ。」

「全く、その責任を取るのは局長の私だと言うのに。」

やれやれと両手を挙げながら、マユリはその場を去っていく。

「狂気の研究者という点ではそちと変わらぬがな。」

修多羅はクスクスと笑っている。

〈十二番隊長執務室〉

「仙波四席参りました。」

「話とはなんじゃ？」

「はっ、十番隊十四席の由寫欧許を是非技術開発局に迎え入れたいのですが。」

由寫欧許とは緑の髪をした長髪の男で頭が良く、昔から仙波に一目置かれていた男だ。

「義魂の知識を有しておりまして、我が技術開発局での開発をと。」

「十番隊の志波家の者はなんと言うておる？」

「就任してすぐで分からないからいいようにしてくれ、と仰っております。」

「なら連れて来るがよい。」

「ふう、義魂の関係ならやはり妾より曳舟の方がよかったのではないかのう。」

零番隊に昇進して間もなかった元十二番隊隊長曳舟桐生は、靈王謁見や御殿建設など零番隊の着任業務に追われていたため、修多羅が派遣されたのだった。

「時に修多羅殿、次の隊長候補は決まっていますのですか？」

「まあマユリであろう。あやつの卍解修得待ちじゃな。」

「なっ、淫局長は、その、蛆虫の巣出身です。」

「それがどうした？」

「隊長は高貴な役職です。相応しくないのでは。」

「高貴かどうかは関係ない。それならば鬼巖城も相応しくはないであろう？」

「そ、そうですが、。」

「もうよい、下がれ。」

仙波は隊長執務室の外で立ち尽くした。

怒りが湧いてくる。

「クソつ、涅、。」

「蛆虫の巢など屑が生きながらえているだけの場所。」

「それなのに涅マユリは、私、私が屑に遅れをとるなど許せん。」

翌日マユリが出勤し局長室まで来ると入口に修多羅が立っていた。

「マユリや。そちは義魂の技術に興味があるようなのう？」

義魂関連資料をヒラヒラと涅に見せびらかしている。

「貴様、、、！また、、、！」

修多羅は口元に手を当て上品に微笑した。

「マユリ、そちの鍵は飾りかえ？」

「仙波を見習ってはどうかじゃ？あれは本腰を入れねば開けられん。」

修多羅は仙波の部屋の鍵を開けようとしたが時間がかかるため面倒臭くなっていた。

「あんな三下の真似をするなど冗談はよして欲しいものだネ。」

マユリはイラつきながらも修多羅の持つ資料を奪い取り局内に入っていく。

さらに翌日マユリが出勤すると、また修多羅は局長室入口に立って資料をヒラヒラとさせていた。

「マユリ、施錠の腕を上げたようじゃの。少し時間がかかった。」

「なん、、、だと、、、？」

怒り心頭のマユリの顔には血管が浮き出ている。

修多羅は入り口まで来たマユリに資料を手渡す。

「それはそうと、卍解の鍛錬はしておるのか？」

「言われずとも順調だヨ。」

マユリの語気はかなり鋭い。

「妾が鍛錬してやろうか？」

「余計なお世話だヨ。」

「おはようございます。」

そこに仙波が朝の決済書類を持って現れる。

そして遠くから2人の話を聞いていた仙波はマユリに負けたくない一心で修多羅に掛け合ってみた。

「修多羅隊長代理！私はもう卍解に至っております！」

「私は、！私が隊長候補では如何でしょうか!？」

「ほれ、マユリ。仙波はすでに卍解に至っておるぞ。早くせねば追い抜かされるぞ?」

「な、、、」

「(追い抜かされるだど?まだ卍解にも至っていない涅に劣るといふのか?)」

今思えばこの時から仙波の中の何かが一気に溢れ始めたのかもしれない。

「修多羅、、!涅、、!」

「ならここで示してやろう!涅をすでに超えているということを一!」

「卍解!!」

く一番隊隊舎く

「まさかこんなことになるなんてねえ、、、。」

京楽は浮竹、藍染と立ち話をしていた。

「惣右介君が偶然技術開発局に行つてなかつたら危なかつたよ。」
「全くだ。しかし仙波がこんなことをするとはな、、、。」

浮竹も普段の仙波を見たことがあつたため驚きを隠せない。

「修多羅隊長代理も、涅局長にも大したお怪我なく幸いでした。」

藍染は困つたような顔を浮かべている。

「おつ、山爺だ。そろそろ始まるみたいだね。」

「皆集まつておるか？では臨時隊首会を始める。」

「仙波逸ノ将前へ。」

刑軍に縄を持たれ、手枷をつけられた仙波が山本元流斎の前へ現れる。

「此度の騒動に關し、十二番隊第四席仙波逸ノ將に除隊を命ずる。」

「待て！除隊とは、！」

「連れて行け。」

仙波は刑軍に引つ張られながら一番隊舎を後にする。

「以上で臨時隊首会を終了する。」

「大前田後は頼む。」

山本総隊長からそう言われた二番隊隊長代理の大前田は刑軍を引き連れある場所へ向かう。

蛆虫の巢。

仙波が最も忌み嫌っていた場所。

仙波は危険分子として妻、息子とともに蛆虫の巣へ収容となった。

「あるときああしていれば、、、」

「絶対に復讐してやる、、、！」

「浦原喜助、修多羅千手丸、藍染惣右介、、、」

「涅マユリ、!!」

T o b e c o n t i n u e d

第5話 U N M A S K E D

「さかのほ、
逆れ、
渺渺分岐。」

平子の逆撫に似た形をしていた。

柄の先の大きな円には小さい輪っかがいくつも付いており、ジャラジャラと金の擦れる音を発している。

弥勒丸という斬魄刀を逆にしたような形状だ。

それ以外特にな変わったところは見られない。

「これで万全だ。」

「なんだか分からねえが、行くぜ！」

劍八は男に斬りかかるが同じように躲される。

しかし今の一太刀が男の左上腕に入ったかのような感覚、デジャヴに近い感覚を覚える。

「おっと早速薬が切れてきたか。」

男は間合いをとると注射器を取り出し腕に打っている。

「ああ？なんだそりゃ？」

「超人薬だよ。昔少し失敬した物でね。」

「あの淫の野郎が作ってたやつか。」

「おれの振りに反応できるのは素の力と思っていたが、それで避けてやがったのか。」

「さつき以外はね。」

「やはり解放しておいてよかった。」

男は左腕を見ながらさすつている。

「何をごちゃごちゃと訳わかんねえことほざいてんだ。」

「まだまだいくぜ！」

しかし剣八の攻撃は当たらない。

空を切るばかりである。

「くそつ、当たらねえんじやつまらねえ。攻撃もしてこねえし、」

興が冷め始めて面倒臭くなってきたときだった。

「更木隊長！」

リーゼントにグラサン、七番隊の隊長羽織を着た男が更木の横に空から着地する。

「おう、射場！こいつお前にやるよ。」

「え？」

「こいつ躲してばつかでつまんねえんだよ。」

「は、はあ。」

王印奪還部隊でもない七番隊隊長射場鉄左衛門は、大先輩である平子の

逆骨の更木見てきてえな！

というお願いを律儀に聞いて来たのであった。

さらに元上司の更木が言うのだから射場は引き継ぐ他なかった。

「仕方がないですのう。更木隊長が言うなら。」

更木はもうすでにその場にはいなかった。

射場はため息をつきながら斬魄刀を抜き、始解する。

「押し切れ、しぶんがたな枝分刀！」

解放すると斬魄刀から枝分かれたかのように小さく刃が生える。

「いぐわー！」

射場は連続で斬りかかるが、全て綺麗に躲される。

「本当に当たらんのお、、、なら、、、」

「縛道の三十、嘴突三閃。」

射場は嘴突三閃を皮切りに次々と縛道を繰り出していく。

「縛道の六十二、百歩欄刊。」

「縛道の六十三、鎖条鎖縛。」

「縛道の七十五、五柱鉄貫。」

「縛道の七十九、九曜縛。」

「縛道の九十九、禁！」

この間約10秒。男は縛りに縛られ身動きができない状況になっている。

「これで避けられはせんじやろう。」

男は焦りこそないが驚いた顔をしている。

「お前の縛道本来のものと違うな？」

「おうよ、僕は前田希ノ進殿から直々に応用鬼道を教わつとるけえのお。」

前二番隊副隊長前田希ノ進は、夜一が隊長業務から逃げるのを防ぐため自身で研究を重ねその鬼道を磨いて来たのだ。

そのため嘴突三閃と百歩欄刊には追尾能力が、鎖条鎖縛には麻痺効果が、というように各鬼道が強化されている。

「さあ終わりじゃー！」

射場が大きく跳躍し斬りかかった瞬間だった。

「父上ー！」

青年が間に入り射場の刀を受け止めた。

「なんじゃ？この坊主は。」

髪を結った線の細い少年は射場に対し啖呵を切る

「お前ごときの力で父上を斬れると思うな！護廷隊など父上の足元にも及ばんわ！私で十分だ！」

「それはどうじゃろうのお？」

射場が一度剣を引き、次は突きを繰り出す。

が、その突きはまたも止められることとなる。

「致命的な突きだな！」

「お前の枝分かれした刃に引っかければいとも簡単に防ぐことができるわ！」

お互いの斬魄刀越しに射場を見ると、少し口角が上がっている。

「そこに疑問を抱かんところがまだまだ坊主なんじゃ。」

「こいつの能力はお！」

射場は両手でしっかりと柄を握ると止められた刀を思い切り押し込む。

ピシッ

鉄が断ち切れる音がし、砂の上に鉄片と化した刀が落ちた。

青年の斬魄刀は見事真っ二つに折れてしまった。

いや、斬られたと言われた方が腑に落ちる綺麗な斬り口だった。

「儂と同じでのお、こいつは止まっても押し切ると、何でも押し斬れるんじや。」

「なっ、斬魄刀が、、！」

その時突然射場の頭上に黒腔が開く。

そして闇の中から顔の右側には刺青のはいった短髪でメガネをかけた男が現れた。

「おいおい、やられそうじゃねえか。」

その男は挑発気味に縛道で拘束されている男に話しかけている。

「お前こそ、子供相手に尻尾を巻いて逃げ帰って来たんだろ？」

「仕方ねえだろ！黒崎一護と朽木ルキア、浦原喜助に石田雨竜だぞ？」

「あれだけ黒崎一護はおれが斃すと息巻いていたではないか。」

「そうだ、だから確実に斃せるときに斃すんだよ。」

かつて全く情報がないときに黒崎一護と対峙し、惨敗したことがあった。それからずっと自分の手で倒す日を待っていた。が、それはこの前の戦いではなかった。

「お前は誰じゃい!?!」

射場は耐えきれず、新たに現れた男に聞いたです。

「あん?なんだてめえは。」

「おれは【^ノ新しい^{デア}神^オ】の一人シヤズ・ドミノ。」

「与えられた能力は The ^生 V i a b i l i t y ^能 だ。」

く現世、浦原商店く

「フウ、呼び出されたと思えば研究を手伝えとは。」

「私はもう元局長殿の部下ではないのだがネエ。」

マユリは皮肉をたつぷりと込めた言葉を向ける。

「わあ何この人？すごい顔だね！」

「こちら一勇！この方は十二番隊長殿だぞ！」

無邪気にマユリの顔の感想を言う一勇に莓花は怒鳴りつけた。

「なんだネ？このガキどもは。」

「君も死神なの？」

マユリそつちのけで一勇は横にいた同い年くらいの少女に話しかける。

「はい、そうです!!!」

「何度も言っているだろう。声が大きいヨ！」

「遊びに行こうよ！」

「マユリ様、この方たちと遊んで来てます！」

ポンポンと話が進み、この子もマユリそっちのので一勇達と商店の外へと駆け出ていく。

「全く、七號と何が違うのか見当もつかないネ。」

一勇、苺花、その女の子は瞬歩で公園まで移動する。

「やっぱり苺花ちゃん速いなあ。」

「そうだ、君の名前は？」

「わたしは涅ネムです！よろしくお願いします！」

ネムは深く頭を下げた。

「ネムちゃんか。よろしくね！」

一勇はにっこりと微笑んでいる。

「僕は黒崎一勇でこっちは阿散井莓花ちゃん！」

「よろしく。」

反対に莓花はしかめっ面をしている。

「莓花ちゃん怒ってるの？」

「うるさい！」

莓花は一勇からプイツと顔を背けた。

「ねえ、瞬歩鬼ごっこしよう！」

「楽しそうです!!」

ネムは大賛成、といった様子で両手を挙げ飛び跳ねている。

「それおれも入れてくれよ。」

「!!?」

後ろには虚のような怪物が立っていた。

腰には刀が差してある。

「虚?! 破面?!」

莓花は斬魄刀を抜き臨戦態勢に入る。

「どつちでもねえよ。俺はかつてシユリーカーとか呼ばれてたが今となつちやなんでもいい。」

「おれは子供が好きでよお。見ると殺したくなるんだ。」

かつて人間だった頃、小さい子供に靴紐を引つ張られたことが原因で高所から転落死したからだった。

「いやしかしおめえの目を見てると思い出すぜえ。」

「おれが地獄に行く羽目になった女をよお。」

手に赤いグローブを着けた制服姿の女性だった。

「そんでもう一人の野郎にも似てやがんだ。そっちの坊主は。」

オレンジ色の髪に目つきの悪い死神、一護のことだ。

「あれから地獄を抜け出し探しに探してみりや、あの女今や護廷十三隊の隊長になつて
るらしいじゃねえか。」

「それ多分母上。」

「何!?!」

「ハッ!こりやあいい!てことはおめえを取つ捕まえれば母上殿も出てくるつてわけ
だ。」

「捕まえられるならね。」

「苺花ちゃん、、！」

一勇は心配そうに苺花とシユリーカーのやり取りを見ている。

「じゃあおれが鬼で始めだ!!!10は数えねえぞ!!!」

シユリーカーは腰に据えてある斬魄刀様なものを抜く。

「堕ちろ！ 煉獄破面！」
マスコ・デ・ラ・インフレロ

同時に苺花も斬魄刀を解放させる。

「三火三水双びて連なれ！」
さんかさんすいなら
つら

苺花が斬魄刀を手放すと宙に浮き凍り始めその上から炎が包む。

氷は溶け水となり、滴り落ちるとともにもう一对の斬魄刀を形作る。

そして燃える一对と、水滴る一对を手に取りシユリーカーへと向ける。

「焱^{えん}森^び双^{よう}連^{そう}!^{れん}」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.

第6話 Monster and a transformation

「墮ちろ！ 煉獄破面！」
マスコ・デ・ラ・インフエロ

「三火三水双びて連なれ、焱焱双連」
さんかさんすいなら つら えんびようそうれん

「先手必勝。母花が先手を打つ。」

「父上直伝、火骨大砲！」
ひこつ

炎の球がシュリーカーに勢いよく直撃するが全く効いていない。

「花火か？」

「むー！なら、母上直伝、初の舞・滝泉！」
りゅうせん

蒼い円がシュリーカー真下の地面に浮かびそこから逆さになった滝の様に水が天まで伸びる。

「涼しいぜえ。シャワーみてえで人間の頃を思い出すなあ。」

「で？ 終わりか？ お嬢ちゃん。」

シュリーカーの口元には炎が揺らめいている。

「僕がいるぞー！」

一勇は瞬歩で2人の間に入り斬魄刀を解放させる。

一護の卍解を思わせる同じ形ではあるが、その色は対照の白であった。

「詠み入れろ、融月！」
ゆうげつ

一勇は左手で刀身に触れ鬼道を発動させた。

「破道の一、衝！」
しょう

すると一勇の融月が光を放つ。

そして一勇は中段に構え、相手の出方を窺っている。

「来ないならこっちから行くぜ！」

シユリーカーは鋭い爪で一勇に襲いかかる。

バチツ

爪が融月に触れると衝撃によりシユリーカーの手は弾き飛ばされる。

「なるほど、鬼道の力を斬魄刀に付与できるのか。」

「厄介だが、、、触れなければいいこと。」

シユリーカーは手を前へ出すと霊子で弓を構築する。

「まだ慣れてないが、、、これならそれに触れずにいけるぜ。」

シュリーカーは引き絞った渾身の矢を放つ。

「縛道の三十九、えんこうせん 円闇扇。」

一勇の前に立ち込める白煙。
そこには2人の姿があつた。

「おじいちゃん！夏梨お姉ちゃんも！」

一心が斬魄刀を抜いて立ち、その後ろに夏梨も控えていた。

「待たせたな一勇。」

一心はシュリーカーの手にある弓を見て夏梨に声をかける。
「夏梨、虚の力だ。」

「はいよー!」

夏梨は斬魄刀を解放させる。

「纏え、纏月!」

そして夏梨は手で顔を当てがい虚化する。

「いくぞ親父! 与えろ、纏月!」

虚化したまま両手で斬魄刀を持ち一心の方へ向けると、切っ先から虚の付与球を出す。

その付与球が一心に当たると、一心の霊圧が変化し虚の仮面が出現する。

「行くぜ!!」

一心は高く跳躍し、シュリーカーに斬りかかる。

「月牙天衝!」

虚の力が付与された黒い月牙天衝はシュリーカーに命中する。

虚の力、と聞いていたシュリーカーは大したダメージはないと踏み、あまり防御に力

を入れていなかった。

が、ダメージ量はその予想を裏切ることとなる。

「なぜ、、、？虚の力で効くわけ、、、」

「お前今の霊圧が滅却師寄りになってるの気づいてなかったのか？」

「それがどうした!?!おれのベースは虚だぞ、、、？」

「お前何も知らずに仙波の野郎から能力を貰ってたんだな。」

「なに？」

「悪いな。話し合ってるヒマはねえんだ。」

「月牙天衝!!」

もう一太刀。

シュリーカーに正面から命中した。

「クソっ、、クソっ!!!」

シュリーカーには袈裟斬りの形に斬傷が付いているものの、致命傷とまでは至っていない。なかつた。

「直前で霊圧を虚か破面にしやがったか。」

「クソっ！たかが死神風情が!!!」

苛立つシュリーカーの口元には高濃度の霊圧を放つ火球が形作られていた。

「焼け死ね!!」

ドラゴアリエント
「龍の息吹!!」

巨大な火球が一心たちに向け放たれる。

「地獄の炎を纏った王虚の閃光だ!」
グラン・レイ・セロ

一心は咄嗟に防御の縛道を発動させた。

「縛道の八十、断空！」

一心は断空を突き破ると判断し、夏梨を手で突き飛ばし回避させる。

大爆発が一心を包み込んだ。

「親父！」

「おじいちゃん！」

20秒程経ち黒煙が晴れると、一心は焼け焦げ片膝をついていた。

「新しい神ノヴァアデオとか名乗るだけあるじゃねえか、」

「終わりだ！」

シュリーカーはもう一度大技を放とうと霊圧を上げている。

「全く、体の衰えとは怖いものだネ。志波一心。」

「マユリ様！」

ネムは創造主である父の救援に声を上げる。

「浦原喜助、君は志波一心達を連れ帰って駄菓子でも食べているといいヨ。」

浦原は一心に肩を貸し立ち上がる手助けをしていた。

「私はサンプル採取に移るとするヨ。」

「掻き筆れ、正殺地蔵。」

その金色の斬魄刀には顔がついており、その口からは紫色の毒々しい霧が放出されている。

「さあ、抵抗しないでくれヨ。出来るだけ傷はつけたくないのでネ。」

爪で切りかかってきたシュリーカーの右腕をカウンターの要領で斬り、瞬歩で背後へ

移動し左腕も斬る。

「残念、浅かったなあ。」

シュリーカーはどちらも寸前のところで半歩身を引き致命傷を避けていた。

「いや、充分だよ。」

マユリの余裕にシュリーカーは違和感を抱くが、その答えをすぐに知ることとなる。

「腕が上がらねえ、、、」

「麻痺か、、、？」

いや、麻痺にしては痛みが強い。

「脳から出る信号のみを断ち切っているのだよ。マア君のその小さな脳みそから果たして四肢へ信号が出ているか不安ではあったがネ。」

「さあ、終わりだヨ!!」

マユリが足殺地蔵でシユリーカーを斬ろうとするが、隊長羽織に何匹ものヒルが付いていることに気づく。

「なんだネー…これは!?!」

「もう遅え!!」

シユリーカーが舌で音叉のように音波を発すると、それに呼応しヒルが大爆発を起す。

先ほどの一心よりもさらに大きな爆発。

さすがのマユリでもひとたまりもなかった。

「ぐあああ、、、」

マユリは大ダメージを受け、地に伏している。

「さつき切りかかったときに仕込んでおいた。」

シユリーカーは斬られたはずの両腕をあげ、やれやれといったジェスチャーを取っている。

「乱装天傀かネ、、、。全く、私の斬魄刀とは相性が悪いことだヨ、、、。」

「じゃあ殺らせてもらうぜ。まあだが先にお嬢ちゃんからな!!」

シユリーカーは一番近くにいたネムに鋭い爪を向け飛びかかる。

「クソっ、、、」

マユリは無意識にネムの方へ手を伸ばす。

シユリーカーは攻撃をしたが思っていたような手応えは感じられなかった。

「なに、、、?てめえ、、、!」

一護が覆いかぶさる形でネムを守っていたのだ。

背からは大量の血が吹き出る。

「お父さん！」

「一勇来るな！」

ネムの身代わりとなり背中を切られた一護はその場に倒れこんでしまう。

「その髪、てめえ黒崎一護じゃねえか。」

一護に倒され、地獄の番人クシャナーダに斬られ地獄に堕ちた瞬間のことを鮮明に思い出した。

「てめえは痛ぶつてやろうと思つてたのによお。あつけねえ。」

そしてシュリーカーは倒れている一心、涅、一護、一心に肩を貸す浦原、そして子供達を見渡すと勝利宣言とも取れる言葉を口にする。

「死神が束になつても全然じゃねえか！余裕だな！」

「束つて、、それ子供も数に入れてんのか？」

シユリーカーの独り言に答える形でどこからか声が響き渡る。

「ああん？」

「おいおい、小さい子を虐めんのは大人のやることじゃねえだろ。」

「次から次へと、、それで次の死神様は誰だ？」

シユリーカーはまたもや若干イラついていた。

京楽の様な笠を被り、無精髭を生やした男が一護たちの前に現れた。

「おれの名は西堂榮吉郎^{さいどうえいきちろう}。かれこれ10年ほど鏡野市の担当をしてるケチな死神だ。」

「すげえ霊圧だから行くのやめようかと思ったが、子供の霊圧もあつたんじゃあ行かない訳にはいかねえ。」

「六車隊第五席、男西堂！相討ちしてでもてめえをぶった斬る！」

西堂は斬魄刀を引き抜く。

「動け！刀無縛。かなしばり」

T o b e c o n t i n u e d

死神凶鑑ゴージャス

「よお！みんな！」

「覚えてるかな？この俺、西堂榮吉郎を！」

「誰だネ？覚えてないヨ、君の様なモブキャラ。」

「モ、モブ、!? 涅隊長！おれは今は現世の鏡野担当で、元々は二番隊にいて、…、四楓院隊長のときの、…」

「知らんぞ。お主誰じゃ？」

「四楓院隊長！」

「儂ではなく、碎蜂のときではないのか？」

「そんな、…！」

「誰だネ？」「誰じゃ？」

「ひどい!!!!!!」
「助けに来るんじやなかった!!!」

〈 f i n 〉

第7話 悪意沸沸（アクイフツフツ）諧謔（カイギヤク）
ノ極（キワ）ミ

「動け！刀無縛。かなしばり。」

西堂は斬魄刀を解放させると納刀する。

「なんだあ？納めんのか？」

「おめえ怖気付いたの、」

シユリーカーは自身の背後に西堂の霊圧を感じる。

そして1秒遅れ、腹部に痛みを覚えた。

「なっ、？」

シユリーカーの腹部から鮮血が吹き出ている。

「おれの斬魄刀は隠密機動には向いてないとか言われて、まずは十一番隊に飛ばされてよお。」

隠密機動出身というだけで難癖をつけられた日々。

「最悪だよな、あんな戦闘狂。」

「そんであいつらと毎日殺りあつてたら抜刀術の西堂とか言われるようになった。」

「毎日必死だった。生き残るのに。」

「何を喋ってやがんだ、、」

シュリーカーは傷口を押さえている。

「だから、、要はおれの抜刀はたぶん護廷十三隊一速えぞ?」

後半の言葉は自身の背後から聞こえていた。

「な、、、に、、、？」

気づくとまた血が吹き出ていた。

「おれの斬魄刀、刀無縛は抜刀すると3秒間威力が何十倍にも膨れ上がる。」

西堂はまた納刀している。

「おれ自身のスピードも劇的に上昇し、さらに斬魄刀の重量は1／1000に、無いに等しくなる。」

「だが相手の霊子を感知した一瞬、つまり当たる時に元の100倍の重さになる。」

スピードに重量が乗れば威力は絶大だった。

「この斬魄刀は抜刀に長けた刀なんだよ。」

「どうだ無闇に動けねえだろ？動きや防御に移行するのに時間がかかるからな。」

「おい、どうした虚？」

「動けよ、金縛りにでもかかったのか？」

西堂は不気味に口角をあげた。

西堂がシユリーカーと交戦している間にマユリはネムの元へ向かう。

「黒崎一護。」

背中から血を流し一護がネムの前で片膝をついている。

「この子は、あんたの娘みたいなもんだろ？おれも息子いるからあんたの気持ちもわかってるつもりだぜ？」

「フン、余計なことをしてくれる。もしこいつが壊れてもまた新しく、より良いものを作

り直せばいいだけの話だヨ。」

そう言うのとマユリはネムを連れ一護から離れていった。

一方のシュリーカーは西堂を前に全く動けなくなっていた。

「(矢を打とうにも、グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光を打とうにも隙ができる、、、)」

「(かといって逃げて背を見せても確実に斬られる、、、)」

シュリーカーはある賭けにでることにする。

「おい！その白い奴!!」

それは自分を斬らせない理由を作ることだ。

「俺を今助けてくれるならアジトにある実験体をいくらでもやる!」

シユリーカーはマユリに訴えかける。最低限の隙を見せない程度に。

「研究してえんだろ!？」

「死神、滅却師、虚、破面、完現術師色んなベースがあるー」

マユリは10秒ほど顎に手を当て考えた後、答えとも取れる言葉を発する。

「ほう、面白い。」

するとマユリは胸元から特殊な補肉剤を取り出し体に注射する。

「これは回復用に開発したものでネ。」

見る見るうちに先ほど火傷で損傷した箇所が回復していく。

「ふう、こんなものかネ。」

次の瞬間、マユリはその場にネムを残し姿を消した。

「なっ、？ 涅隊長、？？」

マユリは瞬歩で西堂の背後へ移動し、その背中を斬りつけた。

「心配ないヨ、浅く斬ったからネ。」

「おい！お前自分の研究のために仲間を斬るのか!？」

「人聞きの悪い。これも敵の戦力を探るためだヨ。」

マユリはその言葉を言い終わるや一護の方へ向かう。

もちろん、手負いの一護はその速度に反応できるはずもなく接近を許してしまった。が、一護は力を振り絞り片膝をついたまま正面にいるマユリに向け刀を振るう。しかしマユリは防ぐ素振りも見せず一護の攻撃を受けた。

パンッ

「これは、！」

一護はかつて破面が現世に攻めてきた際浦原が使っていたものだど気づく。

しかし遅かった。

そのときにはもう自身の左肩から刃が見えていた。
マユリに背後から貫かれていたのである。

「おまえっ、、、なんで、、、？」

「邪魔なんだヨ。」

さらにその刃はマユリのが足殺地蔵ではなかった。

「こ、これは、、、？」

「これは虚の力を消滅させる装置だヨ。」

「虚対策でネ。」

「な、、、なぜ、、、？」

「君の虚の力は何かと邪魔なんだヨ。」

一護の中の虚の力が急激に消失していく。

「虚の、あいつの力が弱まっていく、…。」

「君も虚の力に悩まされていたことがあつただろう？感謝して欲しいものだネ。」

「あと数日で塵ほどの力しか残らないヨ。」

「あんた、…、そこまでして研究したいのかよ、…？」

「答える義務はないヨ。」

マユリはすでにシュリーカーの方へ歩みを進めている。

「では連れて行ってもらおうかね。」

「話のわかる隊長さんだぜ。」

シユリーカーは黒腔を開けるとマユリと共に消えていった。

「クソ、」

「大丈夫ですか？黒崎サン。」

「浦原さん！なんで止めなかつたんだよ!!」

「一心サンも抱えてましたし、。」

「とにかく、一度うちへ戻りましょう。」

浦原は何かを見据えるように鋭い目をしていた。

く流魂街、逆骨地区く

「斬っても斬っても再生できる！」

射場によって斬り落とされたシャツの腕から、新たな腕が生えてくる。

「そうか、ほいじゃあお前が痛みで根を上げるまで斬ったるわい。」

「儂の力ならさつきみたいにお前のその静血装ごと断ち斬れるけえの。」

「根比べと、いこうかのう！」

言い終える前に瞬歩でシャズに近づき、シャズの左耳を髑髏型のピアスごと引きちぎる。

斬撃が来ると思ってた構えていたシャズは意外な攻撃に驚いた。

「そんな地味な攻撃でいいのか？」

シャズの耳はすでにピアスごと再生していた。

「おうよー！」

射場は引きちぎった耳をシャズの顔面に投げつけ視界を奪う。

さらに蹴りを入れ2メートルほど距離を取ると射場は刀を振りかぶり斬撃を浴びせる。

が、しかし射場の斬撃はまたもや同じ形で止められることとなった。

それはドミノではなく、黒いフード付きのコートを着た男によって。

その男は誰かに似たような霊圧を放っている。

「なんじゃ？仲間か？」

「あなたの斬魄刀には致命的なところがあります。」

「斬りかかっても枝分かれした刃に引っ掛け防ぐことができ、」

「どこかで聞いた台詞じゃのう！」

射場は再度力を入れて刀を押し込む。

「そして必ず押し込む、ということ。」

その男は射場が押し込むと同時に半身にし受け流す。

まずいと思った射場は咄嗟に体勢を立て直し、間合いを取る。

黒コートの男は前方に射場がいるにも関わらず後ろを振り向く。

「()までにしませう、仙波逸ノ将。黒腔を。」

「お前は一体、？」

仙波も知らないといった様子だったが、

「あなたもよく知っていますよ。」

そういうと、男は仙波の開いた黒腔とは別の黒腔の中に入っていった。

「命拾したなあ、死神。」

ドミノは嘲るように笑っている。

そしてその言葉を残し仙波たちも自分達の黒腔へと消えていった。

「なんじゃったんじゃ、、、。」

ノツァデイオ
く新しい神アジトく

「（ここでやっちゃうか？今なら俺たちのアジトだ。何かがあればみんな集まってくる。）」

シユリーカーはマユリを連れ、薄暗い廊下を歩いていた。

「（いや、けど集まってきたところで、それまでに俺だけがやられるかもしれねえ。）」

そんなことを思い巡らせていると、目の前に黒腔が開き、黒コートを着た人物が現れる。

「お、お前だれだ？」

仲間には該当しない霊圧。

シユリーカーは警戒を強めた。

「シユリーカー、地獄へはどうやったら行けるのです？」

突然の問いにシユリーカーは拍子抜けしてしまった。

「も、もう俺の鎖は壊されたから俺は行けねえよ。」

「生前に罪を犯した虚を斬るしかねえんじゃねえのか？」

「やはりそうですか、。。。」

1秒後シユリーカーは横から刀で胸を貫かれた。

「て、てめえ、。。、なんで、。。、？目の前のやつは、。。、」

完全な不意打ちだった。

それもそのはず、シユリーカーとマユリの目の前には先ほどの男が今も立っていたからである。

「あなたは虚ベースでしたよね。斬魄刀で斬られればもちろん、。」

「クソツ、、！」

空間から仰々しい地獄の門が出現する。

そしてその扉が開くと、中から巨大な刀とそれを持つ腕が現れた。

そしてシユリーカーはその大刀により貫かれる。

「ありがとう。シユリーカー。先に行っていますよ。」

その男は門の隙間から地獄へと入っていった。

「クソがあああああ！嫌だあああ！」

まだ殺してない。

色黒でガタイの良い人間。

二度も戦った女の死神。

赤い長髪の男の死神。

西堂とかいう死神。

そして黒崎一護。

シユリーカーはまた地獄の鎖に繋がれることとなった。

そして地獄の門はまた異次元へと姿を消していく。

「一体なんなんだネ、、、」

突然出来事にマユリは少し驚いていたが、

「だがこれはこれで好都合。」

引き続き歩みを進め、廊下の先の奥の部屋へと消えていった。

く地獄く

「君は？こんなところまで来るなんて正気じゃない。」

「地獄から出て、私の元で戦いませんか？」

「嫌だ、と言ったら？」

「なら帰るまでです。あなたの替えはいますから。」

「替えだと？」

「ええ、100の数字を持つ破面です。」

「なんの冗談だい？それはヤミーが復活したとでもいうことか？」

「元錬金術師の戦闘狂のことですよ。」

「ほう？面白い。君についていけば会えるのかい？」

「ええ。」

「君は？」

「そうだなあ、ノヴァディオとでも呼んで下さい。」

To be continued.....

第8話 The Third Moon

（浦原商店）

「クソつ、あいつ浦原さんの弟子じゃなかったのかよ？」

「涅さんは微塵もそんなこと思っていないですよ。」

「で、仙波という男はどうでした？」

「ああ、悪い、行く前に一勇が交戦してるって聞いたもんだから、」

「ルキアとひよりに任せた。」

「それより、さっきのあいつ、。。。」

「ええ、黒崎さん達がかつて戦った虚です。」

「一度地獄から出た後、咎人に始末されたと思っていましたか。」

「おう、喜助帰ったでえ！」

「こりやまた、大勢で。」

ひよりは横に立つ四楓院夕四郎に向け親指を立て指差す。

「なんやこいつに聞いたら仙波なんてやつはおらへん言うから、記録見せてみい言うたったんや。」

夕四郎はひよりに続いて話し始めた。

「二番隊の記録は大戦で焼失してしまったため、大霊書回廊にしかないんです。」

「それで大霊書回廊の担当は吉良副隊長なので連絡を取り、」

夕四郎は吉良の方を向く。

「みんな勘違いしてますけど、僕は担当ではないです。阿万門ナユラを知っているので連絡しただけで、」

「そして私の権限で資料を複製し持ってきたのだ。」

どこか誇らしげな様子で幼い面影を残した少女、ナユラが一步前へと出る。

「とりあえず記録を見てみましょうかあ。」

「あつ、涅サンと阿近サン見つけました。これより後のはずですが、」

「ここから先がないですね。」

「消去されたということでしょうか？」

夕四郎が誰に問うでもなく呟く。

するとひよりが、ひらめいた！と言わんばかりに手のひらを叩いた。

「妖怪白玉団子に聞いたらええんちゃうんか？」

「あいつは裏切りやがったよ。研究のために。」

一護が吐き捨てるように答える。

「それにおれの虚の力まで、、、。」

「あつそうだあ！各所での交戦記録を集計しました。」

「鉄裁サン、スクリーンを。」

「かしこまりました店長。」

鉄裁が戸の近くの壁にあるボタンを押すと、壁が両側へ開き、スクリーンが現れる。「なんでもありだなこゝ、」

そしてスクリーンの電源が付き、マユリや更木から《草冠もどき》と言われていた人物の映った画像が表示された。

「まず草冠さんを名乗っていた男ですが、おそらくこの人物こそ、アタシが探して欲しかった仙波逸ノ将でしょう。」

「一心さんが少し知っているようで。さつき話の途中で飛び出して行っちゃったもんだからどういふご関係かは知りませんが。」

「そしてこの少年が仙波の息子だと思われます。」

画像が切り替わり虚が表示される。

「で、これがさつきシユリーカー。」

「あとは、」

さらに画像を切り替えると、石田や射場と交戦している男が表示される。

「いつ、！」

吉良とナユラは顔を見合わせた。

「シヤズ・ドミノ!?!」

「でも顔が違うような、背丈も、」

一護は《シヤズ・ドミノ》という名前に反応する。

どこかできいたことがある、と。

「そいつ！聞いたことあるぞ、どこだ、？」

「僕が四十六室で斬って地下に沈んでいった滅却師です。」

イツルが今の体になって初めて稼働したときのことだった。

「この男はどうも相手のお仲間では無いようです。」

「第三勢力か。」

ルキアは鋭い眼光で黒コートの男の画像を観察する。

「その可能性は大かと。」

「仙波ってやつは何故こうやって仲間を集めて、…？」

一護の問いに対する答えが、戸が開くと同時に聞こえてくる。

「復讐だろうな。」

「親父！大丈夫なのかよ!？」

一護はこの中でも一番の重症だった一心の身を案じていた。

「大丈夫だ。元大鬼道長様に治してもらったからな。」

一心が腕をグルグルと回しているのを見て一護は胸を撫で下ろす。

「ほんで、復讐って誰にやねん!？」

ひよりが話を元に戻した。

「修多羅に涅、藍染、あともしかしたらお前も入ってるかも知れねえぞ。浦原。」

一心は端にあつた座布団を取り、よっこらせ、とあぐらをかく。

「あいつはよ、俺が十番隊隊長だったとき、うちから由寫ゆしま欧許おうこを引き抜きたいって直談判しに来たんだよ。」

「由寫欧許って、」

かつて霊骸を使い、尸魂街を襲った人物だった。

「仙波は、当時の十二番隊隊長代理だった修多羅千手丸と副隊長だった涅の野郎に対し謀反を起こしたが失敗し、除隊を命じられた。」

「除隊がどういう意味かお前ならわかるだろ?」

一心は浦原に問いかける。

「除隊になった後、気になって奴の経歴を調べたら非人道的な方法で滅却師を研究していたことがわかった。」

「まあそれに関しちや涅は特に賛成も反対もしていなかったようだがな。」

一心はさらに続ける。

「そして奴は今で言う義骸や霊骸、義魂の研究、あと、」

「死神、滅却師、虚の境界をなくす研究もしていた。」

「ちなみにそのときの謀反を止めたのが藍染だ。」

「藍染は仙波が自分の計画の妨げになると思ったんだろう。つまりそれだけ厄介な人物という」のだ。」

藍染が一目置く人物というだけで仙波がいかに厄介かが分かる。

「まあこれは予想だが、滅却師が攻めてきたときにどさくさに紛れて逃げたんだろ。」

腕組みをしたひよりが話を整理する。

「つまりなんや、仙波が自分の息子、シユリーなんたらとドミノって奴らを引き連れてマユリとか藍染に復讐しようとしてんのかいな？」

「簡単に言えばそうですね。」

「ほんでまたそのグループとは別に黒いコートのやつがおんのか。」

「まあそれもあっち寄りでしょうがね。」

ノヴァディオ
新しい神アジト

「これは面白いネ。」

マユリは液体の入った高さ一メートルほどの円柱状のカプセルを眺めていた。

「霊王の右足に脊髄。やはりすでに見つけていたか。あのときは他の部位を探していた、というところかネ。」

「それは我々の物です。涅マユリ。」

さっきの黒コートの男の声が響く。

その男の後ろには同じコートをきた者が3人立っている。

「間に合ってよかったです。あなたが奪って行く前に。」

「退いてもらえませんか？ここで暴れて霊王の肉体に傷はつけたくないのです。他のものならどれだけ研究しても構いませんから。」

「こんな物を前に退くと思うかネ？」

「でしようね。」

するとマユリの後ろから手足が伸びてくる。

いつの間にか背後を取られていたのだ。

「(霊圧を感じない?)」

羽交い締めにされたマユリの前には別の者が立っていた。

「ではな、三流の研究者！グラン・レイ・セロ王虚の閃光！」

マユリは羽交い締めから逃れようとするが、まるで岩のように固くやつの思いで右手だけが自由になる程だった。

「これはまずい、い、い、い」

マユリはすぐ様刀を取り出し自身に突き刺す。

パシヤツ

間一髪マユリは液体となり部屋の隅へと流れていく。

「あのまま撃つていれば、涅マユリは死んでいたかもしれません。」

「涅マユリは殺さないという約束だったはずです。」

「感動の再会だったものでついね。すまない。」

王虚の閃光を放った男は悪びれる素ぶりさえ見せない。

黒コートの男は胸元からある機器を取り出す。

「ソレハ何ダイ?」

まるで合成音声のような声をした人物がその見かけない機器を指して問いかけた。

「これは血を解析しその人物がどこにいるかを把握することができる装置です。」

「あの人も目の付けどころはいいんですが、少しばかり抜けているのと、すぐ熱くなると

「ところが惜しくてね、」

「まあだからこそ私の策がうまく事運ぶのですが。」

「何ノ話ヲシテイルンダ？」

「あ、いえいえ、こちらの話です。今は更木剣八がどこにいるかが分かるようになっていきます。」

更木剣八の名を聞いて、今まで沈黙していた残りの1人が突然話し始める。

「更木剣八だつて？どこにいるんだ？僕は約束したんだ。また殺し合いをするとね！」

「今はまだダメです。計画が狂います、筋道通り進めなければ。」

「ならいつならいいんだ!!」

「100年後まで御機嫌よう、といったところでしょうか。」

彼は王虚の閃光を放った男の方を向き、その言葉を伝えた。

「なぜ僕に言うんだ？」

言われた男もいきなり自分の方に言葉が向けられ、全く意味がわかっていない。そしてその言葉を聞くのは二度目のはずだが、初めて聞くに等しかった。

「なんにせよ霊王の欠片を持っている状態で彼とは会いたくないですからね。」

「では霊王の右足と脊髄を持って先に行つててください。」

「私はここで会うべき人がいますから。」

少年はポツリと一人座っていた。

斬魄刀を折られてしまったことで父から叱責を受け、落ち込んでいたのだった。

ふと顔を上げると見知らぬ黒コートの男が立っていたため、少年は驚き警戒を強めた。

いつから？

そんなことを考えながらその人物を見ていた。

「やあ、はじめまして。いや、私は初めましてではないか。」

「お、おまえは？」

「いいことを教えてあげよう。君の父上に報告するといい。」

「ここに置いてあつた霊王の一部は、、、」

少年は薄暗い廊下を全速力で走り抜け、父のいる部屋へとたどり着いた。

「父上！霊王の一部が奪われました！」

「なんだと!? 一体誰に、、、!?」

「涅マユリです！」

黒コートの男たちの前に黒腔が開いた。

「遅かったじゃないか。何をしていたんだい？」

「過去を塗り替えてきたんです。」

「ここが我々にとって勝利のターニングポイントとなる。」

T o b e c o n t i n u e d

第9話 B l e a c h m y h o r r o w s o u l

「涅槃、我々の物を奪うなど舐めた真似を、、、。」

「いいだろう。私の実験体の力を見せてやる。」

「麓源ろくげん！シャズ！明日だ！瀨靈廷に攻め込む！」

「おい、熱くなんなよ。冷静になれ。」

「私は至って冷静だ！」

「分かりやすいよなあ？麓源。熱くなったらすぐ口調が変わる。」

ドミノは隣の少年に話を振る。

「え、ええ、、、。」

尊敬する父だが、確かにすぐ熱くなるところは玉に瑕だった。

ドミノは何かを探すように辺りを見回している。
「シユリーカーの奴はどこに行きやがったんだ？」

「いない奴のことなどいい！この私の10000の実験体を持つてすれば奴の穴など簡単に埋められる！」

「だけどこいつら虚だろ？理性もクソもあつたこつちやない。」

「私の命令を聞くようにプログラムされている。問題ない。」

依然として仙波の語気は鋭いままだ。

「落ち着けて。」

「落ち着いているわ！」

仙波は自身の息子の方に向き直った。

「麓源、更木の居場所を見ろ！」

「は、はい！」

麓源は備品棚を探してみるが、あるはずの装置が見当たらない。

「父上ありません、」

「なんだと!?!」

「なんのために更木と交戦したと思っっているんだ!」

「わざわざ危険を冒してまで、逆骨に行つて血を採取したんだぞ?!」

「これでは奴の居場所が分からんではないか!」

「もしやこれも涅が、? 巫山戯た真似を!」

く十二番隊隊舎く

「本当に巫山戯ているヨ。2日も動けないとはもどかしい。」

マユリが使つた肉飛沫というものは、以前は1週間は動けなかったが、研究によつて2日にまで短縮することに成功していた。

「マユリ様、お体はいかがですか!!」

「声が大きいヨ！見て分かんかネー！」

マユリは培養液の中にいた。

そして未だ毛細血管が体を形作っている程までしか回復していなかった。

「あれも完成までまでもうあと一息だというのに、」

く一番隊隊舎く

「いやく悪いねえ。どうもまた逆骨に大量の虚が出現して、それが刀を持ってさらに矢を放つて言うんで調べてきてもらえないかな？」

「大きな戦闘になる可能性もあるから、部隊運用で頼むよ。」

「またかいな。またあいつらやる？もうええっちゅうねん。」

「桃、部隊員に伝達頼むわあ。」

「はい！」

雛森は瞬歩でその場を後にする。

「難儀なやつちゃで、ほんま。」

く浦原商店地下く

「一護の虚の力がなくなったのは本当か？」

「ええ。完全にとまではいきませんが、あと2、3日ほどで1%ほどの力しか残らないでしょう。」

一護は岩の上で斬月たちと対話をしていた。

ビルの側面に立つ一護。

そしてその先にはサングラスをかけた長髪の男が立っていた。

「一護。」

「おっさん。」

「虚の力が弱まっている。」

「ああ。分かってる。」

「奴はあつちにいる。おまえに会いたくないようだ。一護。」

滅却師の斬月はそう言い残し蒸発するように姿を隠した。

一護はビルの側面を歩き、ビルからビルへと飛び移る。

一つ先のビルの端に《白い自分》が腰をかけていた。

「おい。」

一護がもう一人の自分に声をかける。

「おう相棒、やっと俺から解放されるわけだな。」

「こつちもせいせいするつてもんだぜ。」

膝を立て腰かける虚の斬月は、立てた膝に手を置きうつむいた。

「結局おまえを完璧に引き摺り下ろすことはできなかったのが心残りだがな。」

「一瞬引き摺り下ろしたろ。石田にまで攻撃しやがって。」

2人はウルキオラと戦った時のことを思い出す。

「そうだったな。」

一護は虚の斬月の隣に腰をかけた。

「おれは、最初はお前に呑み込まれないように必死だった。」

虚の力を抑え込むため仮面ヴァイザードの軍勢と共に修行をした日々。

「破面と戦ってる最中も。」

「お前はおれの中にある《異物》だと思ってた。」

「けど、親父の話聞いてわかったんだ。」

自分のルーツを知り、それが異物ではないことを心で感じた。

「お前もおれだつて。」「お前もおれだつて。」

「被せてくんじゃねえよ。」

「おれは生まれた時からお前だからな。」

ホワイトという虚から黒崎真咲を通して虚の力が一護に受け継がれた。

しかし、ホワイトとしての人格ではなく、黒崎一護の一部として一護と共に新たに生まれた。

「おいおい、なんだ？ 湿っぽい話でもしに来たのか？」

「相棒、お別れの前にちよつと付き合えよ。」

「さつき心残りがあるって言ったろ？」

「おれはまだ諦めちやいねえ。」

「ああ、そうだな。」

一護が穏やかに微笑むと、空から黒と白の斬魄刀が降ってくる。

そして2人の背後で刀が地面に刺さる音が静かに響く。

2人はゆっくと立ち上がりビルに刺さった斬魄刀を抜き構えた。

「いくぜ、相棒。」

そして2人の刃は交差する。

「じゃあな、い。」

斬魄刀との対話を終えた一護は岩の上で立ち上がる。

「一護、、、。」

岩から下を見下ろすと三つの人影があつた。

「親父、浦原さん、ルキア。」

「話は済んだか、、、？」

「ああ。もう大丈夫だ。」

そこに凜とした女性の声が響く。

「喜助——！」

「あれえ？どうしたんスカ？夜一さん。」

夜一は柄にもなく、額に汗を浮かべ息を荒げたいた。

「仙波が攻めて来おったぞ！30分ほど前に連絡があつた。

青流門しゅうりゅうもんの外で十一番隊と

交戦しておる。相手はすごい数だそうじゃ！」

「ルキア！行こうぜ！あいつらを助けねえと！」

「ああ！」

く青流門く
しよりゆうもん

「おめえら負けんじゃねえぞ!!」

十一番隊は戦いとあらばすぐさま駆けつけ戦いに参加する。

今回もそうだった。

常に院内各所をうろつき戦いを探しているため一番に駆けつけた。

しかし今回は隊長、副隊長、三席が不在のため戦力としては普段より格段に下がっていた。

「ぐあああ！」

隊士が次々と倒れていく。

「こいつら、、、滅却師の矢を、、、！」

その時あたりの虚が一斉に凍りついた。

「こ、これは、、、日番谷隊長!」

「十番隊も加勢する!」

はくどうもん
〵白道門〵

「なんや青流門に敵や言われてこつち来てみれば、誰もおらんやないの。」

「読んどったやつまだ途中やったのに。」

全く異常のない青流門を確認して矢胴丸リサは早くも愚痴をこぼしていた。

「丹坊!この感じやったらあんた1人で行けるや、、、」

前に見える黒い霧。

「なんだあの霧は、、、?」

隊士も訝しそうにその霧を眺めている。

その霧はだんだんと白道門へと近づいてきていた。

「あれは霧やない、、、大量の虚や!!」

くろりようもん
く 黒稜門 く

「くそつ、こいつら、！多すぎる!!」

碎蜂を始めとする隠密機動が仙波の仕向けた虚と戦っていた。

「皆離れろ!!」

碎蜂の命令を聞くやすぐにその場から離れる。

皆、彼女がこれこら何をするのかわかっていたからだった。

「正解、、!!」

しゆわいもん
く 朱匣門 く

「キリがないわい!」

射場はリーゼントを揺らしながら虚を一体ずつ斬っていく。

「皆連携を取れ！犠牲を出すな！」

〜一番対隊舎〜

「逆骨に平子隊長、更木隊長、朽木隊長、それと追加で六車隊長にローズくん。」

「各門にリサちゃん、日番谷くん、射場隊長、碎蜂隊長。」

「涅隊長は戦闘不能。」

「で、ルキアちゃんが現世。」

「あとは僕と虎徹隊長だけか。上手いこと分散したねえ。」

「読みが正しければ、あそこに来るはずなんだけど。」

〈懺罪宮前〉

「本当に来た、、」

「おいおい、敵いるじゃねえか。」

地下から出てきたシャツは仙波の言葉を思い出し愚痴をこぼしている。

「おめえは確か、四番隊隊長の虎徹勇音だったか？」

「ええ。隊長としてここであなたを止めます。」

「奔れ、凍雲！」
はし いてぐも

柄からは三本の刀が扇型に伸びている。

そして柄は氷の結晶を思わせた。

「そんな三つ又の刀で防げんのか？」

シャツが矢を放つと勇音は氷の盾を生成しその矢を防ぐ。

「成る程、」

「日番谷冬獅郎といい、朽木ルキアといい、隊長格は氷ばっかりだな。」

勇音は舞い散る氷塵を手で払いながら話し始めた。

「日番谷隊長は生成量、朽木さんは温度、そして私は、」

「硬度です。」

氷の壁が猛スピードでシヤズへ向かっていく。

「そしてその氷を自由自在に動かすことができます。」

氷の壁はシヤズにぶつかり氷塵を舞い上げ霧となる。

く技術開発局く

「シヤズが交戦を始めたか。京楽、読みが外れたな。」

「やあ、待つてたよ。仙波逸ノ将。」

笠を深々とかぶつた京楽が壁にもたれかかっていた。

「京楽春水、、、なぜここへ？」

「流魂街で突如滅却師型の虚が大量に現れ、次は瀟靈廷の四門に敵襲。」

「これは明らかに戦力の分散だ。」

「戦力を外へ引き出し内からの急襲を思わせる。そして懺罪宮前の地下水道から尸魂街に入る。」

「君の配下がね。」

「僕も危うく騙されるところだったよ。けどよく考えたら地下道を使わなくても黒腔で来れるはずなんだ。」

「ということはこれらは陽動。狙う先といえば、、、」

「だから隊長格に必要以上に出てもらい、より君の策を盤石なようにしたんだよ。君を確実にここへ来させるために。」

「だがなぜあそこから出てくるとわかった？ 地下水道の出口は数え切れないほどあるはずだ。」

「あそこが一番戦いやすいし、目立つからだよ。」

「なんせ、君の狙いは陽動だからね。」

ひとしきり京楽が説明すると、仙波は刀を抜いた。

「だからどうした？ 私の能力を忘れたわけではあるまい？」

「覚えてるよ。だからこそ総隊長である僕が来たんじゃないか。」

「君の正解はもちろん、始解もやっかいだからねえ。」

「あの時は彼がいたからなんとかなっただけだよ。」

「藍染か。叛逆者を懐かしむとは悲しいよ。総隊長殿。」

「まあお喋りはここまでにしようかな。」

京楽は静かに二本の斬魄刀を引き抜いた。

「花風紊れて花神啼き 天風紊れて天魔嗙う、花天狂骨。」

「遡れ、渺渺分岐」
びようびようぶんぎ

「仙波くん、対策済みだ」

「早速だけど、手加減はなしだよ。廻天不精独楽ー」
かいてんぶしょうどま

京楽が斬魄刀を振ると、何本もの大きな竜巻が仙波に迫る。

「竜巻は仙波に直撃し、土煙や、小さなネジやボルトに包まれた。煙が晴れていく。」

「やはり広範囲の攻撃だとやり直しても無理みたいだねえ。」

仙波の左腕は血を流し、だらんとしている。

「始解では駄目だな、。。」

仙波は自身の霊圧を上げていく。

「さあ、ここからが問題だねえ。」

「正解、
靈障隸属渺渺分岐」
れいしょうれいぞくびょうぶんぎ

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.

第10話 Lance With Snowwhite

「正解、れいしょうれいぞくびようびょうぶんぎ靈障隷属渺渺分岐」

「形状は変わらないんだねえ。」

京楽は報告書で能力しか見ていなかったため、その形状の無変化に驚いていた。

「私の能力を全て知っているものだと思っていたが。」

「いやいや、あの時君が十二番隊内を壊したせいで映像で残ってなかったんだよ?」

「ということは、修多羅、涅、藍染の報告による知識のみか。」

「まあそうだね。」

「ということとは、私の能力の全ては知らない訳だな。」

く懺罪宮前く

「知っていますよ。あなたが何者なのか。」

勇音は刀を中段に構えていた。

「何者かだと？滅却師のシヤズ・ドミノ様、、、だろ！」

シヤズは連続で何本もの矢を放つ。

「効きません！」

「また盾か！うざってえ！」

「だが守ってばっかりじゃあおれは倒せねえぜ!？」

「わかってます、、、よ！」

氷の盾はシャツズに向かって奔っていく。

「ツイエルトクリーク・フォン・キーツ・ハルトファイエルト銀鞭下りて五手石床に墮つ」

「グリッツ五架縛！」

「盾、、、ですか？」

その盾を見た勇音が霊圧を上げると斬魄刀、三又の刀の内一本が光を放ち始める。

目の前の氷の盾が霧へと変化し、グリッツ五架縛を通過した。

盾を通り過ぎた霧はまた氷へと変化する。

今度は盾ではなく、槍に。

「そんなことが、!!」

そしてその槍はシャツズの右脇腹に大きな風穴を開けた。

「クソ、、、クソがあ、、、」

「その超速再生、破面ベースというのは本当なようですね。」

「おれは誇り高き滅却師だ！」

怒りの表情を浮かべたシャズ・ドミノの右脇腹はすでに塞がっている。

「どう思うのもあなたの自由ですが、少なくとも、、、」

「あなた、シャズ・ドミノではありませんね？」

「おれはシャズ・ドミノ様だ!!!」

—————

お前には？ステイグマの文字を与えよう。

お前は正式な星十字騎士団ではないが、1人だけ部下を与える。

よろしく願います、ドミノ様。

行くぞ、技術開発局とかいうところを襲撃する。

こつちから開けてやりたかったんだけどよ、、、。

あん？何だてめえは？

おれは星十字騎士団シヤズ・ドミノ

与えられた力は、、、

すまない、、、

助かった、、、 ああ、、、

オレンジ色の死神と交戦したが全く歯が立たなかった。

なに？やつがあの特記戦力の黒崎一護なのか？

それでドミノ様は？

なんだと、？

ドミノ様、、、。

そこに転がっていたのは主人の生々しい死体だった。

—————

「ではあなたが最後に戦ったのは誰ですか？」

「決まってるだろう！黒崎の野郎だ！」

「それはおかしいですね。シャズ・ドミノは吉良副隊長が斃したはずですよ。」

「なんだと？」

「あなたは知らないでしょうが、あなたの見たあの死体は偽物ですよ。」

「その後シャズ・ドミノは四十六室を蹂躪し、その後吉良副隊長に討たれたのです。」

知る由もなかった。自分は早々に黒崎一護に倒され気絶していたからだ。

まさか偽の死体を使い生きながらえていたとは。

「あとあなたは破面ではないと言いましたが、射場隊長との戦闘記録を涅隊長が解析したところ、破面の霊圧や特徴と一致したとのことでした。」

男は顔を曇らせ始める。

「シャズ・ドミノの再生能力は、欠損部分に霊子を集め再生するものです。」

「しかしあなたは欠損部分から新たな組織が《生えて》きた。これは虚や破面のそれと同じです。」

「さらに再生するとき、耳のその髑髏のピアスも再生したようですね。それがあなたの破面としての仮面ではないですか？」

「何が言いたいん、、、」

そして勇音は真実を突きつける。

「あなたはシャズ・ドミノ唯一の部下、アルファラ・シラですね？」

男は一呼吸置くと静かに話し始める。。

「ふう、、、」

「あの時の俺は滅却師の残党として斬られた後だった。」

天に向いて倒れる自分。

そして自分の視界を遮る影。

私は仙波逸ノ将。

君の主人を生き返らせたくないか？

どうやって、、、

どうやって、か。

君はかなり肉体が欠損しているね。

私は死神、虚、破面、滅却師の境界をなくす研究をしている。

虚か破面になれば君は超速再生で回復できるかもしれない。

なにを、、、言つて、、、？

君が生まれ変わるんだよ。

シャズ・ドミノに。

うつむいていた男、アルファラは顔を上げた。

「ドミノ様は死神にやられて終わるような方ではなかった。」

「だから恥を忍んで破面となった。全てはシャズ・ドミノの名を三界に轟かせるためだ！」

「アルファラ・シラは死に、シャズ・ドミノに生まれ変わった。」

勇音は悲しそうな顔をしている。

「シャズ・ドミノは死に、アルファラ・シラは生きている。破面として。これが事実です。」

「やかましい!!」

「生きろ！^{ピアピレツ}生存能力!!」

骸骨のような顔に、外殻のついた太い腕、そして背中には甲羅がありそこにはダガーナイフのようなものが無数にも生えていた。

「外見は破面というよりも虚ですね。」

「こちらは一気に決めるとします。」

〈技術開発局〉

「ドミノが帰刃したようだな。やつは並大抵では止まらない。交戦している死神が可哀想だよ。」

「その心配は無用だよ。」

「なぜ毎度毎度、四番隊隊長は殺傷能力の高い卍解なんだろうね？」

仙波はかつての四番隊隊長、卯ノ花烈を頭に思い浮かべた。

「卯ノ花隊長が殺傷能力の高い卍解だと？」

「そうか、君は知らないのか。」

京楽は笠から不気味な笑顔をのぞかせている。

「虎徹隊長は卯ノ花隊長が残した遺書で、無駄な優しさはなくなったからね。彼女は今や護廷十三隊内でも貴重な回復手段でもあり、盾でもあり、そして矛でもある。」

「虎徹隊長が卍解するみたいだね。彼女は並大抵じゃあ止まらない。交戦してる破面が可哀想だよ。」

霊圧を上げた勇音の後ろには薄っすらと蜘蛛の足のようなものが浮かび上がる。

「卍解、、」

あたりの気温が一気に下がり、霜が降り始めた。

「凍雲射手蜘蛛。」

「正解だと？」

ぼやけていた蜘蛛の足は実体を持ち、銀色と白の美しい縞模様をしている。

そして勇音の頭上には同じ模様をした楕円形の塊が浮かんでいた。

「蜘蛛か、？？」

その楕円の塊上方から白い霧のようなものが勢いよく噴出される。

「なにつ？」

その速度は速く、アルファアラは避けることができなかつた。

そして鋭い氷柱がアルファアラの左太腿を貫く。

「速いな。だがさつきとなんら変わらない。」

見る見るうちにアルファラの傷口は塞がっていく。

「変わりがない、、、そうですか？」

アルファラが辺りを見回すと、霧のような糸のような線が張り巡らされていた。

「これは、、、糸？」

するとその糸が端から凍り始め、何本もの氷柱がアルファラの体を貫く。

一歩動いただけで串刺しとなり動けなくなっていた。

「この正解は雲の糸を作り張り巡らせます。」

「そして私以外の体温を感じると雲の温度が下がり氷となります。」

「その温度はマイナス70℃。一番硬い氷です。」

その説明の間にも次々と氷が体を貫いていく。

「あなたはもう蜘蛛の巣にかかりました。」

シャツは蜘蛛に捕まった虫のようにもがいて暴れていた。

「私は四番隊隊長、虎徹勇音。」

「先代ほど優しくはありませんよ?」

T o b e c o n t i n u e d

第11話 The Battle

それは10年前のこと。

自身の尊敬する上司、卯ノ花烈が更木剣八に斬術を教えることとなった。

分かっていた。

卯ノ花烈は還らないと。

だが気持ちの整理ができなかった。

頭では理解できても感情が追いつかなかったのだ。

理解しなければ、そう思っていた矢先だった。

自分の事務机の上に置かれた手紙。

読まなくても分かっていた。

それは遺書だと。

「姉さんまだ読んでないの？」

「なんか、読んじやうと完全に卯ノ花隊長が消えちゃうみたいで、。。。」

その時ガラガラつと四番隊長執務室の扉が開いた。

「やあ、姉妹揃って仲がいいなあ。」

「京楽隊長、どうされたんですか？」

「君の元には卯ノ花隊長の遺書があるだろう？けどまだ怖くて読んでいないよね？」

「だから僕はそれを読んでもらうために卯ノ花隊長の遺言を伝えにきたんだ。」

「遺言、？？」

京楽は無間で聞いた通りの言葉を勇音に伝える。

「《私が死んだ後、本当の剣八の名を継ぐのは更木剣八。》」

「《四番隊長の名を継ぐのは勇音、あなたです。だから勇気を出して読みなさい。あなたは『勇ましい』のだから。》」

「だってさ。僕の更木隊長に斬術を教えるっていう提案に対する卯ノ花隊長の条件が、戦争が終わればこの遺言を君に伝えることだったんだ。」

「卯ノ花隊長、……」

~~~~~

勇音へ

あなたは優しく、勇ましく、正しく、真つ直ぐで純粹な人です。

私が穏やかに、優しく有ることができたのも、勇音と共に居たからでしょう。あなたは隊長に相応しい人材です。

ただ一点を除いては。

それは優しすぎるところです。

無闇矢鱈に敵を傷つける必要はもちろんありません。

しかしいざ戦いとなれば相手を殺すつもりで挑まなければならぬ時もあります。私の知る限りではあなたは唯の一度も殺気を放つたことはありませんでしたね。

隊長となる以上、自分でしか斃せない敵を殺すことも責務の一つです。私の背中を見てきた勇音なら分かるはずです。

殺す気で戦わなければならない時を。

良い隊長になりなさい。四番隊を頼みましたよ。

今までありがとう。

元四番隊長

卯ノ花烈

~~~~~

「なんだと？」

「更木隊長、私と殺し合いをしてください。」

「やっぱ隊長の仇でもとりに来たってか？」

「いえ、そうではありません。」

「山本前総隊長がお亡くなりになり、卯ノ花隊長を越える方は唯の一人も居ないと思つていました。」

「しかしあなたが越えたのです、更木隊長。」

「私は四番隊隊長になります。そのためには卍解の習得が必要です。」

「いち早く卍解に至るには、生半可な鍛錬、気持ちでは無理だと考え、命を賭してあなたに挑みます。」

「面白え。死んで後悔すんなよ!？」

「あ、、、が、、、」

巨大化したアルファラは何十本、何百本にも及ぶ氷の槍により串刺しとなっている。

「反撃の間は与えませんよ。あなたがどれだけ強大な力を持っているようと、使わせなければいけません。」

「相手に反撃する間を与えない。これこそが相手を殺す戦いの全てです。」

さらに勇音は雲を操り、串刺しになったアルファラを包み込んだ。

そしてその雲を瞬時に凍結させ、アルファラを包む大きな氷塊を作り出す。

さらにそこへ何百本もの細く、鋭利な槍を突き刺した。

「ドミノ、、、さ、、、ま、、、」

く技術開発局く

「ほらね？言っただろう？」

「あの破面は決して弱い訳じゃあない。」

「むしろ並みの隊長格でも苦戦するほどの霊圧だ。」

「ただ運が悪かったね。殺すための戦い方を知り、殺傷能力の高い卍解を持つ隊長が相手で。」

仙波の知っていた虎徹勇音とは違っていた。

そのまでの戦闘能力があったとは。

「あれほどの破面が、やつが一瞬でだと、、？」

「さて、こちらにも決着をつけようかねえ。」

「そうだな。お前を殺し私が決着をつける。」

京楽は辺りの霊圧を覚知する。

「運がいい。ここあたりはどうも局員がいない、倉庫の近くみたいだ。」
すると京楽からは黒く、冷たい霊圧が流れ出始めた。

「卍解、、花天狂骨枯松、、」

仙波は天井に向け球状の装置を投げると、半径1メートル程の円状にそれは爆発し繰り抜くように天井が崩れ落ち土煙に包まれた。

煙が晴れると仙波は誰かを左腕で背後から押さえ、首元に刃を当てていた。

「京楽、、、隊長、、、？」

仙波に捕らえられていたのは技術開発局局員の壺府リンだった。

「うっ、、、!!!」

壺府リンは突然頭の中でデジャヴのような感覚を覚える。何度も何度も床が崩れ転落死する感覚だ。

「うわあああああ!!!」

あまりの脳への衝撃で壺府は発狂している。

そして京楽自身も卍解をしていないにも関わらず何度も卍解をしたような感覚に陥った。

「これでも卍解をするか？こいつを巻き込んでしまうぞ？」

「一体、、、」

京楽も脳への衝撃で冷や汗を流している。

「一体、何回やり直したんだ、、、？」

「千以上かな？」

「なかなか範囲が広くて逃げれなくてね。人質を探すことにしたんだ。」

「そうしたらこの建物の屋上に1人だけいるじゃないか。」

「霊圧遮断衣を着て呑気に菓子を貪っていたやつが。」

「ピンポイントで天井に穴を開けるのは苦勞したよ。」

「しかも運良く途中でシートに包まれ落ちてこないと転落死してしまうからな。」

「何度も転落死させてしまい、その度に時間を巻き戻した。」

「彼は700回程死んだのでは？」

「まあそんな過去があったからこそ今がある。感謝しなければ。」

「京楽は卍解するための霊圧を弱めていく。」

「なるほど、、、始解の回数制限はなくなってるわけか、、、。」

「それだけではない!!」

「これは、、、!？」

「仙波は京楽が繰り出した廻天不精独楽を再現させる。」

「京楽の笠は強風に飛ばされて竜巻に飲み込まれてしまった。」

「靈子の時間を戻し、その現象をやり直させることができる。」

「何回でも、、ね。」

何本もの竜巻が京楽に近づいていっていた時だった。

「月牙十字衝!!」

声とともに、薄暗い空間の中に十字架の斬撃が光を放ちながら竜巻にぶつかる。

「京楽さん!」

「一護君、、なぜ、、?」

「十三番隊が襲撃されたついで、ルキアとこつちに来たんだ!」

「ルキアは1人でいいから、京楽さんのところに行けつて。」

「黒崎一護。待っていたよ。これで安心して戦える。」

「なんだと?」

「なんでも撃つといい。月牙でも虚閃でも、滅却師の矢でも。」

「一護君、挑発に乗っちゃダメだよ。彼は靈子の時を遡って再現できるからね。技を与えるのと同じだからね。」

「その3人。ここで何をしている?ここは我々十二番隊の敷地なんだがネ。」

「涅隊長!元に戻ったのかい?」

「お陰様で。まあまだこの有様だが。」

マユリはいつもの派手な格好をしておらず、短髪の、いたって普通な姿だった。ただ耳がないことを除いては。

「涅!!貴様、靈王の欠片を盗みおつたな!」

「なんの話をしているのかさっぱりわからんが、、元上司に会えて余程興奮しているよ

うだネ。」

「ほぎけ！貴様を殺すためにここまで来たのだ！」

「研究だけではなく、斬術まで三流の君にそんなことができると思つていいのかネ？」

「貴様こそそんな病み上がりのような格好で私に勝てると思つていいのか？笑わせ
るな！」

仙波はマユリに挑発され頭に血が上りきつていた。

「おつとおつと、これだから野蠻人は怖いヨ。私のような弱い存在が直接戦うなどと
考えようものなら脳髓まで震えがとまらなくなってしまうからネ。」

「これを使うことにするヨ。」

マユリは胸元から手のひらサイズの四角形の機器を取り出した。

「なんだそれは？」

「これはついさつき完成したものでネ。」

「死神、虚や破面、滅却師の全ての霊圧を持つものを消滅させる薬品と、その散布機器だヨ。」

「これを使えば君はおろか、その部下や軍勢も一網打尽というわけだ。素晴らしい。」

仙波は驚くどころか笑っていた。

「だろうな。そのためにわざわざ十三番隊を襲撃させたのだ。」

「そうすれば朽木ルキアに情報が伝わり、黒崎一護と共にこちらに来るだろうからな。」

一護自身も疑問がなかったわけではない。

なぜ十三番隊だけが襲撃されたのか。

夜一は各門に敵襲と言っていたのに。

「黒崎一護は死神、虚、破面、滅却師の霊圧が混ざっている、謂わば我々の同類だからな。」

「一緒にすんじゃねえ！」

「黒崎一護、お前は私の盾になるのだよ。」

「涅隊長、一護君がいる今、それは使わないよねえ？」

京楽は少し焦りを見せた顔でマユリに尋ねかける。

「そいつがどうなろうと私は知ったこっちゃないヨ。」

「待て！ 涅隊長！」

マユリは機器の上面にあるスイッチを迷うことなく押してしまう。

仙波はまさかの事態に狼狽する。

「うあああああ!!」

そして技術開発局を中心に青い光が広がっていく。

（白道門）

「なんやあの光は!? こつち向かって来よるで!」

虚を斬り伏せながらもリサは同心円状に広がる青色の光に目をやる。

「光がこつちに来るぞ!」

隊士達も慌て始める。

「みんなオラに隠れろ!」

☒丹坊は迫り来る光の壁から隊士をかばって覆いかぶさった。

光は☒丹坊の体を通り過ぎたが何も起こってはいなかった。

効果があったのは周りにいた虚の軍勢だった。

「敵が消滅していくぞ!」

「マユリのやつやな、;、使う前にどんなんか言えや、;、!」

く懺罪宮前く

「あの光は!？」

勇音は両手で顔を隠す形で自分の身を守るが、光に直撃してしまう。

「何も、、、ない?」

そしてアルファアラの方に向き直ると異変が起こっていた。

氷の槍で串刺しとなっていたアルファアラは、光が当たるとまず氷が砕け、蒸発するようにならなくなっていった。

く技術開発局く

「一護君、なぜ、、、?」

京楽は最悪の事態となっていなかったことに安心しつつも驚きを隠せなかった。

「だから言ったはずだよ。君の虚の力は何かと邪魔だと。」

「あんた、、、。」

あの時マユリが虚の力を奪ったのは自分を救うためだったことを知る。

「く、、、ろつ、、、ち、、、」

「オヤオヤ、私としたことが、、、完成とは言わず試作品と言っておけばよかったかな？
消滅はしていなかったものの、仙波は地に伏し瀕死の状態だった。

「サア、仙波三流研究員。終わりにしようじゃないか。」

「父上!!」

仙波の息子、麓源がマユリと仙波の間に入り、機器を使いポータルのようなものを開いた。

「こちらですー!」

麓源は仙波を担ぎ、そのポータルの中へと入っていく。

「断界に逃げたようだね。」

く断界く

「クソ、、、。」

仙波は麓源に担がれながら意識朦朧としていた。

「父上、これを。補肉剤です、少しは回復します。」

仙波は補肉剤を打ち回復するが、歩けるようになった程度で戦うには不十分だった。

「待てー！」

一護、京楽、マユリが仙波を追い詰める。

仙波は分かっていた。

もう逃げ場も勝ち目も無いと。

「こうなったらお前らもろとも死ぬのみよー！」

仙波は胸元から小型のタイマーのような物を取り出した。

「あと15秒で爆発を起こす。」

「断界内で爆発を起こし、現世と尸魂界の時間軸をずらす！」

「そうすればお前らがどちらに戻ったとしても肉体は時流についていけなくなりバラバ

ラだ!!」

一護達と反対側、仙波の背後から光が差し込んだ。

「間に合った!」

「浦原さん!!」

仙波は浦原という男の名を聞き、頭に血がのぼる。

「浦原————!!」

「正解、観音開紅姫改メ。」

浦原の背後には巨大な黒髪長髪の女性が前屈みに出現した。すると仙波の持つ時限爆弾を大きな二つの手が包み込んだ。

「時限爆弾の配線を組み替えました!あと一分は稼げます!」

「縛道の七十九、九曜縛!」

浦原は縛道で仙波を縛り上げた。

「早くそれぞれの出口へ！」

「黒崎サンこつちです！」

一護と浦原は現世へ、京楽とマユリは尸魂界へと駆けて行く。

「待て、、、！」

「浦原！涅！」

「くそっ、、、」

仙波は縛道で縛られたまま爆発に呑み込まれた。

To be continued……

第12話 GET BACK FROM THE STORM

く現世く

「うおおおおおー！」

現世への出口から空中に飛び出た一護は、突然のことに霊子を固められず落下していく。

パンツ

「ぶおっ!？」

一護の背後から何か布のようなものが覆いかぶさった。

「!?っおおおおおおおう」

なんだかわからないがものすごいスピードで回転している。

「これつてもしかして」

「よっしゃア!!!」

「久々にきたきたきたきたぜエ〜〜!!!」

「ジン太」

「ホーーーーー!!!ム!!」

「テツサイデスキャッチ!!!」

「むりむり!吐く吐く吐く!!」

バサッ

布が魔法の絨毯のように浦原商店のメンバーと一護を乗せ飛んでいる。

「なんでこの帰り方なんだよ！」

「それになんで浦原さんは一緒にやられてないんだよ!？」

「アタシはそういうのは嫌なんで。」

「テメエまた肘入れんど、！」

「あの青春の日々を思い出しました？」

「まあな!!!」

「とりあえずうちに行きましょう。断界がどうなったからも調べないと。」

「皆さんもいますし。」

〈浦原商店〉

「あなた！」

織姫が一勇と手を繋ぎ一護を出迎えた。

「織姫、一勇、、それに石田、チャドまで!!」

「チャドお前今日、、」

チャドは今日防衛戦のはずだったのだが、、。

「問題ない。」

「君のことを聞いて開始1秒でKOだよ。」

石田もチャドの強さにあきれた様子だった。

「ルキアちゃんは？」

「あいつは尸魂界だよ。心配ない。」

浦原が奥の研究部屋から頭を掻きながら出てくる。

その様子からあまり良い状況ではないようだ。

「解析の結果、尸魂界ではあれから91年経っています。」

「そんなにずれちまったのかよ、、！」

「こちらからの入り口を修復するにはさすがのアタシでも10年はかかります。」

「てことは100年近くか、、。」

「心配いりませんよ、あちらの100年も丁度こちらの10年と同じくらいですから。」

一護は顔を曇らせたままだった。

「まだ心配ごとでも?」

浦原は一護の浮かない顔が気になった。

「いや、。。。」

「仙波ってやつがどうなったのか知りたくてさ。」

「あいつ、仙波ってやつは認めてもらいたかったんじゃないかね、。。。」

「浦原さんにも、涅マユリにもさ。」

仙波は自分の能力を誇示することに必死になっているように見えた。

「頑張ってるのに人から認められないと確かに腐っちゃおう時があるよな。」

「（藍染サンの時といい、あなたは本当に相手の心を理解するのに長けていますね。）」
浦原は心のうちで一護に感服していた。

「おれも一勇をしつかりと認めてやらないとな。」

一護は一勇の頭にポンつと手を乗せる。

「すっかり父親ですねぇ。黒崎サン。」

子育てに苦戦していた一心と真咲の姿を思い出していた。

「一心サンの若い頃そっくりだ。」

「暑くなってきましたね。窓でも開けましようか。」

月はいつもよりも輝き、いつもよりも大きく、高く空に上がっているように見えた。

第2章 第三の月

第1話 The 2nd Moon
The 2nd Moon
higher than

「ああ？なんだテメエ!？」

「俺たちとやろうつてののか？ああ!？」

「この、スカしやがって、死ねや！おらっ、、、ゴフツ!!!」

殴りかかったパンチパーマの男は思い切り胸を蹴られ、後ろへ吹っ飛んでいく。

「浜ちゃん!」

「おまえら、、、浜ちゃん、、、て、呼ぶなって、、、ゴフツ!!!」

浜ちゃんと呼ばれるパンチパーマの男は仰向けのまま頭を何度も踏みつけられる。

「何すんだお前！」

「知らねえよ。まずお前から謝らなきゃなんねえだろ。」

「なんでお前に謝らなきゃなんねえんだよ!!」

「俺にじゃねえよ。」

「へ?」

「こいつにしつかりと謝れってんだよ!!」

「うわ!!!!
!!!化け物!!!!
!!!助けてくれー!!
!!!」

黒崎一勇^{かずい}／15歳

髪の色／オレンジ

瞳の色／ブラウン

職業／高校生兼死神

く 黒崎医院く

「ただいまー。」

一勇が帰宅すると、ライオンのぬいぐるみが出迎えた。

「あれ？コン、お袋は？」

「織姫ちゃんは買物だよ。」

「親父は病院か？」

コンはてくてくと廊下からリビングへと向かう。

「一護は尸魂界に行っちゃったよ。定例会だつてよ。」

リビングに入った一勇はカバンをソファアームへと投げた。

「部隊長も大変だな。」

「虚が出たら彦禰ひこねかお前の近い方が出てくれつてき。」

彦禰とは一昨年護廷隊の十二番隊に入隊し、十二番隊から外世部隊として十三番隊付で現世隊へと異動してきた青年である。

彼は入隊と同時に六席の席次が与えられるほどの人材だ。
また初の流魂街鏝るこんがいさびつら面地区出身の死神となった人物でもある。

ホロー！ホロー！

一勇の制服のズボンに括り付けてある《死神代行証》が光りながら鳴り響く。
虚ホロウの出現を知らせる警告音だ。

「うおおおい！何度鳴つてもびっくりするなあ。ええと、、ちょうど真ん中くらいだな。」

「コン、ちよつと俺行つてくるわ！」

く空座町某所く

「破道の三十三、蒼火墜!!」

一勇が着くと、もうすでに彦禰が戦闘を始めていた。

「彦禰!!」

「一勇君！」

二人は目を見合わせ同時に斬魄刀を振り下ろす。

斬られた虚は蒸発するように空へと消えていった。

「彦禰速いな。まだ学校いたんじゃ？」

彦禰は納刀しながら答えた。

「帰宅がてらちようどここら辺を警邏けいらしていたんです。」

彦禰は死神だが、普段は現世での情報収集や現世の生活に溶け込むため空座第一高校に通っている。

ピピピピピピ

伝令神機が異常を知らせる警報音を発する。

「なんだ？」

一勇が彦禰の取り出した伝令神機を覗き込む。

「この霊圧は、、、滅却師、、、？、、、破面？」

今までにあまり経験のない霊圧を感じた二人は辺りを見回し検索する。

一勇は南東方向の上空に浮かぶ人影を捕捉した。

「あいつだな！」

彦禰も一勇の声により相手を覚知する。

すると相手は気づいていたのか2人に向け攻撃を仕掛けてきた。

「クソっ！ 矢か!? 撃ってきやがった！」

「縛道の八十、断空!!」

彦禰は鬼道で盾を発現させ霊子の矢を防ぐ。

そして身近に迫った矢の霊圧の質を感じ取った彦禰はある疑念が浮かび上がる。

「この霊圧、昔僕が滅却師の弓で撃った虚閃の感覚に近い、、？」

「こうなったら始解で、、」

一勇は霊圧を上げていく。

「ダメです！ よく分からない相手に手の内を明かすのは良くありません！ ここは鬼道で

様子を見ましよう！」

「破道の五十四、はいえん 廃炎！」

「おれ鬼道苦手なんだよな、ゝ。」

彦禰はさらに攻撃を続ける。

「縛道の六十一、りくじようこうろ 六杖光牢！」

「破道の八十八、ひりゆうげきぞくしんてんらいほう 飛竜撃賊震天雷砲！」

渾身の破道を放つと相手に命中しあたりが白煙に包まれる。

煙が晴れると再度姿が露わになり、彦禰は驚愕することとなる。

「無傷、？あれほどの鬼道で!？」

すると相手は失望したかのような声色で突然言葉を発した。

「始解は見せない、か。」

そして右手を上げ黒い穴のようなものを開く。

「あれは、、、ガルガンタ黒腔!？」

「ではな。黒崎一勇、鍔面彦禰。」

「そう言い残すと黒腔へと消えていった。」

「なんだったんだ、、？」

「とにかく浦原商店に行きましょう。」

く浦原商店く

「どうもく、いらつしやいませく。そろそろ来る頃だと思ってましたよ。」

「先ほどの霊圧は？」

「今解析中ですが、破面と滅却師が混ざったような霊圧です。」

「一体誰が、、。」

「それもまだ分かっていません。とりあえず黒崎サンが定例会から戻ってきたら話し合

「いましてよ。」

（戸魂界）

「おう！一護久しぶりじゃねえか！」

「恋次！やっぱり隊長の格好は似合わねえな！」

「ほっとけ。こつちだつてなりたくてなつたわけじゃねえんだ。」

約100年前の仙波の事件を受け護廷隊は組織改編をし体勢をより盤石なものにしていった。

十三隊のほかに独立した2つの組織が作られたのだ。

十三番隊直轄部隊だった現世部隊は独立し、黒崎一護を部隊長とする外世部隊となっていた。

現世部隊が出来てすぐの時に仙波の事件が起き現世と行き来が出来なくなった。

そのためメールでのやり取りしかなかったものの、現世部隊として一護が中心となつて現世を守っていたことは死神達も知っていた。

そのため往来が再開してすぐに独立部隊としての運用が可決されたのだった。

部隊構成は、

虚担当として十三番隊隊士一名、死神代行

副部長兼滅却師担当として石田雨竜

破面担当としてネリエル・オーデルシュヴァング、ロカ・パラミア

完現術師担当として茶渡泰虎、銀城空吾

支援担当として浦原喜助、握菱鉄裁つかびしてっさい、月島秀九郎

であつた。

仮想敵である破面や滅却師を入れることに四十六室はかなり渋っていた。

しかし京楽や四十六室の一人、阿万門あまかどナユラの尽力により認められたのだった。

そしてもう一つの独立した組織が技術開発局。

十二番隊の主要メンバーはそのまま技術開発局に異動となった。

「それじゃあ定例会始めようか。七緒ちゃん。」

「はい。では各隊の報告からお願いします。」

「では、二番隊から。」

「特段の報告事項はない。」

二番隊長である碎蜂はびしやりと言いつ切る。

「では三番隊。」

「総隊長から要望のあった遠征演習だが、各隊3名ずつを選出してくれ。」

三番隊長、狩能雅忘人は40年前に隊長に就任したばかりの新人隊長であった。

かつて彼は七代目剣八である剝屋敷くむやしき剣八の元で腕をふるっており、50年前までは遠征隊員として「メノスの森」とよばれる虚圏の一部で何百年もメノスと戦っていた。

彼の腕、人柄の良さは確かだが、隊長就任に反対する者は多かった。

以前遠征隊出身で隊長となった者が謀反を起こしたからであり、また同じ三番隊ということで批判の声が強まった。

しかし剝屋敷を知る京楽、また帰還後狩能と一戦交えた十一番隊隊長更木剣八、そして狩能とメノスの森で共闘したルキアが推薦したため、上も納得せざるを得ず隊長就任に至ったのだった。

四番隊隊長、虎徹勇音が一步前へと出る。

「四番隊から皆さんにお知らせで、四番隊隊舎前の雑貨屋ですが各隊にも設置が決まりましたのでお伝えしておきます。」

四番隊の雑貨屋とは現世のコンビニエンスストアを模して作ったものであり、これは

四番隊三席の山田花太郎が現世派遣の際に見知ったものを取り入れたのだ。

「よっしや！うちにもコンビニできひんかなくて思うてたんや！あ、五番隊はなくんもないわ。ひまでひまでしやーなくてなあ。」

関西訛りの強い金髪おかつぱ頭の五番隊隊長、平子真子がまるで独り言のように報告する。

「六番隊は隊土産としてワカメ大使饅頭の販売を始めた。売れ行きが良ければ現世での販売も検討している。」

六番隊隊長朽木白哉の報告とは、自身のデザインさせたワカメのキャラクター《ワカメ大使》の饅頭を宣伝だった。

「兄様!!」

ルキアは目を輝かせている。

「ちよつと朽木隊長！定例会でワカメ大使関連商品の宣伝するのやめてくださいって言いましたよね！」

伊勢七緒は語気を強めて白哉に訴えかける。

「あの、ワシ話してもいいですかいのお？」

コワモテでグラサンをかけリーゼントの隊長、射場鉄左衛門が話しに割り込む。

「うちの隊舎の横にある犬小屋を立て直そう思っております。」

「流魂街の野良を拾いよつたら場所が足りんようなるけえでかくせにやいけんのです。また予算は次に提出しますし。」

近年流魂街では野良犬による噛みつき事件が多発しており、この犬を保護し、調査犬として育てる政策が開始された。その主管は七番隊であった。

「八番隊はそんな報告することなんてないつすよ。」

新人隊長の一人である八番隊長、阿散井恋次は軽く目を閉じて言った。

「恋次はなんも考えてねえから報告することもねえよ。」

「うるせえぞ一護！」

「一護チャチャ入れんじゃねえ。会議進まねえだろ。うちも特にねえ。早く終わらせてえんだよ、こっちは。」

ソフトモヒカンで白髪の男、九番隊隊長六車拳西も一護にヤジを飛ばす。

「十番隊は勤務怠慢の隊士を厳しく処分する隊規を制定中だ。」

この中でダントツに若い白髪の青年、日番谷冬獅郎は自身の部下松本乱菊に対する隊規制定計画を報告する。

「十一番隊はねえ。」

十一番隊隊長更木剣八はめんどくさそうに吐き捨てる。

「報告はねえが檜佐木！また殺し合いしようぜ。」

更木は不気味な笑みを浮かべる。

「ちよつと勘弁してくださいよ！もうあれ二度とやりませんから！」

「十二番隊からは瀨霊廷通信できたんで各隊に配布します。今回は各隊一押し隊員特集が目白押しです！」

技術開発局ごと隊長、副隊長を含む席官が抜けたため、已解が使える檜佐木が十二番隊長に、そして吉良イヅルが副隊長に任命されていたのだ。

そして空いた三番隊副隊長には新人隊長の狩能を支える意味で、元一番隊の沖牙源志郎が就任していた。

檜佐木は当初隊長就任を拒んだが、東仙の立っていた場所に立ってみようと思うに至ることがあり、覚悟を決めたのだった。

そしてルキアが一步前に出る。

「十三番隊からは特にありません。」

「外世部隊からは報告が一件。虚圏で感知したことのない霊圧を記録した。」

「ネル、ハリベル、グリムジョーがその正体不明の敵と交戦したが、途中で相手が撤退したそうだ。」

「一護君、それは何人だい？」

京楽は目を細め詳細を尋ねる。

「ネルが言うには3人らしい。」

「私からもその話だよ。今回の霊圧はなんと驚くことに、仙波と同じ部類の霊圧だ。」

「まあ正体までは分かつてはいないがネ。もしかすると100年前の事件と関係があるかもしれない。」

技術開発局局長の涅マユリも一護の話に情報を追加する。

「全く、各隊この話が出るかと思えばしょうもない話をベラベラと、。零番隊も暇ではないんだよ。」

涅マユリは護神大戦や100年前の仙波の事件、そして新たな技術の開発が買われ零番隊に昇進していた。

その際自分の御殿に技術開発局を移設したため、十二番隊は一般隊となり、檜佐木が隊長に就任することとなったのだ。

零番隊ではあるものの、護廷十三隊と密接な関係にある装置や施設が各所に点在するため定例会にも出席することとなっていた。

プルルルルル、プルルルルル

「ちよつとすまねえ緊急通話だ。」

一護は胸元にしまっていた通信機を取り出し、隊長達が並ぶ横一列から数歩下がる。

「ああ、浦原さん。ああ、なに？本当かそれ？二人は？ああ、分かった。終わればすぐ向かう。」

「喜助はなんやて？」

平子が一護に問いかける。

「破面の霊圧をした奴が空座町に現れた。」

「一勇と彦禰が交戦したそうだ。」

彦禰という名前を聞き檜佐木が反応する。

「黒崎！二人は、彦禰は無事なのか!？」

元々自分の隊から現世へと派遣されたため気になるのだろう。

「二人とも無事だ。」

「とりあえずおれは戻る。またわかり次第ルキアか恋次宛てに情報を送る。」

そういうと一護は瞬歩で一番隊舎を後にする。

「一護君の報告待ちとしようかねえ。」

「じゃあ各々待機で。」

く空座町く

「どうだい？ノヴァディオ。」

「シエンですか。どうでした？黒崎一勇と錆面彦禰は。」

「錆面彦禰は頭が回るようだ。」

「で、そっちは井上織姫を確保できたんだらうね？」

「勿論。今回の策に彼女は必須ですからね。」

「今はザエルアポロが。」

「さあ、尸魂界崩壊のカウントダウンスタートです。」

T o b e c o n t i n u e d

第2話 Born from the Fire

（浦原商店）

「一勇！彦禰！無事か？」

「親父！」

「大丈夫です。檜佐木さんにもそうお伝えください。」

「きつと心配してくださってますから。」

「浦原さん、奴らはなぜ一勇たちを襲ったんだ？」

「敵サンの目的はよくわかっています。」

「ただ話を聞くに、一勇サンと彦禰サンの能力を知りたかったのかもしれませんが。」

「まあ詳しいことが分かればまた連絡しますのです。」

く 黒崎医院く

「おう！一護！やっと帰ってきやがったか！」

「コン、織姫は？」

「帰って来てねえぜ？」

「なに？お前から知ってるか？」

「一護はコンの隣にいる三体のぬいぐるみにも尋ねてみた。

「知らない。」

「私も存じ上げませんが。」

「俺もだ、、、。」

「まさかやつらの狙いは、、、!!」

く 断界く

「フハハッ！」

「なんです？ ザエルアポロ。気味が悪いからやめてください。」

「今になってやつと気づいたみたいだよ。自分の妻が攫われたとね。」

「盗聴なんて趣味悪い！」

後ろを走る少女がザエルアポロを非難する。

「敵戦力分析のためさ。」

「それよりもそれぞれやられないようにして集中下さいよ。」

「双極の丘と技術開発局ですからね。」

「分かってるよ。」

ザエルアポロは鬱陶しそうに答えた。

「特に技術開発局は用心してください。今やあそこは零番隊ですから。」

暗闇の先から光が差し込んで見えるのが見える。

「さあ双極組は出ますよ。」

「技術開発局組はあなたが仕切ってください、ザエルアポロ。」

「任せてくれ。」

「回収が終われば引き上げてください。ではまた後で。」

く双極の丘く

「懐かしいよ。」

左胸に風のような紋章があらわれたコートを着ている男はかつて自分がこの場所にいた時のことを思い出していた。

「さあ黒崎織姫、燬^{きこうわう}燬王を破壊される前の状態に戻してくれますか？」

王印の紋章の男が優しく織姫に尋ねる。

しかし織姫は声を大にして拒絶した。

「絶対にいや！」

「はあ、先ほども言いましたがこちらには石田竜燕りゅうえんがいるんです。断れば、、分かりますね？」

「竜燕くんを人質に取るなんて卑怯だよ！」

「いいから早くするんだ。」

「石田竜燕は今私の風の檻に入っている。腕くらいならもいでやってもいいんだが。風の紋章の男は苛ついた様子で織姫を急かした。」

「わかった、わかったから竜燕君には手出ししないで。」

「あやめ、舜桜。双天帰盾、私は拒絶する。」

オレンジ色の結界が処刑台上部を包み込む。

「こっちは今のところ順調ですかね。」

その瞬間、凄まじい霊圧が男の背後から流れってくる。

「何が順調だと?」

「更木剣八、来るのはわかっていましたよ。」

風の紋章の男が剣八の方へと近づいていく。

「私に任せてもらおう。」

「Z^サe^イi^ゲg^ゲe^ゲ d^{ディ}i^ッc^ヒh^ヒ、メツサー!」

「呑め、野晒。」

斑目一角は猛スピードで出て行ってしまった剣八を追いかけて、やっと双極の丘へ辿り着いたのだが、そこで目にした光景は目を疑うものであった。

「隊長！早いっす、な、な、な、」

「隊長!!!」

剣八は大きな血だまりの中に伏して倒れていた。

「てめえがやりやがったのか!!」

「よくも!!」

「卍解——!!」

「龍紋鬼灯丸!」

卍解の霊圧が作り出した突風にさらされながらもコートの男たちは余裕な様子だっ

た。

「君は正解しないと聞いていましたが、更木剣八がやられていたのがよつぽどショックだったのですか？」

く霊王宮く

「この数の霊圧は、。。。」

兵主部が筆を置いた。

「技術開発局か！風呂なんか入ってる場合じゃねえぞ、チクショー!!」

く技術開発局く

1000の紋章の入った男は先頭を走っていた。

「どこなんだ？」

「次の突き当たりを左だ。」

その後を8の紋章が入った男、ヒルのような紋章の入った男、そして小柄な子供のよ
うな人物が走っている。

「敵だ!!ぐああああー！」

黒コートたちの前に現れた局員たちは次々と血だまりを作っていく。

そして黒コート達は、複雑な道の奥、特殊独房へと辿り着く。

「なんだ？」

「君がナナナ・ナジャークープだね。」

「あ? ああ、。。。」

「一緒に来てもらおうよ。」

ザエルアポロが特殊独房の外にある開閉装置を押した。

「オヤオヤ、それは私の駒だよ？勝手に決めてもらっては困るんだが。」

8の紋章の男、ザエルアポロはご機嫌な様子でフードを取り、顔を露わにする。

「久しぶりだね。涅マユリ。」

「私は科学者以外は中々覚えられない質でネ。」

「おい、小娘にシュリーカー、こいつを連れて先に行け。」

ザエルアポロはシュリーカーと少女に、ナナナ・ナジャークープを連れていくよう言いつけた。

「小娘って言うな！」

「行くぞ、小娘！」

「あんたまで！」

シュリーカーと少女が来た道に戻っている時だった。

「散れ、千本桜。」

突然の攻撃。

コートに紅葉の紋章が刻まれた、小娘と呼ばれていた少女は風を操り千本桜を退ける。

「あんたは確か、、朽木白哉、、！」

「行くぞ、、卍解。」

白哉はここで逃すまいと手掌で千本桜景厳を操っている。

「はああああああ!!」

少女の放つ風が千本桜を飲み込み、白哉に跳ね返した。

白哉は廊下の壁に叩きつけられ、辺りは砂煙が舞っている。

そしてなぜか紅葉も宙を舞っていた。

「なるほど、。。。」

砂煙が晴れると白哉は額や腕から血を流していた。

「先に行ってるぜ！あとは頼んだ！」

シュリーカーはナナナを連れ先へと進む。

角を2つほど曲がり、あと一息というところだった。

「うわっ!!」

シュリーカーが走っていると、突然前から氷塊が飛んできた。

「てめえら逃げれると思うな。」

そこには氷の翼を生やした白髪青年が待ち構えていた。

「めんどくせえなあ。」

シュリーカーの口元にはすでに火球が浮かび上がっている。

地獄での憎しみを込めた一撃。

グランセイ・ドラゴアリエント
「王虚龍の息吹!!」

ひょうてんぐんちようつから
「氷天郡鳥氷柱!!」

く双極の丘く

「全く、他愛もない。これが本当に卍解か？」

一角は風の紋章の男の前に倒れていた。

さらに一角の龍紋鬼灯丸は粉々に砕けていた。

「この程度が今の十一番隊副隊長とは、一ノ瀬の方がよっぽど強かったぞ。」

そこに2人の隊長羽織を着た男が駆けつける。

「阿散井、俺が先に行く。」

檜佐木修兵と阿散井恋次であった。

「卍解。」

「風死絞縄！」
ふうしのこうじょう

「なんだこれは、？」

風の紋章の男と檜佐木は黒い鎖で繋がれ、さらにその鎖は頭上に浮かぶ黒い太陽のよ
うな球体に接続された。

「相手を攻撃せず、守りに徹してください！」

王印の紋章の男が檜佐木の卍解の攻略方法を教える。

「くそつ、分かってやがるのか。」

「阿散井!!」

檜佐木の声と共に、恋次が燬きこうわう王を治す織姫の元へ飛んだ。

「井上を返してもらおうぜ!! 卍解!!」

「双王蛇尾丸!!」

その瞬間、恋次の目の前に9の紋章の入った男が現れ進路を塞いだ。

「オット、僕モいるんだヨ?」

合成音声のような声の主は罅迫り合いとなった恋次の斬魄刀を振り払う。

「なんだこいつは!？」

すると9の紋章の男はフードを取りその顔を恋次に見せつけた。

「なんだはねえだろ。阿散井!」

「志波副隊長、!」

「つてことはおめえが!!!」

そのとき山本元流齋重國にも似た霊圧が双極の丘を包む。

「復元が終わりました!あと少しです。」

巨大な炎の鳥が羽ばたいている。

男が小さな玉を取り出すと、燬きこう王はそこへ取り込まれていった。

「よし、終わりました!引き上げです!」

〈技術開発局〉

「おっと、終わったようだよ。」

ザエルアポロが耳に手を当てている。

無線のようなものを聞いているようだった。

「なんの話かネ？」

「井上織姫が、いや、今は黒崎織姫だったかな。」

「どうも慣れなくてね。あの頃は井上織姫、井上織姫と呼んでいたからかな。」

「ついに回答する能力も無くなってしまったのかネ。憐れで涙が出そうだよ。」

ドカンッ

一瞬だった。

100の紋章の男がマユリの腹を物凄いスピードで打ち抜いたのだ。

「何をしている？行くぞ！」

100の紋章の男は手の平をブンブンと振っている。

「野蛮だね。やはり分かれて正解だったよ。」

そう言うと2人は走り始めた。

↳技術開発局廊下↳

「あんたの能力じゃ、あたしのと相性悪いよ！諦めたら？」

白哉は完全に攻撃を封じられていた。

そこにザエルアポロ達が合流する。

「小娘、行くぞ！」

「王虚の閃光！」

白哉は咄嗟に千本桜で何重もの盾を作るが弾き飛ばされてしまった。

ザエルアポロ達は白哉を置いてまた走り始め角をいくつか曲がると、またもや敵と交戦しているシュリーカーと合流した。

「シユリーカー！お前もまだやってたのか！」

またもや100の紋章の男が日番谷冬獅郎を氷塊ごと拳で打ち抜いた。

「ぐはっ、っ、」

白哉、日番谷を退け黒腔のある場所まで戻ってきたのだが、そこには兵主部一兵衛、二枚屋王悦、麒麟寺天示郎が待ち構えていた。

「よお。もう帰んのか？まだまだ楽しんでいけよ。」

「兵主部に二枚屋、麒麟寺か。」

「やばいの？」

少女は能天気なザエルアポロに尋ねた。

「やばくはないが長引くな。」

「ウキヤクを呼ぶか。」

そう言うたザエルアポロはまた別の黒腔を開く。

その黒腔の中にはフードを被ったコートの人物が立っていた。

「ウキヤク、頼むよ。」

「ウ、ウ、ウアアアアアアアアアアギヤアアアア！」

鼓膜を破るような叫び声。

そしてそれを聞いた零番隊はその場に倒れてしまう。

「こ、これは、、？」

「体が、、痺れて、、？」

「これ前の霊王サマの力じゃNAいか、、！」

「さあ、行こうか。」

その場で動けなくなった3人を横目に黒腔へと歩いていく。

く双極の丘く

「待って！待ってくれ！僕も連れて行ってくれ！」

「なんだ？」

「僕はホムラ！僕も尸魂界を滅ぼしたい！僕も連れてって!!」

「あの犬のような生物は？」

風の紋章の男は怪訝そうな顔で王印の紋章の男に尋ねている。

「人狼族ですよ。」

「面白い、何か使えるかもしれません。」

「彼も連れて行きましょう。人化の術には興味がありますし。」

く現世く

「うちの竜燕もいないんだ!!」

「霊圧を探しても見つからない！」

「今、夜一サンから連絡がありました。」

「井上サンが燬^{きこうわう}燬王を復元したそうです。」

「燬^{きこうわう}燬王？」

「朽木サンを処刑するときに出てきた炎の鳥です。」

石田は冷静さは失ってはいないものの、かなり焦っている様子だ。

「つまり、竜燕は井上さんが確実に治すための人質にされたと言っていることですか？」

「その可能性が高いかと。」

石田の横に立つ女性は顔に冷や汗を浮かべ石田を咎めている。

「なんでうちの子が連れてかれなきゃなんなのよ！」

「あんたあたしが力なくなっても守るって言ったじゃない！」

「すまない、、、。」

「兎に角、井上サンと竜燕君を探しましょう。」

「一番隊隊舎」

「本件の状況を報告いたします。」

「六番隊朽木隊長、八番隊阿散井隊長、十番隊日番谷隊長が軽度の負傷。」

「十一番隊更木隊長、同隊斑目副隊長、零番隊涅マユリ殿が重度の負傷。」

「涅マユリ殿は既に麒麟殿に搬送されています。」

「また外世部隊部長黒崎一護の妻、黒崎織姫及び同隊副部長石田雨竜の息子、石田竜燕が連れ去られた模様。」

「現在場所を特定中。」

一通りの報告が終わると京楽が話し始めた。

「みんなも気づいていると思うけど、今回の敵は更木隊長がやられるほどの敵だ。」
「そして今回敵さんは本格的に攻めてきたわけじゃない。明らかにこれからの戦いのための準備をしに来ていた。」

「必ずまた来るよ。」

「各々準備を怠らないように。」

「それと、更木隊長、斑目副隊長は中でも傷が酷いからね。零番隊で治してもらうことになるから。」

「その間は悪いけど、弓親君が隊長代理でよろしく頼むよ。」

く虚夜宮く

「黒崎のおばさん！」

メガネをかけた目つきの鋭い青年が織姫に近寄る。

「竜燕君！よかった！大丈夫？」

「ええ。けど滅却師十字は取り上げられてしまいました。ここからどうやってでるか、」

く虚夜宮会議広間く

黒コート達は会議のため広間に集まっていた。
かつてと同じように。

「この感じ十刃だったころを思い出すね。」

「2ツ席が増えテイルがナ。」

そういうと黒コートの者たちは次々と左右の椅子に座っていく。

8の紋章

9の紋章

100の紋章

風の紋章

紅葉の紋章

脚の様な紋章

骨の様な紋章

蛭の紋章

杖の紋章

護廷隊の紋章

そして新たに、

焰の紋章

弓矢の紋章

その横には人狼族の少年。

最後に王印の紋章の男が上座に位置する椅子に腰をかける。

「この場合、藍染は紅茶でも淹れるのですかね？」

T o b e c o n t i n u e d

第3話　M e m o r i e s　o f

く一番隊隊舎く

「織姫が奴らといただと？」

「落ち着け一護！」

「まず更木隊長、一角さんが奴らと交戦。そのあと檜佐木さんと俺が戦った。」

「お前も分かるだろ!?!これだけの戦力をして勝てなかったんだ!イラついたって仕方ねえだろ!！」

「くそッ！」

「気持ちにはわかる。けど今は少しづつ解明して行くしか方法はない。」

檜佐木が一護を諭すように語りかけた。

〈技術開発局〉

京楽と阿近はモニターの前に立っていた。

「観測した霊圧を解析し、データベースで照合してみたんですが、」

阿近は画面を指差して説明する。

「王印の紋章はわかりません。一致するものがありませんでした。」

「8の紋章はザエルアポロの霊圧と一致しました。」

「100の紋章はシエンと呼ばれる破面。」

「こいつは皆もご存知の通りシユリーカーです。」

「涅局長の話だと地獄に堕ちたようですが、なんとかして戻ってきたみたいですね。」

「あと風の紋章は照合結果自体は出てきましたが、100年前にデータが消去されました。」

京楽は顎髭をさすっている。

「消したのは仙波くんなんだろうねえ。」

「そして最後にこの紅葉の紋章の霊圧、」

「これは？」

「これは過去のデータではなく、文献で得た知識ですけど思念珠と呼ばれる存在に近い霊圧みたいっす。」

「なんだい？その思念珠ってのは。」

「それがまだよくわかっていないんすよ、、、。」

穿界門が現れその中から浦原が飛び出てきた。

「アタシがお答えしましょう！」

「簡単に言えば記憶の集合体です。」

「記憶の集合体？」

「ええ。魂魄から抜け落ちた記憶が固まってできたものです。」

「そしてその空の魂魄を欠魂ブランクといいます。」

「その欠魂が自分の記憶を求め思念珠に引き寄せられる力は相当なものです。それこそ世界の存亡に関わるほどのね。」

「本当かい、喜助くん？」

「まああくまで文献を読んでの予想ですが。」

「ならまずその思念珠つてのを見つけないとねえ、…。」

「一番隊隊舎」

「それじゃ王族特務零番隊と護廷十三隊の合同会議を始めるよ。」

「ちよつと待て。なぜ零番隊もいるのだ。」

「碎蜂は納得がいかない様子だった。」

「やつらは霊王宮にある技術開発局にも襲撃してきたからな。」

「天示郎が首をコキコキと言わせながら気だるそうに答えた。」

「天示郎に続き兵主部も言葉を発した。」

「おんしらに言っておきたいこともあつてな。」

「更木と斑目をこちらに渡してもらおう。天示郎のところで療養させるわい。」

「えっ、？」

四番隊で治療していたためか、勇音がつい驚きを口に出してしまう。

そして京楽が兵主部の意向を訪ねた。

「彼らも鍛えるんですか？」

「そうじゃ。やつらは本当の力を手にしておらん。2人とも斬魄刀が壊されたようじゃし、丁度いい。一から打ち直す。」

「分かりました。和尚達のご自由にして下さい。」

「あと僕からも。」

京楽は手に持った資料を上にあげた。

「資料を見て貰えば分かる通り、思念珠搜索部隊についてだ。」

「五番隊平子隊長を責任者として、八番隊阿散井隊長、十番隊日番谷隊長、外世部隊石田副隊長、十一番隊第三席綾瀬川くん、一番隊第三席龍堂寺くんをお願いするから。」

「ちよい待てや！俺いつでもシフト入れる大学生とちやうねんぞ！」

「いつつも俺入ってるやんけ！綱彌代ん時も、仙波ん時も！」

「つてこのやり取りも何回目やねん！」

「思念珠っていうのがあまり分かってないみたいだから滅却師の可能性も考えて石田くんにも参加してもらおうよ。」

「スルーかい!!!」

「ほかに何かある人はいるかい？」

「もうええわ、、、こき使ってくれ、、、。」

「じゃあ解散で。」

く 一番隊隊舎前く

平子が不貞腐れて一番隊隊舎から出ると、ガタイの良い銀髪の死神に呼び止められた。

「平子隊長、よろしいですか？ 一番隊三席、龍堂寺鳳巖です。」

「今回、思念珠討伐隊に参加させて頂くことになりました。よろしくお願い致します。」

「龍堂寺ってあの龍堂寺の？」

平子は目を細める。

「はい。綱彌代家の件で四十六室から復権の許可が降りまして。」

龍堂寺言家は鳳巖の祖父の代に、まだ少年だった綱彌代時灘のただの気まぐれで追放された。

そして断界へと追いやられたのだ。

綱彌代家はこの件を権力争いの末のものと四十六室へ報告し、事態を収束させた。

しかし綱彌代時灘の一件で彼の悪性が認められたこと、さらに京楽の直訴により行き場を失っていた元上流貴族の龍堂寺家を普通の待遇で尸魂界へと受け入れることと

なつた。

かつて鳳巖の叔父にもあたる龍堂寺家のある男が世界を破壊しようとする目論み、それがある死神代行が阻止したことがあったが、記憶があるものは今や一護以外誰一人としていない。

ただ綱彌代家に追いやられた悲劇の元貴族という認識だった

「そうなんやな。まあ俺今回サボる気満々やしよろしく頼むで！」

平子はそう言うともまた歩き始めると、鳳巖を通り過ぎたところで手をヒラヒラと振つた。

く現世く

一勇と彦禰は突然現れた大量の虚の対処に当たっていた。

「大丈夫か、彦禰！」

「ええ。」

彦禰は冷静に虚を次々と斬り伏せていく。

「しかし多いですね。きりが、」

そのとき背後から突風が吹き抜けた。

彦禰と一勇がその方向を振り返ると虚の軍勢の中に人影が立っていた。

「あれは、、、黒コート？」

その人物は金色の錫杖を振り上げると、小さな竜巻を発生させた。

「あんた邪魔!!」

一勇はその黒コートに踏み台として肩を踏まれた。

飛び上がった時の風でフードがとれる。

その正体はオレンジ色の髪留めをしたポニーテールの少女だった。

「はあああああああ!」

少女は錫杖を操り竜巻を発生させ虚を蹴散らしていく。

そしてその竜巻は紅葉の葉を巻き上げながら虚を追いかけていた。

そしてその少女は紅葉に包まれながら姿を眩ませる。

「すげえ、、、あの数を一瞬で、、、」

一勇が空を舞う紅葉に目を奪われているときだった。

後ろから女の子の声が聞こえてくる。

「よおし！やったーあー！いえいえいえいえー！」

「いい感じー！」

一勇と彦禰は後ろを振り向いた。

その少女は一言。

「なんだあんたか。」

そこには先ほどの少女が制服姿で立っていたのだ。

「お前いつの間に義骸に入ったんだ!？」

「知らない。」

「お前何者だ!？」

「死神、かな？」

「てか人のことを聞くときはまずじぶんからじやなくい？」

「ぐっ、ぐっ、黒崎一勇だ。」

「あら！割と素直ね！ってこのやり取りどこかでやらなかった？」

「知らねえよ!!」

「まあいいや！あたしは茜雫！じゃっ！」

そういうとその少女、茜雫は駆け出した。

「待て待て待て！」

一勇はすかさず茜雫を追いかける。

「一勇くん！そつちは頼みました！浦原さんには僕が伝えておきますから！」

彦禰は一勇に満面の笑みで手を振っていた。

「な！彦禰！てめえ！くそっ！」

黒コートの一人なのは間違いなかったため一勇一人でも追いかけるしかなかった。

「待ちやがれ！黒コートのこと教えろ！」

「なんなの!?!しつこーい!!」

なにやら茜雫は楽しそうにしているようにも見える。

「あ！じゃあさ！鬼ごっこしよう！」

「はあ？」

「捕まえたら言うこと聞くからさ！」

「くそっ！ふざけやがって！」

それから20分ほど走っただろうか？

一勇は茜雫を完全に見失ってしまった。

「このショッピングモールに入ったのは見えたんだけど、広すぎるだろ、」

「わっ、見て！」「危ない！」「ショーか？」

突然周りがざわめき始め、そして皆上を向いている。

そのショッピングモールでは吹き抜けの4階部分に『毎月1日は大セール』という垂

れ幕とそれを吊るすロープが対角線上にかかっていた。

そしてなんとそのロープの上を茜雫が歩いていたので。

しかももう半分くらいまで来ている。

「あ、あいつ!!」

「あっ」

茜雫は急にバランスを崩し、足を滑らせてしまった。

「きゃあああああ!」「うわああ!」「まじか!!」

周りで見ていた来客も思わず悲鳴をあげた。

そして茜雫は一階の植え込みに転落した。

「大丈夫か!?!」「頭から落ちたよな?」「救急車だ!」

植え込みの周りに人だかりができています。

「ジャジャーーン! イエーイー!」

茜雫は一勇の遙か後ろに両手を挙げて立っていた。

「なあんだ手品かよ。」「よかったあ。」「すげえ！」

「どお？みんな!？」

一勇はものすごい剣幕で茜雫の元へと走った。

「お前！何やってんだよ！」

一勇は茜雫の手を取り強引にその場を離れた。

くシヨツピングモール屋上く

「なあんだ！奢ってくれるなら言つてよ！」

一勇と茜雫は屋外のテーブルにつき、クレープを食べていた。

「イチゴ！、、、じゃなくて一勇だった。」

一勇は一瞬考えた。

一護のことなのか、母のことなのか。

しかしイントネーションは完全に一護だった。
さらに茜雫の食べているクレープはチョコバナナだ。

「親父、の、の名前のこと言ったのか？なんで知ってたんだ？」

「分かんない。」

「けどなんだか懐かしいの。」

「で！黒コートについて知ってること教える！」

「えく？どうしよっかなあ。」

「おい！」

「あたし記憶がないの。だからよくわかんない！」

茜雫は悲しそうな笑顔を浮かべている。

「一勇くん！」

そこへ雨竜が駆けつけた。

「石田のおじさん！」

「その娘は？」

「茜雫って言うんだけど記憶がないみたいで。」

「記憶がない？」

「(思念珠は確か記憶の塊。定まった記憶がないとも言える。)」

「えっと、茜雫さんといったね？記憶を戻せるかもしれないから一緒に来てもらえないかな？」

「いや！」

「え、、、」

「いや、記憶を取り戻せるかもしれないんだよ？」

雨竜もなんとか説得しようと試みる。

「石田！」

「日番谷くん。」

そこへ次々と死神が到着する。

「甘えぞ、お前の子供だって連れてかれてるんだろ？力づくでもこいつを引っ張って行くべきだ。」

数人の隊長格が現れ『こいつを引っ張って行く』という言葉聞き一勇は立ち上がる。

「ちよ、ちよつと！なんなんだよ！いきなり来てこいつ連れてくつて！話聞けばいいだけじゃねえか！」

冬獅郎は斬魄刀を抜いた。

「黒崎一勇、下がつてろ。」

「下がれるかよ！」

「邪魔をするな！霜天に座せ氷輪丸！」

「詠み入れろ、融月！」

冬獅郎と一勇は刃を交えた。

「行け！茜雫！」

「逃すな！」

茜雫は瞬歩でその場を離れた。

「ちよつとこれはまずいかな、ゝ、？」

茜雫は走りながら独り言をつぶやいた。

すると前方に2人の刀を抜いた人影が立っていた。

「うーん、見つかったやつた、。」

そこにガタイが良く、それでいて品のある死神が立ちはだかる。

「私は一番隊第三席龍堂寺鳳巖。黒コート達のことを聞かせてもらおう。」

茜雫は龍堂寺の様相を見て、なぜか即座に敵と認識してしまう。

「夕闇に誘え、マイトレイヤ弥勒丸！」

「解放だ！」

弓親も刀に手をかけている。

「いけえええ！」

茜雫が斬魄刀を振ると、紅葉の葉と共に竜巻が襲う。

「なんて風圧だ。」

弓親は飛んでくる紅葉を手で払いながら攻撃のタイミングを見計らっていた。

「咲け、藤孔雀！」

弓親は竜巻を躲し瞬歩で茜雫の背後へと回り斬魄刀を振り下ろす。

「なっ!?!」

弓親の振り下ろした斬魄刀はあろうことか華奢な少女である茜雫の腕に斬り込めていなかった。

そしてよく見ると茜雫の腕には青色の線模様が浮かび上がっていたのだ。

「静血装か、、！」

「うああああ!!」

茜雫の口元には赤黒いエネルギーの球体が形成されていた。

「まずいつ、、王虚の閃光！」

赤黒い閃光が放たれる。

弓親はやられた、と思ったが前を見ると何者かが王虚の閃光を吸い込んでいる。

「なんだ、、？」

「君は、、！」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
.
.
.
.
.

第4話 時雨（しぐれ）・鉄球（てつきゅう）・柘榴（ざくろ）・黒猫（くろねこ）・群狼（ぐんろう）

「君は、、、！」

見覚えのある緑色の髪、ミニスカートを模したような死覇装。

そして特徴的な斬魄刀。

ピンク色の刀身の切っ先には雨竜の持つ銀嶺孤雀に似たものが付いていた。

弓親はその名を口に出す。

「九条望実、、！」

望実の斬魄刀は光を放ちながら王虚の閃光を吸い込んでいった。

そしてその閃光を跳ね返す。

霧が晴れると茜雫は黒い空間の穴へと逃げていた。

「黒腔か、、。」

「なぜ九条望実が、？」

「これは私が作ったのだヨ。50年ほど前ネムの遊び相手にでもとネ。」

雨竜が後ろを振り向くと何とも形容し難い格好をした男が立っていた。

「涅マユリ、、！」

「呼び捨てにされる筋合いはないのだが。マアいい。」

望実が振り向くと一人の男に目が止まる。

「お前は、、黒崎一護？」

望実は目を丸くして一勇をまじまじと見ている。

「それはおれの親父。おれは黒崎一勇。お前も間違えてんのかよ。」

「お、親父、、？」

「実はこいつはもう用済みでネ。譲りに来たんだヨ。君たちのことを考えて連れてきたこの慈悲深い私に感謝してほしいものだネ。」

「なにが慈悲深いだ、、。とりあえず黒崎の家に行こう。」

石田は銀嶺孤雀を収めている。

く 黒崎医院く

「ただいま。」

「おう！一勇、遅かったじゃ、、、！」

一護の目に映った少女は腕を組み、ぶいと横を向いていた。

「望実!!!お前望実じゃねえか!!!」

「おい！コンー！」

「なんだよ、今グラビアアイドルがバインバインで、、、」

コンはトボトボとリビングから廊下へと歩いてきた。

そして一護の先にいる人物が目に入り一瞬言葉を失った。

「お、、、お前、、、」

「のぞみく!!!」

コンはいつもよりも勢いよく飛びつこうとするが、、、

「相変わらずだなスケベ。」

コンは望実の足で踏まれながら満面の笑みと涙を浮かべていた。

一護、一勇、雨竜、望実はリビングのテーブルについて今回のことについて話をして
いた。

「なるほど。涅さんが作ったんだな。で、望実、どうすんだこれから？」

「ここに住む。」

「はあ??お前、俺は家庭持ってたぞ?」

「ならあのぬいぐるみたちは何なんだ。」

望実はソファからこちらを覗いているコン、リリン、ノバ、クロードを指差していた。

その様子を見たコンが隣の部屋に入り、ガサガサと音を立ててから戻って来た。

「ほらよ、このコン様と同じになれるんだからありがたく思えよ。」

コンは自分のスペア用に石田に作ってもらった《自分》を渡す。

「いやだ。」

「モツドソウルなんだからぬいぐるみ入れよ!ここではそういうルールだぞ!」

「絶対にいやだ。」

「あ！そうだ！階段のところ飾ってあるぬいぐるみがあるじゃん！」

同じくソファアに座って話を聞いていた夏梨が階段へと走り、すぐ様戻って来た。

「これ。」

ピンク色で顔の部分だけ白色のウサギのぬいぐるみだった。

「これ前にルキアちゃんも入ったことあるとかなんとか。織姫ちゃんが言ってたけど。あの有名デザイナーの毒ヶ峰さんが持ってたやつなんだって。」

望実は顔を赤らめ恥ずかしそうにしている。

「まあこれなら、。」

「これからまた賑やかになりますな！」

「よろしく、頼む。」

「あたしリリン！よろしくね！」

「よ、よろしく。」

〈虚夜宮〉

「勝手に出歩くなと言ったはずです。思念珠。」

続いてシュリーカーが大声を上げる。

「危うく足が付くところだったんだぞ！」

「なに？ビビってんじゃ〜ん！いつも《死神たちを殺してやる》て息巻いてんのに。」

茜雫はおちよくるようにシュリーカーの真似をしてみせた。

「てめえ！おれは計画の話をしてんだろが！」

「醜いねえ。これだから野蛮な虚出身は。」

ザエルアポロが嘲笑している。

「お前だつて元を辿れば虚だろうが！」

「やめて下さい。思念珠、今回のあなたの行動はいただけませんよ。」

「もし次やれば容赦なく消します。替えはいますからね。」

王印の紋章の男は部屋の隅に立つ人狼のホムラに目をやった。

「はいはい、わかりましたよ！」

茜雫は頭の後ろで腕を組み適当な返事をして席に着いた。

「一欠ですが会議を始めましょうか。」

〳 黒崎医院〵

「どうやらあの風の紋章の男はバウントのようです。」

あれから浦原も合流し、敵戦力の分析をしていた。

「バウント？つてことは、、！」

「そう。狩矢^{かりやじん}神です。」

かつて尸魂界に復讐するため複数のバウントを率いて瀟靈廷に侵入した男。双極の丘で一護に討たれ灰と散ったはずだった。

「バウントの研究データは狩矢のものだけでなく全て消されています。」

「じゃあどうすんだ？」

「大丈夫です。バウントの研究者に連絡を取ってあります。」

浦原は帽子を被り直すと石田の方を向く。

「大先輩ですよ。」

「あとそのほかにも何人かにコンタクトは取っております。」

「更木サンがああも簡単にやられるほどの敵です。今回はかなりの準備が必要になるでしょう。」

「それと黒崎サン、一勇サンと蓼花サンに卍解を。彼らにも万一に備えて修得してもらう必要があります。」

「万一つてなんだよ!?!」

一護は自身の息子や親友たちの娘が戦力として数えられていることに不快感を表した。

そして浦原はそれを見透かしたように一護の問いに答える。

「戦力というよりは、自分の身を守るためです。」

今回は剣八や一角がやられるほどの敵。

そう思つて納得せざるを得なかった。

「わかつた、、、。」

「急ですから、方法は、分かってますよね？」

く現世、ヨーロッパく

「いきなり日本語が聞こえたから驚いたぞ。」

「浦原喜助？ああ、あの空座町にいた男だろ？」

「なるほど、それで俺にも声がかかったということか。わかった、向かおう。」

「久々に連絡が来たと思えばまたあの街に行けとは。」

オレンジ色のモヒカンの巨漢が懐から取り出した鉄球を見つめていた。

鉄球の表面には青い光の模様が浮かび上がる。

「今度こそ止めなければ。」

く無間く

「キヒツ、いいのかい？」

「いや、わかつてる。言わなくたってわかつてるよ。あんたは私、私はあんた。」

「ああ、無駄話はもう懲り懲りだ。」

言葉とは裏腹にその男は柔らかい表情を浮かべている。

「あんたが話したいって言ったんじゃん。素直じゃないの？なれないの？」

「何よりさっきの天挺空羅を聞いただろう。」

「浦原喜助だろ？ここまで届かせるとはさすがだねえ！」

男は一人暗闇の中を歩き始める。

「藍染、私は良き敵になれそうだよ。」

〜四楓院家〜

「ねえさま、どうされたのです？いきなりお戻りになられるなんて。」

「今回ばかりは徒手だけではちいとキツイかと思うてな。」

「素手の方が強いが、こいつの力もあつた方がいいじやろう。」

「それは、、、！」

刀掛けに置いてある刀を手に取ると口角を上げ話しかけた。

「久しぶりじゃのう。拗ねてはおらんか？」

く虚圏某所く

「聞いたか!？」

「大声出すな! しつかり聞こえてる！」

「あなたも五月蠅いですわよ。ほんとにこのお猿さんたちは、、、。」

「で、どうすんだよ。」

「あら、最近は随分と柔らかくなったのね。昔ならすぐ『黒崎の野郎ぶつ潰す』って飛び

出て行ってたのに。」

「きつと一勇が気にかかっているのでしょうか!!」

「そうそう!一勇は小さい頃から懐いていたでヤンスから。」

「で、どうすんだ?虚圏の王さんよ。虚夜宮からも追い出されてよお。」

「我々は黒崎一護の決定についていくだけだ。」

「あいつが決めるつてのは気に食わねえがな。」

「でも浦原さんがこの情報を流すつてことは一護もそういう意向つてことじゃない?」

「ちよつと!まさか行くつてんじゃないでしょうかね!」

「あなたたち2人は元々私の部隊ですから私が行くと言えは行くのです。」

「かつての戦友ニニヨが待っているのだ。行くしかなかるう。久々にチルツニチニヤにも会えるかもしれん。」

「幸せな生活を送っている時こそ、女性が一番輝いている瞬間よ。」

「何の話だよ!気持ち悪いんだよ!君男のくせにさあ!」

「ではあの子達は どうしますか?」

「あいつらは置いていこう。また遊びなどと言って暴れられては困る。」

「各々準備を整えてくれ。今夜には現世の黒崎と合流する。」

「お前もそれでいいな？」

「ああ、一緒に行こう。蹴散らしてやろうぜ。」

く虚夜宮廊下く

「やっべく、遅れちまった。好き勝手しやがって！」

9の紋章の男は廊下を走って広間へと急いでいた。

ガタンッ

「遅かったなアローニーロ、ってまたその顔か？」

ザエルアポロが呆れ気味にアローニーロの顔を見た。

「顔のことはいいじゃねえか。」

王印の紋章の男が立ち上がる。

「今日は敵戦力の確認をしようと行ったはずですが？もう最後の破面勢力だけですよ。」

「しかたがなかるう。儂は久々の外を楽しんでおっただけよ。」

アールローニークは手で首を揉みながら答えた。

「なんだい？さつきからその変な喋り方は、、、。もしかしてアールローニーク、君、、、」

アールローニークは顔を元のカプセル状の顔に戻し、声も合成音声のような声になった。

「何もナイよ。君が思ッテイルような事ハネ。」

「続けますよ。」

「今回の破面勢力はティア・ハリベルを始めとする十刃級が7体、従属官級が10体と一大勢力です。」

「けど皆んな僕以下だろ？」

シエンは足を組み余裕そうに手をヒラヒラと振っている。

「シエン、あの中にはあなたを倒した破面もいるのですよ？」

「浦原喜助は各方面に連絡を取っています。いくらこちらの力が強くとも油断は禁物です。」

「……！あいつか……！まあ、でもいいじゃないか。相手が強いにこしたことはない。更木剣八がやられてしまつて退屈してたところさ。」

シエンは一瞬顔を歪ませたが、またすぐに余裕な表情を見せた。

その表情を見透かしたように風の紋章の男、狩矢神がシエンを挑発する。

「更木とかいうあの程度の男をライバル視しているだけでたかが知れるがな。」

シエンが立ち上がる。

「今確かめてやつてもいいんだが？」

「そこまです。」

王印の紋章の男が力強く机を叩いた。

そして合図をすると2人の部下が刀を持って広間に入つて来る。

1人は燬殿王の元へと歩いていく。

「燬殿王、あなたにはこれを使つてもらいます。」

「これは？」

「流刃若火です。かつての総隊長山本元流斎重國の斬魄刀、といえば分かりますか？」

「あなたならこれを使いこなせるはず。」

もう1人の部下は会議テーブルの横に立つ人狼の少年へと刀を手渡す。

「そしてホムラ、あなたはこの斬魄刀を。」

「これは、、、？」

「あなたが忌み嫌う一族の者の強力な斬魄刀です。」

く七番隊隊舎く

「つくしゅー！」

「風邪？うるい？！」

2人の人狼族が隊長執務室のソファに腰掛けていた。

「うるい、シヨーマ、もう寝ろ。」

「鉄さんは？」

「俺はまだやらにやいけんことがあるけえの。」

うるいとシヨーマに目をやることなく、鉄左衛門は書類に目を通してている。

「左陣様の斬魄刀?」

「それだけじゃないわ。元流斎殿の斬魄刀もじゃ。」

100年前の仙波の事件の後、紛失が発覚した物がいくつかあった。

王印

霊王の脊髄と右足

流刃若火

天譴

王印は襲撃を受け奪取されてから見つからず仕舞いだった。

霊王の脊髄と右足は紛失というよりも行方が分からなくなっていた。

そして一番隊隊舎に奉じてあった二振の斬魄刀が消えていた。

四十六室は

王印は元々存在しなかったことに

霊王の脊髄と右足は発見されていなかったことに

二振の斬魄刀は霊王護神大戦で破壊されたことに

歴史を改竄したのだ。

護廷十三隊としては自分たちの落ち度ではあるものの、偉大なる死神の不名誉に耐えられるわけもなく、秘密裏に二振の斬魄刀の行方を探っていた。

そしてその調査に名乗り出たのが射場鉄左衛門だったのだ。

「何としても見つけ出さなきゃ元流斎殿、左陣殿に顔向けできん」

～麒麟殿～

「動くなよ。いくらお前が不死身でも死ぬぞ。」

「零番隊で何すんのかと思えば風呂かよ。」

剣八は落ち着いた様子で風呂に浸かっていた。

「こんなことしてる暇あねえだろ！」

一角は今の状況を考えると声を上げざるを得なかった。

そこへ兵主部が現れる。

「まあまあそんなに吠えるな。」

「更木はまだしも、斑目、おんしは今戻ったところで何にもならんぞ。」
「んだと!? テメエ!」

「正直に言う。おんしの卍解は卍解として体をなしておらん。」
「始解のように形を変えただけの卍解もどきじゃ。」

湯に浸かり岩にもたれかかった天示郎も兵主部に続いた。

「そうだ。お前のことは調べさせてもらったが、卍解使つても出来損ないの破面と相打ちだったらしいな。」

「しかも始解じゃ従属官にも負けるって、それで戦闘狂十一番隊の副隊長が務まるのか?」

「烈も悲しんでるだろうよ。」

「くっ、」

一角は言い返すことができなかった。

それもそうだ。十一番隊は結果が全て。

勝てば強く、負ければ弱い。

そんな一角を見て剣八が立ち上がる。

「ごちやごちやうるせえ。こいつは俺が斬りまくって強くする。それでいいんだろ？」

「はっ！もう治りよったか！よし、もういいじやろ。次は服じゃな。」

「早く上がれ！」

「何なんだよ！」

天示郎に怒鳴られながら一角も風呂から上がって行く。

温泉を後にする剣八と一角を兵主部は遠目から見守っていた。

「そう。おんしの正解は更木にも並ぶ能力を秘めておる。そしておんしならそれを開花させることもできる。」

「斬魄刀ではなく自分の心と向き合えたら、な。」

T o b e c o n t i n u e d

第5話 Princess and Dragons
W a l l o w

〔六番隊隊舎〕

「白哉坊、悪かったのう。夕四郎を借りて。」

「隊長、夕四郎ただ今戻りました！」

「斬魄刀を取りに行っていたのか。」

白哉は夜一の背中にある斬魄刀に目をやる。

「貴様が斬魄刀を使うとはな。」

「めんどくさいから使いとうはないんじやが、喜助が使えるものは使えとうるさくてのう。」

「それに素手ではちと手こずりそうじゃしな。」
「で、夕四郎はどうじゃ？」

——4年前——

真央霊術院の廊下を歩いていた白哉は突然呼び止められた。

「おい、白哉坊！」

「なんじゃ儂に会いにでも来たのか？」

白哉を呼び止めたのはここで講師をしていた夜一だった。

「そうかも知れんな。」

「ふん、丸くなりすぎてつまらんわい。大方今年の卒業生の出来を見て引き抜きにでも来たのであろう。」

「今年は一人すごいのがおつての。」

「うぶぎぬひこね産絹彦禰、、か。」

「つなやしほ綱彌代と産絹。」

あの事件の後この二つの名が一括りで語られることが多かった。

「今は錆面彦禰じゃ。」

「上が五月蠅うなるじやろうと京楽が名字を変えさせた。」

「これなら上が検索した時でも引つかからん。」

「残念じゃが奴は檜佐木の十二番隊に行きたいと言っておるし、檜佐木も手元に置きたいようじゃ。」

「そうか。」

「それはそうと白哉坊、ちと頼みごとがあるんじゃが。」

「断る。」

白哉は面倒ごとになると思いすぐにその場を離れようとした。

「まあそう言わずに。今二番隊にうちの夕四郎がおるじやろう？六番隊の副隊長として取ってくれんか？恋次が抜けてから副隊長をおいておらんじやろう。」

「碎蜂だと夕四郎を甘やかし過ぎる。やつの為にもならん。どうじゃ？やつは実力、席次ともに申し分なからう。」

「断る。」

—————

「ではいくぞ、夕四郎。」

白哉は振り返ることなく歩き始め、その後ろを慌ただしく夕四郎が付いていく。

「朽木隊長!!待ってください!!」

「なんやかんや上手くやっておるではないか。」

夜一が2人の背中を見ながら腕組みをした時だった。

「四楓院先生、斬魄刀を持っているなんて珍しいですね。」

そこには坊主頭でたらこ唇、そして顎の左側に傷跡のある男が立っていた。

「おう!青鹿^{あおが}!」

檜佐木の同期である青鹿は四番隊から中央霊術院に異動していた。

高い回道能力が認められ教鞭を執るのようになったのだ。

「今回は攻撃面ばかりではキツそうじゃからのう。」

「ノヴァディオとかいうやつらですか。」

青鹿は目を伏せた。

「喜助が言うには滅却師共と同じくらい犠牲を出す可能性もあると。」

「また争いですか、、檜佐木も出るんですよね？」

「奴は隊長じゃからの。間違ひなく最前線に立つじやろう。」

青鹿はふう、とため息をついた。

「あいつも誘つて墓参りに行くか、、。」

「墓参り？」

「ここにいた時の同期です。六年生の時に虚にやられて死にました。」

「護神大戦の間にも一度行つたんですが、そしたらどっちも生き延びることができて。」

「きつとあいつが、、蟹沢が守つてくれたんです。」

「今日は月命日ですから。」

一通り話を聞いた夜一はなにか閃いたように声をあげた。

「よし、今から檜佐木を連れて行ってこい。」

「え？」

「授業は儂に任せろ！ほら行けっ！」

夜一は青鹿の資料を奪い取ると、わっはっはと笑いながら廊下を歩いて行った。

く十二番隊く

「隊長、どうするんですか？」

「どうもこうもねえ！やるわけないだろ！」

「でも総隊長命令ですよ？」

副隊長の吉良イツルは隊長であり、先輩でもある檜佐木にお茶を淹れていた。

「そんなことはわかってる！」

檜佐木は思わず机を叩いてしまい、その衝撃でお茶が少しこぼれてしまった。

「――彦禰君に卍解を習得させたいんだ――」

「――戦力としてだよ――」

「話に聞けば、黒崎くんと阿散井くんの子供達も卍解を修得するために浦原さんのところ」

ろで修行つけてるらしいですよ。」

檜佐木はこぼしたお茶を布巾で拭いている。

「けどあいつらの子は戦力じゃなく、身を守るためだろ?」

「それが本音か建前かは分かりませんが、危険な方法で卍解を修得しようとしているのは変わりませんよ。」

イツルは一口お茶を口に含み飲み込んだ。

「檜佐木さん。僕は彦禰君の件、賛成です。」

「卍解は5〜10倍の能力上昇です。修得するに越したことはない。」

「今や隊長以外で卍解を使える隊士は松本さんと僕だけです。」

「この戦いで何人の隊長格が減るかもわからない。」

檜佐木は湯呑みを持ち上げると、目を閉じてフリーズした。

何かを考えているのだろう。

「わかった、、、。だが俺が稽古をつける。」

ガチャツ

「話し中だったか、すまない。休憩中と聞いたもんだから。」

「青鹿！」

「青鹿さんお久しぶりです。」

イツルは青鹿の方に向き直り一礼した。

「おう、吉良。元氣（？）そうで何よりだ。」

「檜佐木、今日は月命日だ。終務後墓参りに行かないか？」

彼ら3人はかつて実習中に虚の軍勢に襲われ、檜佐木と青鹿の同期だった蟹沢という少女は虚に殺されてしまった。

そしてその後藍染達に助けられたことがあった。

しかしそれもすべて藍染の策略だったのだが。

そんなこともあり檜佐木、青鹿は、その当時自分たちと共に戦った後輩、吉良イツル、阿散井恋次、雛森桃を自分たちと重ね気にかけてきた。

「俺も誘おうと思ってたところだ。」

「僕も行つてもいいですか？」

「勿論だ。後輩が来れば蟹沢も久々に先輩風吹かせるからな。」

く 集合墓地 く

「なっ、、、」

「蟹沢の墓が、、、！」

3人が墓地で目にしたものは信じられないものだった。

蟹沢の墓が暴かれていたのだ。

「青鹿、お前一ヶ月前も来たよな？」

「ここ半年は現世出張があったから来てなかった。いつからこうなっていたのかは分からん。」

「一体誰が、、、」

く虚夜宮モニター室く

「何やってんのく？」

「あなたは、、紅葉の紋章の、、」

「茜雫でいいよ！」

「で、何やってんの？えくつと、、」

「蟹沢ほたるです。」

「ほたるね！で、なんだっけ？」

「ここの映像の場所、私の1度目の人生が終わった場所なんです。」

蟹沢はモニターに映された映像を見ていた。

「え？」

そこには3人の人影を先頭に、大勢の人が追従していた。

「後輩たちを連れて実習に来てたんです。」

「優秀な同期2人と一緒に。」

すると彼女達の上に何体もの巨大虚ヒュージ・ホロウが現れる。

「けどそこで虚に襲われて、」

蟹沢は鋭い爪を持った虚に切り裂かれ吹っ飛ばされていた。

短髪の男も爪で切り裂かれ、さらにもう一人の男も攻撃を受けていた。

「うわっ、、今の人顔切られたけど、、」

虚との生々しい戦いを初めて見た茜雫はなんとも言えない恐怖を感じた。

「実は私死ぬまでに意識があつて、2人の同期は助かったのは見えたんです。勇氣ある後輩のおかげでね。」

その言葉通り、間一髪のところまで2人の青年と1人の少女が虚の攻撃を止めた。

「よかつたつて思った。自分が死ぬのに変ですよね。」

「けど後悔もあつた。自分の気持ちを伝えてればよかつたつて。まさかあの日が最後だなんて思つてもなかつたから。」

蟹沢は映像の中の男を見つめる。

「その時に、なんでこの世界つてこうやって争いがあるんだろうつてふと思つたんです。」

「虚も滅却師も死神同士でも。」

「争いがなければ、あの日死ななければ檜佐木くんにも思いを伝えられたかもしれない。」

蟹沢は悲しそうな顔をしている。

「ほたる、その檜佐木つてのが好きなんだね。」

「でも檜佐木くんは今や護廷十三隊の隊長ですから。敵同士です。」

「抜け出しちゃえばいいじゃん！」

蟹沢は両手を握り胸に押し当てた。

「それはできません。仙波の言う争いのない世界が今の私の目指すべきところですか
ら。」

「敵同士かあ、。。。」

「まあ敵とか以前に、思いを言葉にするのって怖いよね。」

「あたしもなくんかうつつすらと誰かに思いを伝えられなかったような記憶があるだけ」

どさく、、、。」

ー！……………が……………ぬのが……………なんだよ！ー

「似たようなことは言ったけど素直には言わなかったような、、、？」

「自分のことじゃないですか！」

曇っていた蟹沢の表情からやつと笑みがこぼれる。

その時。

ガタツ

蟹沢はすぐ様音のした方向を確認する。

「あなたたちは、、、捕虜！」

蟹沢は織姫と竜燕を敵として補足すると、致命傷にならない程度の攻撃を放つ。

「虚閃！」

蟹沢の虚閃を皮切りにその場の雰囲気は戦闘のものへと変わった。

「夕闇に誘え、マイトレイヤ弥勒丸！」

茜雫は解放すると竜巻を織姫達に向けた。

「ヒナギク、バイゴン、リリイ！三天結盾！！私は拒絶する！」

織姫は素早くヘアピンに手を当て能力を解放する。

「なにあの能力？死神でもないし、、、。」

織姫は盾で茜雫の攻撃を阻むと、すぐさま攻撃へと移った。

「シユンオウ、アヤメ、ツバキ！！」

「三天甦盾！！そしゅん私は拒絶する！！」

双天帰盾のオレンジ色の盾がツバキを包み込む。

茜雫の前に蟹沢が瞬歩で移動し、相殺するための虚閃を放った。

虚閃がツバキにぶつかるが、虚閃を物ともせず距離を詰めていく。

「止まらない、、!!?」

虚閃を押しつけ蟹沢の腹部にツバキが激突した。

「固え、、！」

ツバキは鈍い手応えを感じ、すぐ様織姫の元に戻る。

「危なかった、、。」

蟹沢は間一髪で静血装を使用していたのだ。

「自分自身が回復する刃だとは、、。」

以前の織姫は双天帰盾で盾舜立花を治すことはできなかった。

しかし有昭田鉢玄との絶え間ない修行によりある程度の傷なら治すことが可能になっていた。

織姫の攻撃を見て厄介ではあるものの、致命傷にはならないと判断した蟹沢は竜燕に

狙いを定める。

「破道の五十七、だいちてんよう大地転踊！」

織姫と竜燕の手前に向け岩を飛ばし土煙で姿を隠した。

その隙をついて縛道を浴びせる。

「縛道の七十五、五柱鉄貫。」

相手の行動が見えなかった織姫は反応が遅れ身動きを封じられてしまった。

「これハッチさんがよく使う、、！」

「君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ。轟火と戦火、、、、」

その時織姫は詠唱の声の向きで気づいた。

この攻撃は自分に向けたものではないと。

「竜燕くん！逃げて!!」

「破道の七十一、ごうてんしゃつかほう轟天赤火砲！」

「イ・シエンク・ツアイヒ盃よワオルコール西方に傾け！」

「緑杯!!」

竜燕は緑杯の衝撃で轟天赤火砲の威力を弱めようとするが、威力はそのままに竜燕へ

と命中する。

「くっ、」

土煙が晴れ、五柱鉄貫から解放された織姫は竜燕の元に駆け寄った。

「竜燕くん！」

「威力は弱めておきました。捕虜ですから殺すわけにもいきませんしね。」

「ヒナギク、バイゴン、リリイ、シユンオウ、アヤメ！」

「五天衛盾えいしゆん！私は拒絶する！！」

「無駄です。」

オレンジ色の盾が竜燕を包み込んだのを見て、蟹沢は間髪入れず追撃した。

「破道の四、白雷びやくらい。」

バチツ

白雷は盾に当たると上方へとはじかれた。

「防御の盾に回復ですか、。」

「さすがは黒崎織姫。大した攻撃はされないといい後回しにしましたが、先にあなたを攻撃しておくべきでした。」

茜雫は蟹沢の言った言葉に反応した。

「黒崎？」

茜雫は、竜燕を庇いながらこちらを睨みつける織姫に話しかける。

「あんたもしかして一勇の家族かなんか？」

すると織姫の顔は一瞬ほぐれ対話に応じた。

「一勇を知ってるの？」

「うん、クレープおごってもらったし逃してもらった。」

その様子を見た蟹沢も戦闘態勢を緩めた。

「知り合いですか？」

「ん、まあ巡り巡って？」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:

第6話 Time Limit || 3 days

（鳳凰殿）

「よおし、合格DA。」

上から聞こえる声。

暗闇の中でボロボロになった一角がはるか上方に立つ2つの人影に目をやる。

「遅かったのう、斑目や。」

「兵主部のおっさん、！」

「まあうちに来い。」

一角は着替えをし簡単に体を流した後、兵主部の待つ部屋へと入っていった。

「まあ座れ。」

促されるまま一角は兵主部の対面にある紫色の座布団に座った。

「更木は既に斬魄刀との対話をしておる。」

「奴にはコツだけ教えた。卍解の名前は教えとらん。」

「だがおんしには教える。知ろうと知らまいとおんし次第じゃからな。」

「斑目、おんしの卍解の本当の名は、、」

「待て。俺次第つてのはどう言うことだ？」

兵主部は一瞬驚いたように目を見開いた。

「ふむ、なんとといえば良いか。」

言葉を選んでいいのか顎をさすっている。

「おんしの言葉と心の差異じゃ。それが解決されぬ限り卍解には至らん。目を背けるな。」

「目を背けるなだど？」

「まあ良い。一度行って話し合ってみるのもいいじやろう。」

「さあ、おんし自身を説いてみる。」

対面で兵主部が手をかざすと、一角の意識は暗闇に飲み込まれた。

目を覚ますとそこには不思議な空間が広がっていた。

折れた刀や、斬られ倒れている人。

その周りには円状に、そして其処彼処に白い花が咲いていた。

「よお、相棒。」

浅黒い肌に橙色の特徴的な形をした髪、腰には白い布を巻き槍を手にしている男が待っていた。

「鬼灯丸、」

浦原商店地下・勉強部屋

一勇が地下勉強部屋に着くと、一護、一心、浦原、そして莓花が立っていた。

「なんだ？ 莓花、お前も呼ばれてたのか？」

「だから呼び捨てにすんな！」

莓花から幼さは消え、スラつとした美人になっていたが気の強い性格はそのままだった。

「昔は莓花ちゃん、莓花ちゃんって言ってあんなに可愛かったのにどうしてこんなになっただか、。」

一心が笑いながら一護と一勇を見る。

「一護も昔は一勇そっくりで柔らかい子だったからなあ。」

「それがなぜ中学くらいから、。」

急に一心は懐から取り出したハンカチを目元に当てた。

「うるせえよ！ ヒゲダルマ！ 話進まねえだろ！」

「で、親父、じいちゃん、浦原さん、一体なにすんだ？ こんな広いところで。」

「勉強会つす。」

「勉強会つて、、てかこんなの作つて犯罪じゃねえのか？」

「どこかで聞いたような台詞ですネ。やはり遺伝子ですか。」

浦原は一護の方を意味ありげな顔で見ている。

「いちいち止めんなよ！」

浦原はハイハイ、と話を元に戻した。

「一勇サン、莓花サン。御二方には卍解を修得していただきます。」

「3日で。近いうちに敵サンが攻めてきますからそれまでに修得してもらいます。」

「ちよつと待つてください。卍解とは才のあるものでも10年かかるのでは、、？」

莓花は自身の親から卍解に至るのがいかに難しいかを聞いていた。

だからこそ3日で修得できるなんて到底考えられない。

「そうつす。その通りつす。」

「だからこのやり方は危険が伴います。」

危険を伴うと聞いて母花は声を荒げた。

「それを私たちにやれと言うのですか!?!前例は、、、!」

「前例ならある。俺と浦原さんだ。」

「親父も、、、?」

「それに恋次とルキアの許可は取ってある。」

「で、でもどうやって?」

浦原は横の岩に立てかけてある人型的のようなものを手に取った。

「転身体といいます。これを使えば3日間斬魄刀を具象化させることができます。」

「その間に具象化した斬魄刀を屈服させるんだ。」

浦原が真剣な眼差しで一護に続く。

「それができなければ、、、」

グサッ

「できなかつた時のことは聞かねえ。」

「一勇、、！あんた!!」

「それしか方法が無えんなら、、やるしか無えだろ！」

く双極の丘地下・勉強部屋く

檜佐木は夜一から尸魂界での勉強部屋を、浦原から転神体を借り、彦禰の卍解修得のため修行を始めようとしていた。

「と言うわけだ、彦禰。」

「覚悟はあるか？」

「あります。」

「怖さはあるか？」

「あります。」

「よし、ならこの転神体に斬魄刀を刺せ。」

「卍解、風死絞縄。」

「手加減はしねえ。斬魄刀だけじゃなく、俺も入る。」

〈虚夜宮広間〉

「黒崎一勇と錆面彦禰の能力は詳しくは分かっています。」

王印の紋章の男、ノヴァディオが懸念事項である一勇と彦禰を話題にあげていた。

「黒崎一勇なら知ってるぜ。」

シユリーカーはかつて、一勇、莓花と交戦したことがあったのだ。

が、ノヴァディオはもちろんその程度のことは知っていた。

「鬼道を斬魄刀に取り込む能力があるのはわかっていますが、それだけでは無いはずですよ。」

「彼ら是我々のように後付けではなく、生まれた時から色々な力が混ざりあっていたのですから。」

「あの2人の能力が分かっていない以上、誰をぶつけるべきかも決め兼ねますね、。」

「なら奪つちまえばいいんじゃないか?」

そう意見を出したのは腕を組み柱にもたれかかって話を聞いていたナナナ・ナジャークープだった。

「^{メダライズ}星章化ですか。しかしあなたの分は更木剣八が正解をしたときのために備えておかなければ。」

「確か現世のどこかに星十字騎士団の生き残りがいたはずだ。そいつらなら持つてるかもしれないねえ。」

4人と1体の女性勢力。

たしか現世に身を寄せていたはずだった。

「では探しに行きましょうか。」

「どうやって?」

そこへザエルアポロがタブレットのようなものを持ちやって来た。

「これだよ。」

「君を解放する時に横にあつたものを拝借して来たんだ。」

かつて技術開発局と関わりをもった滅却師の位置情報が示されていた。

「やっぱあいつ、えげつねえ物作るな。」

く現世・某国く

金髪でスラっとしたモデル体型の女性と、少女のような童顔の女性が雨の中道を歩いていた。

「湿気で髪が、、！クソっ!!」

「キャンデイス、落ち着けて。」

「あとはこのスイートバジルってやつで終わりだ。」

少女のような女性は傘をさしながら小さいメモを見ている。

「リルトット、あんたは短いからそんなことが言えんのよ！最近虚圏の乾燥に慣れてたからな、、。」

キャンデイスと呼ばれる女性は髪をやたらと気にし手櫛で整えていた。

「(イ)だ。」

——休業のお知らせ——

無情な張り紙だった。

「なんだ？休みじゃねえか！髪ゴワゴワになってまで来たのに、、、ふざけんな!!」

「開けろ!!」

キャンデイスは引き戸をガタガタと引つ張り始めた。

「おい、やめろ。みつともねえぞ。」

「うるせえ！あたしがここまで来たつてのに休みやがつて!!」

「ミニーニヤもだが、こいつも相当脳筋だな。」

キャンデイスが諦めて帰ろうとした時だった。

カランカラン

ガタイのいいオレンジ色のモヒカンの男が店から出てきた。

「なんだ？うちは今日から休業だぞ？」

キャンデイスは、しめた、とばかりにその男に詰め寄る。

「おっさん！少しだけ店開けてくれよ。バジルだけ！」

「それは無理だ。俺は今から日本に行かねばならん。」

「日本なんてまた今度でいいだろ？な？寺とアニメしかないだろ？」

リルトットは、『最近お前もアニメにハマってよく行ってんじゃねえか』と心でつつこみをいれていた。

「そういえば日本つていやあ、石田や黒崎の野郎を思い出すな。」

リルトットは懐かしむように2人の日本人の名前を挙げた。

「黒崎の話はやめな。レディの髪ぐちやぐちにしゃがって。今でも忘れられない！あー！ー！イライラしてきた!!」

「黒崎だと？黒崎一護か？」

「なに？おっさんも知ってんの？あいつ結構、、、」

「有名だなんてか？」

そこにはなんと形容したらいいかわからないような奇妙な格好をしたお齒黒の男が立っていた。

「あんたは、！」

「ナジャークープ、！」

「久しぶりだなあ、キャンデイス、リルトット。ちよつと付き合ってくれよ。」

T o b e c o n t i n u e d

第7話 S w o r d o f o r g i n ,
H o l e
i n m y h e a r t

く現世・某国く

「何の用だ？」

キャンデイスとリルトットはナジャークープを睨みつけている。

「お前らに頼みごとがあつてな。それより2人はどうした？」

ナジャークープは辺りを見回していた。

いつもならあと3人いるはずだからだ。

「あいつらとは決別した。」

「決別だ?!」

驚きでつい声が大きくなってしまふ。

「面倒だな、、、。まあ二つあれば足りるか。」

ナジャークープは独り言を言うど手を口元に当て少し考えている。

「まあいい。とりあえずお前ら2人ともメダリオンを俺にくれ。」

リルトットが表情を変えずその理由を問いただす。

「なんでだ？」

「近々また尸魂界に殴り込みに行く。その時にいるんだよ。」

「懲りねえなあ。」

リルトットは呆れている。

「で、どうなんだ？」

「もちろん断るぜ。俺たちはもう面倒ごと懲り懲りなんでね。」

「そうか、、、。」

「じゃあ力づくで奪うしかねえな！」

ナジャークープは滅却師十字を取り出すと、手に霊子を集め矢を生成し始めた。

その様子を見た店の男はキャンデイスとリルトットをそれぞれ両手で肩に担ぎ走り

出した。

「なにすんだよ!？」

キャンデイスはいきなり持ち上げられたことに激昂している。

「あそこは俺の店だぞ? 壊すつもりか?」

男は細い路地を何度も曲がり、その先の広い空き地へとたどり着く。

「よくわからんが、奴をここで迎え撃つ。」

男は腰のポーチから鉄球を取り出した。

「Zeige dich、ダルク。」

男はそう命令すると鉄球を手放す。

鉄球はブックブックと細胞分裂のようにどんどんと膨れ上がり、次第に人型を形成していく。

鉄球は濃い紫色の女性のような形に変化した。

「あく、久しぶりに出た気がするわ。」

その鉄球の女性は男の後ろに立つキャンデイスとリルトットを見て率直な感想を漏らす。

「なあに？この子達。あんた知らないうちにこう言う趣味ができたの？」

初めて見る能力を前にリルトットは驚きを隠せなかった。

「なんだこいつ？完現術の一種か？」

そしてそれは追いついてきたナジャークも同じであった。

「おいおい、なんだそいつは？」

「ダルク、頼んだ。あの男だ。」

男はその鉄球の女性をダルクと呼んでいた。

「久々に張り切っちゃうわよ〜！」

ダルクは両手を前へ突き出すとそこから鉄球を猛スピードで飛ばした。

「まだ観察できてねえつてのに！」

ナジャークープは避けながらダルクを分析している。

「上手いこと避けるのねえ！ならこれはどうかしら？」

ダルクは腕に小さい銃口のようなものを作り鉄球を放つ。

それはまるで無限に撃てる機関銃のようだった。

幾百にも上る鉄の雨を前にナジャークープは次第に逃げられなくなっていく。

「クソッ……のままじゃやられるっ、っ、！」

彼は頭をフル回転させ打開策を考えた。

その時目に入ったのが、男や鉄球の女性と離れたところにいたキャンデイスとリルトットだった。

ナジャークープは静血装を最大にし、キャンデイスとリルトットに狙いを定め
グラン・レイ・ゼロ
王虚の閃光を放った。

「（お前ら純粋な滅却師に虚閃は致命傷のはず！）」

その狙いにいち早く気づいていた男はキャンデイスとリルトットの元へ駆け、二人を

その場から放り投げた。

「ダルク!!」

鉄球の女性、ダルクは男に向かってサッカーボールほどの鉄球を放出した。

鉄球は男の身体の左側面に当たり男を吹っ飛ばした。

それによって虚閃を避けたのだ。

「おっさん!!」

キャンデイスが男の元へ駆け寄った。

「おっさんなんで!?!」

男は左腕を押さえ倒れている。

「なんとなくお前がケインに似ていたからだ、、、。」

「もう俺の前で若い者の命は散らせない。」

「ケイン、、、?」

リルトットナジャークープの虚閃、手負いの男、そして戦意を喪失しているキャンデイスを見てどうするべきかを考えていた。

そして10秒ほど考え、リルトットはキャンデイスの元へ駆け、自身と彼女の懐からメダリオンを引つ張り出して、2つとも遠くへと投げ捨てる。

「これがほしいんだろ!?!おらっ!!」

「てめっ、、!」

ナジャークープは放物線を描き飛んでいく2つのメダリオンを目で追いながら、その方向へと飛廉脚で飛んで行った。

「今のうちだ!」

キャンデイスは男に肩を貸して立ち上がらせ、リルトットは浦原から譲り受けた簡易黒腔発生装置を取り出し、黒腔を出現させた。

く虚圏く

「ん?なんか座標変わってないか?」

黒腔から出てきたリルトットはいつもと違う風景を目の当たりにし、座標が違っていることに気づく。

するとそこへショートカットでありながら、左の髪が肩まで伸びているアシンメトリーの女性が、負傷している男を見て、心配そうに近寄ってきた。

「おかえりなさいませ、、、どうしたんですか!？」

「アウラ、こいつの手当てを頼む。」

アウラと呼ばれる女性は医療箱のある戸棚の方へと急ぐ。

リルトットは当たりを見回しアウラに尋ねた。

「ネルやらハリベルは？」

「現世の黒崎一護さんの元へ行きました。正しくは浦原商店ですが。」

アウラは自分の視線と同じくらいにある戸棚を探りながら答えた。

男が左腕を押さええながらさらに尋ねる。

「浦原だと？お前たちも呼ばれていたのか？」

キャンデイスは男の左腕を気遣った。

「おっさん大丈夫かよ。」

「腕と肋骨数本が折れただけだ。それより一体何が起こっている?」

男はキャンデイスにも尋ねた。

「あたしらも一ヶ月くらい現世で食料調達してたからな、。。。」

アウラが状況を説明し始める。

「虚夜宮はノヴァディオという者に占拠されました。」

「ノヴァディオ?」

「ハリベル様の話では、その配下には元十刃や滅却師もいるようです。」

「尸魂界では護廷十三隊を中心に、現世と虚圏では黒崎さんを中心に對抗戦力を集めているようです。」

「私はここの調理師ですのであまり詳しくは聞かされていませんが、。。。」

アウラは自分の知り得る限りの情報を伝えた。

「それを言ったら俺達だってここ専属の食材調達業者みてえなもんだけどな。」

男はひとしきり話しを聞くと左腕を押さえながら立ち上がる。

「現世に、空座町に連れて行ってくれ。おれも浦原に呼ばれて日本に行くところだった。」

「おっさんも浦原に？つてかおっさん名前は？」

「俺はクラウド・ゴーガン。だが今から当分の間は、、、」

「古賀剛ごうだ。」

く無間く

一つ暗闇の中を歩く影があった。

そこに声のみが響く。

「久々だね。もういいのかい？」

低く落ち着いた声だった。

「ああ。何千年とかけてゆっくりと理解した。お互いにな。」

さらにその人物は話を続けた。

「その間に外では、色々あつたようだな。滅却師、綱屋代、そして仙波。」

「君が出ていれば犠牲は減らせたかも知れないな。」

相手の顔は暗闇で見えないものの、嘲笑しているのが分かる。

「お前が犠牲とは、死神側についたというのは本当だったようだな。」

「はは、客観的に犠牲を語ってみただけさ。私以外は敵だよ。」

「今護廷隊は大丈夫なのか？ 私がいた頃やお前のいた頃よりも弱体化しているように思えるが。」

「私を除けばの話だが、今の護廷隊は今までもかなり強い方だと思うがね。」

「特に新戦力。」

狩能雅忘人

阿散井恋次

檜佐木修平

「狩能雅忘人は始解無しで更木剣八を認めさせるほどの実力を持つ。」

「阿散井君は護神大戦で、檜佐木君は綱彌代時灘の件でその能力の高さを証明したからね。」

相手の思いもよらない評価に少し驚いていた。

「お前が護廷十三隊を褒めるなど珍しいな。」

「私を除けばの話だと言ったはずだよ。」

「それで、君は行くのかい？」

「今尸魂界は危機にさらされている。」

「ということは良き敵になったということだね。」

「あざしろけんぼち痣城劍八。」

「いや、今の私はただのあざしろそつや痣城双也だ。」

痣城と呼ばれる男は一しきり話し終えるとまた歩き始め、門の元へとたどり着いた。

ギイイイ

すると門が開き始め、外からは深く暗い霊圧が流れてきた。

「やあやあ、痣城クン。」

「京楽春水、。」

「喜助クンからの天挺空羅は聞いたろう？ 迎えに来たよ。」

「まさか総隊長も了承済みとは。」

痣城はわざと呆れたように振る舞った。

「まあそこら辺のことも含めて一番隊隊舎で話すよ。」

「じゃあ行こうかねえ。」

京楽はそう言うのと振り返り門の外へと出て行く。

かれこれ30分ほど歩いただろうか？

静かに足跡だけが響く暗闇の中、京楽が突然言葉を発した。

「ちよつと待ってくれるかい？」

痣城が左を向くとそこには暗闇の中、赤黒い門があつた。

「ここは、大焦熱？」

大焦熱とは無間に次いで大罪者を収監する監獄である。

「ここにも1人罪人が居てね。喜助クンの声がかかったんだ。」

「誰だ？」

「君は知らないと思うけど、元十一番隊隊士だよ。」

「罪人を2人も集めるとは尸魂界も寛容になったものだな。」

京楽は不気味に笑うと門に手をかざした。

「偉いさん方も分かったんだろう。自分たちを守るには力が必要だったね。」
京楽はさらに続けた。

「それに今回は、敵対していた破面だろうと滅却師だろうと、復元したデータだろうとこちら側の戦力になるならなんでも使うつもりだからね。」

門が開き始めると、隙間から帯刀した死神が立っていることが確認できた。

「やあ、久しぶりだねえ。」

く浦原商店地下・勉強部屋く

「なんで俺のは具象化しないんだ、？」

一勇は遠目で苺花が具象化した斬魄刀と戦っている様子を見ていた。

「今解析中つす、。。」

そう言い、浦原は困った様子で携帯機器を操作していた。

そこへ少し離れたところにいた一護が近づいてくる。

「俺なりに原因を考えてみたんだが、」

一護は午前中からずつと考えていた。

今の状況をどう打開すべきなのか。

「二勇、お前自分のルーツがどんなか知ってるよな？」

「ああ。」

かつて一護から聞いていた。

祖父にあたる一心は死神で、祖母にあたる真咲は滅却師だった。

そしてその2人が出会う際に真咲は計らずも虚化してしまった。

そのため自分にも死神、滅却師、虚の力が宿っていると。

さらに母の黒崎織姫からは舜瞬六花の能力も受け継いでいる可能性があるとも。

「けどお前今使えるのは死神の能力だけだよな？」

一護の言葉を聞いて浦原は勘付いた。

「なるほど、死神の力とは対話はしているが、その他とはしていないということですか。」

「俺は滅却師の力と死神・虚が混ざり合った力、それぞれと対話をして真の斬月を手に入れた。」

「死神のみの力が出てきているのを見ると、一勇は死神と虚の力が混ざっていない。」
「一勇は死神以外の力とも対話をしなきゃいけない。」

すると一護たちの背後から関西弁が聞こえてくる。

「なるほどなあ。なんで俺呼んだんや思うたら、そういうことかいな。確かにお前んときも俺が強制的にやらせたんやったなあ。」

「悪いな平子。」

岩の陰から出てきた五番隊隊長平子真子は普段の死覇装ではなく、私服にハンチング帽を被っていた。

「ほんまに黒崎家は手のかかるやつちゃで。こつちは忙しゆうてしゃあないつちゆうのに。」

「せやから今回も説明は無しや。行くで一勇。」

平子は一勇の顔に手をかぶせる。

そして一勇は深い意識の中へと誘われた。

「後悔しなや。」

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:

第8話 Whose Memories ?

浦原商店地下・勉強部屋

「後悔しなや。」

平子が一勇を精神世界へと誘った。

これから一勇は斬魄刀との対話、或いは戦闘をすることとなる。

「で、なんであんた達も来てんだよ！」

意識を失った一勇の横には岩陰からぞろぞろと出てきた隊長格が横一列に並んでいた。

平子他に、四楓院夜一、碎蜂、朽木白哉が立っている。

「儂はもともと喜助に用があったからのう。」

「ほんでちょうど俺と会って、ほな一緒に行こうかて言うてたんや。」

「私は夜一様をお守りするために同伴したのだ。」

「ほんで穿界門とこ向かってたら白哉に会って、」

「朽木家の当主として姪の卍解修得は見届けねばなるまい。」

「ネル達といいお前らといい、、、」

く虚夜宮く

「という訳だ。あの荷物を見るところ彼女は戻らなすもりは無さそうだね。」

ザエルアポロがモニターを前に説明をしている。

「なるほど、、、。彼女がまた勝手な行動を。次やれば消すと脅したのにやりますね。」

「あなたもいたのになぜ止めなかったのです？蟹沢ほたる。捕虜まで逃して。」

ノヴァディオと呼ばれる首領は蟹沢に厳しい語気で問い質した。

「あなたの命令には従うとはいいました。しかしあの時はあなたの命令はありませんでしたので。」

ザエルアポロはやれやれと手を挙げながらノヴァディオに進言した。

「セキュリーカーにでも行かせればいいじゃないか。」

「彼は黒崎一勇の所へ偵察に行っています。」

「だからこそじゃないか。同じ空座町だろう?」

「ならキミガ偵察に行けよ。アノ敵の巢窟ノ中へ。」

アーロニーロが口を挟む。

「あんなに危険な所に重要な戦力は行かせられません。なんのためにシユリーカーを選んだと思っているんですか?」

「なら僕が連れ戻してくるよ。」

ザエルアポロの分身とも言えるシエンが自ら茜霰回収に名乗り出た。

大方強者と戦えると思っているのだろう。

そしてその思惑を悟ったかのようにノヴァディオは釘を刺した。

「シエン、確実に、そして穩便に頼みますよ?今黒崎一護の周りには破面達もいますからね?」

「分かつてるよ。まあけど正当防衛なら仕方ないけどね。」

「頼みましたよ。彼女は我々の計画にとって重要な存在ですから。」

く現世く

夕焼けの中、茜雫は織姫を連れて歩いていく。

先に竜燕を石田家に送ってから織姫を自宅まで送っていたのだ。

「茜雫ちゃんは何であそこにいるの？」

「分かんないんだけどさ。気づいたらあそこにいたの。」

「けどな、なんか考えが合わないし、楽しくないから元々今日抜けるつもりだった！そして織姫さん達が来たから丁度良いや！ってね！」

「今日はおそこに来たら千日目だから。決めてたんだ、千日目に出ようって。」

「なんで千日なの？」

「“せん” なんだし！」

茜雫は屈託のない笑顔を見せた。

「でもいいの？あつちからしたら裏切りなんじゃ、、、それにあのほたるちゃんって娘だって友達じゃないの？」

「ほたるは、友達になれてたのかも。今日初めて喋ったんだ。」
「え？」

「ほたるは最近完成したばかりだったから。」

「完成？」

人間には使わない『完成』という言葉を聞き織姫は目を大きく見開いた。

「あたし達強魂魄は集められて、魂魄を改造されてるの。」

「だからあたし達はどの種族でも死神、虚や破面、滅却師の力が使える。」

「まあこの体結構強いからいいんだけどさ！」

茜雫は右手で力こぶを作るような素振りを見せた。

「けどそれ関係で心残りなこともあって、、、斬魄刀は元々の解号じゃないらしいんだ。」

「今は弥勒丸マイトレイヤだけど、昔は何だったのかなって。」

茜雫は鞘に収まった斬魄刀を悲しそうな目で見つめた。

「覚えてないの？」

「あたし記憶がないんだ。」

「え？それって、！」

織姫の言葉を遮るように看板を指差し示す。

「ここじゃないの？ 黒崎医院って書いてあるよ？」

「う、うん、、ここだよ。ありがとう、。あれ？ 鍵がかかっている？」

ガラス戸を引く織姫だったが、ガタンと音を立てただけだった。

「夫も一勇もいないみたいけど、ちよつと上がっていかない？」

「お邪魔するのも悪いし気持ちだけで！」

「でも、。。」

「まああたしのことは気にしなくていいから！」

織姫は渋々納得したように引き下がった。

「うん、、本当にありがとう！ 茜雫ちゃん。」

「いいっていいって！ 一勇によろしくね！」

「ばいばい！」

織姫と別れた茜雫は夕日を浴びながらどこへともなく歩き始める。

この街を歩いていると懐かしい、茜雫はそう感じていた。
そして思い出せなかったはずの記憶が突如頭へと流れ込んできていた。

土手道に立つサラリーマンの父。

ビールを片手に微笑んでいる友人。

頭中で頭を守りながら避難する人々。

次々と流れて込んでくる記憶に困惑しながら歩いていると、いつのまにか陽もすつかり暮れてしまった。

静かで人影も車さえも見当たらない。

黄色の点灯信号、その近くには40kmの速度制限の標識。

こんな時間から点灯するなんて人通りが本当に少ないんだ。

そんなことを考えていた時だった。

ふと目を横にやると棟門のような和式の門があった。

塀に囲われている。神社だろうか？

その場所はどこか寂しそうで、静かで、でも温かくて、茜雫はその門へと惹きつけられた。

門を開け敷地内に入る。

手を離すと門はキィイと音を立てて勢いよく閉まった。

墓地だ。

茜雫はしばらく墓地を見回しながら歩いていった。

「!!？」

その時突然また記憶が思い起こされる。

さっきのどの記憶よりも鮮明に。

「あたしのお葬式、、、？お父さん、、、？お母さん、、、？」

僧侶を先頭に、夫婦が泣きながら自分の遺影を持って墓の前に立っている。

それだけではない。

「いっ、いっ、、、。なんだか懐かしくてあつたかい、、、。」

誰かと触れ合っていた温かい記憶がうつすらと浮かんできた。

——あたし、絶対生きてたよ、、、この街で——

「誰かがあたしを負ぶって、、、？」

その時まるで何かがあぶつかったような鋭い衝撃が頭を襲う。

——……………が死ぬのが嫌なんだよお！——

「誰、、、？」

——茜雫!!!!——

何者かに囚われている自分の目の前に現れるオレンジ色の死神。

「一護、、、？」

「あたしここで一護つて人に、一勇の父親に会ってる、、、？」

茜雫はそこでやつと気づいた。

シヨツピングモールでなぜ一勇を一護と呼んでしまったのか。

——なんだか目が霞んじやって、、——

——ある、、？——

——ああ、あるぜ——

「あたしの墓、、？」

茜雫はその先に分かたずにとつて重要な何かがあることは分かっていたが、どうしても行くのが怖かった。

「この記憶は誰の、、？」

「存在しない人の記憶じゃないかな？」

茜雫の背後から男の声が聞こえてきた。

「どうしたんだい？そんな浮かない顔をして。」

「シエン、、！！」

「さあ戻ろうか。頼むから変な気は起こさないでくれよ。穩便に済ませたいんだ。」
「絶対いや。」

「戻らないなら、黒崎織姫と黒崎一勇を殺す。」

シエンは織姫と一勇がいるであろう方向を見ている。

「あんだ、、！」

茜雫は殺気を含んだ靈圧を放った。

はあ、と大きなため息をつくときエンは手を後頭部に当て、如何にもどうしたものか、
という素振りを見せた。

「感づかれるから穩便に、と言ったのにさ。」

〈浦原商店地下勉強部屋〉

「この霊圧は、、、茜雫、、、なのか？」

一護がいち早く反応した。

「黒崎さんこの霊圧を、敵サンの思念珠の事を知ってるんですか？」

「浦原さん何言つて、、、！そうか、俺以外は忘れてたのか、、、。」

「なんで奴らの中に思念珠がいる事を教えてくれなかったんだ!？」

浦原は肩をすくめ弁明した。

「あの時はまだ解明できてなかったので報告書には『正体不明の霊圧』と書いていました。すみません、、、。」

「くそっ、行つてくる！浦原さんは一勇を頼む！」

一護はそう言い残すと瞬歩でその場を後にする。

浦原商店を出たところですぐ横に霊圧を感じた。

「白哉!？」

「私も行こう。以前戦った霊圧だ。」

一護と白哉は霊圧の出所へと向かう。

そこにはもう一人強大な霊圧を持つ者がいるとも知らずに。

「茜雫、、!!」

T o b e c o n t i n u e d

第9話 P a s s i n g t h r o u g h o n e t
h o u s a n d n i g h t s

（墓地上空）

「ほら来たよ。」

シエンは駆けつけた一護と白哉を一瞥した。

「だから言ったじゃないか。穩便につて。」

「茜雫!!」

「一護、、、？」

「てめえ!」

一護は瞬歩でシエンへと斬りかかる。

シエンは硬化した自らの腕で一護の斬撃を防ぐと、茜雫に呼びかけた。

「さつき言った通りだ。だが、お前が朽木白哉を倒せば彼女達を殺しはしない。」

「くっ、っ、」

茜雫は白哉の元へと向かいながら斬魄刀を解放させる。

「夕闇に誘え、マイトレイヤ弥勒丸！」

風を巻き上げながら向かってくる茜雫に対し白夜も始解をする。

「散れ、千本桜。」

そして紅葉を纏った風と桜の刃が正面からぶつかった。

白哉は茜雫と刃を交えながら問いかける。

「いいのか？黒崎一護が気になっっているようだが。」

茜雫は白哉の言葉を聞き思い切り斬魄刀を振り下ろし白哉を後退させた。

「あなたに何が分かるっての!!？」

そして再度茜雫は白哉へと斬りかかった。

「あたしがあんたを倒さなきゃ一護の家族が殺されるんだよ!!？」

白哉は鏝迫り合いをしながら答えている。

「今黒崎一護が戦っているのではないか。よもや奴が負けると思っているのか？」

「シエンの強さを知らないからそんなこと言えるんだ!!」

茜雫は風を発生させ白哉との間に距離をとった。

「そう思うのなら助けに行ったらどうだ?ここで奴を倒して仕舞えば問題ない。」

白哉はさらに続けた。

「それに私が言う『いいのか?』とはそういう意味ではない。」

「気持ちを伝えずして良いのか、と聞いている。」

—————

あの時気持ちを伝えていなければ死ぬまで後悔しただろう。

く南流魂街七十八地区・戌吊く

「朽木様、またこのような所に、。」

緋真。

戌吊の虚討伐で来た時に助けた流魂街の民。

そのとき私は虚を倒し損ね、逆に緋真に助けられた。それをきっかけにこうして定期的に、周りの目を盗んで会っていた。

「朽木様といるとなんだか安心します。」
「私もだ。」

お互いに気づいていた。

身分に差がありすぎる。

緋真は頭がいい。

私の、朽木家の迷惑にならないよう、会う時にも場所や着衣等に細心の注意をはらって来ていた。

緋真の思う通り、朽木家も次期当主が流魂街の民と結ばれることを許さないだろう。

この世界にはどんなに願望もうが変えられぬことが沢山ある。

私が見たいを伝えようと彼女は私のために断るだろう。

私は勝手に一人でそう思っていた。

「また流魂街戊吊で多数の虚です！負傷者も多数とのこと！」
私は命令が下される前に隊舎を飛び出した。

「緋真、！」

私は戊吊に向かう道中後悔していた。

想いを伝えておけばよかったと。

確かに世界には変えることのできないことがある。

「だが私が緋真を想うことも変えることのできぬ事実。」

間一髪だった。

緋真が虚に襲われる寸前で私はその虚共を斬り伏せた。

「朽木様！」

すぐ様緋真の元へ駆け抱き寄せた。

「緋真、私はおまえを、！」

「けど一護には織姫さんも一勇もいる!」

「もう何かを変えることはできないんだよお!」

茜雫は斬魄刀を振り下ろし、竜巻を白哉に向ける。

その竜巻を刃がの花びらで打ち消すと白哉は茜雫に語りかけた。

「確かに変える事は出来ぬ。」

「だったら、、!」

「だがおまえが黒崎一護を想っているということも変える事は出来ぬ。」

「確かに想いを伝えることは怖いだろう。だが想い人に想いを伝えることは結果がどうであろうと何より素晴らしいことだ。」

「あの時言っておけばよかったと後悔するのは嫌なのでな。」

その言葉を聞き茜雫はがくつと手の力が抜けて戦意を喪失したようだった。

「どうするのだ?」

「一護、、、」

茜雫は一護の方を見つめている。

「ぐっ、、、」

一護はシエンの拳を一对の斬月で受けるが、止めきれず遙か後方に吹っ飛ばされた。

「おいおい、黒崎一護?!」

シエンは一護を嘲るように笑っている。

「この程度かい?! 君は滅却師から特記戦力として数えられたんだらう?!」

「こいつ、、、強え、、、」

一護は片膝をつきながらゆっくりと立ち上がっている。

「つまらないからもう終わらせるよ。」

シエンがかざした手の前には高濃度な虚の霊圧が球状となり浮かんでいた。

グラン・レイ・ゼロ
「王虚の閃光。」

「一護!!」

いくつもの竜巻が連続して王虚の閃光とぶつかり轟音を響かせながら相殺した。

「茜雫!」

予想外の展開にシエンも驚いている。

「おいおい、裏切るのか?」

一護の前に茜雫が立ちはだかり、斬魄刀を構えている。

「今度はあたしが一護を守る!」

その瞬間、何体もの欠魂ブランクが斬魄刀から飛び出し、茜雫の周りを飛び回った。

斬魄刀は解放前へと戻っている。
マイトレイヤ

「隙がありすぎだよ!」

シエンはまた右手をかざし、手の前に赤黒い高濃度の霊圧の球を出現させた。

そしてまた王虚の閃光を撃とうとした時だった。

桜の刃が波となってシエンを飲み込む。

「白哉!!」

一護の横には白哉が立っており、千本桜を操っていた。

「時間を稼ぐだけだ。」

千本桜が散るとシエンが無傷のまま姿を現わす。

「何が時間を稼ぐだけだつて? そんな手加減をしてないで殺し合いをしようじゃないか、朽木白哉。」

白哉は驚くでもなく余裕な様子で静かに答えた。

「兄を倒すのは私ではない。」

白哉の視線の先には茜雫がいた。

欠魂は茜雫の周りを飛び交いながら語りかけていた。

『やっと決心がついたのね。』

『君が決めたなら僕は付いていくよ。』

『今度はおれが助ける番だ。』

『今なら本当の名前を思い出せるはずだよ。』

そうだ。この力の本当の名前は、、、

茜雫の周りを霊圧の風が吹き荒れ、紅葉も舞っている。

その力は生まれ変わる。

一護を守るようにと。

「夕闇に誘え!!」

「みろくまる弥勒丸!!」

以前の解放とは比にならない霊圧を放っている。
茜雫は風と紅葉を纏っていた。

「やあああああ!!」

弥勒丸からいくつもの竜巻を発生させシエンへとぶつけた。

「こんな風、さつきと同じで涼しいだけ、、、？」

鋼皮イエロに加え、静血装で茜雫の放った竜巻に備えたのだが、えぐり取るような風の感覚を覚え、咄嗟に距離をとった。

「相当威力が強くなっているようだね、、、。」

シエンは余裕な表情を見せてはいたが冷や汗を流していた。

シエンは頭上に黒腔を出現させ、そこから何体もの最下級大虚ギリアンを召喚した。
「この量を捌けるかな!?!」

「私が最下級大虚ギリアンを潰す。」

白哉は斬魄刀から手を離す。

「正解、千本桜景敵。」

白哉は億の刃を手掌で操り最下級大虚を斬っていった。

シエンは白哉が離れたのを見計らい、強力な霊圧を纏った拳で茜雫に襲いかかった。

しかしシエンの腕は突然発生した竜巻によって複雑に折れ、さらに突風で吹っ飛ばされてしまう。

「本当にさつきまでとは別人だね、。」

シエンは腕を押さえながら態勢を立て直していた。

そこへ茜雫は弥勒丸みろくまるを振り上げシエンへと斬りかかる。

「くそっ、！」

シエンは霊子を固め弓を生成し、斬りかかってくる茜雫に向けて放った。

「まだまだ!!」

さらに大きな竜巻を発生させ矢と相殺させた。

しかし相殺の爆風が晴れるとその先にはいるはずのシエンが消えていた。

「いつちだよー!」

シエンの腕は再生しており、茜雫の頭上すでに弓を引き絞っていた。

「まずいっ、っ、」

「茜雫!! 月牙十字衝!!」

シエンと茜雫との間に一護が現れ、月牙十字衝を放った。

だが高濃度の虚の矢は月牙を突き破って一護に命中し大爆発を起こした。

そして一護は気を失って落下していく。

「一護!!」

そこへ白哉が瞬歩で走り受け止めた。

シエンは改めて茜雫に問いかける。

「今黒崎一護と朽木白哉を倒せばお前は無事に我々の元に戻る。さあどうする?」

茜雫は弥勒丸を握りしめ答えた。

「知らないわけじゃない。あたしは無事でなんかいられない。あたしがいる理由はあたしを使って尸魂界や現世で大爆発を起こさせるためなんですよ、っ、っ、」

「あたしが戻るってことはあたしも一護も2人とも死ぬってこと。」

「けどあたしが戻らず、ここで死ぬまで抵抗すればあたし1人だけで済む。」

「自分を犠牲にするというのかい？」

茜雫は左手で死覇装の裾を力強く、そして震えながら掴んでいた。

「やっぱり、、自分が死ぬよりも、、」

「一護が死ぬのが嫌なんだよお!!」

茜雫の斬魄刀が光を放ち始め、その光が茜雫を包み込んだ。

光の中に浮かぶ茜雫。

目の前には大勢自分の人が立っていた。

『あなたの思いに根負けしちゃった。』

『私も同じ気持ちよ。』

『君のその覚悟には感服したよ。』

さらにそこには赤い髪留めをした茜雲自分が立っていた。
『これが彼一護を守るための新しい力。』

私が

僕が

ウチが

オレが

あたしが

儂が

自分が

一緒に戦うよ

みんなで守ろう

光はだんだんと収縮し、弥勒丸に吸い込まれた。

「卍解!」

「ふうじんみろくまる風神弥勒丸!!」

茜雫は白い袈裟に、天女を思わせるような淡い赤色の羽衣を纏っていた。
そして頭には黄色、赤色、オレンジ色のリボンがついた金色の髪飾りがつけられてい
る。

「卍解だと?」

見たところ茜雫の外見上の違いは、天女の羽衣と髪飾り、そして左手に持った赤い紅葉を思わせる羽扇だった。

そして右手には依然として金色の錫杖があった。

「はあ!!」

茜雫が右手の錫杖を振ると始解よりも大きな竜巻が発生した。

シエンは強力な吸引力により竜巻へと引き込まれて直撃した。

竜巻が消えると大量に血を流すボロボロのシエンがかろうじて立っていた。

「たしかに威力は上がっているようだが、ゝゝ!」

元の状態とまではいかないものの、見る見るうちにシエンの体は再生していった。

「それが卍解の能力ならハズレだね!」

シエンが攻撃に移ろうとした時だった。

茜雫が左手に持つ羽扇を振ると、次の瞬間にはシエンの右胸に小さな竜巻がめり込ん

でいた。

その竜巻は小さいながらもとてもなく威力があり、シエンの右胸をいとも容易く貫通した。

「ぐあああ！くそつ、、、 鋼皮と静血装を貫通するだど!?」

シエンは激高したまま、また高濃度の虚の矢を生成し躊躇なく撃ち放った。

「さつきよりも霊圧を込めた！これがお前如きに防げるはずが、、、？」

茜雫は右手の錫杖の先をカン、とゆつくりと霊子で固めた地面に打ち付ける。

すると茜雫の後ろで竜巻が発生し、そこから大量の紅葉が茜雫の目の前に集まった。

シエンの矢は紅葉の盾によっていとも簡単に防がれた。

「なんなんだ！その力は?!」

「一護を守るための新しい力よ!!」

茜雫の後ろには大勢の人影がうつつすらと浮かんでいた。

「いつけえええええ！風神弥勒丸!!!」

巨大な竜巻と弾丸の竜巻がシエンを包み込む。

「クソガアアアアアアアア!!」

「一護!!」

茜雫は一護と白哉の元へと向かう。

「一護は!？」

「心配ない。今は気絶しているだけだ。直に目を覚ますだろう。」

「見事だった。お前の想い、確かに黒崎一護に届いていたぞ。」
そう言い残して白哉は瞬歩でその場を後にする。

夜が明けた肌寒い土手沿いの道。

茜雫はボロボロになった一回りも大きい一護をおぶって歩いていた。

「茜雫、、、？」

「気がついた？ちよつとだけでいいから付き合つて。あたしも限界超えてそう長くないから。」

赤信号、その近くには40kmの速度制限の標識。

もう明け方だが人影はやはりない。

茜雫はあの墓地へと向かっていた。

「一護、、、あの時お墓の前で、、、ありがとうね。」

「――ああ、あるぜ――」

「――おまえはこの街で生きてきた――」

「――家族もちやんといた――」

「安心させてくれて。嬉しかったよ。」

そして茜雫は墓地へと入っていった。

今なら行ける。

一護と一緒に今なら。

自分の墓なのかどうかを確かめに。

自分の生きた証があるのかどうかを確かめに。

突き当たりから4つ手前の墓。

——佐藤一夫——

——佐藤 学——

「ほら、やっぱり。一護は嘘つくの下手だから。」

「お前の生きた証は残る、、、。」

「俺にも残つてたようにみんなの記憶に残る、、、。」

「だから、そんな顔しねえでくれ、、、。」

想いを素直に伝えるのは怖い。傷つくから。

でも今なら言える。

自分の気持ち伝えることは世界で一番素敵なことだから。

「一護ありがとう。大好きだよ。」

「ああ。」

「やっぱり、、、あつたかい。また会おうね。」

茜雫の頬を涙が流れ落ちる。

そして紅葉は空へと舞い上がっていった。

「あなた!!」

自宅で目を覚ますと目の前には織姫の顔があつた。

「俺は一体、？」

「全然知らない人のお墓の前で倒れてたの。白哉さんが教えてくれて。」

「そこにこれが、、、。これって茜雫ちゃんのだよね、、、？」

ボロボロになつたオレンジ色のリボン。

「ああ、そうか。今度はちゃんと茜雫の記憶があるんだな、、、。」

一護はオレンジ色のリボンをそつと受け取り握りしめた。

「またな、茜雫。」

T o b e c o n t i n u e d

第10話 鬼道の始祖と呼ばれた死神

茜雫の霊圧を感じ取り、一護と白哉がその出所を探りに行った頃。

〈浦原商店地下・勉強部屋〉

「まずいですねえ、苺花サンも少し気晴らしにと義骸で散歩にでたばかりだったのに、、、。」

「二勇サンに私服姿を見せたいという乙女心が仇となりましたねえ、、、。」

「店長、私が行きますかな？」

鉄裁がエプロンを取っている。

「いえ、今日は確か茶渡サンが当直のはずですから連絡してみます。」

すると浦原は伝令神機を取り出すとポチポチとボタンを押している。「まあ霊圧を探って見た感じ場所は離れていますし、大丈夫でしょう。」

チャドはというと数年前にボクシングの現役を引退していた。

彼は無敗の王として世界に知られ、ファンからも引退を惜しまれた。

今では空座町でボクシングジムを営んでいる。

そんな彼はランニングがてら空座町の現世部隊の当直についていた。

ピコン

「ム、ム、浦原さんから連絡か、、、。 蓼花を？」

く空座町某所く

蓼花はコンビニから出てきたところで異変に気付いた。

「この霊圧は白哉叔父様と、黒崎部隊長、、、！」

はるか遠くで2人の隊長格と見知らぬ霊圧を感じたのだ。

「戻らないと！」

不気味で粘着質な声。

「いい匂いがするなア、、！よお、おまえあの時の女だな？」

「あんたは!!」

——墮ちろ！
マスコ・デ・ラ・インフエロ
煉獄破面——

——三火三水双びて連なれ、
さんかさんすいなら つら えんびようそうれん
焱焱双連——

「あの時の、！」

「(義骸を着てるこんな時に、、!)」

苺花がどう戦うかを考えていると、いつの間にか目の前にいたはずのシユリーカーが数メートル先まで距離を詰めてきていた。

「速いっ！」

シュリーカーは拳を思い切り振りかぶり苺花に打撃を与える。

「がはっ、っ、」

苺花は左のみぞおちに打撃をくらい、数秒間息が止まってしまった。

「やっぱおめえも一発で死なねえか。母親同様やるじゃねえの。」

苺花はみぞおちを押さえながら態勢を立て直している。

苺花はシュリーカーの顎に膝蹴りを食らわせた。

そしてシュリーカーの頭を足場として上空に飛び上がる。

「君臨者よ！血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！真理と節制、罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立てよ！」

「破道の三十三、蒼火墜！！」

蒼い炎がシュリーカーの背後から直撃する。

が、しかし、

「遺伝子だな。全く同じことするなんてよお。」

全くの無傷だった。

「もう偵察はあらかた終わらせたから、遊んだ後に報告しようと思ってたんだが、正解だったな。」

シュリーカーは不気味な霊圧を垂れ流している。

「あの時のガキを殺せるなんてゾクゾクするぜ。」

シュリーカーは響転ソニードで蓼花に詰め寄り、首元を掴んで壁に押し付けた。

「ざまあねえな、クソガキ。」

「くっ、、、」

その時シュリーカーの顔面を右から何かが殴り飛ばした。

「ゴアアアアツ!!」

さらにもう一発。

「え。ぶ!!」

「あなたは、、、茶渡さん!」

チャドの右手には黒い盾の手が、左手には白い悪魔の手が。

「蓼花、、、義骸なのか?」

シユリーカーは頬を押しえながら立ちがっている。
「く、く、くそ、くそ、ッ」

ザアッ

バサアッ

「なっ！飛んだ!?前はそんな力なかったのに!」

「前は見せてなかったただけだ!ふははは!」

シユリーカーは翼を羽ばたかせ上空に留まった。

「ム、ム、飛んだな。大丈夫だ、策はある。」

チヤドは道端にあるコンクリートの電柱へと歩いて行く。

「な、何をするつもりなんですか!?!」

チヤドは電柱の足場となるステップボルトを掴んだ。

「こうする。」

上空のシユリーカーは余裕の様子でどうするかを考えていた。

「てめえら空中なら届かねえだろ!!やっぱ空中はヒット&アウェイでハヤブサみたく仕

留めて、… あ?」

「おオオオオオオオ！」

シュリーカーが地上を見るとチャドがコンクリートの電柱を引き抜いて持ち上げていた。

「なんだと~~~~!!?」

「大丈夫だ。今度は方向は分かっている。」

チャドは思い切り電柱を振り下ろす。

「ぼぶ!!」

シュリーカーの背中に電柱がめり込み叩き落とされた。

『父さん! テレビ消えちゃった!』

『うるさい! こっちはウオシユレット消えてんだ!』

チャドが引き抜いた電柱が原因で辺りの家から悲鳴が聞こえてくる。

「ム、、、すまん、、、」

土煙が晴れるとシユリーカーが頭を押さえて立っていた。

「なるほど、、、お前あの時の男かあ、、、。忘れてたぜえ。」

「けどお前らも忘れてんじやないか?」

チャドと蓼花の背後の塀には細長い頭で小動物のような小虚が所狭しと並んでいた。

そしてその小虚達はチャドと蓼花を取り押さえる。

「形勢逆転ってヤツだなア、オイ?」

「ムオオオオオ!」

チャドは筋力で小虚達を払いのけ立ち上がった。

「やっぱムチャクチャな奴だな!!」

シユリーカーは再度空へと羽ばたいた。

「また空に!!」

蓼花が上空を指差しチャドの方を向いている。

「蓼花、安心しろ。俺に考えがある。風を出せる鬼道はあるか？」
「へ？」

～浦原商店～

「どうやら茶渡サン達も戦闘してるみたいっスねえ。」

「彼らに出てもらいますか？」

鉄裁が後ろに手を組んで立っていた。

「そうっスね。アタシが連絡します。」

「あ、どうも、浦原っス。ちよつと出て頂けませんかね？」

～空座町某所～

「茶渡さん、、」

「本当にこれでいくんですか、、？」

チャドは体育座りの蓼花を右手で抱え、折りたたんだ蓼花の足を左手で支えている。

「俺の怪力と蓼花の鬼道を有効に活用するにはこの方法しかない。」

「何というか、、すぐく、、頭の悪い作戦のような気がするのですが、、」

「言うな、母親が悲しむぞ。」

「ちよつと！高すぎです！！花火じゃないんですから！！」

「さつき言った通り、発射して奴の前にいけばその鬼道を使ってくれ。」

「はいー！」

「終わりだ！虚、観念しろ！」

蓼花はチャドに対し大きく返事をする、上空へと投げ出された。

「カンネンしますからっ！何もしないでエ!!」

シュリーカーは両手を前に出し飛んでくる蓼花を阻む素振りを見せた。

「…、なんてな。」

シュリーカーの左肩にいた小虚の眉間から何かが固まった球状のものを噴出された。

「破道の五十八、てんらん風!」

吹き出した何かの塊はてんらん風の突風によってシュリーカーに跳ね返された。

「なに!?!」

シュリーカーに塊が当たると弾け、幼虫のようなものが体に張り付いた。

「ヒルが…!!離れねえ!!」

その塊の正体はヒルだった。

「これで得意の小型爆弾ヒルは使えないはずだ。」

チャドは落下した蓼花を受け止めた。

「それだけじゃあねえ!!」

シュリーカーは矢を生成し弓を引き絞った。

「滅却師の矢か！ 苺花俺の後ろへ！」

チャドは右手の盾でシュリーカーの矢を防ぎきった。

「これはどうだあ!? グラン・レイ・ドラゴアリエント王虚龍の息吹!!」

赤黒い焰を纏った王虚の閃光を放つ。

「チャドは悪魔ブラソ・イスキエルダ・デル・ディアブロの左腕に霊圧を込め振りかぶった。
「魔人の一撃!」ラ・ムエルテ」

「へえ、お前も虚や破面の力を使うのか。やるじゃねえか。」

「なあ、同胞?」

チャドは片膝をつき、立ち上がれずにいた。

「魔人の一撃で中心部を相殺したお陰で直撃は免れていた。」ラ・ムエルテ

「茶渡さん!! 大丈夫ですか!」

「おいおいなんだあ? 黒崎の野郎じゃねえじゃねえか。」

鋭い男の声が夜の通りに響いた。

そしてそれに続くように凜とした女性の声も響く。

「だから母花ちゃんって言ったでしょ？」

「全く、一護かと思つてきてみれば全然違うではないか。」

そしてもう一人スペイン語混じりの男も現れた。

「うるせえ雑魚。」

「何おう!? 我輩は元3番だぞ!？」

「ネリエルに奪われたんだろ?」

「ケンカしないの!」

ネリエルと呼ばれる破面の女性は2人を必死で仲裁している。

シュリーカーは長い口喧嘩に痺れを切らし怒鳴り上げた。

「なんだてめえらは!？」

水色の髪の毛の破面は不気味に口角を上げシュリーカーへ鋭い眼光を向ける。

「ああ!?! テメエを今からぶつ殺す奴だ。」

〈虚夜宮〉

「通じない!! 一体何をやっているんです?!

頭領のノヴァディオはシエンとシユリーカーに連絡をするも繋がらず苛ついていた。

「僕が行こうか? 僕の分身だからね。」

ザエルアポロがコートを羽織り出撃しようとしている。

「いや、彼女に頼みます。」

ノヴァディオがそう断ると、広場出入り口から杖の紋章の黒コートが現れた。

ザエルアポロはその人物を一瞥すると一言。

「元貴族さんか。」

その元貴族と呼ばれた人物も言い返した。

「その呼び名はやめろ。消すぞ破面の小僧。」

「じゃあお婆さんとも呼ぼうかな？」

「ふん、餓鬼には付き合つとれんわい。行つてくる。」

「そう言い残すと元貴族の老婆は広場を後にした。」

「元貴族とかいうけど大丈夫なのかい？あんな老いぼれで。」

「ザエルアポロは怪訝そうな面持ちでノヴァディオに尋ねる。」

「彼女が全盛期の時は五代貴族の中でも一番の栄華を誇っていましたから。」

「朽木、四楓院、志波、綱彌代。あの化け物貴族達の中でも群を抜いていました。」

「鬼白峯おにしろねたまき珠稀。その名を轟かせた。」

「ノヴァディオが一通り説明したところで死神出身である蟹沢がその名に反応した。」

「鬼白峯ってあの？」

「ザエルアポロは続きを蟹沢に尋ねる。」

「なんだい？そんなにすごいのかい？」
「すごいなんてものじゃありません！」

中央霊術院では霊王の次に教える五人の偉人がいた。

中央霊術院の創始者にして長年に渡り護廷十三隊総隊長を務めた

山本重國

尸魂界のあらゆる事象に名前を付けた

兵主部一兵衛

死神が持つ全ての浅打を打った

二枚屋王悦

何度斬られても倒れないという最強の称号

剣八

そして鬼道の開祖である

鬼白峯珠稀

「全ての鬼道を自在に操る天才です。」

蟹沢の顔はこわばっている。

「なるほど、只の婆さんではないわけだ。」

ノヴァディオはさらに続けた。

「我々の中で魂魄の境界を破壊していない、つまり異種族の力を得ていない者が1人だけいます。それが彼女です。」

「それをする必要がない程の鬼道の使い手。それが、、、」

『鬼の歩く道』とまで呼ばれた鬼白峯珠稀です。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:

第11話 Before THE BLEACH WA
RFARE

く空座町某所く

「終わりね。」

「つまんねえ。」

「M u y f ・ c i l l !」
容 易 い

ネリエル、グリムジョー、ドルドーニは横一列に並び白煙に包まれたシュリーカーを見下ろしていた。

シュリーカーは羽を引きちぎられ飛ぶことすら出来なくなっていた。

「くつそ、、ツイてねえ、、流石にこいつら相手はキツイぜ。」

「シエンの野郎もいつのまにか来て、いつのまにかやられたみたいだし、、やべえな。」

「破道の九十、黒棺。」
くろひつぎ

「何?!」

グリムジョーは黒い棺に閉じ込められ、一瞬で轟音を立てて崩れ落ちた。

「グリムジョー!!」

ネリエルが駆け寄るが、鬼道の天才、鬼白峯おにしろうねは攻撃の手を休めなかった。

「縛道の九十九、禁。」

「破道の九十一、千手皎天汰炮。」
せんじゆこうてんたいほう

ネリエルの身動きを封じ高威力の破道を放つ。

「破道の五十四、廃炎。」
はいえん

「破道の九十六、一刀火葬。」
いっとうかそう

さらに自らの手を焼き、焼き焦げた腕を媒体として発動させることのできる犠牲破道を躊躇なく使用した。

攻撃をしに向かってきていたドルドー二もろとも焼き尽くす。

「裏破道四の道、ふくぞうほうけん複臓奉獻。」

鬼白峯は犠牲になった腕を生やすと、肩をぐるんぐると回している。

「で、縛道の七十九、くようしばり九曜縛。」

鬼白峯はチャドと苺花を九曜縛で封じるとシユリーカーに向き直った。

「これだから虚は信用ならん。この程度に手こずるなど。シエンを回収に行く、モタモタするな。」

鬼白峯は瞬歩で、シユリーカーはソニード響転でその場を後にした。

く空座町某所墓地付近草むらく

「クソがつ、、、あの小娘、、、！殺す！」

茜雫にやられボロボロになったシエンは地面を這いつくばっていた。

「それは出来ぬ。お前はここで死ぬのだからな。」

「朽木白哉、！」

白哉がとどめを刺そうとしたときだった。

「破道の八十九、銀川ぎんせんい一粒砂いちりゅうさ。」

鋭い鉄の砂が川のように白哉を襲う。

鉄の川が流れ切るとピンク色の球体が姿を現した。

そしてその球体は花びらのように散っていく。

白哉は千本桜で鬼道を防いでいたのだ。

「この霊圧、、まさか鬼白峯珠稀か、、」

白哉は珍しく驚きで目を見開いている。

「朽木家の坊主。元氣そうだね。」

「お陰様、」

「破道の九十、黒棺。」

一瞬だった。

鬼白峯は何の前触れも、予備動作も見せず、九十番台破道を詠唱破棄し発動させた。藍染ですら手掌に黒棺の元となる霊圧を構築してからでないかと詠唱破棄できないにも関わらず、鬼白峯はいとも簡単にやってのけた。

史上最速といってもいい黒棺が発動し終えると、そこに白哉の姿はなかった。

「流石の白哉坊も私相手では逃げるしか手が無いか。けどその速さは見事だね。」

そして鬼白峯は無様にもポロポロになったシエンに目を向ける。

「ざまあ無いね、破面の小僧。」

「うるさい、、、早く連れて帰れ、、、！」

く空座町・某廃墟く

「だれやねん、お前。」

かつて仮面ヴァイザードの軍勢と呼ばれた虚化を主な戦闘方法とする一派がいた。

その仮面の軍勢がアジトにしていた廃墟に、父親そっくりの顔立ちに目元だけ母親譲

りの青年が訪れた。

「父から聞いた。黒崎一護さんがここで虚化修行をしたと。」

「いや、だからお前だれやねん。名前乗れ言うてんねん。」

金髪ポニーテールの少女、猿柿ひよ里が珍しく怒鳴りつけず静かに問うていた。

「滅却師の石田竜燕だ。」

「滅却師の石田やと？そもそもまず素質がないとあかんで。誰でもできるもんとちゃう。」

ひよ里は帰れ帰れ、と言わんばかりに竜燕に向け手を小さく振った。

「僕の母は元破面だ。僕の中にも破面や虚の霊圧が宿っている。」

「義骸で力を失った破面と石田が結婚したってのは一護の冗談じゃなかったんだな。」

黒い紅葉のような髪型をした男、愛川羅武あいかわらぶはページを忘れないように、ジャンプを開いたまま伏せ竜燕を観察するように見ていた。

羅武の横に座るピンク色の短髪の巨漢、有昭田鉢玄うしやうだはちげんが困ったように呟いている。

「冗談と思つてご祝儀渡してなかつたデス。」

「もういいんじゃないかな？その代わりに僕が曲を送るよ。」

百年前の仙波の事件の時にはまだ三番隊隊長をしていた鳳橋楼十郎おおとりぼしろうじゅうろう、通称ローズが愛用のギター、フライングVを手にとっている。

「ローズ！お前うるさいねん！」

ひよ里は訳の分からないことを言っているローズにピンポイントで怒鳴り散らした。
「なんで僕だけ!？」

その2人を傍目にラブが話を進める。

「なるほどな。で、お前覚悟はあんのか？」

「何勝手に進めとんねん！ラブ！」

「なかつたら来てない。」

そう言うとき竜燕は滅却師十字クイーンシークロスを取り出した。

その目はかつての一護と同じであった。

「はっ！面白い、ついて来い。」

ラブはサンダルをパタパタと鳴らせながら廃墟の奥へと歩いていく。

「おいラブ！何勝手に決めてんねん！こいつ滅却師やぞ!?死神と同じかどうか分かれへんやろ!」

ローズはギューーン、とギターを鳴らしながらポーズを決めている。

「いいじゃないか。彼の目には確固たる決意が見て取れるよ。良い曲が出来そうだ。」

「ローズ、せやからお前はうるさいねん!!」

ラブはまたも2人のやり取りをスルーして話を進めた。

「だが虚の仮面から出そうってならかなりきついぜ?」

竜燕が額に手をあてがい下へと引つ掻くように下ろすと、虚の仮面が出現する。

「これのことかい?」

「ほお、。。。」

そしてラブも同様に虚の仮面を発動させた。

「なら話は早いぜ。」

く虚夜宮く

「何をやっているんですか!?! シエン!!」

「思念珠を失ったのがどれだけの痛手が分かっているのですか!?! これで計画を変えざるを得ません!」

王印の紋章のノヴァディオはパンツ、と机を思い切り叩き怒りを露わにした。

「落ち着きな。それでお前さん、どうするんだい?」

鬼白峯は杖をつきながら自分の席へと向かっている。

ノヴァディオは深呼吸をし、冷静になるとこれからの作戦を伝え始めた。

「思念珠がない以上現世部隊の足止めは諦めます。現世部隊で厄介なのは浦原喜助だけです。他は各自流動的に撃破してください。」

「更木剣八には予定通りセキズイを当てます。」

「京楽春水にはウキヤクを。」

「浦原喜助は、、、鬼白峯さんに頼みます。」

「虎徹勇音は燬^{きこ}王^{おう}がいいでしょう。」

「そして私が涅マユリに当たります。」

「メダリオンは更木剣八、京楽春水、虎徹勇音にあたる3名が持つて行ってください。」

「浦原喜助と涅マユリはきつと対策を持っていて意味がないでしょうから。」

「後は取るに足らない者ばかりですから誰を当ててもいいでしょうが、一応相性は考えておきます。」

一通りの説明を終えると、ノヴァディオは立ち上がり声を少し張り宣言した。

「3日後に尸魂界に攻め入ります。」

「目指すのは尸魂界の、そして四十六室の浄化！」

「皆さん、頼みましたよ。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.

登場人物↳尸魂界↳

↳尸魂界・護廷隊↳

総隊長の提言で外世部隊の設立及び一部隊長に特別任務付与

【零番隊】

○兵主部一兵衛 / まなこ和尚

尸魂界のありとあらゆる事象に名前をつけた人物。

○二枚屋王悦 / 刀神

全ての斬魄刀を打った人物。

○麒麟寺天示郎 / 泉湯鬼

護廷十三隊の初期メンバーで元四番隊隊長。

卯ノ花烈に回道を教えた。

○修多羅千手丸 / 大織守

姫君のような風貌の女性。涅マユリとは顔見知り。

○曳舟桐生 / 穀王

元十二番隊隊長。義魂技術の開祖。

普段は太っているが、霊圧を消費すると絶世の美女となる。

○志波空鶴 / 王遣花火師

元零番隊。志波家没落によつて零番隊の除隊を余儀なくされたが、名家復活に伴い、零番隊に復隊した。

○涅マユリ / 狂研者

元十二番隊隊長兼技術開発局二代目局長。

マッドサイエンティストだが、護廷十三隊在籍時には大きな信頼を寄せられていた。

【一番隊】

○京楽春水

一番隊隊長兼護廷十三隊総隊長

元八番隊隊長。飄々としているが思慮深く物事の本質を見抜くことに長けている。

○伊勢七緒

一番隊副隊長

生真面目な性格で、大雑把な京楽の尻を叩きながらも献身的にサポートしている。

【二番隊】

○碎蜂

二番隊隊長兼隠密機動総司令官

非情で冷酷な性格とは裏腹に、夜一の前ではデレデレとなる。

○大前田希千代

二番隊副隊長

金持ちのデブ。

【三番隊】

○狩能雅忘人かのうアシド

三番隊隊長兼遠征部隊指揮官

メノスの森で孤独に戦っていた男。実力は折り紙つき。

○沖牙源志郎

三番隊副隊長

元一番隊副隊長。新人のアシドを支えるため奮闘している。

【四番隊】

○虎徹勇音

四番隊隊長兼副総隊長

攻撃、防御、回復、どれをとっても過去最高レベルの護廷隊で重要な戦力。
姉妹で隊長、副隊長を務める。

○虎徹清音

四番隊副隊長

物静かな姉とは真逆の性格で、お互いに足りないところを補い合ってる。

○山田花太郎

四番隊第三席

自分に自身のない優男で、回復の技に関してはずば抜けた能力を持つ。

【五番隊】

○平子真子

五番隊隊長

京楽、六車に並ぶ、隊長歴の長い関西弁の男。

かつては藍染の上司だった。

○雛森桃

五番隊副隊長

藍染に憧れ副隊長まで上り詰めたが、藍染の裏切りに遭う。平子のあえて気を使わない対応によってその傷を克服した。

○阿散井^{いぢか}蓼花

五番隊十四席

阿散井恋次・ルキアの娘。親譲りで高い死神としての能力を持つ。勝気で大雑把な性格。

【六番隊】

○朽木白哉

六番隊隊長

朽木家の当主。物静かで冷静だが、姪である蓼花と《わかめ大使》のことにになると熱が入る。

○四楓院夕四郎

六番隊副隊長

四楓院家の当主で、夜一の弟。無邪気な性格で白哉の後ろを追いかけまわしている。

【七番隊】

○射場鉄左衛門

七番隊隊長兼調査犬部隊長

グラサン、リーゼントで広島弁、仁義を重んじる熱い漢。

○伊江村八十千和

七番隊副隊長

射場によって四番隊から引き抜かれた。射場に振り回されながらも漢として慕っている。

【八番隊】

○阿散井恋次

八番隊隊長

過去最多となる隊長11名からの推薦で六番隊副隊長から隊長となる。

朽木ルキアの夫で蓼花の父。

○行木理吉

八番隊副隊長

恋次に憧れ走り続けてきた元六番隊第三席。恋次と共に異動した。

【九番隊】

○六車拳西

九番隊隊長

京楽、平子に並び隊長歴の長い男。

平子と同じで、陰ながら早く引退したいと思っている。

○小椿仙太郎

九番隊副隊長

元十三番隊副隊長。ある男のせいで縁もゆかりもない九番隊に配置となる。

【十番隊】

○日番谷冬獅郎

十番隊隊長

若くして隊長となった天才。部下の教育にいつも手を焼いている。

○松本乱菊

十番隊副隊長

グラマラスな体つきをしている金髪美女。上司にいつも手を焼かせている。

【十一番隊】

○更木剣八

十一番隊隊長

泣く子も黙る最強の男。最近は丸くなったとの噂が。

○斑目一角

十一番隊副隊長

更木隊の一番槍。実は卍解を使えるが隠している。

○綾瀬川弓親

十一番隊第三席

鬼道系斬魄刀であることを隠して戦闘部隊で凌ぎを削っている。

【十二番隊】

○檜佐木修平

十二番隊隊長兼瀨靈廷通信編集長

技術開発局が靈王宮に移動したことで隊長に抜擢された。
瀨靈廷通信の編集長も兼ねている。

○吉良イツル

十二番隊副隊長

文章が得意という理由から檜佐木に引き抜かれた。

副隊長というよりは副編集長。

【十三番隊】

○朽木ルキア

十三番隊隊長

本名は阿散井ルキア。朽木ルキアは仕事上のみの名前。

夫は阿散井恋次で娘は苺花。朽木白哉の義妹。

○志波岩鷲

十三番隊副隊長

海燕の跡を継ぐため真央靈術院に入学し、卒業後副隊長に就任。

卒業後すぐの副隊長就任は開校以来二人目の快挙。

○錆面彦禰

十三番隊第五席

本名は産絹彦うぶぎぬ禰。

かつて綱彌代時灘つなやしろときなだに生み出された青年。京楽の計らいで苗字を変え、第二の人生を送り始めた。

【外世部隊】

○黒崎一護

外世部隊隊長

かつて尸魂界を襲撃した旅禍。その後死神代行として護廷十三隊に与した。その功績が認められ現世、虚圏の治安維持部隊部長としての運用が決まった。

○石田雨竜

外世部隊副隊長

かつて尸魂界を襲撃した旅禍。霊王護神大戦でユーハバツハ討伐に加勢した功績が認められ現世、虚圏の治安維持部隊副部長としての運用が決まった。

登場人物く現世く

く現世く

〔外世部隊〕

○黒崎一護

護廷十三隊外世部隊部長。

空座町で黒崎医院を営む医者。

15歳の時に死神・朽木ルキアと出会い、死神代行となる。

妻は黒崎織姫、息子は黒崎一勇^{かずい}

○石田雨竜

護廷十三隊外世部隊副部長（滅却師担当）

空座町で石田医院を営む医者。

滅却師の生き残り。

妻は人間化した元破面。息子は石田竜燕^{りゅうえん}

一護とは高校の級友。

○茶渡泰虎さど やすとら

護廷十三隊外世部隊所属（完現術者担当）

空座町でボクシングジムを営む。

元ボクシングヘビー級世界王者。

15歳の時に完現術フルブリンダに目覚める。

一護とは高校の級友。

○ネリエル・トゥ・オーデルシユヴァング

護廷十三隊外世部隊所属（破面担当）

破面。元第3十刃トレス・エスパーダ。通称ネル。

従属官フラシオンはペツシユとドンドチャツカで、新たにロカ・パラミアを迎えた。

○ロカ・パラミア

護廷十三隊外世部隊所属（破面担当）

元ザエルアポロの従属官フラシオンで今はネリエルの従属官。

○銀城空吾^{ぎんじょうくうご}

護廷十三隊外世部隊所属（完現術者担当）

一護の前任の死神代行。

死神でありながら完現術者^{フルプリンガー}でもある。

○浦原喜助

護廷十三隊外世部隊所属（支援担当）

浦原商店店長。

元十二番隊隊長兼技術開発局初代局長。

○握菱鉄哉^{つかびし}

護廷十三隊外世部隊所属（支援担当）

元鬼道衆総帥・大鬼道長

○月島秀九郎^{しゅくじゅうくわう}

護廷十三隊外世部隊所属（支援担当）

フルプリンガー
完現術者。

能力は相手の過去に記憶を挟み込むブック・オブ・ジ・エンド。

【黒崎家】

○黒崎一護

辛子明太子とチョコレートが好物。

高校の頃は現国が一番得意だった。

○黒崎織姫

一護の妻で、フルプリンガー完現術者。瞬舜六花を操る。

○黒崎かずい一勇

一護と織姫の息子。空座第一高校1年生で、現在は一護の後を継ぎ死神代行となった。

○黒崎一心

元十番隊隊長で志波の分家出身。

○黒崎夏梨かりん

一護の妹で、遊子とは双子の姉妹。
実は・・・

○黒崎遊子ゆず

一護の妹で、夏梨とは双子の姉妹。

【石田家】

○石田雨竜

裁縫が得意で高校時代には手芸部に所属していた。
滅却師の白さには誇りを持っている。

○チルツチ・サンダーウイツチ（現世名・石田千鏤ちる）

雨竜の妻で、竜燕の母。浦原の用意した義骸で人間化。

かくかくしかじかであつて敵として対峙した雨竜と結ばれた。

○石田竜燕りゅうえん

雨竜とチルツチの息子。空座中学2年生。

滅却師と破面の力を持つ。

○石田竜玄

雨竜の父で竜燕の祖父にあたる。チルツチからはクソ義父やろうと呼ばれている。

【浦原商店】

○浦原喜助

人呼んで《ハンサムエロ店長》。

一般商品から霊関連商品まで広く取り扱っている。

○握菱鉄裁

主に事務方を取り扱っている。

○花刈はなかりジン太

主に雨ウルルにいたずらをしている。

○紬屋つむぎや雨ウルル

主に駄菓子を取り扱っている。

○矢胴丸リサ

元八番隊隊長。

主に大人の商品を取り扱っている。

【鰻屋うなぎや】

○鰻屋郁美

何でも屋である「鰻屋」の店長。

鰻は提供していない。

○猿柿ひよ里

鰻屋で働く金髪で関西弁の少女。

○愛川羅武ラフ

鰻屋で働く紅葉のような髪型をした男。いつもジャンプを読んでいる。

○有昭田鉢玄うしよただはちげん

鰻屋で働く。ピンク色で坊主頭の巨漢。

○鳳橋楼十郎おおとりぼし

鰻屋で働く金髪で長髪の男。いつもギターを弾いている。

登場人物↳虚圏（ウエコムンド）

↳虚圏↳

【ティア・ハリベル】

トレス・エスパード
元第3十刃

金髪で褐色肌の女性破面。虚圏の女王。

藍染が投獄されたことで、虚圏を治めることになった。

フランゾン
従属官はア・パッチ、ミラ・ローズ、スンスン。

【ネリエル・トウ・オーダーシュヴァンク】

トレス・エスパード
元第3十刃

緑色の長髪で、頭には割れた仮面が付いている。通称ネル。

ハリベル、ドルドーニよりも以前のエスパードだった。

一護が虚圏に乗り込んだ際には共闘し、霊王護神大戦でも死神側として戦った。

現在は外世部隊の破面担当として護廷十三隊に所属している。

従属官はペツシユ、ドンドチャツカ、ロカ。

【ロカ・パラミア】

元ザエルアポロの従属官で、現在はネリエルの従属官。

ドン・観音寺との出会いが彼女の人生を変え、現在はネリエルと共に外世部隊に所属している。

【ペツシユ・ガティーシエ】

ネリエルの従属官。

一護が虚圏に乗り込んだ際には共闘した。

【ドンドチャツカ・ビルスタン】

ネリエルの従属官。「くでヤンス」という口癖がある。

一護が虚圏に乗り込んだ際には共闘した。

【グリムジョー・ジャガージャック】

セスタ・エスパーダ
元第6十刃

かつて一護と死闘を繰り広げ、その後も事あるごとに一護と殺し合いをしようと試みていたが、最近はその息子一勇に懐かれ斬魄刀を虚圏に置いて現世に行くこともあるとか。

【ドルドーニ・アレッサンドロ・テル・ソカッチオ】

トレス・エスパイダ
元第3十刃

ハリベルの前の十刃で、ラス・ノーチエス虚夜宮では一護と対峙した。その後、涅マユリの骸部隊としてこき使われた。

【ルピ・アンテノール】

セスタ・エスパイダ
元第6十刃

グリムジョーの後に第6十刃となるが、グリムジョーによつてその座から引きずり下ろされる。

その後、涅マユリの骸部隊としてこき使われた。

【シャルロツテ・クールホーン】

第2十刃バラガンの従属官の一人。

藍染投獄後、涅マユリの骸部隊としてこき使われた。

【道羽根アウラ】

宗教法人「XCUITION」の元代表で完現術士^{フルプリンガー}。

他の完現術士のように固有の能力は持たないが、全ての完現術士^{フルプリンガー}が使える基礎能力が極限まで引き上げられている。

産絹彦禰を息子のように思っており、いつか母として手料理を食べさせてあげられるよう今はハリベルの庇護下で調理人をしている。

【リルトット・ランパード】

元星十字騎士団団員^{シュテルンリッター}。

ユーハバツハから《G》、The Glaton^{シュリフト}の聖文字を授かった食いしん坊の能力を持つ滅却師。

色々あつて虚圏の食料調達をしている。

【キャンデイス・キャットニップ】

元星十字騎士団団員^{シュテルンリッター}。

ユーハバツハから《T》、The Thunderboltの聖文字シユリフトを授かった雷の能力を持つ滅却師。

色々あつて虚圏の食料調達をしている。

〔ピカロ〕

元第2十刃セグンダ・エスパーダ

百以上もの少年少女破面の集合体。遠目から見ると黒い霧のよう。

無邪気・無垢ゆえに残虐で、遊びの一環として殺戮を選ぶこともある。

ドン・観音寺に懐き、空座防衛隊のカラクラホワイトとして任命される。

第3章 空座町迎撃戦（前編）

第1話 Start THE BLEACH WARFARE

ARE

不穏な霊圧が尸魂界に流れる。

——浮竹十四郎ノ墓——

「来たみたいだ、浮竹。じゃあ行きますかねえ。」

（霊王の脊髄迎撃地）

「来やがった！」

その男は靈王の脊髄の強大な靈圧を感じ取り、眼帯を引きちぎりながら不敵な笑みを浮かべている。

～おにしらねたまき 鬼白峯珠稀迎撃地～

「なぜ猫娘がここに？それにここは現世!？」

「まあ喜助と涅が解析勝ちしたということじやな。」

～ 靈王の右脚迎撃地～

「こいつかいな。靈王の右脚つちゆうんわ。」

「思ったより大つきくもなく普通ですね、、、。」

「今んところはのお。」

く燬^{きこう}王^{おう}迎撃地く

「お前らが私の相手か。破面に若造が相手とは舐められたものよ。」
「俺たちはお前にとつて一番の天敵だと思いがな。」

くアーロニーロ迎撃地く

「君ハ。何処カデ見覚えがアルと思えバ、、、」
「アーロニーロは顔を変え相手を挑発する。」
「貴様、、、！」

く狩^{かり}矢^や神^{じん}迎撃地く

「ここは？尸魂界ではないのか？」

「待っていたぞ。」

狩矢は驚きで目を見開いている。

「まさかお前たちにこんなところで会えるとはな。」

くシエン迎撃地く

「ノヴァディオとザエルアポロの奴、浦原喜助と涅マユリに負けてるじゃないか!! 傑作だ!!」

仲間を嘲笑うシエンの前には2人の死神が立っていた。

「そして、また君達と戦えるとはさらに傑作だよ。」

くザエルアポロ迎撃地く

「おやおや懐かしい顔ばかりだ。同窓会でもしていたのかな?」

ザエルアポロの目の前に立つ敵達。

そしてその端に立つ女性を一瞥した。

「1体場違いがいるけどね。」

く蟹沢ほたる迎撃地く

「この面子。あの時の演習を思い出すね、、、。」

「蟹沢!! 本当にお前が、、、!」

くナナナ・ナジャークープ迎撃地く

「これはこれは元滅却師の王候補さん。」

「やあ、ユーハバツハに裏切られてもなお付き従い気づけば死神にこき使われていた哀れな元滅却師さん。」

「言ってくれるじゃねえの。てめえこそ死神の犬になりやがったくせに。」

くホムラ迎撃地く

「お前は、、！ 狛村左陣の部下だった、、！」

「儂だけじゃないわい。こいつらもおる。」

「お前らは、、！」

くシユリーカー迎撃地く

「なんで俺のどこ誰もいねえんだよ!!!」

くノヴァディオ迎撃地く

ノヴァディオが黒腔を抜けると、そこは自分の予想していた景色とは違っていた。

一目で分かる。

ここは尸魂界ではないと。

そして現世の高い建造物に囲まれた道には2つの人影があった。

「いやあ、どうもツス！」

「全く、予定よりも遅いじゃないかね。私も暇では無いんだヨ!!」

あつけらんかんとする浦原とは対照的にマユリは苛ついていた。

「なぜあなた達が!? 涅マユリはともかく、浦原喜助は鬼白峯さんと当たるはずでは、
！」

「こちらに有利なように組み替えさせてもらいましたア！」

浦原はいつもの調子で飄々と答えている。

「しかもサービスでどれだけ暴れても大丈夫な、レプリカの空座町にしました！」

浦原がビルのエントランス上方から垂れている紐を引っ張ると

ー祝☆暴れ放題ー

という垂れ幕が下りた。

「一体どうやって、？」

マユリはノヴァディオを嘲笑っている。

「どうやって？ 君は研究者の父を持つていながらそんなこともわからないのかネ？」

「なるほど、私の正体も分かっているということですか。」

たしかに対戦相手を組み替えられたことは予想外ではあったが、霊圧感知で把握した組み合わせはそこまで不利ではないように思えた。

「あなた方は人数にはそこまで力を割いていないようですね。」

「アア！ その点なら大丈夫ツス！ 後できますから。」

「ここ結構遠くてツスねえ、第一陣転送組、第二陣転送組、第三陣転送組に分けてるんす。データ容量みたいなのが馬鹿でかくて、重要な人から先に送りました。」

巫山戯た様子で話していた浦原は態度を一変させ鋭い眼光となった。

「貴方が心配するのは自分のことだけで結構ですよ？」

浦原は杖で帽子を少し押し上げた。

「さあ、貴方はどれほど準備してきたっスか？」

「アタシは少なくとも、死ぬほどしてきたつもりっス。」

T o b e c o n t i n u e d

第2話 The Blade is You and

You are Me

「靈王の脊髄迎撃地」

「オマエ、更木劍八ダナ？」

フードを被ったまま靈王の脊髄は片言の言葉で劍八に問いかけた。

「なんだてめえ、喋れんのか？脊髄なんだろ？」

「シニガミ、敵、殺ス。」

「会話はできねえみたいだな。」

すると脊髄の背中から蜘蛛の足のように骨が伸び劍八を襲う。

「格好は虎徹の卍解みてえだな。」

劍八は伸びてくる骨を一気に切り落とし相手の攻撃を止めた。

しかしその切断面から糸のようなものが伸び地面に寄生する。

「なんだあ?」

すると地面がめくり上がり剣八を包み込んだ。

そして横のビルにも寄生し、ビルを剣八へと倒壊させる。

「なるほど、涅の野郎が言つてやがった神経がどうのこうのつて奴か。」

「となると体乗つ取られりやめんどくせえことになるな。涅の野郎からもらつたやつ飲んどくか。」

剣八は降りかかる瓦礫を斬りながら懐から怪しげな小ビンを取り出した。

ビンのラベルには、「神経を防御するヨ」と書かれている。

「ほんとに効くんだろうな。」

剣八は一口で薬を飲み干した。

そして再度相手の方を見ると、背中から蜘蛛の足のように生えた何本もの骨が折れ曲り剣八の方を向いていた。

「ああ?」

背骨から弾丸のような骨の破片が発射される。

劍八が飛んでくる骨の破片を刀で撃ち落としてみると、突然刀の制御が効かなくなつた。

斬魄刀を見ると血管のようなものが張り付いている。

「斬魄刀にも寄生すんのか。」

さらに神経は斬魄刀を伝い、劍八の腕に寄生しようとしたが薬の作用で抗体霊圧が動し灰となった。

「ほんとに体には入らねえのか。霊圧で焼き切れるつてこたあ、」

劍八は斬魄刀に寄生した神経を焼き切ろうと霊圧を上げる。

寄生した神経は黒い灰となり空气中を漂った。

「なるほど、ちつとは耐えるみてえだがその骨の欠片中にやそんなに神経は入つてねえみてえだな。」

「サツキカラ痛イ。痛イ、イヤ。イヤ、殺ス。」

脊髄は神経を四方のビルに伸ばし、劍八に向け倒壊させた。

劍八は倒壊するビルへと高く跳躍すると斬魄刀の名を呼んだ。

「行くぜ。呑め、野晒ー！」

倒壊したビルの瓦礫は剣八を避けるように真つ二つに落ちていく。

すると脊髄はその瓦礫に神経を寄生させゴーレムのような兵士を作り出す。

瓦礫に寄生した神経は本体から切り離され、独自で動き始めた。

すでに十体以上ものゴーレムが剣八を取り囲んでいる。

「数で勝ちやいけるとでも思ってるのか？」

剣八が野晒を一振りすると全てのゴーレムが腰のところまで上下真つ二つとなった。

しかし上半身は下半身に瓦礫を集め、下半身は上半身に瓦礫を集め数を二倍に増やし再生した。

さらにそれぞれが瓦礫や信号機、ガードレールを取り込み巨大化していった。

脊髄もすでに瓦礫に包まれ、どれが本体かわからなくなっている。

「隠れやがって、面倒くせえなあ。」

剣八は次々と周りのゴーレム達の手足をを斬り捨てていく。

しかし何度斬ってもその断裂面に瓦礫が集まりまた新たなゴーレムを作り出した。

キンツ

「チツ、刀が通らなくなってきたな。」

肥大化したゴーレムの体表は厚く、野晒も通らなくなってきた。

数十体のゴーレムが剣八と交戦している間、その後ろでさらに十数体ものゴーレムが集まり光を放っている。

ある一体のゴーレムを中心に、左右に各五体のゴーレムが30メートル離れたところに立っていた。

そしてその両端が霊圧の線で結ばれ、線を中心に立つゴーレムがまるで弓を引き絞るように線を後ろに引っ張り始める。

同じく30メートルほど引っ張ったところで、周りからとてつもない霊圧を放ったゴーレム達が集まり、巨大な岩の塊となった。

「コレデ更木剣八モ終ワリ。」

それは滅却師の得意とする弓矢と言うよりはパチンコ玉を連想させるものだった。

剣八はそれに気づかず剣を振るっていると、突然周りのゴーレムが剣八に抱きつき始

めた。

「なんだ？」

「終ワリ、死ネ。」

放たれた巨大な岩の塊は神経を網のように伸ばし、周りのビルやその瓦礫を巻き込みながら剣八へと迫っていく。

「くそつ、そういうことかよ。」

剣八は迫り来る塊を見て、なぜゴーレム達が突然集まってきたのかがやっと理解できた。

身動きの取れない剣八は野晒で防ぐが受け切れず大爆発とともに吹っ飛ばされてしまった。

轟音は暫く鳴り響き続けた。

粉々になった小さな破片はまた小さなゴーレムとなり、その数は一万を超えていた。

「オマエ弱イ。モウ死ネ。」

どこにいるかもわからない本体がそう告げると一斉に滅却師の弓矢を生成し剣八がいるであろう砂煙に向かって放った。

「言ってくれるじゃねえか。なあ野晒。」

「見せてやる。俺たちの力を。」

「卍解。」

く 靈王宮 く

数日前のこと。

「更木や。おんしは対話と具象化は既に済ませてある上に、卍解の力にも少し触れてい

る。」

「らしいな。」

「しかし卍解を修得するには斬魄刀を屈服させなければならん。」

「屈服だあ？なんだ？野晒を斬り伏せりやいいってか？」

「斬り伏せられるのならな。まあその前に儂と劍を交えてもらおうか。」

「そう言うと兵主部は斬魄刀を取り出した。」

「黒めよ、一文字^{いちもんじ}。」

兵主部が斬魄刀を解放させると、まるで筆のような刀へと形を変える。

「なんだ？筆で俺を斬ろうってのか？」

「筆か刀か見分けがつかんかね？」

兵主部が一文字を振ると、墨が飛び散り劍八を黒く染め上げた。

「今のおんしらに名はない。」

「名前が無えだど？」

劍八には言っている意味が理解できなかつた。

「名がない、その痛みおんしならわかるはず。まあそれもよく話し合うのがよかろう。」

兵主部は意味深な言葉を発すると、再度霊圧を上げた。

「さて、ではおんしらに仮の名をやろうかのう。」

「真打・しら筆一文字。」

現在では卍解と呼ばれる「真打」という名称は兵主部が初めて斬魄刀を二段階解放させたときに呼んでいた解号だった。

そして兵主部が白色の一文字で、全身が黒くなっている剣八とその斬魄刀に「名」を与えた。

そこには「更木剣八」でも「野晒」でもなく、《獣》と書かれている。「一度失ったおんしとその刀の名をよく理解しろ。」

剣八はそこで一度意識が途切れた。

薄暗く殺伐とした地を濃い霧が円状に取り囲んでいた。

そして静かに響く声。

「ようこそ、我が主。」

姿はなく声だけが聞こえてくる。

「誰だ。」

「(兵主部のおっさんに斬られたんじゃねえのか?)」

劍八は何が起こったのか理解できず辺りを見回している。

「あなたが私に会ってから長い間、私の名前を知ろうとはしませんでした。」

「なんだと?」

すると霧の奥から巨大な柄の無い斬魄刀を持った人物が歩いてくる。

「一護!」

「しかしあなたは黒崎一護との戦いで私たちに歩み寄ろうとしましたね。」

一護に敗北した時強くなりたいと心の底から願った。

初めて斬魄刀の名前を知りたいと思った瞬間だった。

「しかしあの時私たちはあなたに応えられませんでした。なぜならあなたは自分自身で力を抑えていたから。」

目の前の一護は卯ノ花に姿を変える。

「卯ノ花八千流との戦いでああなたは自身の力を解き放ち、そして私たちの声が聞こえた。」

最高の時間だった。初代劍八、卯ノ花八千流との命を賭した斬り合い。

あの時、更木区の剣八から十一番隊長更木剣八となった。
 そしてその戦いの後に聞こえた斬魄刀の声。

「お前、やちる、いや野晒か。」

「私たちはあなたの言う『やちる』ではありません。」

卯ノ花の姿は霧となり、滅却師の中でも最強と名高い想像した事象を現実に変える力を持つ星十字騎士団の一人、グレミイ・トウミューへと再度姿を変える。

「グレミイ・トウミューとの戦いで私たち『野晒』を使い、共に勝利を得ました。」

グレミイはまた霧となり奇跡ザ・ミラクルと呼ばれた滅却師ジェラルド・ヴァルキリーの姿を形作る。

「そしてジェラルド・ヴァルキリーと戦い、正解の力に触れましたね。」

「あなたは野晒のすべてを掌握した、そう思っていますか？」

そう問いかけられ剣八は自身の持つていた浅打を見つめる。

「あなたはまず野晒を根本から理解しなければならぬ。」

すると霧の中から二体の異形の者が現れる。

青い髪の生えた骸骨、黒いローブ様の物を纏った死神。

全身が卵色の体毛に覆われ、丸々とした体型の怪物。

「私たちが野晒です。」

「難しいことは言いません。あなたの好きな《斬り合い》を始めましょう。」

「ハッ！面白れえ！斬り合いは、、大好きだぜ!!」

剣八が斬りかかろうとしたとき、前方の死神が切りかかってくる。

剣八が斬ろうとしたイメージと全く同じ形で。

剣八は間一髪で剣を振るい、相手の骨で出来た刀を防ぐ。

すると同時に怪物が菜切り包丁のような刀で斬りかかってくる。

剣八が斬りかかろうとした動きと全く同じ形で。

剣八と怪物は袈裟斬りの形で刀を交差させ、お互いの剣圧で弾き飛んだ。

「どうなってやがんだ。」

「更木剣八、あなたは野晒の能力を知っていますか？」

「ああ？巨大な力でなんでもぶった斬れんじゃねえのか。」

「なるほど。道理である時あの程度の力しか出せていなかったのですね。」

「本来なら真つ二つに斬れていた所をあなたのその思い違いで本来の力が出せず、砕くということになったのですね。結果的には良かったのでしようが。」

剣八は「砕く」と聞き、グレミイの召喚した隕石を思い起す。

「よくわかんねえが、真似ばっかしてても俺は斬れねえぜ!」

そして剣八はまた斬りかかる。

何度やっても鏢迫り合い。

何度やってもお互いに弾かれる。

ただあちらは二人掛かり。二人で斬りかかられると力負けするときもあった。

「力まで俺と同じたあ、驚いたぜ。」

死神と怪物からの答えはなかった。

「なんだ? 来いよ。」

「行かねえならこっちから行くぜ!!」

そしてまた刀は交差する。

何度も何度も。

「更木剣八、いつまでたつても私たちを理解できませんよ。」

「俺の一振りでお前らも一緒に斬ってんだろ？ つうことは、野晒の力は俺一人で普段の3倍の力が出せるってこつた。」

「気づいていたのですか？」

「気づいてはいたが、どうしても斬り伏せたくてなあ。」

「あなたの言う通りです。始解はね。」

「始解は、か。なら卍解はそうじゃねえってか？」

すると別の声が霧の奥から聞こえてくる。

「それは私が説明しましょう、、、。」

霧の中からさらにもう一体、鮮やかなピンク色の獅子が現れた。

その獅子は光に包まれ、光り輝きながら二足歩行に、そして小さくなっていく。

それは剣八のよく知る一人の少女だった。

「やつほー、剣ちゃん！」

「やちるー！」

剣八と長きに渡り相棒として、家族として共に生きてきた少女、草鹿やちるは困った表情を浮かべている。

「うーん、、、やちるなんだけど、この世界では

〃……………

だよ？」

「(なんだ？聞こえねえ。)」

「剣ちゃん、多分あたしの名前聞こえてないよね？」

やちるは困った表情から笑顔に変わり、剣八の方へスキップをし近づいていく。

「始解はね、対話すればいいの。」

やちるは剣八の方を見ることなく、ケンケンパをしている。

「けど卍解はそうじゃなくて、理解して屈服させないといけない。」

するとやちるは腰に携えていた斬魄刀を引き抜いた。

「さあ、行くよ？ 剣ちゃん。」

「出ておいで、さんぼけんじゆう 三歩剣獣。」

やちるの後ろにはさっきの死神と怪物が佇んでいる。

「とりやー！」

やちるが袈裟斬りで斬りかかってくると剣八も同じように体が動き、全く同じ形で斬撃を受けることとなった。

そしてやちる達の重い斬撃に剣八は膝をついてしまう。

「三人分つてことかよ、、、。」

少しだけタイミングをずらして怪物、やちる、死神の順番で斬りかかって来た。

特に二発目の、やちるが振るう斬撃の重さが尋常ではなかった。

「これがあたし達の力だよ。」

「そりゃあー！」

ガンツガンツガンツ

「くっ、、。」

やはり二発目がどうしても重い。

さらにここで気づいたことは、一発目の怪物と三発目の死神の斬撃が自分の斬撃の威力と全く同じだということだった。

「(くそっ、、 やちると同じように動いちまうならこっちが不利だ。 どうにか、、、)」

剣八が苛立ちで何気なく剣を振ると、やちるも同じように刀を振っていた。

「!!俺たちはどっちも同じように動くのか、、。」

何かを思いついた剣八はやちるに問いかけた。

「やちる、お前を倒せば屈服になるのか？」

「モフモフとホネホネとあたし、三人をいつぺんに倒さないとダメだよ！」

「そうかよ。」

剣八は自らの腹に斬魄刀を刺した。

するとやちるも刀で自分の腹を貫いた。

横にいるモフモフ、ホネホネと呼ばれる前獣と後獣も同じように腹に刀を突き刺している。

「硬さ勝負するか？」

「気づいたんだね、。。」

やちるは苦悶の表情を浮かべるでもなく剣八に語りかけた。

「劍ちゃん、あたしたち三人はみんな『野晒』。そのなかでもあたしは核の部分なんだ。」

「『野晒』はね、真似っこなの。モフモフとホネホネが劍ちゃんに合わせて劍を振るうの。」

「二振りすると二人も真似して振るうから一振りで三人分の威力になる。」

「解放したら霊圧自体もすぐく上がるから、始解してない時と比べたら数十倍の力だよ。でもその代わり負担も数十倍になる。」

「……までが始解の説明！」

「それで卍解だけど、あたしが卍解の力を司ってるの。」

「前はごめんね。あたしが力を解放しすぎて劍ちゃんが耐えきれなかった。」

ジェラルド・バルキリーと戦ったとき、負担に耐えられず右腕が折れてしまったことがあった。

「あの時はまだ劍ちゃんが卍解を理解してなかった上に、あたしが調節を間違えちゃった。」

「あたしの力は、劍ちゃんの潜在能力を引き出して膂力をあげ、さらに同じタイミングで

剣を振るうこと。」

「あと剣ちゃんの動きの前後にタイミングをずらしてモフモフとホネホネが真似っこするから、剣ちゃんの一振りで、モフモフ、あたしとけんちゃん、ホネホネの四振りしたのと同じことになるの。」

「死神、怪物、獅子、そして鬼。」

「あたしたち四人で一つの『獣』だよ。」

「わかった、、、 ありがとよ、やちる。いや、、、」

「――斬魄刀と共に戦う？ 戯れ言だ――」

「――教えちゃくれねえか、お前の名を――」

「――初めまして更木剣八、私の名は――」

——嬉しいなあ、野晒——
——その力の名は——

—————

「見せてやる。俺たちの力を。」

「正解。」

「さんぼけんじゆうじゆうのざらし三步剣獣四重野晒。」

T o b e c o n t i n u e d

第3話 霊王の右手と右脚

「卍解。」

さんぼけんじゅうしじゅうのざらし

「三步剣獣四重野晒。」

解号を言い終えると剣八の肌は赤黒くなり、額には二本の角が生え始めた。

「ウオアアアアアアアアア！」

剣八が獣の様な唸り声を上げると、次の瞬間にはゴーレム達は真つ二つに斬られていた。

目にも留まらぬ速さで剣八が斬撃を浴びせていたのだ。

脊髄の神経は瓦礫を求め伸びていくがそれもまた斬られていく。

「コノママデハ、ゝ。」

脊髄はメダリオンの存在を思い出し、剣八の卍解を奪おうと考えた。

そしてコートの中に手を入れメダリオンを掴んだときだった。

「アレ？」

脊髄の視界はどんどん上へと向いていく。

何が起こったか理解できなかった。

脊髄は手で掴んだメダリオンごと体を真っ二つに斬られていたのだ。

「ナン、、、ダト、、、？」

しかしすぐさま上半身の切れ目から神経が下半身へと伸び再生していく。

命の危機を感じた脊髄はすべての神経を集め、巨大な山の様な体を作り上げた。

「コレナラオマエ潰セル！」

脊髄は剣八に向け隕石の様な拳を振り下ろす。

「グルアアアアアア!!」

剣八が斧を振るうと、まず前獣であるモフモフの斬撃が脊髄の体を縦に割り、その中に光り輝く核の様な珠が露わになった。

そして二発目、剣八とやちるの斬撃が核を砕く。

さらに三発目、後獣であるホネホネの斬撃が再生しようとする核と肉体を完全に断ち

斬った。

「ソナナ、…、余は靈王であるぞ…、コンナ事ガ…、」
縦に真つ二つになった巨大な体は左右に倒れ、轟音と共に砂煙を上げた。
そして核の珠は灰のように静かに散っていった。

——お疲れ様、劍ちゃん——

「ああ、ありがとよ。」

劍八は一護に敗れた時と同じように仰向けで、刀を握ったままの右手で顔を隠した。
あの頃とは違うのは、斬魄刀と共に闘って勝った、ということだった。

く 靈王の右脚迎撃地く

「また動き出したで！勇音！」

「はい！」

勇音は卍解、凍雲射手蜘蛛とううんいづくもの能力で、氷の槍を靈王の右脚へと何本も突き刺す。

そして動きが止まったところで平子が斬魄刀の能力を使った。

「逆撫！」

平子が何度も前後左右上下の感覚を変え、相手を混乱させることで足止めをしていた。

「そろそろきつついで、。早よせえや総隊長、。、。！」

「また動き出した！勇音！奴が方向に慣れる前に！」

しかし後ろに立つ勇音から氷の槍が発せられない。

「勇音？」

平子は不思議に思い後ろを振り返った。

「すみません、。、。靈圧が、。、。」

勇音は疲弊した様子で両膝をついている。

「（そらそうや！こんだけの氷生成すりや靈圧もないなるわ！）」

右脚はその隙を見逃さなかった。

「あ、あれは!？」

右脚が手にしたメダリオンが光を放ち、勇音から卍解の靈圧が抜けていく。

「なっ、、、!」

「これはやばいな、、、。早せえ、、、。総隊長、、、!」

「ウアアアアア!」

右脚が再度メダリオンをかざすと、背後にうつすらと蜘蛛の足の様なものが浮かび上がった。

そして氷の槍が平子と勇音に襲いかかる。

「クソがつ、、、縛道の三十九、えんこうせん円閘扇!」

平子は鬼道で盾を出現させたが、防ぎきれぬ大きさはなかった。

「廻かいてんぶしょうこま転不精独楽。」

右脚の放った氷の槍は、巨大な竜巻によつて砕かれた。さらに竜巻は右脚に直撃し、砂煙を上げる。

「いやあ、おまたせ！第二陣の到着だよ！」

二人の背後には京楽が立っていた。

「おっそいわ!!どんだけ時間稼がせんねん！勇音の卍解奪われてもうたやんけ！」

「ごめんよ、解放に時間がかかってさ、。それより霊圧を感じ取ったかい？」

「ああ、更木やろ？あいつ訳分からんわ。バケモンすぎるやろ。」

「本当に更木隊長はすごいよ。一人で霊王の一部を倒したんだからね。文字通り化け物だ。」

「それはそうと、遅れてきてなんか策があるんやろなあ？何も無しは流石にきついぞ。」

「もちろん。」

そう言うと京楽は少し左にずれ、後ろから出てくる人影を左手で指し示した。

「じゃーんー!」

白髪 of 長髪に柔らかな雰囲気。

それは失ったはずの暖かさだった。

「浮竹隊長!」

疲弊していた勇音も大声を上げる。

「浮竹さん!?なんでや!?!」

平子も相手そっちのけで驚いていた。

「浮竹が神掛をした後、少し霊圧が残ったまま埋葬したんだ。」

霊王護神大戦の最中、滅却師の首領ユーハバツハが世界の楔である霊王を斬ったことで世界が崩壊へと傾いた。

浮竹はその崩壊を止めるため、自身に宿る霊王の右腕で《ミミハギ様》と呼ばれる流魂街の土着神の力を全身へと広げる儀式、《神掛^{かみかけ}》を行った。

「涅槃隊長曰く、霊圧が残っているならそのデータを元に再現できるってね。だから霊骸を使つて再現したんだ。」

「でも何でわざわざ浮竹さんを、、、いや、戦力になるんは間違いないけど、、、。」

京楽は左の人差し指を上に向け説明を始める。

「この霊王の右脚は一度零番隊の和尚達を叫び声で麻痺させただろう？喜助くんがそこに注目してね。」

「喜助が？」

「ああ、なんでも霊王の一部は同じ霊圧の力に弱いらしい。だから浮竹を連れてきたんだ。」

「動けるのは1日だけだが。」

浮竹は悲しそうな顔をするでもなく、淡々と呟いた。

そうこうしているうちに右脚が態勢を立て直す。

「さあ、敵やっこさんが動きだすよ！浮竹！」

「ああ！」

浮竹は斬魄刀を抜き解号を口にする。

「波なみ 悉く我が盾となれ 雷いかずち 悉く我が刃となれ。」

「双魚そうぎょの理。」

二刀一対の斬魄刀でそれぞれを赤い紐が繋ぎ、さらに紐には五つの札が吊り下げられていた。

解放と同時に右脚から高密度の霊子の塊が放出されるが、浮竹は右手に持つ斬魄刀でその攻撃を吸収する。

吸収された攻撃は赤い紐を通り左の斬魄刀へと移動しているのが分かる。

紐に付いている札の箇所を通るたびに、その札はまばゆい光を放っていた。

そして左の斬魄刀の切っ先から受けた攻撃を撃ち返す。

すると右脚の左肩に直撃し肉体を消しとばした。

「グアア、、、。」

「よっしゃ！効いとる！」

「けど致命傷ではないみたいだねえ、、、。もつといけるかい？浮竹。」

「これ以上は無理だ、容量を超える。」

「うーん、ならダメージはそんなに与えられないか、、、。」

「靈子が高密度すぎる。」

双魚の理は一度に吸い込める量に限度があつた。

つまり最大限跳ね返して致命傷にならないと言うことは相手を斃せないということになる。

困った様子で頭を掻きむしりながら平子が続けた。

「超速再生もやつかいやし、何より奪われたんが勇音の正解なのが痛すぎるわ！」

京楽は平子の言葉に同意するように頷き呟いた。

「うーん、万事休すだね。」

京楽は笠を少しあげ浮竹を一瞥した。

「浮竹、万事の次の、」

「一手と行くか。」

浮竹は一步前に出て京楽の横に立ち靈圧を上げていく。

「卍解、こんとんむけい渾沌無契・そうぎよ双魚のふじょうり不条理」

二振の斬魄刀は重なり一つの斬魄刀の様になる。

しかし二刀を繋ぐ紐と、そこに引つかかっている五枚の札は付いたままだった。

浮竹は両手でその斬魄刀を支えるように持っている。

「卍解したら二振りになるんかいな、！」

「いや、二刀二対は変わらない。ただ重なっているだけだ。」

右脚は不意をつくように勇音の卍解を使い氷の槍を繰り出す。

浮竹はその氷の槍を斬魄刀で吸い込むと始解と同じように右脚に撃ち返した。

はね返した氷の槍は右脚に近寄るに連れ透明になっていき、右脚にあたる頃には消えていた。

何も起きなかったため再度右脚は氷の槍を放つ。

「ウギヤアアア！」

しかしその速度、大きさはさつきとは全く違っていた。

「なんやあれ？ちつき、おつそ!!」

威力も速度もなく氷柱のように小さな槍は途中で地面に落ちてしまった。

「ウ、ウ、ウギヤアアアア!!」

勇音の卍解が使えないと判断した右脚は叫び声を上げ浮竹達を襲った。

その時またもや浮竹の斬魄刀が光を放つ。

そして紐についている札が順々に青白く光る。

「ウギヤア、、、ウ、、、ウ、、、」

右脚の叫び声はどんどん小さくなり、声が出なくなっていた。

「悪いな。俺の卍解は相手の攻撃の霊圧濃度、速度、威力、大きさ、消費霊力を自由に変えることができる。」

「そしてさらにその条件のまま相手に返すこともできる。」

「今さっきのは消費霊力以外すべてを最小にして返した。」

すると浮竹は平子の方を振りむく。

「平子君！上級破道を撃てるか!？」

「お、おう！けど八十九が精一杯や！」

「詠唱はいい！撃つてくれ！」

平子は慣れない上級破道を詠唱破棄し発動させた。

「破道の八十九、銀川ぎんせんいちりゆうさ一粒砂！」

浮竹は同じように吸い込み変化させ鉄の嵐を平子に撃ち返した。

「よっしゃいくで！破道の八十九、銀川ぎんせんいちりゆうさ一粒砂！」

平子はその威力に驚いた。

速く、強く、そして霊力消費がほとんどなかったからだ。

「まだまだいけるで!!」

高威力となった銀川一粒砂を連発する。

「ウギヤアアアアア！」

流石の右脚もこれには悲鳴をあげた。

「あれは!!」

「あの球体に肉体が集まっている?」

鉄の砂が右脚の体を扶^{えぐ}り、一瞬だけ胸の辺りに球体があることが確認できた。

「核か、、、。つまりあれを壊さな終わらへんってか。」

その核を包むようにすぐさま右脚の肉体は再生する。

「再生されるんじやあ、困ったねえ。」

京楽の暗く冷たい霊圧を感じ取った浮竹は声をかけた。

「京楽、、、」

「分かってるよ。みんながいるからここで卍解するな、だろ?」

すると京楽は突然低い声色から高い声色へと変える。

「そいえばルキアちゃん、十三番隊隊長になったんだ!」

「朽木が、、、?」

「はあ?何言うтонねん、いきなり。」

こんな状況でいきなりなぜその話なのか平子は理解できなかった。

「彼女や阿散井クン、それに一護クンを見てるとき、僕らがまだ駆け出しだった頃とか、隊長になった頃のことを思い出すんだ。」

「そうだな。あの頃は一生懸命だった。」

霊術院時代から共に走り続け、切磋琢磨した。

「ああ。けどいつからか自分の能力に上限を設けていた。これ以上は伸びないってね。」
確かに浮竹も隊長になって百年も経った頃から、もつと強くなりたいたい、もつと成長したい、という気持ちは無くなっていた。

「浮竹、歌舞伎や人形浄瑠璃を現世でよく見たらどう？」

「ああ。」

「ほんまになんの話やねん。」

平子はイラつきを通り越し呆れに変わっている。

「僕らが見た心中ものって一本じゃなかったよね？」

浮竹はその言葉を聞きすぐ様理解した。

「皆を巻き込まないなら止めはしない。」

「流石は相棒。じゃあそうさせてもらうよ。」

再度京楽から冷たい霊圧が流れ出す。

「正解、、、。」

「花天狂骨愛剪心中。」
かてんきょうこつあいぎりしんじゅう

「さあ、第二幕目と行こうかね。」

「一段目、潔死覚悟遠途。」
けつしかくごのえんと

京楽は白い靄もやに包まれ猛スピードで右脚に体当たりし、そのまま百メートル程上空へ飛んでいった。

「不釣り合いな愛する二人は腹を括り死地を索める。」
もと

「二段目、暇いとまの現うつ」

「心身共に衰弱し歩く事すらままならない。二人は肩寄せ互いたいを劬いたわる。」

右脚は急激に靈圧と気力が失われたように感じその場から動けなくなる。

「正気になるも何処いずこやら。戻るも逝くも地獄の果て。気付けば辺りは追っ手の波。」

「三段目、困かこ深手逃みてに不が。」

右脚が周りを見ると、周囲には槍が内向きで直径1メートル程の円状に並んでいる。動くことができない右脚の隙をつくため、京楽が浮竹を呼ぶ。

「浮竹！今だ!!」

「なにが奴を止めているかはわからんが、ゝ！」

浮竹は瞬歩で右脚の目の前まで飛んだ。

「腸剥わたはぎの御手みて。」

浮竹の右手は白く大きな手と変化した。

まるで阿散井恋次の卍解、双王蛇尾丸の腕のようだった。

そして浮竹は大きく右手を振りかぶると相手の胸へと突き刺し、核を掴み取り取った。

「これが核だ！京楽！」

その間も京楽は心中劇を続けている。

「後悔するももはやこれまで。女が覚悟を決めたのに、男が足踏みするとは滑稽。」

「女は懐刀を取り出し、愛と共に男に押し寄る。」

京楽は右手で懐から何かを取り出す素振りを見ると、その手には白く奇妙な霊圧を放つ靄もやのようなものが握もやられていた。

「臍せいか下に抱えた諦観ていかんと、腹に巢食う女々しきを、せめてこの場で斬り落とそう。」

浮竹は掴んだ核を京楽へと思い切り投げつける。

「此これにて大詰おおづめめの段、割腹死かつぶくしほつじ浄化じょうか禊みそぎ。」

京楽が核に向かって霽もやを突き刺すと、だんだんと膨れ上がっていく。

「一体何が起こってるんや、？？」

霊圧ではとてつもない何かが起こっていることは分かるが、視覚では何が起こっているかが分からず平子は困惑していた。

膨れ上がった右脚の核は数十倍の大きさとなり、まもなくして破裂した。

「ウ、ウ、ガアアアアアアアア!!」

核は叫び声をあげながら、バラバラとなり舞い落ち、さらに塵となり消えていく。

そして抜け殻となった右脚の体はガクツとその場に倒れた。

「やったみたいやな、。ほんま更木はバケモンや、。あいつも霊王の一部とちやうんか?」

平子が決着がついたのを見届けホツとしていたところだった。

ドゴーン

「なんや!?!」

突如辺りのビルが倒壊し始める。

一つ一つ順々に。まるでなにかが激突し貫通したかのような倒壊の仕方だった。

「何かが派手に飛んできたみたいだね。味方じゃなきやいいけど、、、。」

京楽と浮竹が平子達の元へ戻る。

そして目を凝らすと土煙の中に片膝をつく頭の長細い人影があった。

「儂は、、、まだ死なぬ、、、死なぬぞ!!朽木ルキア!!」

「なんやあいつは?」

T o b e c o n t i n u e d

第4話 仇敵（きゆうてき）憎し海淵（かいえん）の如し

「ア—ロ—ロ—ロ迎撃地」

「朽木。久しぶりだな。」

「その顔で、その声で喋るな、と言ったはずだ。」

ルキアの目は冷たく殺気を漂わせている。

「つれねえなあ。せっかく隊長になったから俺も祝ってやろうと思ったのに。」

「お前に祝われる筋合いはない。」

ルキアは心の中の感情を吐露した。

「私はお前が憎い。海燕殿を愚弄するお前が、、、」

「私はお前を斬る。」

「斬れるならな。さあ志波海燕に殺されるか、僕二殺されルカドツチがいい？」

海燕の容貌から縦長の試験管を逆さにしたような顔へと変化する。
「貴様は海燕殿にはなれない。どんなに顔を似せようとも。」

「それはどうかかな？」

アールニーロは海燕の斬魄刀を解放させた。

「水天逆巻け、ねじほな振花！」

「舞え、そでのしらゆき袖白雪。」

ラス・ノーチエス以前虚夜宮で闘った時は相討ちだった。

ルキアにとって悔しすぎる結末。

「今度は負けられない。海燕殿が着るはずだったこの羽織を着ておるのだ。」

「おらあ！行くぜ朽木!!」

片手首を軸とした回転を中心とする槍術。

独特な舞を思わせる。

やはり海燕そのものなのが悔しくてたまらない。

アールニーロは大きく水流を巻き上げるとルキアに向けて飛ばす。

ルキアは縦に一閃すると、水流はルキアを避け左右に分かれてルキアの後ろへと飛んでいった。

「ほお、斬った一瞬で凍らせたのか。やるじゃねえか、朽木！」

「前と同じ私だと思うな。能力も覚悟も桁違いだ。」

「特にお前に対してはな!!」

ルキアが斬魄刀を振るうと、一瞬で大規模な氷がアールロニー口を包み込んだ。

まるで波に吞まれたかのような形で凍っている。

「その程度では効かんぞ。」

海燕のものとは違う野太く低い声が響き渡る。

氷からは湯気が上がり辺りは水蒸気に覆われた。

「なんだ？熱か、？？」

「ソウだよ。地獄デ生きてイタんだ。コレくらいノ氷、屁でもナイよ。」

合成音声のような声がそう言い切ると、水蒸気をかき分けるようにアールロニー口が現れる。

アールロニー口は海燕ではなく、元のカプセル状の顔に戻っている。

「つと、まあそういうことだ。」

そしてまた海燕の顔へと変化させた。

「おらおらー！」

アーロニーロが振花を大きく振り回すと、大きな渦が発生しルキアを巻き込んだ。

「くっ、また凍らせ、」

水流で前が見えなくなった一瞬の隙だった。

「!!?」

アーロニーロの持つ振花の切っ先がルキアの左頬を掠める。

「やるじゃねえか。今ので顔面抉り取るつもりだったのによお。」

「黙れ、、！」

アーロニーロを睨みつけるルキアの頬からは鮮血が流れている。

ルキアは深く息を吐くと体温を下げ始めた。

頬の血も凍り傷口は白く固まっている。

「絶対零度。」

今度はアールローの周囲だけを凍らせ冷気を集中させた。

アールローは瞬間凍結され、白い人形のようになっている。

しかし、それもほんの数秒だけのこと。

すぐさま水蒸気を上げながら氷を溶かしていく。

「残念だね。何度ヤツテモ同じだ。」

アールローはまた元の姿に戻っている。

「なるほど。冷気には強いようだな、、、」

「なら、これに耐えられるか?」

ルキアは絶対零度を維持したまま奥の手を使う。

「正解、はつかのとがめ白霞罰。」

一瞬にして辺りは凍りつき、アールローを骨の髄から凍らせる。
はずだった。

「だから無駄だと言っただろうが！」

アールロニー口は全身に炎を纏い強力な冷気を防いでいる。

「まずい、、！」

ルキアの卍解は自分自身も氷となっているようなもので、強力な冷気と引き換えに脆い体となっているのだった。

「くっ、、」

昔は全く動けなかったが、修行を経て普通に走る程度なら出来るようになっていた。

しかし瞬歩はできないため簡単に響転ソニードで追いつかれてしまう。

「木っ端微塵にシテやるヨ!!」

アールロニー口は元の姿から海燕へと変貌し、霊子を集めた振花を大きく振りかぶった。

「志波式射花戦段・旋遍万花。」

アールロニー口は突然の火薬玉に不意を突かれ、空中で体勢を崩してしまふ。

そしてそこには大猪に乗る大男の影があつた。

「岩鷲^{がんじゆ}！」

「おい、朽木よお。お前周りに味方がいねえときに正解使うなって言つたらうが！」

「すまぬ、つい、い、い。」

岩鷲に諫められたルキアは肩をすくめる。

「でもおめえの気持ちはよくわかるぜ。」

岩鷲は目の前にいる敵を見ていた。

「よお！岩鷲じゃねえか！」

岩鷲は思い切り歯を噛み締めアーロニー口を睨みつけた。

「あんな感じで兄貴を侮辱されたんじゃあよ。」

しかしアローロニーロは実の弟に会うかのように岩鷲に話しかけ続ける。「久しぶりだな、なんでお前がここに、」

それを遮るように岩鷲は大声を発した。

「てめえには初めて会うから自己紹介しといてやる。」

岩鷲は愛猪あいのししのポニーちゃん5号の背に足をかけ親指で自身を指差す。

「俺は十三番隊副隊長、志波岩鷲！自称・西流魂街の真紅の弾丸にして、自称・西流魂街のアニキと呼びたい人126年連続ナンバーワン！そして自称・西流魂街一の死神嫌いだった男よお！」

「そんでもって自他共に認める誇り高き志波海燕の弟だ。」

「てめえ如きが兄貴を名乗るんじゃねえ。振りもすんじゃねえ。」

岩鷲は斬魄刀を手にし解号を唱えた。

「石に波立て、石波せっぱ！」

斬魄刀は長方形の刀身をしている。

「岩になあれ！石波！」

岩鷲が地面に左手をつけると辺りのコンクリートがめくれ上がり岩となってアールロに襲いかかった。

アールロアールロもすぐ様水流を飛ばし対抗する。

岩と水流がぶつかり、細かな瓦礫と水が雨のように降り注いだ。

「やるじゃねえか。流石はおれの弟だ。」

「俺は志波海燕の弟ではあるけどよお、てめえの弟になった覚えはねえぜ。」

「これはどうだ!?防げるか!？」

アールロアールロはいくつもの水弾を周囲に浮かべ、槍で岩鷲の方を指し示した。すると水弾は物凄いスピードでルキアや岩鷲の方へと飛んでいく。

「朽木！下がれ!!」

岩鷲はルキアを背後に下がらせ再度地面に手をついた。

「壁になあれ！石波！」

ビルの壁が波打ち始め岩鷲達の前と押し寄せる。

「そうだったな。この大地はお前の力だったな。」

アーロニーロの覚えているかのような口ぶりにルキアは怒りを抑えられない。

「海燕殿の真似事をするな!!!」

ルキアは悔しさを刀に乗せ、冷気を振るった。

しかしアーロニーロは再度炎を纏い冷気を退けようとする。

「何度ヤツテも無駄!!」

「砂になあれ！石波！」

岩鷲が斬魄刀を地面に突き刺すとアーロニーロの周りのビルが砂となり降りかかった。

「朽木！」

「ああ！卍解、白霞討！」

ルキアは再度卍解をし、覆い被さった砂ごとアールニー口を凍らせた。

「岩になあれ、石波！」

岩鷲はさらに岩を何重にも被せる。

「溶かせるもんなら溶かしてみやがれ！まあそんなことすりやお前が蒸し焼きになるけどな！」

岩鷲はこれを狙っていた。

いかに炎を体から出すことができ、炎に耐性は持つてようとも、熱気による体の芯への攻撃は効くと踏んでいたからだ。

「喰いつくせ、グラージョ喰虚！」

解号とともに弾け飛ぶ岩。轟音を立てながら地面へと落ちていく。

砂煙から巨大な蛸のような姿をしたアールニー口が現れる。

その巨体の上には海燕の上半身のみが飛び出ていた。

「ここまで解放させるたあ流石だ朽木、岩鷲。あともう一踏ん張りだ。」
「海燕殿、、、？」

アーロニーロの巨体から炎が揺ら揺らと発せられ始めた。

「おらっ！」

アーロニーロは振花から巨大な火球を放つ。

「壁になあれ！石波！」

岩鷲が岩の壁を作るもいとも容易く火球に撃ち壊されてしまう。

勢いは弱まったものの火球はそのままルキア達を襲った。

「ぐああああ！」

岩鷲は20メートル程吹き飛ばされ瓦礫の中に埋もれてしまった。

ルキアは火球から見て右方向に吹き飛ばされ、岩鷲が捻じ曲げ垂直になっていた地面に打ち付けられる。

地面に伏していたルキアをアールロニーロが触手で持ち上げた。

「虚夜宮の時と同じだな、朽木。」

「同じではない、、、。」

「肆しの舞、白繭しらまゆ。」

袖白雪の切っ先から冷気が糸のように漂いアールロニーロを包み込んだ。

「終つひの舞、浄白じょうはく。」

ルキアが斬魄刀を上空へ向けると冷気の繭も上空へと浮かび上がる。

ルキアは刀で触手を斬り脱出した。

そしてアールロニーロが熱で出てくる前に上空から地面へと落下させる。

冷気の繭はすでに氷となっており、地面に落ちると割れアールロニーロの巨体もバラバラになっていた。

しかしバラバラになった氷の破片は水蒸気を上げながら集まっていく。

「この、、超速再生が無ければ、、やられていた、、ところだ。」

かなりの重傷を負っているアローニーロはカプセルの顔へと戻り、低い声でそう告げた。

ルキアがアローニーロにとどめを刺そうと斬りかかるが触手で袖白雪を止められてしまう。

そして斬魄刀ごと掴み上げられる。

「くそつ、、」

アローニーロの体から炎が立ち、袖白雪を伝って地獄の炎がルキアの腕に燃え移った。

「氷使いノお前デハ炎に勝てナイ！」

「確かに、、私は氷使いだ、、」

炎に包まれているルキアの右腕が赤い光を放ち始める。

「だが、、炎はお前だけの専売特許ではない!!」

「破道の九十六、一刀火葬!!」

巨大な刀身型の炎がアールニーロを呑み込んだ。

轟音と灼熱の炎が約10秒間に渡りアールニーロを焼燬する。

「こんな、、こんなコトが、、」

アールニーロは焼け焦げ、レスレクシオン 刃前の人型の姿で地に伏していた。

「死神如きに、、たかが小娘如きに、、!」

低い声の方のアールニーロがそう言葉を発しながら辛うじて立ち上がる。

「モウ終わりだよ。」

突然もうひとりの方のアールニーロがそう告げた。

「何を言っている?」

低い声のアールニーロは驚いた様子でもう一方に聞き返している。

「マズイよ、だから何度も言っ、アイツが、」

明らかに様子がおかしいことはルキアが見ても一目瞭然だった。

「どうしたんだ!? 一体なに、がつ、」

低い声のアーロニーロが声を発した途端、胸のあたりを押さえて悶え苦しみ始めた。

「なにが起こっているというのだ、」

ルキアも突然の異常に目を見開いている。

しばらく苦しみの声を上げ、まもなくして静まり返った。

「ふう。やっと隙を見せたなアーロニーロ。」

苦しみから解放された様子のアーロニーロは海燕へと再度姿を変える。

明らかにさつきと雰囲気の違う敵にルキアは問うた。

「何を言っている、お前がアーロニーロではないのか？」

ただ俯いたまま返答はない。ルキアは語気鋭く問い質した。

「おい！お前は何者だ!？」

俯いていたアーロニーロはルキアの方に顔を向ける。

「なんじゃ、娘？この儂、メタスタシアのことを言うておるのか？」

「メタスタシア、、、？」

そして海燕の姿をしたアーロニーロは不気味に口角を上げる。

「そんなに儂を呼んで、そんなに儂が愛しいか？小娘!？」

「――何故そう何度も儂の名を呼ぶ？――」

「――そんなに儂が心配か小娘？――」

「――そんなに儂が――」

その言葉を聞きルキアは相手が誰なのかを悟った。

「貴様っ、、!!」

「誰かと思えば、、儂を殺した小娘ではないか。」

「いや、自分の上司を殺した哀れな死神ではないか!」

メタスタシアは嘲るように言い直した。

「貴様がいなければ、、! 海燕殿は、、海燕殿は!」

悔しき、憎しみ、怒り、、

ルキアの心は負の感情によって支配されそうになっていた。

「今頃隊長になって皆を守っておられたのに!!」

そんなルキアの叫びを無視するかのようにメタスタシアは虚閃セを放った。

メタスタシアの攻撃は割って入った岩鷲の岩壁によって防がれる。

「これが虚閃セというものか。一度撃つてみたかったのよ。」

攻撃が防がれたことに驚くこともなくルキアに呼びかけるように叫んだ。

「朽木ルキア！ 儂を殺した女よ！ 儂は絶対にお前を喰らうてやる！」

「ふざけるな！」

ルキアが霊圧を上げたためメタスタシアも動こうとするが、アールニー口の体はポロポロで思うように動くことができなかつた。

「ちつ、体は動かんか。」

その隙を逃さずルキアは残つた左腕で鬼道を浴びせる。

「破道の七十三、そうれんそうかつい双蓮蒼火墜！！」

ルキアの放つた双蓮蒼火墜はメタスタシアに直撃し、文字通り弾き飛ばした。

そしてメタスタシアはビルを何棟も貫通していく。

「儂は、、まだ死なぬ、、死なぬぞ！！朽木ルキア！！」

「なんやあいつは？」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:

第5話 その花振（はなねじ）れど咲きて勇（いさ）まし

「儂は、まだ死なぬ、死なぬぞ!! 朽木ルキア!!」

「なんやあいつは？」

砂煙の中に立つ異様なシルエットに平子は目を凝らす。

そこヘルキアを負ぶった岩鷲が瞬歩で駆けつける。

ルキアは平子や勇音、京楽がいるということは、ここは霊王の右脚迎撃地だと理解した。

しかし遠目から京楽の背後にもう一人人影があることに気づく。

「浮竹隊長!!?」

「くっ、せつかく我が身になったのにこのままではやられてしまうわい、。」

メタスタシアはあたりを見回し現状を確認していると、アールローロの中で聞いた人物を発見する。

「奴は霊王の右脚か！」

「気絶しておるのか？ 丁度良い！」

「アールローロ、今まで世話になった礼じゃ。儂とともに霊王の一部にならせてやろう。」

するとメタスタシアの手から髪の毛の束の様なものゝ霊王の右脚へと流れ込んでいく。

「まさか霊王の一部にまでなれるとは思わなんだ。」

「おいおい、なんや右脚また動き出したで！」

ルキア達と京楽達は合流し勇音が回道で回復させていた。

「やつは、元十刃^{エスパーダ}のアールローロ・アルエリです。しかし今はメタスタシアという虚が乗っ取っています。」

「メタスタシアだと!？」

その名に浮竹が反応する。

「なんやそいつ？」

「海燕を殺した虚だ。」

ルキアは《海燕を殺した》という言葉聞き、目を伏せた。

「お前らには感謝する。こんなに良い体を消さずに残しておいてくれて。」

「まずいねえ、」

京楽は復活した右脚を見て冷や汗を流している。

「そうだな。まさかお前どころかアールニー口の野郎までそつちに連れてつてくれるとはな。」

突然響く懐かしい声。

「やはり出てきたか。」

「くっそ、アローニー口の体ボロボロ過ぎてここに来るにも一苦労したぜ、。」

突然現れた懐かしい顔。

「何見てんだ、見せもんじゃねえぞ？朽木。」

「それともなんだ？俺がカツコよ過ぎて目が離せないってか？」

突然蘇った懐かしい暖かさ。

「海燕殿、？」「海燕!!」

ルキアと浮竹は同時にその名を呼んだ。

海燕は二人の方を向きニカツと笑うとその横に立つ勇音を呼ぶ。

「お前虎徹だな!?!ちよつとでいい、俺を回復させてくれ!」

「は、はい!」

かつてまだ席官に入りたてだった勇音は、その当時の十三番隊副隊長を思い出した。

海燕の周りを緑色の半透明の球体が包む。

「さあ、来い！来い来い来い！喰らうてやるわ!!」

そう挑発した矢先、メタスタシアの左腕は斬り落とされた。

さらに背後からメタスタシアの頭を驚掴みにし、斬魄刀を解放させた。

「水天逆巻け、ねじばな花振！」

「初そめの舞、あおつき蒼月！」

振花の手に水流が出現し、その水流によって海燕の繰り出した突きは加速する。

メタスタシアは咄嗟に態勢を変え致命傷を避けた。

海燕は間合いを取り、メタスタシアの真正面に立つ。

ルキアの技である《初の舞》や《次の舞》は海燕との修行を経て模倣し、開発習得したものだつた。

“舞”とは海燕の独特な槍術から由来している。

「次つぎの舞、そうれん蒼漣！」

海燕の目の前に水のような高密度の霊圧が漂い、それを槍を突くとまるで漣さいなみのように

水紋を立て高速でメタスタシアに迫る。

「くっ、っ、」

避けられず直撃すると、鎌で斬られたようにメタスタシアの体に漣による傷が残った。

メタスタシアは防戦一方。全く反撃する暇がなかった。

「なるほど、やはり強いな。」

海燕は槍を右肩に乗せるとメタスタシアにこう告げた。

「お前がどんだけ強かろうが、反撃させなきゃいいんだよ。」

「それが敵を殺すための戦い方だ。」

勇音はその言葉を聞き自分の習得した戦い方は海燕によるものだを知る。

勇音は隊長になるため、剣八との戦いを経て卍解を習得するに至った。

しかし本当の敵と戦う戦闘に慣れていなかった勇音は思い悩んでいた時期があった。

そしてそれに見兼ねた勇音の妹、清音が十三番隊副隊長執務室に昔から置いてあった

本を手渡した。

それを書いた者こそ海燕だったのだ。

「段々理解できてきた。この靈王の一部の力を。」

メタスタシアは斬り落とされた腕から神経を伸ばし、落ちている腕を引き寄せ再生させた。

さらに蒼月で穿たれた左の脇腹の孔も塞がっていつている。

「さらにこれならどうじゃ?」

メタスタシアは自身の姿を変化させた。

「さすがは靈王の一部。なんでもできるわい。」

そのメタスタシアの姿に海燕は言葉を失う。

「あれは、、都殿。」

ルキアがそう呟いた都とは、かつて海燕が副隊長をしていた時の第三席で海燕の妻

だった女性だ。

「これでもお前は儂を斬れるか？」

「貴様!!」

ルキアは左手で刀を抜きメタスタシアに向かっていく。

しかし海燕の前まで行つたところで、海燕に手で制された。

「待て朽木。俺一人でやらせてくれ。」

「隊長もいっすよね？」

海燕は振り向くことなく後方にいる浮竹に確認をとつた。

「隊長は朽木だぞ。」

浮竹は目を閉じ小さく笑つた。

「そうっすね。」

「つうことだ、朽木隊長。」

海燕は前へ出ると高霊圧の水流を発生させ自身の周りに纏つた。

「都とは長く戦いたくねえから早めに終わらせるぞ？」

「、つとにてめえに会ってから人生振れ放題だ。」

卍解

すいかりゆうねじばな
水渦龍振花

「海燕殿、、！」

ルキアは誇りを守る海燕の戦いをただ見守るしかなかった。

海燕は悲しそうな顔で振花に渦を纏わせている。

「まさかお前に卍解を使うことになるとは思わなかったぜ、都。」

十三番隊隊舎

「五席がいらつしやいますので。」

「あいつがあなの、」「もう七席らしいぜ」「貴族だろ？」

鳴り物入りで入隊した海燕は貴族ということもあり色々な噂が立てられ、中には心無いものもあつた。

「うるせえな。貴族だろうが関係ねえだろ。」

そこにドストドストと足音が響く。

「見せものじゃないのよ。持ち場に戻りなさい！」

ガラッ

扉が勢いよく開くと一人の若く、美しい女性が立っていた。

「五席の四ツ葉都よ！」

「よろしくね！」

それはとても凡庸な出会い。

けどそれは俺の求めていたものだった。

「お、おう、、、」

「おう？ 何なのその挨拶は!？」

「五席が名乗ってるのよ!?! あなたも名乗って『よろしくお願いします!』でしようが!」
「し、志波海燕、、、です。よろしく願います、、、」

「オツケー、海燕ね!」

「今うちの隊は副隊長から四席までが現世で死神代行追ってるから、私が副隊長兼務してるの。」

「浮竹隊長は体弱くて殆ど私が仕切ってるから時々四ツ葉隊長と呼んでもいいわよ!」

都は俺を俺として、志波家の海燕ではなく、志波海燕として扱ってくれた。

く西流魂街第三地区・鯉伏山く

「海燕！」

べしつ

どっさあ

「痛あ！何すんだよ都！いきなり！」

突然後頭部を叩かれた海燕は頭を押さえている。

「敬語使いなさいよ。あなたまだ五席なのよ？」

「お前が歳近いから敬語じゃなくていいよって言ったんだろ！それにもう席次は一つしか変わらねえじゃねえか！」

「あのおきはお酒が入ってたから、」

バツが悪そうな都は木刀を拾い上げる。

「ほら、修行再開するわよ！」

しかし海燕はそのまま頭の所で腕を組み寝転がった。

「なあ都、俺たちって何のために護廷十三隊にいるんだろうな。」

都はきよとんとした顔で答えた。

「そんなの決まってるじゃない！」

「“戦つて” “守るため”よ。」

「何を守んだよ？」

都は真面目な面持ちで答えた。

「、、、心よ。」

「くっせ。」

「うるさいー！」

都は手を上げて怒っている。

「じゃ、じゃあ！心つてどこにあると思う？」

次は都から海燕に問いかけた。

「ここじゃねえの？」

海燕は自分の左胸を親指で示す。

「海燕、手出して拵げて。」

海燕は寝転がったまま右手を前に出し、近寄ってくる都に向け拵げた。すると都はその拵げた手に自らの左手を重ねる。

「何か感じた？」

「んゝゝゝ、手汗がすごいな。」

「コラ!!」

都はまた手を上げて怒っている。

「で、なんなんだよ？」

「ここにあるんじゃない？心。」

海燕と都は見つめ合つたまま少しばかり時が流れた。

「くっせ。」

「コラツ！」

「あ、でもね、心を守るために戦う中で絶対やつてはいけないことがあるの。」

「まだ続くのか？」

「それは一人で死ぬことよ。」

「心は仲間に預けていくの。」

「だから仲間を大事にすることが一番大事。私たちの命は、人を愛し人に愛されて芽吹いて咲くんだから。」

海燕は起き上がると笑いをこらえながら言葉をひねり出した。

「ぶっ、、やっぱくせえ、、お前詩人か！」

「もういい！修行の続きよ！」

「まだやんのか!?折角桜も綺麗に咲いてんだし、ゆつくり花見でもしようぜ。」

「早く追い抜いてもらわないと、約束果たせないわよ！」

「分かったって、そんなにやいやい、、、」

——全滅だそうだ、彼女の部隊は——

都、お前が最後の1人だったそうだな。

部隊の奴らを庇いながら、、

一人一人やられていくのを目にしながら、、

奴らを1人で死なせないために。

魂を預けさせるために。

でもお前は1人で死んだ。

お前の魂はまだ奴に喰われたままか？

—————

「正解を使えるとはやるではないか。」

振花にほとんど変わりはなかった。

ただ一つ、持ち手の周りを振れた鉄の龍が螺旋状に付けられているところを除いては。

「てめえ、その声で喋んじやねえよ。」

「いやはや声まで再現できるとは流石は靈王の一部よ。」

「手加減は無しだ、行くぜ水渦龍振花。」

海燕が水渦龍振花を振るうと、振れた鉄の龍が水色の光を放ち、切っ先から光線のようにうなものが放出された。

メタスタシアが跳躍し海燕の攻撃を避けると、その後ろのビルが横真つ二つに切れた。

「水の刀か！」

「ご名答。これはよく切れる水の鞭みたいなもんでな。」

海燕は何度も何度も水渦龍振花を振るい、切れ味抜群のウォーターカッターでメタスタシアを追い詰めていく。

「貴様も斬るのか!?自分の妻を!!」

「斬る。都をお前如きにおとし貶められたくないからな。」

「あそこの白髪といい、朽木ルキアといい、お前といい、、、」

「正気かアアア!!」

「けど都を、自分の妻を斬りたくないってのも本音だ。」

「いくぜー!」

水渦龍振花の三つの矛先から三本の水の線が放出され、その三本は振れ一本になっていく。

「おらー!」

海燕が水渦龍振花を振るうと太い水の鞭はメタスタシアの左足に巻きつき絡め取った。

再度振るうと鞭は切れ、近くの地面にドリルのように突き刺さりメタスタシアを固定した。

「これで捉えたつもりか!？」

メタスタシアは手で引きちぎろうとするが、触れた瞬間指が吹き飛んだ。

「それ、回転してるぜ。巻きついた後から触れたものに対してだけ有効って便利な技なんだよ。」

「まあ取れない縄みたいなものだ。」

海燕はそのまま残りの手足も拘束していく。

「くそが!!」

さらに海燕は拘束したメタスタシアを水で包み込んだ。

メタスタシアはもがき苦しむが、程なくして窒息し気絶した。

「俺がやってやれるのはここまでだ、、、」

—————

メタスタシアに意識が戻るとそこは夜の森の中だった。

「やっと中に戻ってきたわね。」

そこに立っていたのはかつて十三番隊第三席を務め、聡明で容姿端麗な女傑として名を知られていた、志波都だった。

「貴様！あの夜の！なぜ儂の中で生きている!?それにここは!?」

「あの人が私の魂を連れ戻してくれるのを待ってたからよ。」

「私はお前を倒して、私として海燕に会う！」

能力とは真逆の色である白い柄を手にして斬魄刀を抜き取った。

「儂の精神世界で、自らの力を創り出すとは、、、！」

「雨降り注ぎて光無く、両翼傷付きて動き揺れる。」

くらしめむみよう
「暗雨無明。」

「はあ！」

都は瞬歩でメタスタシアの背後に回り一太刀浴びせた。

「なんじゃ、普通の刀ではないか。」

「今は、、、ね。」

「ふはは！次こそは乳から上も喰ろうてやろう！」

メタスタシアは本来の姿に戻っており、六足歩行で頭から背中にかけて触手が所狭しと生え並んでいた。

触手で都の斬魄刀を防ぎ、さらに別の触手で都の腹を突く。

「がはっ、、、」

都は吹き飛ばされた。

「弱い、弱いとう。また喰われるのも時間の問題、、、」

その時メタスタシアは水滴が落ちてきた感覚を覚えた。

「ん、、、雨？」

吹き飛ばされた都は立ち上がりながらメタスタシアに話しかける。

「雨って憂鬱よね。暗くなるし周り見えづらいし。」

「なんじゃこれは?!?」

メタスタシアは突然目の前が真っ暗になった。

「なっ!?!」

さらに両足が動かなくなっている。

「これが私の斬魄刀の能力。結構強いでしょ?」

「あの時は斬魄刀が消滅しちゃって使えなかったけど。」

「終わりにしましょうか。私は海燕に会いに行かないといけないの。」

拘束され水に包まれているメタスタシアは光を放ち始める。
それをみた海燕は水の拘束を解く。

拘束を解かれたメタスタシアは倒れ地面に伏した。

海燕は急いで駆け寄る。

分かっていた。もうメタスタシアではないと。

「都!!」

「あなた、、、。」

ゆっくりと起き上がる都を海燕が介抱する。

「魂を、、、預かりに来てくれてありがとう、、、」

都は涙を浮かべている。

「すまねえ、遅くなっちゃったな。」

「後悔してるでしょ?」

「後悔？ああ、してるよ。」

「こんなことになるなら一回でもお前と花見しときや良かったな。」

海燕はニカツと笑い、都に満面の笑みを見せた。

都はボロボロの海燕と自分を見て命が長くないことを悟る。

「私もあなたもあと少しみたいね、、、。」

「生まれ変わったら、、、桜の下でまた会いましょう。」

「ああ、そんなときはずっと笑って一緒に居ようぜ。」

都は海燕の手を借り立ち上がる。

海燕と都の周りにはいつのまにか浮竹、ルキア、岩鷲が立っていた。

「誇りは守れたようだな。」

「長かったっすけどね。」

海燕は晴れ晴れとした表情をしている。

「じゃあ、そろそろ行きます。浮竹隊長。」

「ああ。またな。」

浮竹も満足そうな顔で海燕と都を見つめていた。

「ルキア、あんまり気負い過ぎるなよ。」

「はい、、、」

ルキアは涙を流している。

「それで岩鷲。十三番隊を頼んだ。空鶴にもよろしく言つといてくれ。兄貴として何もしてやれなくて悪かった。元気だな。」

岩鷲は頷きながら目に焼き付けるように自身の兄を見ていた。

「じゃあな。」

海燕と都は向かい合い両手を繋いだまま、淡い桃色の光となって空へ舞い散っていった。

まるで春を想わせる桜のように。

T o b e c o n t i n u e d

第6話 S wear by the honor of

the Quincy

「ナナナ・ナジャークープ迎撃地」

「陛下を裏切り死神側につくとはお前誇りはないのか？」

「ナジャークープは雨竜シュテルンリッターに問いかけた。

「確かに僕は星十字騎士団としての誇りはない。」

「雨竜は弓を引き絞っている。

「僕はお前を殺す。滅却師の誇りにかけて。」

「やってみな！」

「ナジャークープがそう言い放つたと同時に雨竜は矢の雨を浴びせる。

「ナジャークープは矢の雨を避けながら滅却十字クインシークロスに手をかけた。」

「死神や破面みたいで解号は嫌いなんだけどなあ。仕方ねえ。」

「刀を下ろせ！無防備！」
センデベンダ

解号を唱えるとナジャークープは光に包まれ霊子の風を放った。

光が晴れるとナジャークープの背後には黒く大きな目玉のようなものが浮かび上がり、黄色い瞳が雨竜を見つめている。

さらに右手から右肩にかけ8連のミサイルランチャーのような銃器が担がれていた。

「お、見える見える。今まで以上にお前の急所が！これならチキンの足を握ぐよりラクシヨー！」

ミサイルランチャーから水色の霊子の矢を放つ。

雨竜は霊子の矢の動線から外れるが、矢はUターンして雨竜に襲いかかった。

「追尾能力があるのか!!」

雨竜は追尾する矢を避けきれず直撃を許してしまった。

雨竜の体の各所に霊圧の針の様なものが光を放ちながら刺さっていく。

「あの時は陛下に力を奪われてたからな。それにノヴァディオに改造してもらったからよ。今はもつと強力だぜ!!」

その刺さった光の矢を何者かが口のようなもので喰らい去った。

「なっ、、、！この攻撃は、、、！」

ナジャークープは予想外の相手側の助っ人に驚いている。

そして後方から女性の声が響く。

「滅却師の矢を食ったのは初めてだが、案外味無いんだな。」

「君は、、、!?!」

雨竜の横を通り前へと出たその人物は、金髪でおかっぱ頭の少女だった。

「よう、元ポストユーハバツハ。」

『THE^食GLUTTON^{ん坊}』のリルトット・ランパード、星十字騎士団の一人だった少女だ。

「浦原に無理言つて容量いけそうなグラサンのおっさんのところにねじ込んでもらつたぜ。」

「キャンデイスはこつち着いた途端どつか行つちまつたがな。」

すでに体からナジャークープの矢が消えた雨竜は撃ち込まれたところを押さえながらリルトットに問いかけた。

「なぜ君が、？」

「元はと言えば俺たちのごこの者だからよ、ケジメつけに来たつてわけだ。」

「それに尸魂界はまだしも、こいつらに虚圏や現世壊されたんじや今の仕事が無くなつちまうからな。」

雨竜と話をしてしているリルトットを見てナジャークープは蔑むような目をしている。

「なるほど、てめえら死神側についたつての本当だったのか。」

「それは違うな。ユーハバツハ側から離れたんだよ。てめえはまだユーハバツハの野郎に着いてくつつもりなのか？」

ナジャークープは極当たり前かのように言い返した。

「陛下あつての滅却師だろ。それに俺だけじゃないぜ？陛下の復活を望んでるのは。」

「なんだと？」

ナジャークープは嫌にニヤつきながらわざとらしくリルトットに問いかけた。

「お前とキャンデイスはなんでジゼル、ミニーニヤと離れた？」

リルトットはそれを気味悪がりながらも答える。

「はあ？あいつらはユーハバツハを復活させるだの訳の分からない話を、、！」

答えている途中にナジャークープのその笑いに気づいた。

「繋がっていたのか、、！」

ナジャークープはさらに続けた。

「やっぱりあいつらしくじつたんだな。」

「しくじつただと？」

「だからあの時言つたろ？やつかいだつて。」

そう言われリルトットはナジャークープがヨーロッパに現れた時のことを思い出し

た。

「お前の言う通り俺はキルゲを介して奴らと通じてたのさ。」

『THE^監 JAIL^獄』のキルゲ・オピー。

虚圏狩猟部隊の統括狩猟隊長として一護とも戦ったことがあり、グリムジョーに討たれた星十字騎士団の一人である。

「キルゲから陛下を復活させるって聞いてよ。俺はお前ら5人も戦力にしたかったんだが、、、」

さらにナジャークープは続ける。

「お前ら2人は反対すると思っつてな、キルゲは先ずジゼルに話を持ちかけた。そうすりゃバンビエッタも付いてくるからな。そしてジゼルがミニーニャに話をつけて、次はお前らだった。」

ジゼルとは『THE^死 ZOMBIE^者』のジゼル・ジュエル、ミニーニャとは

『THE POWER^力』のミニーニャ・マカロンのことで、リルトットと共にいた五人の

女性滅却師グループの内の二人だった。

そしてバンビエッタとはジゼルによつてゾンビに変えられた『THE^爆 EXPLODE^発』の

バンビエッタ・バスターバインという星十字騎士団員だ。

「そしたらお前らが拒否して決別したつてわけだ。」

リルトットは唾を吐くと嫌悪感とともにナジャークープに言い返した。

「ユーハバツハにまた付き従うつてことだろ？冗談じゃねえ。」

「てかまず奴はもう霊王になって意識が無えだろ？死んでんのと一緒だ。」

一呼吸置くとナジャークープは今までとは違い、低く真剣な声で答える。

「いや、まだ生きているさ。現世でな。」

「なんだと!?!」

雨竜がその言葉に反応する。

たしかにあの時一護達とユーハバツハを斃したはずだったからだ。

「ちよつと喋りすぎたか?とにかくお前らの霊圧は解析済みなんだよ。いや、お前だけじゃない!隊長格も零番隊も全員だ!」

ナジャークープは高密度の霊圧を纏い、再び相手を麻痺させるモーフイーン・パターンを打ち込もうとしている。

そのとき赤黒い霊子の光線がナジャークープの元へ飛んでくる。

その光線の霊圧は虚そのもの。

ナジャークープは不意の攻撃を避けるとその出所に目を向けた。

「虚閃か!?誰だ!!」

3階建のアパートの屋上に一つ、そして遅れてもう一つ影が立つ。

一つは紅葉のような頭をした者。

「なるほど、それで俺たちが呼ばれたってことか。」

もう一つは息を切らせている丸々とした巨体の者。

「ちよつと、走るのが早いデス、」

そして二人とも虚のような仮面をつけていた。

「誰だ？」

ナジャークープは下から上へと舐める様に観察している。

雨竜はその人物を目の当たりにし思わず声を上げた。

「あなたたちは！」

緑のジャージを着た紅葉のような髪型をした男が雨竜に呼びかけた。

「あんたんとこの竜燕、強くなつたぜ。」

第二陣として来たのは仮面ヴァイザードの軍勢として知られるラブこと元七番隊隊長の愛川羅武あいかわらぶとハツチこと元鬼道衆副鬼道長の有昭田鉢玄うしやうだはちげんだった。

雨竜の方からナジャークープの方へ向き直ると、ラブは斬魄刀に手をかけた。

「打ち砕け、天狗丸！」

斬魄刀を解放させアパートの屋上から飛び降りながら針の付いた棍棒を振り上げる。

「行くぜ！火吹ひふきの小槌こづち！」

天狗丸から火が吹き出し振り降ろすと巨大な火柱を立てた。

辺りには煙が立ち込める。

「ゴホツゴホツ、いきなりだな、。」

ナジャークープは灰を吸い込んでしまい咳き込んでいた。

全身には薄っすらと静血装の紋様が浮かび上がっている。

「静血装、直撃しねえと傷はつけられねえか、ハッチ、お前も解放しろ。」

ラブは後方のアパートの上にいるハッチに呼びかけた。

「はいデス。」

ハッチは両手のひらの間にピンク色の結界を出現させる。

手のひらを離していくにつれその結界は伸びていき、その中には斬魄刀が入っていることが確認できる。

ハッチは結界に手を入れ斬魄刀を掴み取ると解号を唱えた。

「たつと尊てび照てらせ、てんしやうどうたく天照銅鐸。」

ハッチの左右と頭上に一つずつ、計三つの縄文模様のような模様の銅鐸が浮かんでいる。

銅鐸は鮮やかな紅色でバスケットボールほどの大きさだった。

「行きマスよー！」

「縛道の七十五、しちゆうてつかん五柱鉄貫！」

ナジャークープの体に五本の柱が打ち込まれる。

ハッチが縛道をきめた後、右手を前へ振りかざすと、三つの銅鐸は水平に円を描く様に回転しながらナジャークープの方へ飛んで行った。

「なんだ?」

ナジャークープの後ろの目玉がギョロリと動き、銅鐸の動きを観察している。

銅鐸は回転を止め、中心にある比較的大きな円の模様から赤いレーザーを発した。

「なんだ!?!」

ナジャークープは縛られていたこともあり高速のレーザーに対応できず、右肩に三つ小さな穴を開けられてしまった。

「オラアアアアア!!」

ナジャークープが声に気づき上を向くとラブが飛び降りながら棍棒を振り下ろそうとしていた。

ラブが思い切り棍棒を叩きつけると先程よりも大きな火柱が立ちナジャークープを包み込む。

「やったか!?!」

しかしその火柱に霊圧の針が撃ち込まれ、まもなくして火柱は崩れ鎮火した。

さらにラブを飛び越えハッチの体に釘の様な霊子が撃ち込まれ、ハッチはその場にゆっくりと倒れた。

「ハッチ!!」

煙が晴れると羽が生え、頭上には天使の輪の様なものが見え、それが浮かんだナジャークープが現れた。

「アネステジー・デス・トデス死の麻酔師。」

ラブは聞きなれない言葉を真剣な面持ちで言っているナジャークープをつい突っ込んでしまった。

「なんだそりゃ。」

「クインシー・フォルユテンデイツヒ滅却師完聖体って技だよ。」

「ワカンねえよ、何語だよ。分かりやすくジャンプで説明してくれ。」

「ジャンプ? どうやってジャンプして分かりやすく説明すんだよ?」

お互い知らない言葉が出てきたためうまく会話が噛み合わない。

「まあお前らを倒すために俺自身がパワーアップしたってとこだな。」

ラブは少し考え、自分にわかりやすい例えを考え出した。

「なるほど、スーパーサイヤ人的パワーアップてどこか？俺にはパワーアップ系はこの虚化しかねえからよ。必殺技で勘弁してくれ。」

言い終わるとラブは上空へと飛び上がった。

「ウオオオオオオオオ!!」

「卍解、こうえんでんぐまる光焰天狗丸！」

ラブが棍棒を振り上げると天が赤く染め上がる。

「なんだ？」

ナジャークープは赤くなつた空を慌てて観察している。

「行くぜえ！光焰天狗丸！」

ラブが上空で棍棒を振り下ろすと、赤く染まつた天から火柱がナジャークープに向かつて勢いよく落ちた。

「あぶねっ！」

火柱を間一髪で避けたナジャークープだが、どんどんと火柱が落ちてくる。

「なるほど！火柱が追いかけてくるわけか！だが上に気をつけていれば余裕だぜ!!」

攻略法を見つけたと思ひ、注意して上を見ていた時だった。

「なっ、っ、」

避けたはずの火柱がナジャークープの背中を掠めた。

縦に伸びた火柱からさらに横方向の火柱が伸びてきたのだ。

「どこまでも追うぜ、天狗丸は。」

避ければ避けるほど火柱が縦に横に伸び、どんどんと避ける隙がなくなっていた。

碁盤の目のように張り巡らされた火柱は赤く光を放ちながら膨張していく。

「さあ！弾けろ！光弾爆焰！」
こうだんばくえん

「く、く、そつ、く、！」

火柱の網は大爆発を起こし爆炎を吐いた。

「観察の余裕がねえのにこんな大技、く、く。」

黒く焦げたナジャークープは爆炎の中から這い出て来た。

「隊長格でもないのに、お前ら一体何者なんだ、く、く、？」

ラブは棍棒を振り上げると右肩に乗せ答えた。

「隊長格だよ。尸魂界の時間で言うと二百年くらい前のな。」

「どおりでか、く、く。」

ナジャークープは納得した様に小さく笑った。

ナジャークープの前へリルトットが駆けつける。

「ユーハバツハの野郎をどうやって復活させるつもりだ？」

「おれはここまでみてえだし、、、もういいか、、、。」

ナジャークープは観念した様に話し始めた。

「ある男の中にいる陛下の魂を呼び起こして、、、復活させる。」

「今度は完璧な陛下になる、、、滅却師と虚の力を併せ持ったな。これなら滅却師の弱点がない。」

「だがそいつの中の滅却師の力は、、、配分が小さくて本来の力には、、、遠く及ばない。」
「そこで見つけたのが、、、滅却師と虚の力の二つのみを持つ者だ。」

「キルゲ達が今そいつらの所に向かっている。」

「わかるだろ？」

ナジャークープは雨竜の方に顔を向ける。

「黒崎一勇と石田竜燕だよ。」

「なんだと？」

それを聞いた雨竜もナジャークープの前まで移動した。

「黒崎一勇の中にいる陛下の魂の欠片を石田竜燕に移植する。」

「そうか、、黒崎を残して正解だったよ。」

「彼は仮にも外世部隊の長だからね。僕が来るべきでない、と言ったんだ。」

「そうか、それは、、よかったなア!!」

ナジャークープは不意につき最大級のモーフィーン・パターンを雨竜に打ち込んだ。

「トドメを刺さないとは甘いぜ!!!」

雨竜はまともにナジャークープの攻撃を受けその場に膝をつく。

「このモーフィーン・パターンは普通に麻痺するだけじゃねえ！生命活動自体を麻痺さ

せる！」

「つまり！お前は死ぬ！お前も道連れだ!!」

そうナジャークープが吐き捨てた時だった。

「がっ、っ、」

突然ナジャークープが苦しみ出したと同時に雨竜は立ち上がる。

「アンチサーシス完全反立か、っ、そうだったな、っ、こんな簡単なことを忘れてたぜ、っ、」

「君が靈子を集めているのは分かっていたからね。わざわざ僕が目の前まで行ったんだ。」

「くそっ、っ、。さすがは陛下が認めただけあるぜ、っ、。」

リルトットがナジャークープに近づいていく。

「お前の生命活動が終わる前に同じ星十字騎士団のおれがトドメを差してやる。」

「そりや光栄だ、。。」

そう言い残しナジャークープはリルトットの大きな口に飲み込まれていった。

「お前やキルゲほどユーハバツハに忠誠を誓つてたやつはいねえぜ。そこだけは褒めといてやる。」

リルトットは口を拭きながらそう呟く。

戦いが終わったものの雨竜の表情は未だ晴れていなかった。

雨竜はキルゲが子供達のところへ向かっているということが気にかかっていたのだ。

「竜燕はきつと大丈夫だ。一護達もいる。」

ラブは雨竜の曇った顔を見て声をかける。

「ええ。頼んだぞ、。！黒崎、。！」

To be continued.....

第7話 A Road the White Ogre
Walked

〜鬼白峯迎撃地〜

「なぜ猫娘がここに？それにここは現世!？」

尸魂界で浦原が待ち構えていると思っていた鬼白峯は驚きで辺りを見回していた。

「まあ喜助と涅が解析勝ちしたということじゃな。」

夜一はわざとらしい敬語を使い鬼白峯に話しかけた。

「それにしてもよもや鬼白峯殿が奴らに協力しとるとは思いませんでしたぞ。」

「シヨンベン臭い猫娘が斬魄刀を持っておるとは珍しい。」

夜一の腰の後ろに携えた斬魄刀を目にして鬼白峯はバカにするように笑った。

「あなたほどの方と戦うとなれば斬魄刀がなければ。」

「その気持ち悪い敬語をやめろ。」

「そうじゃのう。では鬼婆が鈍つとらんか確かめてやる。」

「そう言うとき夜一は雷を纏いとてつもない霊圧を放ち始める。

しゅんこう
瞬間、雷神戦形！」

「ほう、いきなり飛ばすじゃないか野良猫が。」

「破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲！」
ひりゅうげきぞくしんてんらいほう

「オラアアアアア！」

夜一は怒号と共に飛竜撃賊震天雷砲を殴り消し飛ばした。

そして雷撃が鬼白峯の方向へと落ちていく。

「縛道の九十八、霊滅割拒。」
れいげんかつきよ

立方体の霊子の盾が鬼白峯を囲み雷撃を防いだ。

「ただだよ、破道の九十八、羽黒帝^{はくろていけい}。」

黒い羽の生えたケロベロスのような生物が夜一へと放たれる。

「猫は犬にでも喰われる！」

「吭景^{こうけい}・千本桜景^{せんほんざくらかげよし}。」

ピンク色の刃が羽黒帝^{はくろてい}を小さく包み呑み込んだ。

「なんだい、白哉坊もいたのかい。」

刃が散ると羽黒帝^{はくろてい}はすでに消滅していた。

白哉は夜一の横に立ち、彼女の斬魄刀に目をやった。

「四楓院夜一、貴様何のために斬魄刀を帯同してきたのだ。」

「すまんすまん、久々で鈍つとつてのう。いつ解放するか使い時を忘れてしもうた。」

「今しておけ。」

腰に携えた斬魄刀を引き抜くと、夜一は顔を曇らせた。

「持ってきておいてなんじゃがあんまり解放しとくないんじゃ。こやつ面倒臭くての

う。ほらまた怒った。」

「しろ。」

白哉は夜一の言い分を無視して再度解放を促す。

「はいはい、、、はあ、、、一応しとくかのう。」

夜一は観念したように霊圧を上げ斬魄刀を解放させた。

「想い隔てろ、れんかしょうへき恋華聖壁。」

夜一の斬魄刀は蒼白い光を放ち始める。

「初めて見るよ、あんたの解放。」

鬼白峯は、頑なに斬魄刀を使わなかった。『白打の天才』の解放を興味深そうに見つめていた。

光が夜一に収束する。その手に斬魄刀は無かった。

「斬魄刀が消えた？」

持ち主の一部となったり、そのまま浅打の形で残る解放は見たことがあった。しかしいくら鬼白峯と言えども斬魄刀がなくなる解放は見たことがなかった。

「おるよ。儂にくつついとるわい。」

「どういふことだ？」

「こやつはなんじや怖くてのう。現代風に言うなら『すとーかー』とか『めんへら』とかいう奴に近い。」

「なんでもこいつが言うには『人への恋は華となり、他の者に触れさせぬ聖なる壁となる』らしい。」

「恋華聖壁はすぐ拗ねる病的な嫉妬女なのじゃ。」

鬼白峯は片方だけ口角を上げ夜一に呼びかけた。

「あいつみたいだね。あのいつもお前の後ろにくつついてる蜂家の。」

「碎蜂とは違う。やつはかわいい儂の部下じゃ。」

「四楓院夜一、。その言葉決して碎蜂に言うな。舞い上がって『黒猫饅頭』の増販など

してみる、『ワカメ大使饅頭』の人氣が落ちてしまう。」

「はあ？白哉坊、、お主、、」

「お喋りはこれくらいにして、いくかね！破道の六十九、怒船。」
いかりぶね

鬼白峯は黒い船の錨の様な物を何本も繰り出す。

しかしその錨は夜一に当たると弾かれ崩れ落ちた。

「体が硬化しているのか。」

「さあどうかのう？」

夜一は余裕な表情を見せている。

「破道の九十三、天守櫓！」
てんしゅやぐら

鬼白峯が地面に手をつくくと、まるでなにかが地面に潜り込んでいるかのように盛り上がりながら夜一達に近づいた。

「千本桜。」

千本桜の攻撃を受けるも隆起の動きは止まらず、白哉の下までいくと白哉を岩の壁で囲み、そのまま上へと伸び始めた。

「白哉！」

伸びる速度が速く、すでに見えないところまで伸びていた。

そして鬼白峯が勢いよく拳を握りしめると伸びた岩は崩れ落ち、砂となって風に流されていった。

「そんなことしても転落死はしやせんわい。鬼婆、儂ら死神は靈子で足場を作れることを忘れたか？」

「靈子で足場がね、」

鬼白峯は不気味に笑っている。

「あれは!？」

上空から人が一人入る程度の岩の箱のようなものが落ちてきていた。

「なぜ白哉坊を選んだかわかってないねえ、猫娘。奴があの中で千本桜を使えば奴自身も細切れさ。」

「くそつ、、、はあああ！」

夜一が上空へと手を伸ばすと、何層もの青く透明な薄い壁が地面と平行に、岩の箱を受け止めるように現れる。

岩の箱は夜一が出現させた壁を何枚も突き破りながら地上へと落ちていく。

しかし確実にその速度は落ちていっていた。

そして地上から約10メートルのところまでやっと夜一の壁によって止められた。

夜一は岩の箱に駆け寄ると手拳で破壊し白哉を救出した。

「白哉坊、じゃから白打もしっかりやれと言ったじゃろ。」

「夜一、あんたの斬魄刀は盾の能力かい。」

鬼白峯は夜一の意外な能力に少し驚いていた。

「ああ、行け行け押せ押せの儂には合わんじやろう?」

「そうだね。」

昔と変わらないやりとり。

夜一は鬼白峯が敵側に着く理由がわからなかった。

荒く不器用な性格ではあるものの、常に正しい道を歩いていた厳しくも優しい人生の先輩だったからだ。

「鬼婆、孫が護神大戦で討たれたそうじゃの。それで自暴自棄になったか？」

「そうではない。残された孫の嫁は役に立たん。孫も後継もおらん今、鬼白峯は衰退するしかない。」

鬼白峯の息子は病に倒れ、一人しかいない孫が唯一の跡取だったのだ。

「鬼白峯に未来はない。無様に残るよりは自ら引導を渡した方が幾らかマシよ。」

「破道の九十九、五龍転滅！」

紫色の禍々しい霊圧を放つ龍の一匹が夜一を襲う。

「恋華聖壁！」

夜一は何枚もの盾を張り霊子の龍の衝撃に備えた。

霊子の龍はいつも容易く盾を破っていく。

「まだまだよ、！」

夜一は今自分が作ることのできる最硬度の盾を作り出した。

「ハアアアアアア！」

恋華聖壁と靈子の龍は衝撃波を放ちながら相殺した。

「ギリギリだねえ!?!猫娘。まだ4匹いるよ！」

「いき過ぎた戀こいは複雑なものとなり、相手を釦けずり取るための壁たまとなる。」

「正解。」

「戀過釦壁れんかしようへき。」

夜一が目の前の盾を殴り飛ばすと、その殴った所の盾が小さな玉を発した。

靈子の龍の頭を次々と撃ち抜き消滅させていく。

そして夜一は最後に鬼白峯に向けて殴り飛ばした。

「縛道の九十八、靈滅割拒れいげんかつきよ。」

「ほう、、鬼白峯のこれを破るかね、、。」

縛道の盾が破られ、鬼白峯の左肩は釦けずり取られていた。

「まだまだだあ！オラアアアアア！」

夜一は目の前の盾を殴り続けた。

「裏破道の四、ふくぞうほうけん複臓奉獻。」

鬼白峯は蜂の巣にされながらも鬼道の力で再生を続けている。

「流石は鬼婆よ、、、ここまでやって生きておれるとは、、、。」

「猫娘、白哉坊や。破道は何番まであるか知っておるか?」

鬼白峯は自身の体についた血を払っている。

「九十九ではないと言うのか?」

白哉が怪訝そうな様子で聞き返す。

「ゴ名答。さあ鬼道の特別授業の時間だ。」

その瞬間、夜一と白哉は今までに経験したことのない霊圧を感じ取った。

「破道の百、破。」

鬼白峯の両手は青く光り輝いている。

夜一が戀過剣壁を弾き飛ばすと鬼白峯は右手を前へ出した。

「な!？」

戀過剣壁れんかしようへきの玉は手に触れると粉々となり跡形もなく消え失せた。

白哉も続けて千本桜を向けるが同じように手に触れると消滅した。

「破壊を極めた単純な鬼道さ。」

「だが、鬼婆の攻撃も届かんだろう?。」

夜一は冷や汗を流しながらもあえて余裕な様に笑ってみせた。

「さあどうかね。」

鬼白峯が両手の平を近づけると、バチバチと音を立て火花が散り始める。

「強力な消滅させる力同士を合わせるとどうなると思う?。」

鬼白峯が手を合わせると、行き場を失った力が前方へ、夜一と白哉の方へ飛んで行った。

「まずいつ！」

夜一は青い盾を、白哉はピンク色の刃でその攻撃を防ごうとするが、足止めにもならなかった。

「これはキツイのう、。防ぐ術がない。」

「終わりか？ 四楓院家、朽木家。」

「おいおい、俺たちを忘れてるぜ！」

上空から突然女性の声が降ってくる。

「散在する獣の骨　尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪　動けば風　止まれば空　槍打つ音色が虚城に満ちる！」

「この詠唱は、ゝ！」

夜一はこの破道を得意とする者を知っていた。

「破道の六十三、雷吼炮！」
らいこうほう

上空から斜め下に、鬼白峯の方向へ放たれた雷撃は轟音と共に砂煙を立ち上げた。

そしてその人物が夜一の横へ着地した。

「よお！夜一、元気してるか？」

「空鶴！」

To be continued.....

第8話 P r i d e o f n o b i l i t y

「空鶴！」

「一心も来たのか。」

空鶴の傍には一護の父、黒崎一心も立っていた。

「可愛い姪が来い来いうるせえからよ。」

「おっさんの顔で可愛い姪とか言うな！気持ち悪い！」

いい歳したおっさんにいい歳した自分が“可愛い姪”と呼ばれ、心底気持ち悪いと感じた空鶴は思い切り一心の顔を殴り飛ばした。

「痛っ！」

痛がる一心を傍目に空鶴は斬魄刀を解放させた。

「いくぜ伯父貴。」

「凧なげ、風車かざぐるま！」

空鶴の斬魄刀は刃とは逆方向に渦巻いた柄をしたパイレーツソードの様な形に変形した。

「殴つといて、いくぜ」はねえだろ、..」

「燃えろ！ 剋えんげつ月！」

鬼白峯は久々に一心の解放した姿を見て、彼が十番隊隊長をしていた時のことを思い出した。

そして一心に吐き捨てるように罵倒した。

「隊長の座を捨てて滅却師と一緒になりおって、貴族の面汚しが。」

「今は志波家名家に戻つてますう。しかも俺分家だし、もう黒崎家だから関係ありません！」

一心の護神大戦での活躍、空鶴の零番隊復帰、一心の系譜である一護の外世部隊長就任、そして岩鷲の十三番隊副隊長就任により志波家は名家に返り咲いていた。

「それにあの霞大路家とかいう小娘のところも四大貴族に入りおつて。」

「妾わらわがなんじや?」

金色のポニーテールにカチューシャをつけ着物を着た女性、霞大路瑠璃千代が空鶴達の後ろから現れる。

「おやおや、これは。代々女系当主だったのにも関わらず、菅かんのぎノ木家の坊主に家を取られそうになった霞大路家の瑠璃千代殿ではないか。」

菅ノ木家の坊主とは、瑠璃千代の夫として霞大路家に婿入りした菅ノ木愁しゆうのことだ。

「当主は男だろうと女だろうとどちらでも良い。それに愁しゆうは元々当主の座を欲していないかった。」

「昔、犬龍けんりゆうと猿龍えんりゆうが付き人として妾を守ってくれたように、今度は妾が次期当主を、我が娘を自分の手で守る!」

「尸魂界は滅ぼさせんぞ!」

瑠璃千代は着物の帯に携えている脇差を抜き取った。

「身を挺せ、じゅんけいろしゆ楯結璐守！」

10枚の黄色く光る長方形の盾が瑠璃千代を囲み周りを回っている。

「夜一といい、あんたといい盾が能力とは、、、自分を守ることとで精一杯みたいだね。」

「破道の九十一、せんじゆこうてんたいほう千手皎天汰炮。」

瑠璃千代の6枚の盾が鬼白峯を放った破道を防ぎ、それと同時に残った盾で鬼白峯を攻撃した。

鬼白峯が飛んでくる盾を躲すと、盾は地面に次々と刺さっていく。

「ただ守る盾ってわけじゃあなさそうだね。」

「ならこれはどうだい？破道の百、破。」

鬼白峯は光り輝く手を合わせ衝撃波を飛ばす。

「気をつけろ！あれは全てを消滅させるぞ！」

夜一が大声で皆に警告する。

「月牙天衝！」

一心は真正面から斬撃を飛ばし相殺させようとするが、引き裂かれたように消え失せた。

「どけっ！伯父貴！」

空鶴が一心を鬼道の動線から無理やり退かせると斬魄刀を前に突き出した。

「吹き上げろ、風車！」

空鶴の放った突風は鬼白峯の攻撃の軌道をずらした。

「鬼婆のその《破》って鬼道は漂う霊子や空気は消してねえ。真空になつてないからな。」

「つてことは風による攻撃は十分有効つてこつた。」

「ならこれはどうだ？縛道の百、縛ほく。」

また鬼白峯の手が光り始める。

鬼白峯が両手で何かを捕まえるような仕草をすると、一心の左右に巨大な光り輝く手が現れ、その手に包み込まれた。

鬼白峯が手を開くと、一心はありとあらゆる縛道で拘束されていた。

「負担がデカイからな、、耐えてくれよ！」

「正解、えんさえんげつ琰鎖剡月！」

炎を纏った一心がまとわりつく縛道を焼き払った。

「流石は元流斎を唸らせたほどの炎よな。」

鬼白峯も一心の放つ炎に感心している。

「月牙天衝！」

炎の月牙天衝が鬼白峯を襲う。

「確かに賞賛に値する霊圧だが、、、、、」

鬼白峯は目の前に異空間を開く。

そして月牙天衝は異空間に吸い込まれると、空鶴の前に現れた。

「なんだと!?!」

空鶴はまともに月牙天衝を受け大きな炎に包まる。

さらに一心は月牙天衝を放った態勢で止まっていた。

「これは、」

一体何が起こったのか理解ができない瑠璃千代は一心と空鶴を交互に見ていた。

「時間停止と空間転移か!」

夜一は禁術と呼ばれるその鬼道を見るのは二度目だった。

「猫娘は握菱つかびしのを見たことがあつたんだつたな。ここまで完璧ではないだろう? なんせ握菱は儂が教えたんだからな。」

そのとき懐かしいような、悲しいような霊圧が流れた。

「この靈圧、、、 兄貴の卍解か、、、？」

炎に包まれ意識が朦朧とする中、空鶴はこの世にいるはずのない兄、海燕の靈圧を感じ取った。

「(なんだよ兄貴、、、 卍解しろつつつてんのか、、、?)」

鬼白峯の後ろで空鶴を包んでいた炎が燃え上がる。

「なんだ？」

そして炎はさらに大きくなりながら竜巻の様に渦巻いていく。

「兄貴がまだくたばんなってよ、、、！」

「卍解か。」

斬魄刀の刀身に龍の刻印が刻まれている以外変わったところはなかった。

「いくぜ、ふうかりゆううかざぐるま風華龍風車！」

鬼白峯は空鶴の卍解に驚くこともなく、破道を発動させようとする。

「破道の九十五、、ん？靈子の流れが、、」

「始解は空氣の流れを、正解はそれに加えて靈子の流れも操る。止めるのも動かすのもこいつ次第ってわけだ。」

「なるほど。なら大氣の靈子を使わなければいい。」

そういうと鬼白峯は上空から地上へと降りた。

「裏破道の七、樹生輪転。」

鬼白峯の体から樹木の根の様なもの地面に伸び始める。

「大地の靈子を使う。」

大地から供給された靈子を使い靈圧を上げていく。

すると突然空が曇天へと変化した。

「破道の九十五、雷霆斧頭。」

雷が空鶴達をランダムに襲っていく。

「瑠璃千代！盾じゃ！儂も卍解を解く！」

「恋華聖壁！」れんかしやうへき「楯結璐守！」じゆんけいろしゆ

夜一と瑠璃千代が何重もの盾を屋根の様にして雷を防いだ。

「これならどうだ!!」

空鶴が空気を操り鬼白峯の周りに竜巻を発生させる。

「閉じ込めたつもりかい？空鶴や。」

「破道の九十八、羽黒帝」はくろてい「！」

羽黒帝は竜巻を突き破り空鶴を狙って直進する。

「夜一!!」

「恋華聖壁！」

空鶴の呼びかけに応え、夜一が恋華聖壁で阻むが勢いは衰えない。

「これでどうじゃ！」

瑠璃千代が二枚の盾で羽黒帝を挟み潰した。

「まだまだ撃てるぞ?！」

鬼白峯は再度手のひらから禍々しい黒色の霊圧を構築し始める。

「破道の九十九、五龍転、、め、、」

突然鬼白峯の言葉が止まる。

「鬼婆、そんなに喋っちゃ酸素なくなるぜ?！」

「なる、、ほど、、、そういう事、、か、、」

鬼白峯は樹木を体から切り離すと、竜巻から抜けるため上空へと高く飛んだ。

その先に待っていたのは刀に炎を纏わせた一心だった。

「待ってたぜ、鬼婆! 月牙天衝!!」

一心は鬼白峯に大きな一太刀を浴びせる。

「高等破道ばかり撃ちすぎて俺への時間停止がなおざりになってたぜ?！」

鬼白峯は炎とともに地上へ落下していく。

地面に叩きつけられた鬼白峯は回道で回復し立ち上がるとするが空鶴によつて靈子を乱され力が入らず立てなかった。

そしてそこへ夜一達が集まる。

「鬼婆、なぜ鬼白峯家を名家から下ろしたのじゃ?」

鬼白峯はゆっくりと起き上がりあぐらをかいてその場に座つた。

「鬼白峯家は子宝に恵まれなかった。孫である珠正しゆせいの代で鬼白峯家は止まったのじゃ。珠正は子供が作れなかったのだ。」

「さらには護神大戦で珠正は滅却師に殺され、、、それにもう儂も長くない。」

「残つた孫の嫁だけでは、、、さゆりはお茶会ばかりしておつた戦いとは縁のない娘。」

「そんな娘に鬼白峯家が背負えるか!!押しつぶされるだけだ!」

鬼白峯は思い切り右手を振り上げ地面を叩いた。

「お茶会ばかりする、さゆり、？」
瑠璃千代は「さゆり」という名に反応した。

「――私はもうすぐ嫁ぐことになっているんです――
――私たちもう一生会えないかもしれないから――」

「まさか、さつちゃんのことか、？」

かつて霞大路家がまだ四大貴族に入っていなかった頃、雲井堯覚くもいぎょうかくという実質霞大路家の実権を握っていた老人がいた。

雲井は瑠璃千代を暗殺し、彼女の今の夫である菅ノ木愁かんのぎしゆうを傀儡の当主としてまつりあげようと画策していた。

そのため瑠璃千代の付き人である犬龍と猿龍が彼女を現世へと引き連れ、一護をはじめとする現世組と共に守っていた。

その際、瑠璃千代は一人で勝手に尸魂界に戻ったことがあった。

それは「さゆり」という貴族の友人が開いた茶会に出席するため、それはさゆりが

政略結婚で嫁ぐこととなったため一緒に過ごせる最期の茶会だった。

「鬼白峯殿、さっちゃんは、、、」

瑠璃千代が問いかけると鬼白峯は今までの殺気が嘘だったかのように穏やかな顔をして答えた。

「幸せそうだった。政略結婚にしては珍しくお互いに愛しておった夫婦だった。」

「だから、、、だからこそ只でさえ珠正が死んで抜け殻のようになっておるのに、あやつに鬼白峯を背負わせるのは酷こくすぎる。」

空鶴は腕を組んだまま問うた。

「鬼婆、あんたは孫の嫁を自由にして、珠正の後を追いたかつたんだな？」

「さあな。」

「でもなんでわざわざ今回みたいに敵について尸魂界を攻めようとしたんだ？」

白哉、一心、瑠璃千代の心を代弁するように空鶴は続けて尋ねた。

その質問に答えたのは夜一だった。

「追放されたかったんじやろう?」

「上流貴族でしかも鬼白峯家ともなれば、仮に尸魂界にあだなしたとしても処刑はありえん。」

「その中に崩玉があつて藍染が居れば別かもしれないがの。」

白哉はルキアが処刑されそうになった時のことを思い出した。

「となればあり得るのは追放。」

夜一は斬魄刀を鞘に収めながら続ける。

「大方鬼白峯家の者たちを何のしがらみもない現世にでも逃がそうとしたのじやろ、なあ鬼婆?」

鬼白峯は凶星だったのか目を伏せている。

夜一は空鶴達の方に向き直ると補足した。

「鬼白峯家が現世に移り住むなど分家が絶対に許さんじやろうから、強制的に移り住む

方法を選んだということじゃ。」

鬼白峯は柄にもなく夜一に力強い眼差しを向け懇願する。

「浦原のガキに頼もうと思つておつたが、猫娘、頼むから、」

「言われんでも追放するわい。喜助にも伝えておく。」

そして瑠璃千代の方を向き力強い声を発した。

「おい！霞大路家の小娘！現世に、さゆりに会いに行けよ、」

「言う通りにせんかつたら化けてでるからな。」

「鬼白峯殿に言われんでもそうする。」

「まあ若造どもはまだまだじゃが、これからが楽しみじやわい。」

「鬼の歩く道もこれで終いじゃ。」

鬼白峯の体が眩く光を放つ。

「赦道しゃどう、」

そう言い終わると、鬼白峯の体は端から光の灰となっていく。

「鬼白峯家を、さゆりを頼んだぞ。四楓院、朽木、志波、霞大路、」

T o b e c o n t i n u e d

第9話 慟哭のバウント

吸血鬼。

西洋ではそう呼ばれる種族は、尸魂界での人造魂魄の研究によって偶然にも生まれた。

バウントとも呼ばれる種族だ。

バウントは魂魄を吸収して生き長らえ、自身の分身とも言えるそれぞれの性格を持つ意思をもつ武器、《ドール》を使うことができた。

バウントの掟として生きた人間の魂魄の吸収は禁止されていたが、それは強大な力を得ることができる方法でもあった。

次第に吸血鬼として人間から迫害を受けたバウントは強者を集め、自分達を生み出した死神に反旗を翻した。

その首謀者が狩矢神という男だった。

そして今、その狩矢の目の前にはかつて共に死神に対し反旗を翻した仲間が立っていた。

く 狩矢神迎撃地く

「古賀、久しぶりだな。バウントがまだ生き残っているとは。」

オレンジ色のソフトモヒカンというヘアスタイル、筋骨隆々の体をした巨漢、古賀は険しい表情で狩矢を見つめている。

「それに一ノ瀬までいるとはな。」

狩矢はかつて配下だった男達の顔を懐かしんでいた。

古賀は悲しそうに、憐れむように狩矢に問いかける。

「狩矢、お前は何をしたいんだ。」

「さあ、何なんだろうな。」

狩矢は右手に風を纏い始めた。

風は右腕に巻き付くように渦巻いている。

サイゲディツヒ
トランシーロ
「己ココロを二ニ示シせ、小風刀。」

右腕は光に包まれると、灰色の刀剣へと変化した。

「そういえば前回ノヴァディオと共に尸魂界を攻めたとき更木剣八と十一番隊副隊長がいたな。」

狩矢は最初の侵攻の際、剣八、一角と刃を交えていた。

さすがに更木剣八は強かった。お互い解放無しの素の力比べならば負けていたかもしれない。

しかし彼の解放はどこか穴あきのような感じがして、本物の力の前には無力も同然だった。

そしてもう一人。

スキンヘッドで激高していた男。

「名前はなんと言ったか、、『殺す相手の名前が』なんだと叫んだ後名乗っていたのだ

が。」

顔は知っていた。

ノヴァデイオから『正解が使える死神』として簡単ながらも説明があつたため、その特徴的なスキンヘッドには見覚えがあつた。

「班目一角ですね。」

一ノ瀬が答える。

「更木剣八もその班目一角とやらも大したことはない。今の十一番隊は落ちぶれたものだよ。」

護廷十三隊で最強とも言われる十一番隊。

そのトップ2人があの有様ではたかが知れる。

そう思い嘲笑っていた。

その言葉に対し、それまで丁寧な口調だった一ノ瀬は強い語気で断言した。

「そんなはずはない。」

普段丁寧なだけに、一ノ瀬の反応に狩矢は少し驚いていた。

「一ノ瀬、お前は死神を、現十一番隊を恨んでいるのではないのか？」

一ノ瀬真樹まきはかつて十一番隊に所属しており、敬愛する隊長とともに尸魂界を護ることを誇りとしていた。

更木剣八が隊長に一騎打ちを申し込むまでは。

——あんな獣が隊長になるなど、——

——護廷隊にも中央四十六室にも正義はない——

決闘が行われている中、一ノ瀬は心穏やかではなかった。

決闘の場の片隅でその思いに賛同してくれる者がいた。

——私とて同じ気持ちだ——

かつての自分の心情を理解してくれたのが、後に大罪人として名を馳せた東仙要だつ

たとは。

「私は、憎んでいました。」

一ノ瀬はうつむき自身の心のうちを狩矢に吐露する。

「ではなぜそちら側に、」

そして一ノ瀬は顔を上げ力強く答えた。

「弱く、人に依存せねば生きていけぬ自分自身を。」

「更木剣八を恨んでいたわけではなかった。そのことに更木剣八との斬り合いを経て気づきました。」

「それに私が投獄されている間に滅却師が攻めてきましたが、更木剣八は相手内で一番の手練れを打ち負かし戸魂界を護ったのです。」

「剣八として『護る』という気持ちは鬼巖城隊長と同じだった。」

ひとしきり言い終えると、一ノ瀬は斬魄刀を抜き、刀を下から反時計回りにゆつくりと振り上げた。

「光華こうか閃ひらめけ、虹霞にじがすみ。」

彼の斬魄刀、虹霞はまばゆい光を放っている。

「君の始解を正面から見るのは初めてだ。」

光で視界が覆われた狩矢に一ノ瀬は刀を振るった。

が、手応えは全くと言っていいほど感じられなかった。

一ノ瀬は斬撃を浴びせ狩矢の背後まで間合いを取る。

そして狩矢の方へと振り返り状況を確認した。

「無傷だと、？」

「破面や滅却師は死神に比べ防御に長けているのかもしれないな。」

狩矢の体には青い線状の模様が浮かび上がっている。

その状況を見て古賀が懐から手のひらサイズで紫色の鉄球を取り出自身のドールに命令した。

「Z^サeige^イ dige^ゲ dich^{ディツ}、ダルク。」

鉄球は泡のようにぶくぶくと膨れ上がり、やがて女性のような姿を形作る。

そしてその女性^は妖艶な声を発した。

「あゝら、懐かしい男がいるじゃない？」

狩矢も懐かしむように古賀のドール、ダルクを見つめていた。

「ダルクか。まさかお前の鉄を打つ日がくるとはな。」

「そういう減らず口叩くところは変わってないわね。」

「そういうところ昔から、、、」

ダルクは右腕を大砲のような形に変えると、左手で支え、さらに左手から鉄を地面へ突き刺し大砲を固定した。

そしてダルクの大砲の発射口は赤く不気味な光を放ち始めた。

「嫌いだったのよ!!」

バレーボールほどの鉄球が目にも止まらぬ速さで狩矢を襲う。

狩矢は高速で迫りくる鉄球に灰色の刀を力強く突き出すと、鉄球はまるでピーラーで皮が向かれたように回転しながら消滅していった。

「ずっと気になっていた。私と古賀、どちらが強いのか。」

そう言い終わると狩矢は姿を消す。

「今わかった、どうやら私のようだ!」

狩矢はダルクを通り越して古賀の背後をとり、風を纏った刀を振り上げた。

「古賀さん!」

一ノ瀬も瞬歩で駆け寄ろうとするが到底間に合う距離ではなかった。

その時狩矢の振り上げた刀を雷の矢が打ち抜く。

皆が一斉に矢の出所に目を向けた。

「お前は、、！」

そこに現れたのは女性滅却師だった。

ロングの金髪をなびかせ胸元の開いた団服を着た女性、キャンデイスは手元に電撃を
まとい始める。

「滅却師か。」

狩矢は興味深そうな目で観察していた。

「石田雨竜しか見たことがなくてね。興味深いよ。」

「うるせえ!!あいつと比べんじゃねえ！」

キャンデイスは雨竜を星十字騎士団として認めていないためか激高し雷撃を放った。

しかし狩矢は風の渦で相殺させる。

「生きがいいな。まるでケインみたいだ。」

キャンデイスは聞いたことのない人物に例えられ眉をひそめる。

「ケイン？」

その名を聞き古賀は目を伏せている。

「その古賀が殺した同族の若者だ。」

冷酷に言い放つ狩矢に対して古賀が言葉を返した。

「その通りだ。俺がやつを殺した。」

それを聞いたキャンデイスは言葉を失ってしまふ。

初めて会った時、古賀がそんな人物に見えなかつたからだ。

「おっさん、、、なんで同じ仲間を、、、」

一ノ瀬はキャンデイスが誤解していると思い、古賀の名誉のために説明を始めた。

「それは違う。ケインという若者は古賀さんの指示に従わず、力を求めた結果自身の力に飲まれ自壊したのだ。」

しかし古賀はそれを強く否定する。

「俺が殺したのと何ら変わらん。」

狩矢は古賀を追い詰めるように言葉が続けた。

「ケイン、黒崎一護、そしてその小娘。お前は若い命を摘み取る運命にあるのだ。」
「確かに、俺はケインという若い命を摘み取ってしまった。」

判断ミスだった。まだ早すぎたのにバウントの力ドールを与える算段を立ててしまった。

——そろそろお前もドールを持ってもいいのかもしれんな——
——俺とうとうドールを手に入れたんだ——

ケインのドールは小さく、神秘的で、緑光を放ち……
そして残虐だった。

——いかん！ケイン！そいつから……——
——おっさん、死にたくねえ、まだ死にたく……——

生きるべき命はいつもこの手をすり抜ける。

古賀はかつて現世の廃ビルで一護と戦った時、ケインと姿を重ねていた。そつくりだった。過ぎたる力虚化を自分のものにしてしまうとどこか。

黒崎一護
この若者は自滅する。ケインのように。

「だが、黒崎一護は俺やお前を退け自身の運命を切り開いた。」

「俺がもう一度生きてみようと思えたのは、若者を見守っていきたいと思うことができただからだ。」

「黒崎一護のおかげだな。」

狩矢は古賀の後ろに立つ若い滅却師、キャンデイスを一瞥する。

「それで今度はその小娘をやつらと重ねているのか。」

狩矢は嘲笑するわけでなく、古賀を認めているかのような笑みを浮かべた。

その時、狩矢と古賀は周囲の霊圧の変化に違和感を感じる。

「これは、、？」

アパートの屋上から女性の声が響く。

「対バウント霊子変換装置さ。こつちに來てからずつと展開作業してたんだが、あんたが世間話好きで助かったよ。」

逆光で影のように黒くなった女性のシルエットが確認できる。

「蘭島^{ランタオ}、、！」

死覇装の上に技術開発局員のもつ白衣様なものを羽織り眼鏡をかけた女性。

その蘭島とよばれる死神は地上に飛び降りると、彼らの抱く違和感の理由を狩矢に説明をし始めた。

「これはバウントの力のみを弱体化させる結界の能力。つまりあんたの主となる力が抑えられてるってことさ。」

「本当はあんたと黒崎一護が戦うときに合わせて完成させたかったんだがね。」

死神たちの時間で言えば120年、現世の時間で言えば20年ほど前、双極の丘で一護と狩矢が激突する前に完成させる予定だった。

「浦原の協力無しにはなかなか難しくくて間に合わず、結局ならだらと完成させて放置しておいた代物さ。」

バウントの第一人者として、そしてバウントを生み出した親として研究を続けていた結果だった。

「バウントの研究がまさかこんなところで役に立つなんてね。」

「ふつ、懲りずにまだバウントの研究をしていたのか。」

「あんたこそ黒崎一護に倒されてもまだ懲りずに尸魂界に攻めてくるとはね。」

蘭島は皮肉を込めて笑みを浮かべた。

「すまない、私は死ぬ直前までの記憶しかなくてな。そうか。あのあと私は黒崎一護に負けたのか。」

「狩矢、あんたは何が目的でこんなことしてるんだ？」

蘭島はさつきとは正反対で穏やかに、そして悲しそうに尋ねる。

そして狩矢は目を閉じ一呼吸置くど静かな声で話し始めた。

「死神、滅却師、虚、破面、完現術者、バウント。なぜバウントはそこまで認知されていないのか。」

死神たちの間では、一連のバウントの騒動は

「藍染の手下あたりが攻めてきた」、追放された死神が復讐しに来た

とくらいにしか思っておらず、それがかつて死神が研究の末に生み出した産物と知るものはごく少数だった。

「人に知られぬまま迫害され滅ぼされる。そんな悲しいことがあるか？」

そして狩矢は強い口調で古賀に問いかける。

「古賀、現にお前の、、、いやバウントの存在を何人が知っている？あれほどの期間戦いがあったのに、隊長格ですらあの戦いがあったことすら忘れてる。」

「今回、バウントである俺がこの戦いに参加しているのは護廷隊の総隊長を通じて知らされている。」

かつて敵として戦った自分を京樂春水という男は丁重にもてなしてくれた。

「これを機に過去の資料を通して俺たちの存在は広く知られていくだろう。」

その古賀の言葉に蘭島が続いた。

「そうさ。この戦いが終われば、私が外世部隊直轄のバウント専門部隊を持つることになっていく。」

「専門だと？バウント対策だろ？敵として見なされているではないか。」

「それは違う。外世部隊は実質、各種族を保護下に置き協力体制を作るための役割なんだ。」

これは外世部隊副部長の滅却師、石田雨竜が総隊長に直接進言したことによって実現したのだ。

「奴らはいいように利用し、使えなくなれば切り捨てる。死神とはそういう種族だろ？」

蘭島？」

「話を通じないね。通じようが通じまいがここであんたを止めるのには関係のない話だけどね。」

「バウントの力を抑制するということは、古賀もこの結界内では力が出せないということだ。」

「なめんなよ！おっさんが無理でもあたしがいる！それにこの死神もな！」
キャンデイスと一ノ瀬は古賀の前へと出ると、狩矢に向かって構えた。

狩矢は中段に構える一ノ瀬に呼び掛ける。

「誰かに寄りかかって生きてきたお前に私が止められるか？」

一ノ瀬は霊圧と刀を握る手を緩めた。

「確かに私は鳶つたのようなものだ。」

かつて更木剣八から受けた言葉。

先代剣八であり、彼の敬愛する上司でもあつた鬼巖城。

鬼巖城が更木に討たれ剣八が交代した。

そのことに納得できず、許可なく尸魂界を去り、その後バウンドである狩矢に従い尸魂界に侵攻した。

今思えば誰かを支え技として生きていた。

——てめえは鳶よ——

——自分で立つ根の張り方を覚えるんだな——

尸魂界を去る前、決闘を申し込んだ更木剣八にそう指摘された。

その意味に気付くのは更木剣八との勝負のあとのことだった。

「今はもう自生する鳶だ。私が鬼巖城隊長の夢を果たす！」

「卍解、彩玉虹霞」

狩矢の周りに光の玉が浮かび上がり、その光がだんだんと膨張していき狩矢を包み込んだ。

かつて自分の意見に賛同してくれた東仙要の卍解と似たような形状をしており、東仙の卍解を闇とするなら、一ノ瀬の卍解は光だった。

光の球体はひとしきり膨張すると、ある大きさを境に収縮していく。

狩矢は光以外に何も見えず、音も聞こえない卍解のなかにいた。

「(そろそろ収縮するところか。)」

狩矢は抑えられたバウントの力、死神の力、滅却師の力、虚・破面の力を最大限に放出し、虹霞の収縮に対抗した。

「(一ノ瀬の力が強くなっていく、、、!?)」

「ひびが、、!」

一ノ瀬の卍解に飲み込まれないよう距離をとっていたキャンデイスは、その卍解が崩れていつていることに気付く。

そして隣に一ノ瀬が瞬歩で現れる。

「このままでは私の正解は破られる。出てきたときにお前の最大出力を浴びせられるか？」

「ああ！」

ほどなくして一ノ瀬の正解は崩れ落ちた。

「エレクトロキユー
電滅、、、」

キャンデイスが電撃を放つよりも先に、虚の霊圧を纏った風の矢が彼女の右腕を吹き飛ばした。

そして間髪置かず虚閃の霊圧を含んだ嵐が一ノ瀬を包み込む。

狩矢が涼しい顔で二人に歩み寄ってきた。

キャンデイスは吹き飛んだ方の腕を押さえ片膝をつき、一ノ瀬は地に臥し斬魄刀の柄を地面に当て立ち上がろうとしていた。

「隊長の夢は、、！十一番隊の矜持は、、！」

ボロボロになった一ノ瀬が気力だけで立ち上がろうとしていたときだった。

「よく言った。」

「流石は元十一番隊隊士なだけあるじゃねえか。」

その突然現れた男は、腕に「十一」と印された副官章を巻いた威勢のいい男だった。

「十一番隊副隊長、斑目一角!!」

「てめえを殺す男の名だ!」

To be continued.....

第10話 LA MEJOR SUERTE (史上最高にツイてる)

「卍解!!!ふかいりゆうもんほおずきまる不壊龍紋火火着丸」

——卍解は治せない。私のは改造なおしてるんだヨ——

——お前の卍解とじやまだ天と地じやろう——

——おんしの卍解はこのままじやとハズレじや——

一角は鬼灯の花に囲まれた地に立っていた。

そして目の前には浅黒い肌をした槍を持った鬼。

「鬼灯丸！お前本当の名を俺に言ってねえらしいじやねえか！」

「てめえがいつまでもつまらねえ意地張ってるからじゃねえのか？」

「なんだと？」

「お前が人前で卍解を使わない理由は、使えば隊長候補になるかららしいな？ 全く恥ずかしいぜ。」

「心配するな、今のおまえの実力なら隊長にはまず選ばれねえ。」

かつて射場にも言われたそのセリフは、自分の強さを否定されているようで受け付けなかった。

「なんだとてめえ！」

一角は手に持った槍を鬼灯丸に向ける。

「てめえの槍なんざ素手で十分よ。」

鬼灯丸は一角の槍を右手で掴むと、奪い取り両手でへし折った。

そして一角の前に折れた槍を投げつけた。

「てめえが更木の元で戦うって決めたんだろ？ 卍解がバレようが何しようが変わらねえんじゃないのか？」

「そもそも更木の元で戦いてえ、それは本心か？」

——生きて俺をもう一度殺しに来い——

「本当は更木を倒してえんじやないのか？」

あの人の下で戦って死ぬ。

そう心に誓っていたはずだった。

「お前自身があれからずっと壊れたままなんだよ。脆いんだ。意思が。」

かつて斬術指南をした後輩の姿が浮かぶ。

——おれは朽木隊長を超えてえんだよ——

そうか。あいつの方が自分に向き合ってたってことか。

「戦い方を教えたつもりが、これじゃあ先輩失格だな。」

「やっと固まりやがったか。」

下なんかじゃねえ。

俺はあの人の、

更木剣八の上に行つてから死ぬ。

負けっぱなしなんざゴメンだ。

姿形は今までの卍解とさして変わりはなかった。
扇型のをした斧の先のような斬魄刀。

それを両手に携え、頭上にはさらに大きな扇型の斬魄刀が浮かぶ。

今までの卍解では頭上の斬魄刀にだけ龍の刻印が施されていたが、不壊龍紋火火着丸はすべての斬魄刀に刻印がなされていた。

とてつもない靈圧に包まれた一角は落ち着いた様子で狩矢に問いかける。

「お前鬼灯ほおずきって知ってるか？」

「ああ、知っている。」

かつてヨーロッパに身を置いていた狩矢は食用としての鬼灯を見たことがあった。

「あれには毒があつてな。その毒には麻酔として使われる成分が微量だが入ってるらしい。」

「不壊龍紋火火着丸は威力を増しながらその成分を大量に分泌する。」

「攻撃を受ければ受けるほどな。」

「ほお。」

狩矢は目を細め、興味深そうに一角を見ている。

「さらにこいつの切っ先は山本前総隊長の卍解と同じ能力が一つある。」

「あの山本重國の、燬齧きこうわう王が持っている斬魄刀の卍解か。」

「刃先の一筋に熱を集中させ焼き切る。」

「それがどうした？ 痛みを感じず、刀の切れ味が上がったただけか？」

「そんでもってもう壊れねえ。」

狩矢は右手の灰色の刀剣を振り上げ、一角に斬りかかる。

一角が右手の斬魄刀で狩矢の刀を受け止める。

そして左手の斬魄刀を狩矢の首を目がけ突き出した。

すると狩矢の体の周りを風が包み込む。

「風つてのは刀も防げんだな。」

間合いを取る狩矢を見て一角

風によって一角の攻撃ははじかれたのだ。

「斑目一角、前と比べると霊圧があがっているようだな。やるじゃないか。」
「やるかどうかは、、」

一角は高く飛び上がると、狩矢に向け不壊龍紋火火着丸を振り下ろす。

「死んでから決めろ!!」

「小風刀!」
トランシーロ

狩矢は飛び降りてくる一角に向け、風の刃を飛ばす。

「息吹け!龍紋火火着丸!」

龍紋火火着丸の切っ先は赤く熱を帯び、煙を上げ始めた。

そしていともたやすく風の刃を切り裂き、狩矢に迫る。

「まだだ。」

狩矢は連続して風の刃を放つ。

「おらあー！」

一角は両手の斬魄刀を手放すとひと際大きな頭上の斬魄刀に持ち変えた。そして下に向け斬魄刀を回転させる。

鎖に引つ張られた二つの斬魄刀がプロペラのように周り始めた。

放たれた風の刃は回転する龍紋火火着丸によつてかき消され、そのまま狩矢は龍紋火火着丸の攻撃に飲み込まれた。

土煙が立ち込め、一角は間合いを取った。

「どんどんと霊圧が上がっているようだが？」

土煙の中から左腕に傷を負った狩矢が姿を現した。

「まだまだ上がるぜ？こいつは敵をブツタ斬って、ブツタ斬られてやっと目が覚める。」
「そして3つの龍が赤く染めあがった時、本当の力が解放される。」

「なるほど。お前の卍解は雑魚だと聞いていたが、なかなか楽しめそうだ。」

「グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光。」

狩矢は赤黒い虚閃を竜巻の形で一角に向け放つ。

一角は両手の龍紋火火着丸で虚閃を防ぐと、すぐさま攻撃態勢へと移った。

「今度はこっちの番だぜえ！」

一角が狩矢に斬りかかろうとした時だった。

「かはっ、、、」

一角の背中に滅却師の矢のようなものが刺さる。

「なん、、、だと、、、?」

一角は何が起きたのか理解できなかった。

目の前にいる狩矢は何も攻撃をしていなかったからだ。

火火着丸の能力で痛みはすぐに消えたものの、体へのダメージは無視できなかった。

そして一角が後ろを振り向くと、そこには数十個の『黒い眼球』のようなものが浮か
んでいた。

そしてその眼球の瞳が赤黒く光り始める。

「また虚閃撃つつもりか、、、！」

「あれは、、、！」

古賀はかつての仲間が使っていた能力に目を見開いた。
「なぜ狩矢が《ゲゼル》を、、、」

その宙に浮く黒い眼球はかつての仲間であった、宇柿うがきという男のドール、ゲゼルだった。

「やれ、ゲゼル。王虚グラン・レイ・セロの閃光。」

数十のゲゼルの瞳が赤く光りを放っている。

「こりゃ流石に不味いな、、、！」

一角は3つの斬魄刀を盾にして王虚の閃光に備えた。

そして数十もの王虚の閃光が一角を襲う。

再びあたり一面に煙が立ち込める。

「黒崎にも言ったが、人は自分よりも秀でているものを忌み嫌う。」

「信じられなどしない。いずれ仲間は去っていく。」

「信じられるのは、ドールだけだ。」

「五月蠅えんだよ、、、。」

煙が晴れると、大量に血を流す一角が立っていた。

「ボロボロだな。護廷隊最強十一番隊の副隊長。」

「俺がボロボロってことはそれだけコイツの威力が増してるってこった。」

「行け、《アイネートル》。」

狩矢は左の手のひらから緑色に光る楕円の球体を発現させた。

「やつは、！ケインの、！」

その不気味でありながら美しさも兼ね備えたドールを目の当たりにし、古賀は忌々しい記憶を呼び起こされた。

——おっさん、死にたく、——

アイネートルと呼ばれるドールはかつて古賀と共に暮らしていた若者、ケインのドールだった。

このアイネートルこそが自身の主人であるケインの命を奪ったのだった。

アイネートルは緑光を放ちながら浮かび上がる。

「あんたも力を見せてよ。」

アイネトールの声は高く、辺りによく響く声だった。

「んだと？」

突然現れた禍々しい霊圧を放つその妖精のようなドールに一角は警戒心を最大にしていた。

「アハハハハ!!」

アイネトールの光はさらに強くなり、カマキリの上半身のような姿に変わる。

その手は巨大で指一本一本が鋭い刃のようで、赤く光る眼が不気味に輝いていた。

「アハハハ！」

アイネトールが一角に向け鋭い刃を振るう。

「なんだこの禍々しい霊圧は、バウントの力が弱まっているのにこれ程の力とは、」
古賀は上空のアイネトールと一角を不安の眼差しで見つめていた。

「クソ、硬えな、。まだ威力が足りねえ、。」

威力の上がった龍紋火着火丸がアイネトールの刃に弾かれていることから、その刃は相当な高度であることが窺える。

「待て、アイネトール。」

無暗矢鱈に龍紋火着丸を攻撃し続ければ、威力が増していくことを懸念した狩矢はアイネトールに声をかけた。

「あんたは黙っててよ！」

しかしアイネトールは狩矢の命令を無視し、一角への攻撃を続ける。

「あんたの力も見せてよ!!」

一角はアイネトールのしなる刃を防ぎ続けるが、鞭のように動く刃を前に、だんだんと体に傷がつき始めた。

「何もしないの？あんた死んじやうよ!?!」

一角は無言のまま攻撃を受け続ける。

「つまらない、。もう終わらせよつか。」

嘲りながら攻撃を続けるアイネトールは一角にとどめを差すべく、両手を大きく振りかぶった。

その時、三振の斬魄刀の龍紋が紅く染めあがる。

「行くぜ、火火着丸!!」

龍紋火火着丸の刃は赤く熱を帯び、ゆらゆらと陽炎を発生させている。

「焼き斬れ!龍紋火火着丸!!」

山本元柳斎重國の卍解の能力と形容したのは間違いではなかった。

元柳斎がかつてユーハバツハに化けたロイド・ロイドを斬り捨てた時のように、一角も袈裟斬りの形でアイネトールを切り伏せたのだ。

「そん、な、、、、、」

アイネトールは斬り口からだんだんと蒸発するように空気に溶けていった。

同時に狩矢はガクつと膝から崩れ落ちた。

「だから、、待てと、、言っただ、、、、」

ドールは自分の一部。

今の狩矢は自身のドール、《メツサー》以外にも、《ゲゼル》や《アイネトール》を自分の力として従えていた。

その自身の一部が消滅したということは狩矢にとっても大きなダメージであること

は言うまでもなかった。

狩矢は膝をつき、呼吸を整えている。

しかし、狩矢の息はさらに上がり始めた。

「どうしたあ？もう終わりじゃねえだろうなあ？」

膝をついている間に一角の周りに浮かんでいた黒い眼球の《ゲゼル》がすべて斬り落とされいたのだ。

「やはり、、、使い慣れないドールを使ってもだめだな、、、。」

「狩矢はゆっくりと立ち上がると左手に螺旋状の風を発生させた。

「やはりお前しか、、、行くぞ、、、メッサー。」

そして左手を振るうと風のドリルが弾き出され一角を襲う。

その攻撃を一角は手拳で殴り、弾き飛ばした。

「おい！てめえ！小手先のつまんねえ技出してんじゃねえよ！」

「お前の全力で来いよ。」

一角は不壊龍紋火火着丸を構え直した。

「ふっ、双極の丘で刃を交えた時とは大違いだな。斑目。」

狩矢は全身に風を纏い、右手の刀剣に全霊圧を注ぎ込んだ。

「御託はいい、、、行くぜ、、、！」

一角も三振の不壊龍紋火火着丸に全霊圧を込め迎え撃つ。

勝負は一瞬。

目にも止まらぬ刃の衝突が、大きな衝撃波と共に同心円状の突風を発生させた。

突風が止むと、一角と狩矢は背中合わせに間合いを取っていた。

「流星は、護廷隊最強、、、十一番隊の副隊長だ、、、。」

「当たり前だ。なんたって今日のオレは過去最高にツイてるからな。」

狩矢は腹から胸にかけて大きく斬られ、勢いよく吐血した。

「私は、、、バウントを、、、」

そのとき狩矢の頭に断片的な記憶が流れ込んでくる。

それは途切れた記憶の先だった。

黒崎一護との一騎打ち。

斬られたのにも関わらず、憎しみはもうなかった。

そして穏やかな顔をした自分。

——終わりのようだ——

——黒崎、、、私は——

そこで完全に途切れた記憶。

かつての記憶を思い出し、少し口角の上があった口からは依然として血が流れている。

「そうか。私は、、」

今の自分も同じ顔をしているのだろうか。

しかし心は同じだと言い切れる。

狩矢は背を向けたまま顔を上げ、小さくつぶやいた。

「黒崎、古賀、一ノ瀬、そして斑目、、」

「刃を交えた今ならわかる、私は、、」

「狩矢は言葉の途中で灰となって消えていった。

「本当に最後まで言い切らないやつだな。」

古賀も穏やかな顔を浮かべていた。

この戦いを経て、バウントという種族は虚、破面、滅却師、完現術者と並び認知されるようになった。

そして蘭島と一ノ瀬がバウント対策として外世部隊に入ることとなり、古賀はヨーロッパで威勢のいい女性滅却師達と雑貨屋を営むことになるが………

それはまた別の話。

——刃を交えた今ならわかる——

——私は、信じられる仲間が欲しかった——

T o b e c o n t i n u e d

接続章

E x t r a I

（浦原商店前）

浦原商店前。

一護は戦闘中だった。

かつて霊王護神大戦中、虚圏で狩猟部隊隊長をしていた滅却師、キルゲ・オピーと刃を交えていたのだ。

「やりますね。黒崎一護。」

「しかし、、陛下復活の為、そろそろあなたには死んでもらいます☒。」

キルゲは右手と一体になった刀剣からかつて護神大戦でキルゲが一護を閉じ込めた監獄の弾を放つ。

「月牙十字衝!!」

しかし以前のようにはいかなかった。一護の放った十字の斬撃がキルゲの監獄を消し飛ばしたのだ。

いとも簡単に自身の攻撃を防いで見せた一護を目の当たりにし、キルゲは独り呟く。
「全く、、面倒ですね、、。」

「貴方のおかげで黒崎一勇と石田竜燕を逃してしまいました。ここで貴方を手早く斃して二人を捕縛するのが最善だったのですが。」

「あの時の貴方ならこの監獄で捕らえることも容易だったのですが、随分と力をつけたようですね。」

事実、護神大戦の際は一護が自分で監獄を壊したわけではなく、グリムジョーがキルゲを斃したため監獄から解放されたのだ。

「そつちこそ随分と余裕だな。いいのかそんなにゆっくりしてて。」

一護は余裕な表情でキルゲに問いかけた。

ここで自分がキルゲと対峙していれば一勇達に危害が加わることはない。

しかし一護の予想は外れることとなる。

「ええ。貴方に遭遇した場合、貴方にゆっくりして頂くのが私の役目ですから。」

キルゲの不気味な笑みを見て一護は即座に理解した。

「まさか、、!!」

「私一人で来るはずがないでしょう。仲間はまだいますよ。」

「ちようど二人。」

キルゲはそう言うのと影の空間を開いた。

「行け、ソルダート聖兵。」

その影の空間から見えざる帝国の残党が湧き出てくる。ヴァンデンライヒ

「クソっ！」

一護が斬月を振りかぶった時だった。

自分のものではない聞き慣れた斬撃が雑兵たちを蹴散らしていく。

「月牙天衝！」

振り返ると、そこには白髪 of 骸骨を模したような風体をした男と、本と刀を持った男が立っていた。

「銀城！月島！お前らなんで!?!」

白い骸骨を模したような男、銀城が笑いながら一護に答えた。

「そりゃ俺たちの部隊長が無様にやられそうになってんだ。ケツ拭きに来てやったんだよ。」

「く、、、てめえ、、、」

痛いところをつかれた一護は顔をしかめている。

「早く行きなよ。一勇が狙われてるんだろう?」

月島のその言葉に一護は頷くと、瞬歩でその場を離れようとする。

「逃がしませんよ!」

キルゲは先ほどより大きな監獄を一護に向け撃ち出した。

「おっと、俺たち倒してからにしろよ、オシヤレおかつぱ頭。」

銀城は瞬歩で一護の前に移動し、キルゲの監獄の霊圧弾を切り伏せる。

そして一護の方に振り向き強く叫んだ。

「早く行け!一護!」

「ああ!」

そして一護は瞬歩でその場を後にする。

「本当に邪魔ばかり、貴方達は手っ取り速く殺し^{ます}」。

く空座町某所く

「竜燕！大丈夫か？」

「大丈夫ですよ！！それより自分のことを気にしてください！」

一勇と竜燕の前には女性滅却師二人が立ちはだかっていた。

「もう終わりく？ヤツちやうよ？いいの？」

正しくは女性滅却師一人と男性滅却師一人だが。

容姿からは少女としか見えない男性滅却師、ジゼル・ジュエルが意識を失った死神達を引き連れていた。

そしてもう一人のピンク色のロングヘアをした女性滅却師、ミニーニャ・マカロンもジゼルの後ろで構えていた。

「つまらないから終わらせよ〜と。」

ジゼルが手を前へ突き出すと、我を失った死神達が一斉に一勇達に襲い掛かかっていく。

「三天結盾！私は拒絶する！」

そう叫ぶ声が聞こえると、一勇達の目の前にオレンジ色の盾が現れた。

「何なの、あれ？」

ジゼルは目を細め鬱陶しそうにそのオレンジ色の盾はひとしきり死神達の斬撃を受け切る様子を観察している。

さらに背後から一勇達の頭上を人影が飛び越えると、その人影は刀のようなものを抜きながら声高に叫んだ。

「掻っ斬れ!!車輪鉄燕!!」
ゴロンドリリーナ

その人物はオレンジ色の盾の前にいる死神達を次々となぎ倒していく。そして二人の人影が滅却師達の目の前に立ちはだかった。

「お袋!」「母さん!」

その人物とは一人が一勇の母の織姫。
もう一人が竜燕の母、チルツチだった。

「母さんなんで、、、力はもう、、、」

元々破面だったチルツチは人間となるために特別な義骸に入り、人間化していたのだ。

そのためチルツチはもう破面の力を使えないはずだった。

「浦原からいざって時のためにもらつといたの。5時間だけ破面の力が戻る薬。」

チルツチは小瓶を見せびらかすように振ってみせた。

「まあ使うと副作用がひどいらしいから使いたくなかったんだけど、、、さ!!」

そう言うときチルツチは小瓶を投げ捨て、自身の触手の先から赤黒い光を放ちながら霊子を溜め始める。

そして高密度な靈子の塊をジゼル、ミニーニヤに向け放出した。

「虚閃！」^{セロ}

それを見たミニーニヤは筋肉で腕を肥大化させ前に構えて防御する。

虚閃はミニーニヤの肥大化した腕に直撃し、あたりに煙が立ち込めた。

「一勇達は早く竜弦さんのところまで逃げて！」

織姫は一勇達の方を振り向かずに手だけで先に行くよう促した。

「あの義父クン野郎には言つてある！病院に行きな！」

チルツチは竜燕の方に振り返り、織姫と同じように手で先に行くよう示す。

「けどお袋！」

「一勇さん早くしてください！」

竜燕は一勇を引っ張りその場を後にした。

「とは言ったものの、子供の前だからってカッコつけるもんじゃないね、」

久々の帰レスレクシオン刃の負担にチルツチはかなり苦しんでいる。

煙が晴れると滅却師クインシー・フォルシュテンドイツヒ完聖体となったミニーニヤが余裕な表情で立っていた。

「行きますよう！」

ミニーニヤは筋肉でさらに腕を肥大させると、右手を大きく振りかぶり織姫達に殴りかかる。

「三天結盾！私は拒絶する！」

織姫はミニーニヤの拳の大きさを見て即座に防ぎきれないと判断した。

「これは三天結盾でも、、！」

「何やってんだゴラア！」

モヒカンの男が割って入りミニーニヤの拳を殴り飛ばすとミニーニヤの指は不自然な方向に折れ曲がった。

「あなたは、」

以前見たことのあるその面影。

織姫は少し間を置きその人物を思い出した。

「スシがわら君!!」

「し、獅子河原ツス!!!」

その後ろからパンツスーツを着たポニーテールの女性が顔をのぞかせた。

「ちよつと獅子河原、アンタ飛ばし過ぎないでよ。」

「リルカちゃん!!」

織姫の親友、毒ヶ峰リルカも織姫達のピンチに駆けつけたのだった。

「獅子河原!」

「オウよ!!」

獅子河原は背負っていた大きなリュックサックをひっくり返し、小さなぬいぐるみを

大量に地面へ落とす。

「アディクシオン・シヨット!!」

リルカが銃のような物を操られた死神に向けハート型の弾を打ち込んだ。

「あんた達を許可するわ!」

すると死神達は次々と小さなぬいぐるみへと吸い込まれていく。

死神達をぬいぐるみに閉じ込め無力化したのだ。

「へえ、、、やるじゃん。」

く空座町某病院く

竜燕達が祖父である石田竜弦の営む病院へ到着し、勢いよく入口の扉を開けると滅却師十字を手に携えた竜弦が地に臥していた。

「なっ、一体何が、!?」

そして次に目に入ったのは、竜弦の傍らで不気味に佇む細目の女性だった。

「はじめまして、石田竜燕、黒崎一勇。」

心地よく響き、神秘的かつどこか恐怖心を煽る声。

「私はユーグラム・ハツシユヴァルトの意思を継ぐ者。」

To be continued Extra II.....

Extra II

く空座町某病院前く

「私はユーグラム・ハツシユヴァルトの意思を継ぐ者。」

細目の女性がそう言った瞬間、一勇の立っている場所の床が青く光り始めた。

「これは、破芒陣!？」
シユブレンガー

一勇は驚く暇もなく、地面に刻まれている滅クインシューツアイヒエン却印から生成された靈子の箱に閉じ込められてしまう。

「貴方の中の陛下の欠片を最適な者へと移植します。」

細目の女性は靈子を集め弓を作ると、銀の鍬やじりを取り出し弓にあてがった。

「おい、やめろ!!」

一勇はその女性が竜燕のいる靈子の箱に向けうとうとしているのを見て、すぐ様斬魄刀を引き抜く。

が、間に合わず一勇は霊子の箱ごと射抜かれた。

「一勇さん!!」

鏃は一勇を貫通した後、背後にある扉に刺さり青白く光りを放っている。
破芒陣が消滅すると、倒れている一勇が目に入った。

「一勇さん！大丈夫ですか!？」

竜燕はすぐさま駆け寄り、倒れている一勇の体を揺らしたが反応は得られない。

その間に細目の女性滅却師は扉に刺さった鏃を引き抜いた。

「これでハツシユヴァルト様も、、、、」

少しの間鏃を見つめると、覚悟を決めたように竜燕の方に向き直る。

「一勇!!」

女性滅却師が鏃を再度弓にあてがったところで一護が息を切らせて到着した。

そして倒れた一勇とその体を揺らす竜燕が目に入り、一気に頭に血が上ってしまった。

「てめえ!!」

一護は目の前に佇む明らかな敵を睨みつける。

「黒崎一護。まさかここまで速くキルゲ様やジゼル様、ミニーニヤ様を退けたというのですか?」

「うるせえ! てめえ一勇に何しやがった!?!」

「殺してはいませんよ。滅却師の、陛下の力を頂いただけです。直に目覚めるでしょう。」

「なぜ一勇なんだ!? ユーハバツハの力なら俺でもいいはずだろ!」

女性滅却師は鎌を当てがった弓を下すと、ゆっくりと一護の問いに答え始めた。

「黒崎一勇は10年前に陛下の残片に触れました。その時に陛下の力が潜在的に黒崎一勇の体に宿ったのです。」

「一勇が、、、?」

「そしてその残滓は今この鎌に、、、」

「鎌、、、?」

「これは虚の霊子を集めて作った鎌です。」

「虚だと?」

「ええ、滅却師の力は元々陛下のお力。滅却師の霊子では射抜き取ることはできません。」

ん。」

「かと言つて死神の力では威力が足りない。そこで、、、」

一護は女性滅却師に代わつて言葉が続けた。

「滅却師が抗体を持たない虚の霊子か。」

「そういうことです。」

「あとはこれを石田竜燕に突き刺し霊子を流し込めば陛下を復活させることができま
す。」

女性滅却師は再度竜燕に向け弓を引き絞る。

「そうかよ、、、！ならそれを竜燕に突き刺させなきや復活しねえつてわけだ。」

一護は二振りの斬月を手にとると女性滅却師に正対し構えた。

「月牙十字衝!!」

女性滅却師は十字の斬撃が直撃すると同時に姿を消した。

滅却師の歩方、飛廉脚だ。
ひれんきゃく

「どっだ?」

一護は霊圧覚知を最大限にし、女性滅却師の行方を追う。

「そこか!!」

一護の後方に姿を現した女性滅却師は鎌を弓から外していた。

そして銀筒ぎんとうを一護へと投げつけ、口上を唱え始める

「大気レンゼ・フォルメル・ヴェント・イ・グラールの戦陣を杯に受けよ。」

「ハイゼン聖噬。」

聖噬ハイゼンという霊子でできた柱が一護を襲う。

「黒崎さん!!」

「やられるかよ!・月牙天衝!」

咄嗟に片方の斬月で月牙を放ち聖噬ハイゼンを突き破る。

しかし女性滅却師は再び銀筒を目の前に投げ口上を唱えた。

「イ・シエンク・ツァイヒ盃よ西方に傾け、ゾオルコール緑杯。」

月牙天衝に衝撃波をぶつけ相殺させた。

衝撃波による砂煙が晴れると、女性滅却師はすでに次の銀筒を投げていた。

一護ではなく竜燕に向けて。

ツイエルトクリーク・フオン・キーツ・ハルト・ツイエルト
「銀鞭下りて五手石床に墮つ。」

一護は竜燕へと手を伸ばす。

「竜燕!!」

「グリッ
五架縛。」

竜燕は霊子の縄によって拘束されてしまった。

そして女性滅却師は鏃を弓に当てがい目いっぱい引き絞った。

「く、く、く、」

目の前で弓を引き絞る滅却師を見て竜燕が観念したときだった。

目の前に突然人影が現れ竜燕の視界を覆う。

「黒崎さん!」

竜燕がそう叫んだと同時に、一護が鏃に射られ吹き飛ばされ竜燕にぶつかった。

大きく吹き飛ばされた一護に刺さった鎌から大きな霊圧が流れ出す。そしてその霊圧は一護を包み込み始めた。

浦原商店前

「この霊圧は一護なのか、？」

一護の異様な霊圧に銀城達は自身の霊圧覚知に疑いを隠せなかった。

「彼女、しくじったようですね。」

そして銀城達と対峙するキルゲは静かに呟いた。

空座町某所

「!!」

リルカも一護の異変に気が付いていた。

「一護、、、？滅却師の霊圧が高まっていったって、、、？」

ジゼルは渋い顔をしながら弓を引き絞っている。

「ちよつとした誤算だけど、ようやく陛下の復活かあ。」

く空座町某病院く

「黒崎さんが!!まずい、、、！一勇さん！起きて下さい!!」

一護の体に乗っ取ったユーハバツハがゆっくりと起き上がり、自身の体をまじまじと見ている。

「まさか、一護の体で復活するとは、、、。」

そして一護の姿をしたユーハバツハは目の前にいる二人の青年に目をやった。

「その霊圧、、、。そうか。お前達も我が息子というわけか。」

「お前は、、、ユーハバツハ、、、？」

竜燕も名前を聞いたことはあった。

滅却師の始祖であり、尸魂界に侵攻した男。

竜燕はすぐさま滅却師クインシークロス十字を手に取り弓矢を構成した。

「見えているぞ。我が息子よ。」

竜燕が霊子で構築された弓に目をやると、あろうことかすでに朽ち果てていた。

「なっ、っ、っ！」

「滅却師の基本は霊子の隷属だ。」

竜燕が構築した弓の霊子はユーハバツハにどんどんと吸い取られていく。

「お前はまだ霊子の隷属ができていない。」

「陛下、っ、っ。」

細目の女性滅却師はユーハバツハの背後からゆつくりと近づいた。

「お前は確かハッシュヴァルトの、っ、っ。お前が私を蘇らせたのか？」

「はい。」

女性滅却師は恭しく頭を下げた。

「なぜだ？」

女性滅却師は面を上げると、自身の願いでもある理由を告げた。

「ハツシユヴァルト様にもう一度付き従いたく、。陛下」

「そうか。」

ユーハバツハは一護の顔で柔らかく微笑んだ。

「では、その願いを叶えてやろう。」

女性滅却師の周りを高密度の霊子の弾が漂う。

「陛下、。？」

次の瞬間その弾は光を放ちながら女性滅却師を蝕んでいった。

まばゆい光に竜燕は手で目を覆う。

目を開くと女性滅却師の姿はなかった。

「まさか、。殺したのか、。？」

「望み通りハツシユヴァルトに付き従わせたただけだ。」

その残酷さ。

一護の姿形であるがためにその違和感はぬぐい切れなかった。

「さて、、、。お前には虚の力が色濃く残っているようだな。」

「一護の体にはなぜかもう虚の力がほとんど残っていない。」

ユーハバツハは手のひらを上に向けると、その上に霊子の球体を発現させた。

「お前の霊子を取り込んで虚の抗体を持った滅却師になるとしよう！」

そして竜燕に向けその球体を放つ。

「くっ、、、」

ユーハバツハの霊子の隷属で思うように霊子を操ることができなかった竜燕は、ユーハバツハの攻撃を待つしかない。

が、その時だった。

「虚ろえー！融月！」

そこには特徴的な、そしてどこか寂しきを感じる仮面をつけた一勇が立っていた。

禍々しくも暖かい霊圧がユーハバツハの放った球体を打ち消す。

「一勇さん！」

父親の異常な霊圧を感じ取り、一勇は事の顛末を悟った。

「親父、、、」

一勇に答えるようにユーハバツハは言葉を発した。

「お前は一護の、、、。」

「ああ！俺は黒崎一勇！」

「死神代行だ!!」

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

E
x
t
r
a
III
:
:
:
:

第4章 空座町迎撃戦（後編）

第11話 0℃

「水天逆巻け、ねじばな振花。」

「舞え、そでのしらゆき袖白雪。」

水と氷が相対する中、融和する水と氷もあつた。

くきしゅうおう燧叢王迎撃地く

きしゅうおう燧叢王が黒腔を抜けると、その先には二つの人影が。

金髪に褐色の肌、レザージャケットを着た女性。

「首元には破面独特の仮面の名残が見られる。

そして白髪で《十》の隊長羽織り羽織った青年。

まだ青年ではあるが、彼には幾度もの修羅場を乗り越えてきたような風格があった。

「お前らが私の相手か。破面に若造が相手とは舐められたものよ。」

感情を表してはいるが、その霊骸の無機質な表情がより不気味さを醸している。

「俺たちはお前にとって一番の天敵だと思っがな。」

そう答えたのはかつて神童とまで呼ばれた天才、十番隊隊長日番谷冬獅郎。

「まさかお前と共に戦う日が来るとはな。」

そしてその横には《虚圏の女王》と呼ばれる女性破面、ティア・ハリベルも立っていた。

「日番谷冬獅郎とティア・ハリベル……」

「我々の名を知っているのか。」

「ノヴァデイオは用意周到でな。基本的な相手戦力の情報は全てある。」

「なら俺たちのことはもう知ってるってわけか。」

「ああ。幼馴染を自らの手で刺した神童と、無様にも滅却師に囚われた虚圏の女王。」

「てめえ、、！」

「それに虚圏の女王に至っては、滅却師に捕縛されたときに力を削り取られたんだろう？」

それを聞いたハリベルは眉間にしわを寄せ、静かに目を閉じる。

事実、ハリベルの解放は以前のもので大きく違っていた。

肩にあった破面特有の外殻と右手にあった大きな刀剣が、滅却師との戦闘によって一

部削り取られ綱彌つなやしろ代家の騒動の後、完全に機能を失い全てを取り除いたのだ。

そのため破面の特徴として外見から見て分かるのは、首元から胸にかけて伸びている白い外殻だけだった。

「だが、お前を斃すにはこの残った力で十分だ。」

ハリベルは目を開き右手を前に出すと、その手の周りを水が渦巻き始めた。

「では、その言葉本当かどうか試してやろう。」

燬齧王は体から炎を噴出させ始め、その炎を胸の前に集めて火球を作り出した。

「防いでみろ！死神の小僧に破面の小娘！」

火球は冬獅郎たちに向け、勢いよく放たれる。

すぐ様ハリベルが右手の水を球状に集め、目の前に浮かべた。

「氷塊ひょうかいがん丸！」

冬獅郎が刀の切っ先を水の球に向けると、氷塊へと変わり勢いよく火球と衝突する。

氷塊は火球にぶつかりバラバラに粉碎されたが、その瞬間中から水が飛び出した。

「なるほど…… 水で威力を落とす、水で相殺させたか。だいぶ対策を立ててきたようだな。」

「お前の炎じゃ俺たちは斃せねえ。」

「なるほど。では山本重國の斬魄刀の威力を試してみるか。」

燬齋王は腰に携えた斬魄刀をゆっくりと引き抜いた。

「万象一切灰燼と為せ、フラマ・グラーヴオ流刃若火」

斬魄刀は凄まじい霊圧と共に炎を吹き上げる。

斬魄刀の名は違うもののその解号と霊圧は流刃若火そのものだった。

「やはりお前らが盗んでいたのか、！」

それは一番隊隊舎に保管されていた元流斎の遺品。

京楽を通じて、中央四十六室から、元流斎の流刃若火と元七番隊隊長、こまむらさじん狛村左陣のてんけん天譴は霊王護神大戦中に紛失した、ということにするよう命令を下されていた。

しかし、京楽の命令はそれだけではなかった。

護廷隊を支え、護神大戦で命を賭して戦った二人の死神の名誉を捻じ曲げられた屈辱を晴らすため、その二振りの斬魄刀の調査部隊を設立させた。

そしてその部隊長に名乗りを上げたのが、現七番隊隊長の射場だった。

射場も大方、ノヴァディオ一派が盗んでいると踏んでいたが、居場所が突き止められず足踏みをしていたのだった。

「山本重國の斬魄刀で斬られることを誇りに思うがいい。」

喉が渴く。

冬獅郎は思い出すようにその熱さを感じていた。

「はあー！」

燬殿王が流刃若火を振るうと炎の斬撃が冬獅郎とハリベルに迫る。

「下がっている。」

ハリベルが冬獅郎の前に立つと水の盾を発生させた。

炎の斬撃が水の盾にぶつかると辺りが白い水蒸気で包まれる。

「くっ、」

ハリベルは感じ取っていた。

自身の放った水の霊圧が薄れていくのを。

「氷竜旋尾！」

水の盾と衝突し威力の弱まった炎を氷の斬撃が消しとばした。

「ただ一振りしただけなのに大騒ぎだな。小僧に小娘。」

「それはそうだ。さっきのお前の炎と違い、あの山本元柳斎重國の炎だからな。」

冬獅郎はそのハリベルの言葉に驚いていた。

ハリベルも認めていたのだ。

山本元柳斎重國という死神の力を。

「その減らず口をきけなくしてやろう。」

「城郭炎上！」

燬殿王が流刃若火を振り上げると、冬獅郎とハリベルをそれぞれ球状の炎の壁が取り囲んだ。

「たしかに、お前達二人が力を合わせると面倒だが、一人ずつに分けてしまえば取るに足

らん。一気に叩き潰してやる。」

炎に包まれた冬獅郎とハリベルはそれぞれ氷と水で炎を破ろうと試みが、どちらも氷と水を生成することができなかつた。

「まさか……！」

冬獅郎は護神大戦の時、滅却師の蒼都ツァントウに自身の卍解、大紅蓮氷輪丸を奪われたことがあつた。

その際、相手の使う大紅蓮氷輪丸が無効化された時があつたのだ。

それが、山本元柳斎重國の……

「卍解、残火の太刀。」

先ほどまで燃え盛る炎を纏っていた斬魄刀は、まるで鎮火したように煙を上げた。

予想外だつた。

いくら燬殿王が炎の化身だからといって、仮に流刃若火を持つていたとしても卍解までは使えないと思つていたのだ。

卍解は対話、具象化、屈服、そして理解を越えた先にある奥義。

他人の斬魄刀をたかが数日で使いこなすのは不可能でありであるため、冬獅郎をはじめとして浦原や京楽も始解ですらできないと踏んでいた。

が、しかし、燬叢王はやってのけた。

これが護廷隊側の大きな誤算となつたのは言うまでもなかった。

「さてどちらから先にするか。」

「破面で終わらせるのは面白くない。どうせなら護廷十三隊の天才で終わりにしよう。」

そう呟くと、燬叢王はハリベルを包む炎の方へと向かい、火の壁をすり抜け球体の中へと入った。

「先に虚圏の女王から片付けることにする。」

「虚閃!!」

三人の女性の声が重なり響く。

そして3本の虚閃が炎の壁の上方を打ち破った。

「破道の九十一、千手皎天汰炮！」

そして冬獅郎の方の炎の壁にも鬼道によつて穴があけられる。

「ハリベル様！助けに来ました！」

「おいアパッチ！なにでしゃばつてんだよ！さつきのはあたしらも撃つただろ!？」

「あたしのが一番威力強かつただろうが！」

「あんた達！言い争つてないで戦いなさいよ！」

「あのお猿さん達と一緒にしないで欲しいですわ。」

「誰が猿だ！スンスンてめえ！」

冬獅郎とハリベルが炎の壁から脱すると、そこには十番隊副隊長の松本乱菊と、ハリベルの従属官であるアパッチ、ミラ、スンスンの三トレス・ベステイア獣神が立っていた。

「行くぜ！」

アパッチの掛け声とともに4人はそれぞれ力を解放させる。

「突き上げろ、碧鹿闘女！」

「喰い散らせ、金獅子将！」

「締め殺せ、白蛇姫。」

「唸れ、はいねこ灰猫！」

アパッチ、ミラ、スンスンは虚閃を、乱菊は灰の刃を燬燬王に向け放つ。

「残火の太刀・西、ざんじつぐい残日獄衣。」

燬燬王は高密度の霊圧を体に纏う。

その霊圧はまるで体から噴き出る炎のように揺らめいている。

4人の放った渾身の攻撃はこの残日獄衣によつて簡単に阻まれた。

自身の始解も防がれたのを見て、乱菊は沈黙している冬獅郎の元へと駆け寄る。

「た〜いちよつ！」

乱菊にハイテンションで声をかけられた冬獅郎はすでに鬱陶しそうな顔をしていた。

「あれじゃ卍解使えませんねえ〜？かといつて、あの十刃エスパーダみたいに、虚閃とか出せませんもんねえ。またミルフィーユ大作戦でいきますか？」

「だからそんな作戦名にした覚えはねえ！それに残火の太刀じゃ卍解どころか始解も無理だ。」

乱菊はその言葉を聞き、嬉しそうに口角を上げた。

「じゃああたしが卍解しましょうか？」

「炎相手じゃ使えないだろ。」

「まあそうですけど、氷も出せない無能な隊長よりは役に立つと思いますけどね！」

「てめえ……」

冬獅郎と乱菊がやり取りをしている間に、アパッチ、ミラ、スンスンは自らの片腕を贅として《アヨン》という混合獣キメラを生み出し、ハリベルを含む5体で燬燬王と戦っていた。

「ちよろちよろと鬱陶しいな。」

燬燬王は炎で薙ぎ払い、一旦ハリベル達と距離をとると、斬魄刀を地面に突き刺した。

「残火の太刀・南、かかじゆうまんおくしだいそうじん火火十萬億死大葬陣！」

炎が地中に伝わり赤く光りを放ち、一斉に何百という黒い骸骨が地面から這い出てくる。

「なんだこれ!？」

アパッチはその異様な光景に冷や汗を流している。

「呆けている暇はありませんわよ！」

すでにスンスンは虚閃を放ち這い出てきた骸骨をなぎ倒していた。

「数が多すぎる……」

ハリベルも虚閃を放ちながら応戦するが、数の勢いに飲まれそうになっていた。

「隊長！これならあたしいけますよね？」

「そうだな。」

乱菊はいつものうつぶんを晴らすごとく、冬獅郎に上から言葉を浴びせる。

「じゃあお願いしてください。」

ブチツと音が聞こえるくらい頭にきた冬獅郎は思い切り怒鳴り散らした。

「つまらねえこと言つてねえで卍解しろ!!」

「せっかく隊長より優位に立てたのに……まあいつか。」

乱菊はトホホ、というような顔で骸骨の集中している場所の上空に移動する。

「あんたたち！下がってなさい！」

ハリベル達に呼び掛けると、灰猫を刀剣状態に戻し、刀身に手をかけた。

「卍解。」

「燃柄灰猫！」
もえがらはいねこ

乱菊の言う通り、冬獅郎の元まで退いたハリベルは乱菊を見据えたまま尋ねる。

「おい、一人で大丈夫なのか？お前の部下なのだろう？」

大量の骸骨を前にして、乱菊一人で立ち向かうことにハリベルは不安を抱いていたのだ。

冬獅郎は焦るでもなく、心配するでもなく、淡々と乱菊の卍解の力を説明し始める。

「松本の卍解は、始解で使う灰をより多く生み出す能力だ。」

「なんだそれ！雑魚じゃねえか！」

思いのほか弱そうな卍解にアパッチが思わず声を上げた。

「まあ、待て。まだ続きがある。」

ハリベル達が心配そうに乱菊の方を見ると、乱菊の周りの空気がゆらゆらと陽炎のよう揺れていることに気付く。

「一人でだど？この燬殿王と流刃若火を前に副隊長如きの卍解で太刀打ちできると思われているとは……舐められたものよ。」

燬殿王は副官如きでは相手にならない、と嘲笑っている。

その間も、冬獅郎はハリベル達に説明を続けていた。

「灰を生み出すには物を燃やさなきゃいけない。松本の炎は、物理的に形ある物ならなんでも灰にできる。」

「やつの卍解の能力の注目すべきところは、その《結果》じゃねえ、《過程》だ。」

「形あるものすべてを燃やし尽くす炎か。」

乱菊は自身の周囲から炎を放出させ、手掌で操り大量の骸骨を包み込んだ。ほんの数秒ですべての骸骨、瓦礫、草木が灰へと帰す。

「残念ね！これでその技は封じたわ！」

「なるほど……だがまだ一つが封じられたただけだ。」

燬殿王は霊圧を上げ、斬魄刀を構えなおした。

「残火の太刀・東、旭日刃きょくじつじん。」

く霊王の右脚迎撃地く

京楽達が霊王の右脚を乗っ取ったメタスタシア斃した直後のこと。

「段々と勝敗が決してるみたいだね。」

「卯ノ花サンも復活させたらよかったのに。ほんならあの人無双してたんちやうか？」
ボロボロになった平子が冗談めかして、前四番隊隊長、卯ノ花烈を復活させなかった理由を暗に尋ねた。

「本当は卯ノ花隊長もその予定だったんだけどさ。復活させたら怒られそうで。」
「怒られる？」

「〃四番隊隊長は勇音が、剣八は更木隊長が〃 ってね。だから今回は死神2人と破面1人だけにしたんだ。」

「破面やと!？」

「大丈夫さ。信頼できる十刃エスバレードだからね。」

「しかも十刃かい!十刃に信頼できるもクソもあるかいな!!」

平子はてつきり、涅骸部隊や外世部隊のネルやハリベルだと思っていた。

しかし、十刃で、かつ復活した破面と言えば完全に新戦力ということになる。

「ほんまに、っ、っ、っ、ん?死神2人っ、っ、?」

もはやツツコミも間に合わなくなっていた。

「大先輩さ。卯ノ花隊長以上にね。」

平子は頭の中で検索をかけていた。

卯ノ花以上に大先輩で、かつすでに死去している死神……

その検索を遮るように京楽が平子に話しかけた。

「この霊圧わかるだろう？」

「ああ、爺さんの卍解やろ？持ってたのは当たってたけど、その後の予想が外れたなあ。まさか卍解使えるとは思わへんわ。」

「けどこれであの人も黙ってないだろう。」

「あの人ってさつき言ってた死神かいな？」

「ああ、こんな残火の太刀を見たら怒るだろうねえ。」

「だから誰やねん！」

「そりやもう『雷鳴』の如くね。」

T o b e c o n t i n u e d

第12話 雷鳴の彼方へ

—— 療やき祓はらい羽は搏ばけ、燬き毘こう王おう ——

何故お前は山本重國に負けた。

何故お前は私を解放したまま燃え尽きた。

そのおかげで私は……

—— 斬魄刀が消滅したぞ!! ——

—— 今あるのH A 浅打100万本、これがギリギリD A ——

—— 鬼道衆準備整いました ——

—— 封印せよ!! ——

山本元柳斎重國。

流刃若火。

いつか必ず……

く 燬^{きこつ}王^{おう}迎撃地^じく

「残火の太刀・東、旭^{きよく}日^{じつ}刃^{じん}。」

乱菊の正解によつて、火^か火^か十^{じゅう}万^{まん}億^{おく}死^し大^{だい}葬^{そう}陣^{じん}が破^{やぶ}ら^れた燬^{きこつ}王^{おう}は、刃先に熱を集中させる旭日刃を繰り出した。

「これですべてを斬り伏せるのみよ。」

「行け！アヨン！」

アヨンは雄たけびを上げながら燬^{きこつ}王^{おう}に殴りかかる。
が、横に一閃。

アヨンは動きを止め沈黙してしまった。

そして肉の焦げた匂いがあたり立ち込める。

アヨンの腰は斬られたのではなく、細胞単位で焼^やき消^けさ^れたのだ。

「さあ次はお前達だ。」

燬殿王は瞬歩でアパッチの前まで移動すると、斬魄刀を振り上げた。

燬殿王は霊圧を感じさせない特殊な霊骸に入っていたため誰も反応することができなかつた。

「アパッチ……！」

ハリベルも探査神経ベスキスによる霊圧覚知が追い付かず接近に気付くのが遅れ、アパッチに向け手を伸ばすことしかできなかつた。

「くそっ……」

アパッチが死を覚悟した時だつた。

突然現れた影。

白髪で、どこか西洋を思わせる死覇装を着た人物が残火の太刀を受け止めていた。

「雀部副隊長……？」

乱菊は目を丸くしてその人物、前一番隊副隊長、雀部長次郎を見つめている。

「旭日刃を受け止めただと？」

燬殿王は突然割つて入られたことよりも、旭日刃を受け切つたことに驚きを隠せないでいた。

「やはり……それは残火の太刀だな？」

元流齋殿の卍解。

元流齋殿は卍解の鍛錬を欠かさなかつた。

ユーハバツハを討ち損ねた自責の念からか、はたまた門下生にその姿を見せるためかは分からない。

——聞いたか？元流齋殿は卍解を変化させたらしい——

——残火……ですか？——

——奴は文字通り血反吐を吐くほど鍛錬し、残火という名を聞いたのだ——

かつて元流齋殿に卍解で挑んだときに、《赤子のような卍解》と言われたのは、元流齋殿自身まだまだ卍解に改善の余地があつたからだということを知つた。

そして私自身も血反吐を吐くまで卍解の鍛錬を欠かさなかつた。

その鍛え上げた卍解をもう一度元流齋殿にお見せしたかつた。

京楽殿から滅却師との戦いの顛末を聞き驚いた。

あの滅却師が元流齋殿に対して、私の卍解を使ったのだから。

元流齋殿が私を弔うために、我を失い刀を振るってくださったのは何事にも代えがたい幸せであることは間違いない。

しかし、そのせいで元流齋殿が卍解を奪われ、ユーハバツハに討たれる原因を作ってしまったのなら……

私が卍解を奪われ討ち死にしたことは悔いしかない。

雀部は燬毳王の刀を振り払うと、霊圧を高め解号を唱えた。

「^{うが}穿て、^{ごんりようまる}蔽霊丸。」

雀部の斬魄刀はレイピアのような形に変形し、フェンシングのように燬毳王の胸めがけて突きを繰り出した。

燬毳王は咄嗟に流刃若火で防御するが、うまく受け流せず左肩に突きを受けてしまう。

すると左腕がビクンと大きく震え始めた。

「これは……電流か……！」

燬毘王はかつて自分の主がこの攻撃を受けていたことを思い出した。

「邪魔だな。」

そう言うとう燬毘王は何の躊躇いもなく、自身の左腕を斬り落とした。

「さつきは受け止められたが、これならどうだ？」

再度霊圧を感じさせない瞬歩で雀部の目の前まで移動し、斬魄刀を袈裟斬りの形に振り上げる。

「天地灰尽てんちかいじん！」

燬毘王は残火の太刀・北、天地灰尽を渾身の力で振り下ろした。

が、その斬撃はまたもや雀部に止められてしまう。

「な……なぜ……！」

雀部は偶然か必然か、敬愛する師と同じ言葉で“燬毘王の振るう残火の太刀”を否定した。

「元流齋殿の磨き上げた卍解は……この程度では断じてない!!」

残火の太刀を跳ね除け、巖靈丸を燬穀王の胸へと突き刺した。

「正解、黄煌巖靈離宮！」

胴体に電流が流れ麻痺状態の燬穀王に巨大な雷が襲う。

逃れることもできず、1秒ごとに何発もの雷に焼かれ続けた。

雷鳴が止むと、顔から右肩までしか残っていない燬穀王が地面に横たわっていた。

「雷の小僧なんぞに……敗れるはずがない……」

《雷の小僧》という呼び名を聞き、かつて流刃若火に並ぶ焔熱系斬魄刀を持つ死神を思い出した。

——雷の小僧、お前では私には勝てん——

——長次郎、奴は儂が討つ——

——重國！私の燬穀王の前に散れ！——

「そうか、あの方の……燬穀王か。」

「あの時双極の丘で、京楽殿と浮竹殿によって消滅させられたとばかり思っていた。」

ルキアが処刑される際、京楽と浮竹によつて消滅させられたが、燬毘王自身もまさか復活するとは思っていなかった。

「私もだ……」

燬毘王の体はゆつくりと燃え、すでに首元までが灰に帰していた。

そして消えそうな声で言葉を紡ぐ。

「私はもう山本重國に……流刃若火には負けない……」

「そうだろう……？^{えいてっ} 叡哲……」

雀部は、静かに消えていく燬毘王に言葉を返す。

「案ずるな、お主は一度しか元流斎殿に敗れておらん。今回は私に、巖靈丸に敗れたのだから。」

「そうか……そうだな……」

無表情ではあるものの、声は笑っていた。

「雷の小僧に負けるのも癪だが、流刃若火に負けるよりはましか……」

「焰を司るこの燬毘王が燃え尽きて没するとは……皮肉もいいところよ……」

そう言い終わると同時に燬毘王は燃え尽きた。

そして灰が風に乗って飛ばされていく。

そこには割れた義魂丸のようなものが残っていた。

——ですからこの先生涯を賭け、この卍解えいじさいがノ字齋殿えいじさいのお役に立つよう磨き上げて参る所存です——

「やつとこの卍解えいじさいがお役に立ちました。」
「十字齋殿。」

T o b e c o n t i n u e d

第13話 F a d e t o R e v a n g e

時は遡り、靈王護神大戦直後。

く流魂街某所の村く

ぴよこぴよここと耳を動かし、辺りを見回す子供の人狼族がいた。

「バイケイは？」

もう一人の子供の人狼族が答える。

「見つからないよー！」

シヨウマ、うるいという名の人狼族の少年達は、バイケイという人物を探していたのだった。

シヨウマとうるいが現七番隊隊長の射場鉄左衛門と出会う前の話だ。

く村の外れく

崖際に腰をかけた人狼族の子供が、遠くに見える尸魂界に対し憎しみの目を向けていた。

「なんで死神はのうのうと生きてる。」

目を細め、牙を剥き出しにしている。

「僕たち人狼族を虐げてたくせに、左陣様に助けてもらって。」

前七番隊隊長の狗村左陣も人狼族であり、護廷十三隊に入ってから顔は隠して人狼族と悟られないよう行動していた。

「左陣様は禁術を使って命を捨ててまで守ったというのに。」

霊王護神大戦中、狗村左陣は星十字騎士団シュテールンリッターの一人、The EXPLOSION爆発のバ

ンビエツタ・バスターバインという女性滅却師を退けた。

しかしそれは自身の心臓を捧げて発動させる《人化じんかの術

による捨て身の勝利。
人化の術が解ければ人狼としての狼ではなく、畜生としての狼となる。

尸魂界おくに葬られる前、つまり生前に理性を失って獣が如く命を奪った者が、人狼族として尸魂界で霊子構築される。

この罪を背負った者が《人》になることは禁忌とされていた。

「いつか僕が人狼族を、！」

その時、その人狼の少年、バイケイは林の中から歪な霊圧を感じ取る。

林の方へ振り返ると、その歪な霊圧はバイケイの数十倍もの大きさのある虚のものだった。

「なんでこんなに大きな虚が!？」

虚は凄まじいスピードで木々をなぎ倒して近づいてきている。

そしてバイケイの目の前まで来た虚は、鋭い鎌をバイケイに向け振り下ろす。

バイケイは驚きのあまり腰を抜かしたため、偶然にも虚の鎌は頭上で空を切った。

「うわああー！」

恐怖でパニックとなり立ち上がることでできないバイケイは瞬時に己の最後を覚悟した。

ーここまでかー

突然目の前に二人の人影が現れ、そのうちの一人が身の丈以上もある大きな鎌で虚を斬り倒した。

「大丈夫？」

鎌を持っていない方の人影、十代後半程でつんつんとした金色の短髪に赤色の前髪をした少女が手を差し伸べる。

「私はホムラ。」

ホムラの後ろから、同じく十代後半程で黒髪の、大人しそうな少年も顔を覗かせた。

「僕はシズク。」

バイケイはホムラが差し伸べた手を払い除けた。

ホムラは払い除けられた右手を見つめると、気を取り直して名を尋ねる。

「名前は？」

「言いたくない。」

バイケイは即答した。

「なんで？」

「名前の意味を知ったら、自分の名前なんて好きになれるはずがない。」

「僕の名前の《バイケイ》は有毒の植物の名前だ。皆から忌み嫌われる植物だよ。」

それでもホムラは引き下がらなかった。

「けど、きつと何か意味があるはずよ！」

そしてシズクも頷き続く。

「誰がつけてくれたの？」

「一族の上の人達。」

「じゃあきつと理由があるよ！大事にしなきゃ。僕らは昔名前が無くてね、、」

それからホムラとシズクは自分たちのことをバイケイに語った。

かつてある死神と離れ離れになったこと。

その死神に会いたい一心で、他の死神たちと対峙したこと。

死神達に討たれ、今はここで暮らしていること。

そしてホムラ、シズクという名はその死神がつけてくれたこと。

死神と対峙したと語っている時のホムラとシズクの顔は穏やかだった。

しかし死神に対し憎しみを抱いているバイケイは《死神に討たれた》

という言葉に、ますます憎しみを募らせていく。

バイケイはホムラ達も死神に敵意を向けている、と一方的な勘違いをしていた。

そういつた勘違いもあり、バイケイはホムラ達と打ち解け、それから一週間ほど彼女達の住む祠ほらで過ごした。

が、ある朝、鳴り響く金属音により目覚め辺りを見回すと、すでにホムラ達がいなくことに気づく。

バイケイが急いで祠の外へ出るとホムラ達が死神と戦っていた。

死神は10人程で、ホムラがシズクを連れ瞬間移動で攻撃を避けている。

その様子を見てバイケイは一心不乱に叫んだ。

「ホムラ、シズク！逃げよう！」

「ダメだ！理由はわからないけど、ここでこいつらの記憶を奪っておかないと、また襲撃

される。」

シズクが鎌を振るい、一人また一人と記憶を奪っていく。

「クソっ、、、餓鬼どもが、、、！」

最後の一人が刀を振るうと、その軌跡が斬撃となって宙に浮かぶ。

「破道の七十八、斬華輪ざんげりん！」

宙に浮かぶ斬撃はシズクに向かって放たれ、シズクの鎌に直撃する。

「シズク!!」

ホムラは白煙に巻かれたシズクを案じ、その名を叫んだ。

その死神は隙をつき、瞬歩でホムラの背後に回ると背中を斬りつける。

「がっ、、、」

ホムラはその場に倒れ、死神が縛道を放とうとした時だった。

「ホムラっ!!」

シズクが勢いよく飛んできて鎌を振るった。

息絶え絶えの死神は地面に伏し、何かに対し謝っている。

「申し訳、ません、、、なや、ろ様、、、」

まもなくして死神は息絶えた。

シズクの話では、どこかの貴族の手下だったそうだ。

なんでも、ホムラの瞬間移動の能力と、シズクの持つ記憶を刈り取る鎌を欲したらしい。

死神はやはり滅ぼすべきなんだ。

そしてバイケイはホムラたちの前から姿を消した。

「バイケイどこに行ってたの？」

何日かぶりに見た友の姿にうるいはびよこびよここと耳を振るわせながらバイケイに近寄った。

「もうバイケイと呼ぶな。今日から僕はホムラだ。」

「せっかく左陣様がつけてくれた名前なの？」

「な、な、」

なんとも形容しがたい衝撃がバイケイを襲った。

一族の英雄的存在だった狗村左陣がこの名前を付けたのだ。

この皆から忌み嫌われる梅バイケイソウ恵草の名を。

驚きと共に憎しみも湧き上がってくる。

バイケイは拳を握りしめると、村の外の方へと歩き始めた。

その姿を見てシヨウマはバイケイに尋ねる。

「どこに行くの？」

「復讐。」

バイケイはそう言い放った。

「それにもう、左陣様なんかじゃない。無様にも死神に利用された狗村左陣だ。」

ホムラ、絶対僕が仇を、死神を討つからね。

くホムラ迎撃地く

ホムラがかつてバイケイだったころを思い出しながら、黒腔を抜けるとそこは尸魂界ではない、見たことのない風景だった。

「なんだここは、、、？この建物は、、、？」

「これは現世の建物じゃ。現世くらい聞いたことがあるじゃろ？」

建物の陰から現れたのは、厳ついリーゼントにサングラスを掛けた七番隊隊長、射場鉄左衛門だった。

「お前は、！ 狛村左陣の部下だった、！」

「儂だけじゃないわい。こいつらもおる。」

さらに射場の後ろから人影が現れる。

「お前は、！」

それはホムラにとって関係の深い人物だった。

「うるい、シヨウマ、！」

かつて人狼の村で共に育った同じ人狼族うるいとシヨウマ。

彼らは死神になると豪語していたため、いつかは敵同士で出会うと思っていたが、こんなにも早く敵として対峙するとは予想だにしていなかった。

「お前ら、僕は狛村左陣の斬魄刀を持つてるんだぞ？」

ホムラは狛村の斬魄刀、天譴てんけんを鞘から引き抜いた。

「敵うと思ってるのか？ 命知らずだな。」

その言葉を聞いてもうるいとシヨウマは無言のまま真つ直ぐな眼差しを向けている。

「そうだ！ その死神に連れてこられたんだろ。だからお前達は間違ってたんだ。死神になるなんて、」

「違う、こいつらが自分から行きたいと言うたんじゃ。」

「友達のお前を止めたい言うて聞かなくてのう。」

「友達だと、？死神なんぞに友達などいない！」

その言葉と共にホムラは斬魄刀を解放させる。

「轟け、コレロ・デ・デイオ天 譴！」

「押し切れ、しぶん枝分、！」

「待つて！鉄さん！僕らにやらせて！」

シヨウマはそう言うのと、抜刀し解号を唱えた。

「輪廻せよ、ふかもんきよう不可聞経。」

刀には特に変化は見られないが、その後ろに半透明で銅色の大きな耳が浮かび上がる。

「なんだ、その斬魄刀は？耳でもよくするつてののか？」

「その通りだよ。」

耳の横から同じような色の手が現れ、まるで耳に手を当てているかのように耳にあてがう。

すると、途端にホムラはあらゆる雑多な音が大音量聞こえるようになった。

「なんだ、！この雑音は!!」

「音に気を取られすぎだよ!」

大音量の雑音に苦しんでいるホムラの背後からうるいが斬りかかる。

しかし、人狼族だからかホムラは咄嗟のうるいの声に反応し、体勢を変え斬撃を間一髪で躲した。

「うるい! 声出しちゃダメだつて! せっかく全部の音を大音量にしてるんだから!」

叫ぶ声は鼓膜を突き破るほどの音量となつてホムラを襲う。

しかし感覚が研ぎ澄まされて音量が大きく感じるだけで、実際に破れることはない。

「じゃあ次はあれでいこう!」

そうシヨウマに呼びかけると、うるいは再度瞬歩でホムラの視界から姿を消す。

「またか、！だが背後にさえ気を配っていれば、!」

「(いつだ? いつくる?)」

ホムラが雑音の中からうるいの瞬歩の音を聞き分けていた時だった。

突然の静寂。

一瞬何が起こつたのか理解できなかつた。

その瞬間、ホムラの背中に激痛が走る。

ホムラは前のめりに倒れそうになるが、斬魄刀を地面に刺して体を支えた。しかし刀を地面に刺した音が聞こえない。

そしてショウマの方を向くと、宙に浮く手が耳を塞いでいたのだ。

「なるほど、、、ごさかしい能力だな、、、。」

「聞こえてない今のうちに僕も解放しとくか。」

ホムラの背中を斬りつけた後、間合いをとったうるいは斬魄刀を解放させるべく霊圧を上げていく。

「恐怖せよ、せんせんりつりつ織織慄慄。」

静寂の中、背中の痛みに耐えながらホムラが立ち上がると、次は左から気配を感じ刀を構えた。

「、、、？誰もいない？」

その瞬間、右から気配を感じ再度刀で防御するが、またもや誰もいなかった。「なんだ、、、？」

するとあらゆる方向から気配を感じ、ホムラは対応しきれなくなりパニック状態になった。

そしてまた背中に激痛が走る。

すぐ様間合いを取ると、背後にはうるいが立っていた。

「なるほど、、あいつの能力か、、。こぎかしい!!」

「天譴!!」

ホムラがうるいに向け天譴を振り下ろすと、同時に巨大な刀を持った手も振り下ろされる。

「わわっ、、」

範囲の広い攻撃に、うるいは直撃はしなかったもののコンクリートの破片を体に受け、その場にうずくまってしまった。

「とどめだー!」

ホムラは再度天譴を振り下ろす。

「うるい!!」

シヨウマは咄嗟に割って入り、斬魄刀で天譴を受け止める。

「うるい! 鬼道だ!」

「君臨者よ、血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ、真理と節制、罪知らぬ夢の壁に僅かに爪を立ててよ!」

うるいは片膝を立てたまま詠唱を始めた。

「破道の三十三、そうかつい蒼火墜!」

ホムラはうるいの放った蒼火墜をなぎ払うため、シヨウマから刀を引いた。

その隙にシヨウマ達はまた瞬歩で姿を眩ませる。

「どこへ行った？」

ホムラが辺りを見回すが、姿どころか気配すら察知できない。

そしてまた音が消えていることに気づく。

「またうるいの能力か、！！」

「くそ、！こうなったら逃れられない攻撃範囲で叩き潰すのみ！」

ホムラは歪んだ霊圧に包まれると、手で顔を引っ掻くように上から下へとあてがった。

「カデナ・デル・カステイゴ黒鎖天譴大明王！」

「ありやあ、！」

射場はその行為が何なのかすぐに勘づく。

ホムラの顔には虚化の印でもある仮面が発現し、その背後には黒い鎖を持った破面の白い外殻を纏った甲冑姿の巨大な明王が姿を現した。

「虚化どころか、レスレクシオン 帰 刃までとは、、左陣殿の卍解を、、！」

「安心しろ！一心同体という欠点のあつた狗村左陣の卍解とは違う！これは完全に僕から独立した、言わば最強の傀儡だ！」

「完全に独立した、、か。」

その言葉を聞いて射場は斬魄刀を解放させた。

「押し切れ、しぶんがたな 枝分刀。」

「さて、ほんなら儂の出番かのう。」

To be continued.....

第14話 寄り添う心

「押し切れ、枝分刀！」
しぶんがたな

射場の斬魄刀から枝分かれしたように小さな刀が伸びる。

「お前の能力は知っている！ 鏢迫り合いに強い斬魄刀だな！」

射場がかつて仙波麓源と戦っていた時の映像をホムラは確認していた。

仙波麓源の斬魄刀は射場と鏢迫り合いになったときに、枝分刀の枝分かれた小刀によつて押し切られたのだ。

「確かに儂の始解は対人向き。つまり自分と同じくらいのもんとの斬り合うための能力つちゆうことじゃ。」

射場は低くドスの効いた声で続けた。

「けどのう、卍解は違う。儂の卍解は儂よりも大きい奴に対抗するための能力なんじゃ。」

ホムラは《儂よりも大きいやつに対抗する能力》と聞いて少し顔を強張らせている。

射場はあえてホムラの不安を取り除くかのように語りかけた。

「心配するな。お前には使やせんわい。」

心を見透かされたような気がしたホムラは慌てて虚勢を張ってみせる。

「こ、怖がつてなどいない！」

「この卍解は意識や自我を持つとる者には向けたくないんじや。」

「それが例え、虚や破面じやろうと。」

「ほんでもう一度聞ぐが、ほんまにその卍解はお前とは繋がってないんよのう？」

射場の再確認がホムラの不安感を煽る。

「な、何度も言わせるな！僕は狗村左陣の卍解を越えたのだ！」

「ほうか、、安心したわい。」

射場は静かに刀を下ろすと、霊圧を急激に上げた。

「卍解。」

「枝分刀鋸化逆突」
しぶんがたなきよかのさかづき

枝分刀はあいくちヒ首ほどの小さな懐刀となり、刀の枝分かれも見られなくなつた。

そしてその小さな刀にはノコギリのような刃が付いている。

「そんな小さなものが卍解だど？」

思い描いていた卍解とかけ離れていたためホムラは目を凝らして何度も確認していた。

遠くから見れば果物ナイフと言われても納得してしまいそうなほど小さな刀。

「そんな小さなものが自分よりも大きい相手専用の技だど？」

ホムラの中での卍解のイメージは、黒縄こくじょう天譴てんけん明王みやうおうのように巨大な力の塊だった。

しかし眼前の敵が繰り出した卍解は真逆のものだった。

「その刀では刺したとしても致命傷には程遠いぞ!」

その言葉を聞き、射場は不気味な笑みを浮かべる。

「どうかのう、?」

射場が懐刀を前に突き出すと、斬魄刀が市丸ギンの神槍のように伸び、切っ先が

黒鎖カテナ天譴デル大明王カステイゴの胴体を貫き、背中から突き出て行く。

「の、伸びたのか!？」

すると射場の斬魄刀の切っ先から小さな刀身が枝分かれし始める。

枝分かれました刀身からさらに枝分かれをし、みるみるうちに刀で出来た木のように

なっていくた。

「くくく。」

射場がそう言うのと、刀についたノコギリの刃がチェーンソーのように回転し始める。
きよかのさかづき
 「鋸化逆突。」

そして射場は思い切り刀を手前に引き抜いた。

その刀の木ごと。

刀の木はホムラの鎖天譴大明王カテナ・デル・カステイゴの体をえぐりとる。

鎖天譴大明王は至るところが穴あきとなり、轟音を立てながら崩れ落ちた。

「黒鎖天譴大明王が、、！」

ホムラの虚の仮面も同時に蒸発するように消えていく。

「こ、これで終わりではない！ 僕の斬魄刀もあるんだ！」

ホムラは射場に先を与えないよう、すぐ様自身の腰に携えてある斬魄刀を抜き解号を唱えた。

「ふ、踏みつけろ、大太郎法師！」

斬魄刀は光の小胞となりホムラの手足を包み込み、徐々に手甲と足甲を形作っていく。

「なるほどのう。手足の装甲か。」

「いっぞー！」

ホムラは右腕を振りかぶると、その腕を倍加させた。

狗村の天譴てんげんのように大きな腕。

「巨大化もできるんか！」

射場はホムラの攻撃を避けながら反撃の機会を窺っていたが、ホムラの一部である腕を斬るのに躊躇していた。

「どうした!? 手も足も出ないか!？」

その躊躇いは剣に表れ、射場はホムラの攻撃を防ぐことしかできなかつた。

「まだまだ!!」

ホムラは攻撃の手は止まない。

「くっ、っ、」

防ぐだけでは埒があかないと考えた射場は四肢の腱を斬ってホムラの動きを封じようと試みる。

「すまん、っ、命まではとらん。」

射場は覚悟を決め、ホムラの左腕の腱を断ち切った。

「くそっ、っ、腱を、っ、」

「これで腕を振るえんじやろう! 次は右腕じゃ!」

ホムラは自身の足元のコンクリートを右腕で殴りつけ、瓦礫を辺りに飛ばす。射場はその瓦礫を躲すため、ホムラとの間に十分な間合いを取った。

「“条件付き鬼道”を知っているか？」

「条件付き鬼道じゃと？」

聴き慣れない鬼道に射場は眉をひそ顰める。

「ある鬼道の発動をきっかけに違う鬼道が発動する。」

そんな鬼道が存在するとしても、使える死神は限られていることは想像に難くない。

浦原喜助や藍染惣右介、元鬼道衆総帥の握つか菱鉄裁びしてつさいならばできるのかもしれないが。

ただ、目の前にいる死神としても未熟な少年にそんな高等鬼道が使えるとは思えない。
い。

「そんな高等鬼道、誰が使えるゆうん、」

そこまで言いかけたところで、相手側に鬼道の天才がいることに気づいた。

「鬼おに白しろ峯ね殿か、！」

「そうだ！あの死神なら条件付き鬼道など容易いこと！」

「縛道の一、塞さい！」

そう言うのとホムラは大きく体が痙攣し、その場に膝をついた。

「一体何が、？」

ホムラはゆっくりと立ち上がると、射場に向け不敵な笑みを浮かべる。

「空間転移で心臓を捧げたのだ。」

「お前、まさか、！」

「人化の術だ!!これで腱を斬られようが関係ない!」

人化の術は、肉体の機能を失う代わりに、意識と霊子のみで体を動かすことができるようになる。

当然痛みもなく、腱が斬られたとしても、滅却師の乱装天傀らんそうてんがいのように霊子によって四肢をコントロールできる。

「そらそら!!」

「鉄さん!」

うるいとシヨウマが射場の元へ向かおうとするが、射場が声で制する。

「お前らは下がつとれ!!」

「こうなったら時間切れを狙うしかないのう、。。。」

「縛道の二十一、赤煙遁！」

射場が両手を地につけると大量の煙幕が、ホムラと射場を包む。

「縛道の七十三、倒山晶。」

煙幕の中、どこからか射場の声が聞こえる。

煙が晴れるとそこに射場の姿はなかった。

「どこに行つた!?!」

「鉄砂の壁、僧形の塔、灼鉄熒熒、雷鳴の馬車、糸車の間隙、自壊せよ、ロンダニーニの黒犬、」

ホムラが目を凝らすと、射場がアパートの屋上で隠れるように詠唱をしていた。

「そこか!」

ホムラが腕を倍加させ、射場を殴りつけるが倒山晶による結界で弾き返される。

「一読し・焼き払い・自ら喉を掻き切り、光もて此を六に別つ、湛然として終に音無し。」

「くそつ、」

ホムラが腕を弾かれ反動で宙に浮いたと同時に、射場の詠唱が完了した。

「複合縛道、六撃光牢五重鉄貫!」

六つの光の柱に紅色の鎖が纏わり付き、さらにそれが五つずつ、つまり三十本もの光

の柱がホムラの体を押しえつけた。

「う、動けない、！」

「鉄さんすごい、！複合の三重詠唱だ、！」

うるいとショウマは見たこともない高度な鬼道を目の当たりにし、目を丸くしている。

ホムラは右腕に全力を注ぎ倍加させ、なんとか縛道の柱を弾き飛ばした。

「く、く、人化の術が解けていく、！」

右腕は自由になったものの、残りの柱を取り除くのは容易ではない。

ホムラが左腕を倍加させて、柱を取り除こうとした時だった。

ホムラの右肩あたりに何かが激突し、そのままその何かに組み伏せられた。

「な、なんなんだ一体、！お前は！」

仰向けに組み伏せられたホムラが目を開けると、一匹の狼が悲しそうな顔をしてホムラの上に乗っていた。

「左陣様！」

うるいとショウマがその狼の名を呼ぶ。

ホムラが右腕を倍加させ狗村を吹き飛ばしたが、すぐさま狗村はホムラに飛びかか

り、次はホムラの右腕に噛み付いた。

「鬱陶しい!!」

ホムラは右腕を倍加させ振り払おうとするが、狛村は牙を突き刺したまま離さなかつた。

狛村はボロボロになりながらも、振り払われるたび何度もホムラに噛み付き続ける。

「このままでは、!」

すでにホムラの手は狼のものとなっていた。

狛村は射場の方を向き、目で何かを訴える。

狛村との関係が長かったからか、射場はすぐに狛村の意図を読みとった。

「(左陣殿、、分かりました!)」

「縛道の九十一、じゆういちじようこうろう十二杖光牢!」

射場は狛村ごとホムラを再度縛道で縛りつける。

最初は暴れて抵抗していたが、狛村に噛み付かれ、ホムラは諦め抵抗をやめた。

そしてホムラは人化の術が解け、完全な狼となってしまうた。

「ーごめんよホムラ、、仇討てなかつたよー」

射場は意気消沈したホムラを見て縛道をゆつくりと解く。

すると狗村はホムラに向かって吠え始めた。

「左陣殿はなんと?」

シヨウマが答える。

「バイケイにお説教してるみたい。」

そして狗村が「頻り吠え終わつた後、うるいが狗村を見つめたまま射場に伝える。

「あと、左陣様はバイケイに教えてあげてるんだ。」

「何をじゃ?」

「バイケイの名前の由来だよ。」

「名前の由来?」

「バイケイソウの花言葉。」

「左陣様は大事にしてほしいことを僕らの名前にしてくれたんだって。」

自分の名前の由来を聞いたバイケイが遠吠えをすると、2匹の狼は射場達を置いて走り去っていった。

「バイケイ、い。」

「大丈夫じゃ、左陣殿が導いてくれるはず。」

「ー名前の意味を知ったら、自分の名前なんて好きになれるはずがないー」

「ーバイケイ、お前の名前の意味はー」

To be continued.....

第15話 八代目劍八の誇り

その男は無駄を嫌い、そして虚に対して苛烈なまでの《滅ぼす》という意思を持っていた。

〳数百年前〵

目の前では八番隊長京楽春水と十一番隊長くろやしき剗屋敷劍八が隊士達と酒を酌み交わっていた。

〳失礼。少しいいかな〳

〳殺し合いに応じてもらいたいのだが〳

その男は酒宴の雰囲気壊すかのようにそう言い、七代目劍八のくろやしき剗屋敷に勝負を申し

込んだ。

そして痣城あざしろ双也そうやというその男は京楽や隊士達の前で七代目を討ち取り、八代目剣八となった。

当時の刳屋敷の部下であり、虚圏へと乗り込んでいた狩能雅忘人かのうアシンドがそのことを知るのは数百年も経った後のことだった。

隊長となった痣城は四十六室にある計画を上申する。

それは罪人の魂魄を改造し対虚の戦闘人形を産み出すというもの。

四十六室は《できるものならやってみろ》と承認したものの、後日痣城が作った戦闘人形に恐れをなし、《非人道的である》と手のひらを返して痣城を大罪人と見なした。

大罪人として護廷十三隊に追われることとなった痣城だったが、そのことについては全く気にかけていなかった。

護廷十三隊の能力では捕らえることができないと知っていたからだ。

しかし、痣城捕縛に零番隊が動くこと聞き、《零番隊相手では戦つても無駄》と思うに至ったのか、自ら無間に収監された。

それから数百年後、藍染惣右介が一護や浦原に敗れ、無間に入れられた後のこと。

時期で言えば、一護が死神の力を失い、取り戻すまでの間のことだ。

痣城は卍解の力を通して脱獄した。

いや、収監前からすでに脱獄していたと言った方が正しいのかもしれない。

痣城は虚を生み出さないようにする為に無間を脱した。

そのためにはある破面を取り込み自分の卍解の能力を高める必要があった。

そしてその高めた能力で、現世に住む人間たちの脳髓と魂魄を改良し、虚になり得る原因である怨嗟えんさや本能などを排除する、という目的があった。

その時の騒動が、藍染投獄から一護が死神の力を取り戻すまでの間の出来事である。

その騒動の中で、痣城に強く印象を植え付けた人物が3人いた。

自分の全力を出しづかった十一代目の更木剣八。

痣城を変えるきっかけとなった人間、ドン・観音寺。

そして目の前にいる破面、シエン・グランツ。

そのシエンも物思いに耽っていた。

今回でシエンは五度目の人生を歩んでいた。

一度目は人間として、現世で好奇心に任せて人体実験をしていた。

二度目は虚となって最上級大虚ヴァーストロードまで進化し、藍染の配下として第0十刃ゼロ・エスパーダを務めてい

た。

三度目は最上級大虚の絶大な力を捨て、アジューカス中級大虚に退化し、戦士としてではなく、科学者として完璧な生命を求めた。

しかし死神側のマッドサイエンティスト狂気の科学者によって葬られたのだ。

ここまで彼は自身をザエルアポロ・グランツと名乗っていた。

そのザエルアポロは狂気の科学者に敗れた時点で人生を終えたはずだった。

しかしある破面の能力で《二度目のザエルアポロ》として霊子のデータような形で再構築された。

それは真正なザエルアポロではなく、ただの記録バックアップの集合体。

しかもそれは、自分がかつて道具のように使っていた価値のない破面によって再構築されたのだった。

造り物の自分に一度は絶望したものの、すぐにその状況を受け入れた。

第0十刃の頃の記録のザエルアポロはプリバロン・エスパルダ十刃落ち、つまりシエン100番として生きていくところにしたのだ。

ーもうザエルアポロに縛られる必要がないー

《自分を再構築した破面》を消す。それがシエンの最優先事項だった。

なぜならその破面がいることで、第二、第三のシエンが生み出される可能性があったからだ。

その破面を追う最中に痣城、更木と刃を交えた。

最高の瞬間。

特に更木剣八との戦いは至福の一時だった。

しかし更木剣八との戦いの最中に、《自分を再構築した破面》を見つけ、泣く泣く更木剣八を置いて、その破面を追って行ったのだった。

必ず再戦すると更木剣八に約束をして。

その後《自分を再構築した破面》と対峙し敗れ、最後は子供の破面達（カ）によって切り刻まれた。

今度こそ完全に人生が閉ざされる。

筈だった。

しかしまたもや《自分を再構築した破面》によって再構築された。

今度はザエルアポロやシエンの記憶はなく、ただ純粹に《更木剣八と再び戦う》ことを胸に、シエンという名だけを持って生まれたのだ。

新しく生まれたシエンは大虚メノスの森に移動し、狩能雅忘人アシドとくる日もくる日も命のやり取りに明け暮れた。

そんなある日、ある男が大虚の森へと現れた。

——剣八と戦いたくありませんか？——

剣八という言葉に熱い何かがこみ上げるのを感じ、ノヴァディオという男と共に尸魂界へと向かうことにしたのだ。

そしてシエンが大虚の森から姿を消したことによって、アシドも尸魂界に帰還することとなった。

くシエン迎撃地く

黒腔ガルガンタを抜けた破面は、嬉々としていた。

一つは自分の分身とも言えるザエルアポロが浦原喜助と涅マユリに解析負けしたからだ。

そしてもう一つは、

「また君達と戦えるとはさらに傑作だよ。」

「痣城剣八、狩能雅忘^{アシド}人。」

アシドとの戦闘は自身の体験として記憶にあつたが、痣城との戦闘は記録でしか見たことがなかった。

痣城の能力で機関銃がシエンに撃ち込まれ、触手が千切れていた記録だ。

その痣城がシエンに答える。

「もう剣八ではない。剣八は一つの時代にただ一人。」

「更木剣八、」

シエンが戦いたかつた相手。

「まさか痣城剣八の方だったとはね。やられたよ。」

ノヴァディオは確かに更木とは言っていなかった。

更木と戦いたい。

そう思っていた。

しかしその思いもだんだんと失せていくこととなる。

更木が双極の丘で狩^{かりやじん}矢神にあつきりと破れてしまい、更木との再戦を望んでいたシエ

ンは肩透かしを喰らってしまった。

次第にこんな思いが強くなっていく。

——強ければ——

——満たされれば誰でもいい——

「あの時の続きを始めようか、痣城剣八、狩能雅忘人。」

「啜^{すす}れ、邪淫^{マルチヤステーク}妃。」

シエンは解号を口にする、刀を飲み込んでいく。

背中からは羽のように何本もの触手が伸び、触手と触手の間には不気味な目のようなものが浮かびあがった。

そして腰から下は軟体動物のような触手が何十本も蠢^{うごめ}いている。

白い隊長羽織の上に茶色の獣毛を羽織り、山羊を思わせるような虚の仮面を肩にかけた赤髪の男、三番隊隊長である狩能雅忘人は斬魄刀を引き抜いた。

「覚悟を決めろ、一刀両断^{いっとうりょうだん}。」

そしてその隣に立つ、後ろで髪を結った貴族のような雰囲気纏う優男で八代目剣

八、痣城双也も霊圧を上げ刀を抜く。

「卍解、雨露石榴。」

アシドは始解で、痣城は卍解でシエンに迎え撃つ。

アシドの斬魄刀はまるで初期の斬月のような巨大な斬魄刀だった。

痣城は卍解すると斬魄刀が消えて無くなり丸腰となる。

「なんだい？見るからに愚鈍な斬魄刀と、丸腰の優男かい？」

その瞬間、シエンの触手が一本切り落とされる。

すると痣城はシエンに問いかけた。

「お前には私が見えたか？」

「ーキヒヒツ、そんな無駄な質問するなんて丸くなったねー」

「無駄も悪くはない。」

「何を一人でぶつくさと、。」

どう攻撃されたか分からなかったシエンは独り言をいう痣城を観察していた。

「(確かこいつは、物を隷属させるような能力だったはず、)」

シエンはかつての自分が痣城と対峙した時の映像記録を思い出していた。

「なら今のは何を隷属させたんだ、。」

五度目の人生である今回のシエンは、ノヴァディオによる魂魄改造もあり、戦闘力で

は過去最高と言っても過言でなかった。

しかし、分析力という点ではザエルアポロに大きく劣っていた。

ザエルアポロだったならば、今の痣城の一撃でその能力がどういものか、そしてその対策まで考えついていたことだろう。

そんなシエンが痣城の能力を自分なりに分析していた時だった。

「二刀両断！」

アシドが瞬歩でシエンの背後に移動し、大きな斬魄刀を両手で振り上げていた。

「!!」

シエンは咄嗟に反応し、アシドに正対する形で斬撃を触手で防いだ。

しかし防ぐために体の前に集めた触手は全て斬り落とされ、胸から腹にかけ、袈裟斬りの形で斬撃を浴びてしまった。

「フルート、ツエネ静血装で硬化した鋼皮をイエロこうも容易く、、！」

流れ出る大量の血。

一本ならまだ分かる。

だが、アシドは集まった数本もの触手を斬り落とした。

アシドの斬魄刀は途轍も無い力の塊であることが窺える。

シエンが驚いていたのも束の間、再度触手に傷がつけられる。

「痣城か！」

「虚閃！」

赤黒い霊子の塊が痣城に向け飛んでいく。

痣城は虚閃を避けるも、なぜか苦しそうな顔をしていた。

「なんの能力かは分からないが、虚閃が嫌なようだね！ならこれで、！」

「王虚の閃、」

グラン・レイ・ゼロ
王虚の閃光を放とうとした瞬間、再度横には斬魄刀を振り上げたアシドが立っていた。

「一刀両断！」

避けきれない、そう思った時にはシエンは既に吹き飛んでいた。

斬られていない。

シエンはアシドに斬魄刀で殴り飛ばされただけだった。

しかも、吹き飛ばされてはいるが、大してダメージも受けていなかった。

まるでアシドの腕力により吹き飛ばされたような感覚。

「なるほど。」

ザエルアポロ程の分析力が無いとはいえ、シエンも並の破面に比べれば戦闘の感も分析力も優れている。

さつき袈裟斬りで斬られたときに当たったのは背中と左腕。

つまり今回はアシドの方を向いていなかった。

「正対が鍵だな。」

「お前の能力は真正面から斬るかどうかで威力に差が出る。そうだろう?」

確信をつくシエンの指摘にアシドは沈黙する。

「つまり王虚の閃光を撃つときも気にすることは無いと言うことだ。」

シエンは触手を自身の前に集め、赤黒い霊球を作り上げる。

「真正面から斬れば虚閃の餌食だからなあ!」

そしてどんどんと霊圧を上げていく。

「王虚の閃光!!」

グラン・レイ・セロ
瘧城とアシドは王虚の閃光を避けるが、瘧城の方は苦悶の表情を浮かべ膝を着いてい

た。

「あいつの攻撃じゃあんたも焼き切られちゃうよ?」

「融合してる霊子だってあんたの一部」

「忘れちゃった? キヒヒッ。これは無駄口じゃないよ」

瘧城に語りかける斬魄刀は軽口を叩きながらも自身の主を気にかけていた。

苦しそうな表情を浮かべる瘧城を見たシエンは心底がっかりしている。

「元剣八もこの程度では、更木剣八も大したことはなさそうだ。」

「あの時のような最高の殺し合いはもうできない。」

そして体験したことのない、記録でしか見たことのない最高の瞬間はもう味わうことはできないと諦めた。

——更木剣八も大したことはない——

その言葉を否定するために瘧城は立ち上がる。

「、、更木剣八より強い剣八はいない。」

七代目刳屋敷を破った八代目瘧城自分、十代目の鬼巖城きがんじょう、そして初代にして最強の剣八、卯

ノ花を破った男。

それが更木剣八。

彼こそが剣八を継ぐにふさわしい男。

瘧城は以前まで、《剣八》という名に特別な感情を抱いたことはなかった。

強さの称号だの、剣八の誇りだの無駄なことには興味がなかった。

しかし今は、自分も剣八の一人として名を刻めることに誇りを感じていた。

「剣八を語るのは私を斬ってからにしろ。」

「――強い死神になってね、双ちゃん――」

かつて痣城の姉が死際に放った言葉が痣城の中でこだまする。

「雨露石榴、始解に戻すぞ。」

「――キヒヒツ、あんたにとつちや始解が卍解だろ?――」

「――始解が卍解? 卍解が始解? ひねくれてるね――」

痣城が刀を持つような形で中段に構えると、そこに向かって白い靄もやが集まり、浅打を形作る。

「沁しみ入れ、雨露あめつゆ。」

To be continued.....

第16話 C i e n t o O c t a b a

始解と卍解。

始解とは斬魄刀と対話することで至ることのできる能力の解放。

始解が使えれば席官入りは固く、死神がまず目指すべき斬魄刀戦術である。そして卍解。

死神として頂点を極めた者のみに許される斬魄刀戦術の最終奥義。

卍解を修めた数ある死神も始解、卍解の順に修得してきた。

それは黒崎一護のような異質な死神でも例外ではない。

しかしただ一人、卍解から修得した死神がいた。

それは数百年前に遡る。

かつてある貴族が財力によって地位を得ていた。

その貴族は力で成り上がったものの、それから地位に胡座あぐらをかいていたため死神としての武力や誇りは皆無となっていた。

そんな一族には、護廷十三隊に入ろうとする清廉勇敢な姉と、その姉を少し疎ましくも誇らしく思う弟がいた。

姉が真央霊術院に通っていた時のこと。

彼らの財力に狙いをつけた貴族同士が結託し、彼らに対し尸魂界への反逆という罪を着せた。

冤罪だ。

彼ら一族はすでに死神としての力はないに等しく、捕らえられるのにそう時間はかからなかった。

一族は処刑と称して、処刑用の穴の中で虚と戦わされた。

力ない彼らにとってはまさに虐殺だった。

一人、また一人と殺されていく。

そして最後に姉と弟が浅打を持たされ処刑場に入れられた。

姉は虚との戦闘の前、処刑を見物する貴族たちに対し、『姉弟が虚を斃した場合、貴族たちが四十六室に延命を進言する』という口約束を取り付けた。

姉は虚に健闘したものの、やはり力及ばず追い詰められていった。

——強い死神になつてね、双ちゃん——

姉は弟を助けるため、使えるはずもない双蓮そうれん蒼火墜そうかついを唱え、虚を道連れに自爆した。

姉は自身を犠牲に弟を助けたのだ。

しかしあろうことか貴族達は新たな虚を穴に放つ。

腹を抱えて笑っていた。

そしてその時弟は悟った。

姉は無駄死にしたのだ。

この瞬間、この少年は始解を経ず卍解に至った。

その少年の名は痣城双也。

卍解を先に修得した彼の始解は、卍解ありきの始解だった。

くシエン迎撃地く

「沁み入れ、あめつゆ雨露。」

「キヒヒツ、あんたこの霊圧耐えられるの?」

「あの時はまだ名前を知らなかったから耐えれたけどさ」

「今は全力フルパワーだからキツイよ」

「その名を知るためにお前雨露との無駄な時間を過ごしたんだ。」

「瘧城は更木剣八に敗れた後、技術開発局で手に入れた超人薬を使い、永遠とも感じられる程の時を斬魄刀との対話に費やした。

——何年？百年？千年？忘れちゃったよ——

「なるほど。君は正解で霊子と融合し、始解でその霊子を集約する。」

シエンの言う通り、瘧城の斬魄刀は途轍も無い霊圧を放っている。

「確かにそれほどの霊圧なら僕でも致命傷は避けられないだろう。当たればの話だがね。」

シエンが皮肉混じりでそう言い放った瞬間、瘧城の背後からアシドが空中へ飛び出す。

「俺が当てさせる。縛道の六十三、鎖条鎖縛。」

アシドが縛道を放つと、シエンも虚閃を放ち相殺させた。

「瘧城、俺が当てさせてやる。」

アシドは爆風を避けるように瘧城の隣に着地すると、そう宣言する。

「いいか、連携は味方の目線と霊圧の流れを読み。」

「分かった。」

——あんたが連携だなんて明日は槍が降るね——

痣城は斬魄刀雨露の無駄口を無視してアシドに問いかけた。

「お前は憎くないのか？ 私はお前の隊長を殺した男だ。」

アシドは一呼吸おいて、低く静かな声で答える。

「より強い者が剣八。それが掟だ。」

かつて十一番隊隊士だったアシドは剣八の意味を理解していた。

そして痣城も剣八の一人として認めていた。

「ただ一つ憎んでいるとすれば、あんたがその掟に従わず九代目に剣八を継がせたことだ。」

「痣城、無駄口は終わりにしていくぞ。」

アシドが中段に構えると、霊圧による突風が発生し、アシドの周りを渦巻き始めた。

「卍解。」

「堅忍不拔一刀両断。」
けんじんにんふばついつとうりょうだん

斬魄刀は一回大きくなり、刀身も少し長くなった。

「先に教えといてやる。この卍解は単に力が増幅するだけの卍解だ。

「その力の増幅は、」

その先をシエンが得意げに続けた。

「5〜10倍だろうか？」

アシドは少し間を置き、嘲笑うように答えた。

「悪いが、その10倍近くはあるな。」

眉を潜めるシエンを傍目にアシドは説明を続けた。

「ただし正面から斬られた時だけ傷を負わない。」

「そんなことを信じる敵がいると思うかい？」

「信じるかどうかはお前次第だ。」

その言葉を発するや否や、シエンの目の前には斬魄刀を大きく振りかぶったアシドが現れた。

「虚閃！」

シエンは咄嗟に虚閃をアシドの斬魄刀に放ち、強引に押しつける。

「……………地に満ち、己の無力を知れ。」

シエンの背後から、低く静かな声の詠唱が響く。

「本当の狙いはこっちか！」

「破道の九十、黒棺。」

痣城が歪な霊圧の棺でシエンを包んだ。

そして体勢を立て直したアシドも痣城に続き、詠唱破棄した高等鬼道で追い討ちをか

ける。

「破道の九十一、千手せんじゆこうてんたいほう皎天汰炮。」

千手皎天汰炮が消滅すると同時に、痣城がその中心部へと移動し、刀を振りかぶった。

「いけ！痣城！」

アシドの声を受け一瞥した後、痣城は爆風の中に立つ人影に斬撃を浴びせる。

一閃。

しかし痣城の斬撃は勢いよく空を切った。

瀕死の状態のシエンは、自身の腹に虚弾バラを撃ち込み、無理やり間合いを取ったのだ。

「まだだ、！」

シエンとの距離は遠くはない。ほんの数メートル。

痣城はもう一度斬撃を浴びせるべく、斬魄刀を振り上げようとする。

するとシエンが痣城との間合いを詰め、あろうことか痣城の斬魄刀を掴んで自身の腹に突き刺した。

「残念だったね、、、。その霊圧で両断できていれば超速再生もできていなかっただろう。」

痣城が突き刺したシエンの腹は、雨露を包み込むように再生している。

「君たちの言葉で言えば、肉を切らせて、つてやつかな？」

さらに鬼道でボロボロになっていた体も回復しはじめていた。

「これで終わりだ。」

シエンが痣城を触手で封じ、目の前で虚閃を放つため黒球を発現させる。

「そうだな。」

アシドがシエンの背後から痣城ごと斬り捨てた。

「仲間ごと、斬ったのか、、、？」

「かつては涅局長とやりあった程の頭脳だと聞いていたが。」

「ー正面から斬られた時だけ傷を負わないー」

シエンはアシドの言葉を思い出す。

「正解の能力は本当だったということか、、、」

「鬼道も痣城の空振りも全て計画通りだったと、、、」

「死神にも中々頭の切れる奴がいたようだ。」

仰向けに倒れたシエンは満足そうにアシドを見上げた。

その時だった。

遙か遠くから黒い砂嵐のようなものが近づいてくるのにアシドが気付く。

「あれは!?!黒煙か?」

シエンがアシド達が目をやる方向へ視線を動かすと呆れたように鼻で笑い、タメ息をついた。

「ここを去った方がいい。」

「なんだと?」

「あれは破面だ。飲み込まれば切り刻まれる。」

「なぜお前が俺たちにそんなことを言う?」

アシドは、シエンに何か思惑があるのでは、と

警戒していた。

「警戒しなくてもいい、最高のひと時をくれた礼だよ。」

「狩能。」

痣城がアシドに対し、この場を離れるよう目配せをする。
痣城とアシドは瞬歩でその場を後にした。

「シエンだ!」 「遊ぼう!」

「久しぶり〜」 「痛そう、」

「Qrrrrrrrr」 「切り刻んで遊ぼう!」

「面白そう!」 「そうかなあ、」

「またお前たちか、。。」

そしてシエンはまた黒い蝗いなごの群れに飲まれていった。

くザエルアポロ迎撃地く

シエンと同じ顔立ちをした破面が嬉々として、かつての仲間語りかけていた。

「いやあ、こんなにも僕を歓迎してくれるなんて嬉しいよ。」

「でも意外だね。このメンバーは。」

「ネリエル、グリムジョー。」

「そして、、スタークに従属官^{リリネット}。」

「まさか君達がいるとはね。涅マユリの記録では京楽春水に討たれたとなっていたが？」

スタークはザエルアポロに答えるように事情を話し始める。

「総隊長さんがおれたちをデータから再構築しろって命令したんだってよ。」

く 霊王宮・技術開発局く

薄暗い無機質な部屋。

足元には緑がかった水が流れている。

「俺は、、一体、、？」

空座町で八番隊長に討たれたはずだった。

あそこで自分は死んだはず。

頭の中で混乱が渦巻く中、ふと前に目を凝らすと、そこには人影があった。

「あ、、あんだ、、。」

「久しぶりだね。」

その男こそ、空座町で自身を討った男だった。

「俺は一体、、？」

「喜助くんに頼んでデータから再構築してもらったんだ。」

喜助、、

確か自分の所属していた組織の頭領がその名を口にしていた。

気を払うべき相手だと。

そこでふと疑問が浮かび上がる。

「なぜ俺を？」

「今度、新たな種族の敵さんが攻めてくるからねえ。その補強さ。」

その男、元八番隊長で、現総隊長である京楽春水が飄々と話しを続ける。

「そうじゃねえ、なんで十刃の中から俺を選んだんだ、って聞いてんだ。ヤミーやバラガンのおっさん達の方が能力的にも強えだろ。」

「君があの中で『信頼できる』と踏んだからだよ。」

「もちろん虚圏の女王さんや、ネルちゃん、まあグリムジョー君もなんやかんや信頼はで

きるんだけどね。」

「それに、君と君の相棒リリネットは孤独に苦しんでいるように見えたからね。」

「元一番がいるとは光栄だよ。」

ザエルアポロは余裕の表情で小さく拍手して見せる。

「だけど、、、」

「やはり君は場違いじゃないかな？」

ザエルアポロは鬱陶しそうに、一端に立つ顔の右半分が仮面に覆われた女性破面に目をやった。

「なあ？ロカ・パラミア。」

ロカと呼ばれるその女性破面はザエルアポロに対し軽く頭を下げる。

「ザエルアポロ様、お久しぶりです。」

その軽い礼が気に障ったのか、ザエルアポロはわざとらしく舌打ちした。

「お前がかつてシエンを斃したのは知っている。お前の能力も知っている。それくらいで凶に乗るな。」

「絡新妖婦テイルレニアだろう？」

ロカは元々帰刃レスレクシオンができない破面だった。

彼女はザエルアポロが作った人工的な虚。

そしてそこから進化した破面だ。

破面としての刀を持たない彼女は、自身の能力を封じこめていないということになる。

そのため彼女は能力の解放ではなく、能力の開花という特殊な過程で帰刃に至ったのだ。

それを可能にしたのが、

「反膜ネガシオンの糸で他人の能力をコピーする、だろ？」

ザエルアポロはすでにどういう過程でロカが帰刃に至ったのか分析済みだった。

「まさかそんな力が使えるようになっていたとは思ってもみなかったが。誰かに教わっ

たのかな？」

ザエルアポロはネリエルを一瞥する。

「だがまあ流石は僕の作った道具だ。網彌つなやしろ代家の艶羅鏡典えんらきょうてんの上位互換で安心したよ。道具でも死神に負けるだなんて恥ずかしいからね。」

艶羅鏡典えんらきょうてんが再現できるのは始解のみで、さらに使うたびに自身の魂魄を消耗する。文字通り命を削る能力である。

それに対してロカの帰レスレクシオン 刃は死神の解放から破面の解放、ひいては《最後の月牙天衝》までも再現できる。

「そうだろう？ 第一スターク十刃。」

「道具ってリリネットのこと言ってるのか？ 俺は道具なんて思ったことはねえよ。」

スタークの横にいた少女の破面リリネットは、ザエルアポロが暗に自分が京楽に劣っていた、と言っていると理解し激怒した。

「スターク、あいつムカつく！」

「そう怒るな。お前は道具じゃねえだろ。」

スタークはリリネットに優しく言葉を向けた。

ザエルアポロの長話にとうとう我慢できなくなったグリムジョーはズカズカと前へ

と出ていく。

「軋れ、豹王！」
きしし パンテラ

グリムジョーは刀を抜くと、鋒の方から柄に向け刀身を爪で引つ掻き能力を解放する。

「こら！グリムジョー、一人じゃ、っ、って、もう、っ、。謳え、うた 羚騎士。」
ガミューサ

ネルはグリムジョーに呆れながらも刀剣解放し、ケンタウルスのような姿となった。そして右手には背丈を超える大槍が。

「啜れ、すず 邪淫妃。」
マルチャステーコ

ザエルアポロの背中からは触手のようなものが生え、下半身からも触手が生え並んでいる。

「待ちなさい！グリムジョー！」

一人先走るグリムジョーをネルが制止しようとする。

「忘れたの!?!ザエルアポロの能力を！飲み込まれれば、複製されり、臓器を自由にやられるのよ!?!」

グリムジョーは鬱陶しそうに返事をする。立ち止まった。

「ああ？だからこうすりゃいいんだろ？」

ガラ・デ・ラ・バンテラ
「豹 鉤！」

グリムジョーは、ザエルアポロから20メートルほど離れたところで、膝から弾丸を噴出した。

迫りくる弾丸を眺めながら、ザエルアポロはグリムジョーの成長に感心していた。

「なるほど、ただの獣じゃなくなったようだ。」

グラン・レイ・セロ
「王虚の閃光。」

ザエルアポロは王虚の閃光をぶつけ相殺させた。

「間合いを取るとは、グリムジョー、君は情報から学ぶということをするようになったようだね。」

「けど、今の僕にはその間合いは無意味だ！」

ザエルアポロは腕を前に出すと、ピンク色の光を放つ霊子の弓を構築した。

すると、ザエルアポロは背中中の触手から垂れ下がっている雫のような赤い肉の塊を引きちぎり、弓にあてがう。

サーゴ・マルチャステーコ
「邪淫妃の矢！」

ザエルアポロはその肉の雫を矢のように放った。

ランサドール・ヴェルデ
「翠の射槍！」

ネルの放った槍が肉の雫を突き破る。

「読んでいたのか。」

「大方、それに飲み込まれれば複製されるってことでしょ？」

「さあ、それはどうかな？」

すると、ザエルアポロの背中の中の触手から垂れ下がっている肉の雫が大きく膨れ上がると、そこから《目の周りに模様をついたネル》と《ネルのような人形》が産み落とされた。

「あれは!？」

ザエルアポロは人形を拾い上げると、舐めるようにまじまじと観察している。

「行け。」

ザエルアポロがそう言うと、偽物のネルが本物のネルへと間合いを詰めていく。

「なぜ!？」

「武器や攻撃から霊圧を解析し、その個体を複製する。それが僕の新たな能力だよ。」

「そして、」

ザエルアポロは不気味に笑うと、ネルの人形をカプセルのように開け、中から臓器や

隼の名前が書いてある模型を取り出した。

——PULMO——

「これは確か肺だったかな？能力に変化が現れるのはいいが、言語まで変わるとは困ったものだよ。」

バキッ

ザエルアポロは肺の模型を粉々に粉碎した。

「ズッはッ」

その瞬間ネルは勢いよく吐血し、その場に崩れた。

そして偽物のネルがとどめを差そうと槍を振りかぶる。

キンッ

「グ、グリムジョー、、、」

「やられそうになってんじやねえかよ。雑魚はそこで倒れてる。」

「虚閃！」

グリムジョーは罅^{つば}迫り合いの状態から、偽物のネルに向かって虚閃を放つと、偽物のネルの上半身は跡形もなく消え失せた。

「君は本当に変わったようだね、グリムジョー。」

「ああ？何言つてやがんだてめえ。」

すると、ザエルアポロの触手に生えている肉の雫から、ネルとグリムジョーが産み落とされた。

「偽物と接触するだけでも霊圧の情報が取れるのか。」

スタークは冷静に状況を分析している。

「さあて、どれにしようか。」

ザエルアポロはグリムジョーの人形から潰す臓器や腱を選んでいた。

——AILLESILIO TENDONO——

「これはなんだったかな。まあいい、これにしよう。」

バキッ

するとグリムジョーが突然態勢を崩す。

「ハハッ、アキレス腱か！」

その一瞬の隙をつき、偽物のグリムジョーとネルが攻撃を仕掛けてきた。

「行くぞ、リリネット。」

スタークは傍らに立つリリネットの頭に手をのせると、青白く光りを放つ。

「蹴散らせ、群狼^{ロス・ロボス}。」

スタークが把持する2丁の拳銃から霊圧の弾が放たれ、偽物たちを打ち抜いた。

「いきなり劣勢だが、やるしかない。」

スタークは後ろを振り向き尋ねた。

「あんたはいけるか？」

「はい。」

口力は力強く頷き、霊圧を高める。

「踊り狂え、絡新妖婦^{テイルレニア}。」

T o b e c o n t i n u e d

第17話 My Sprit Is No Longer
With You

「ザエルアポロ迎撃地」

「躍り狂え、テイルレニア絡新妖婦。」

ロカは包帯でできたようなドレスに身を包まれた。

そして背中からは、虎徹勇音の正解のような蜘蛛の足が伸びている。

「それがお前の帰レスレクシオン刃か。」

「ザエルアポロがロカとの一騎討ちを望んだからか、偽物たちはスタークの方へと向かっていく。」

「俺が奴らをやる。あんたザエルアポロをやるか？」

ロカもまた、偽物たちには目もくれず、ザエルアポロにしか意識が向いていない様子だった。

そのロカの様子を見たスタークは、偽物たちの相手を買ってでたのだ。

「はい、任せてください。」

ザエルアポロはそのロカの言葉を聞き流さなかった。

「聞き間違いかな？ 〴〵はい、任せてください」と聞こえたが？」

ロカは力強くザエルアポロを見据える。

「そう言いました。私がまたあなたを止めます。」

ザエルアポロはわかりやすく顔を歪め、憎しみを前面に出した。

「お前が倒したのは、脳味噌まで筋肉だったときの僕だ。」

「では、あなたも止めます。」

そう言うのとロカの霊圧は急激に上昇し始める。

「ずいしやうほう瑞祥屠りて生まれ出で、あんえい暗翳尊び老いさらばえよ。」

「ががくかいろう餓樂廻廊。」

ロカの周辺に、直径3メートルはありそうな何十もの白色の球体が現れる。

その球体は、鋭い牙の生えた口がついた怪物だった。

ロカはある死神の始解を、わざわざ解号を口にして使用したのだ。

そしてその始解を目の当たりにしたザエルアポロは不機嫌そうに眉をひそめた。

「何故わざわざ解号を口にした？それは、；； 皮肉のつもりかい？」

それもそのはず。

これにはロカの大きな皮肉が込められていたからだ。

ロカが能力を再現するとき、本来その解号は必要ない。

わざわざ言う必要はないどころか、相手に対して今から使う能力を伝えてしまうこととなる。

ザエルアポロが憤慨した理由は、その始解が七代目剣八剝屋敷くろくやしきのものであり、ロカがそれを敢えて口にしたからだ。

ザエルアポロは七代目剝屋敷剣八と八代目痣城剣八の戦いから二人の能力を研究し、ロカ・パラミアを作り出した。

そして何よりザエルアポロの気に障ったのが、；；

「ザエルアポロ様、感じ取られましたか？」

「痣城が出来損ないを斃したんだろう？」

「だからなんだ？ 八代目剣八が奴を斃し、お前が七代目剣八の能力で僕を斃すとも言いたいのか？」

「そう理解していただいて構いません。」

その言葉にザエルアポロの霊圧は激しく揺れ動く。

「お前は本当に、、、生意気な口をきくようになったなあ!!」

そう吐き捨てると、ザエルアポロは肉の滴を3個引きちぎり、その全てを弓にあてがい力強く引き絞った。

「これが止められるか!？」

すると口力は手を地面につき、地面を隆起させた。

車谷の《土鯰》の能力だ。

「鬱陶しいー!」

ザエルアポロは左手から虚の霊圧が混ざった巨大な矢を生成すると、右手でその矢を

弓にあてがい勢いよく放った。

フレチャ・デル・グランレイセロ
「王虚の閃矢!!」

「ががくかいろう
餓樂廻廊。」

口力の周りに浮かぶ白い球体の怪物が、大きな口でザエルアポロの放った矢をあつさりと飲み込む。

「雑魚の分際で!!クソがああ!!!」

「スターク集中しろよ!」

「あつちが気になるのはわかるけどさあ」

リリネットが心を通し、スタークに語りかける。

「あつちは大丈夫そうだが、やつぱこの数の十刃はキツいな。」

スタークの目の前には何十体もの偽物たちが蠢いていた。

「やつちやう?」一気に

「セロ・メトラジエツタ
そうだな。無限装弾虚閃!」

スタークは二丁の拳銃から無数の虚閃を放ち、何十体ものネル、グリムジョーの偽物を撃ち抜いていく。

しかし、撃つても撃つても後続が途切れない。

「くそつ、まだまだ出てくんない。」

スタークは再度無限装弾虚閃を放つが、その合間を抜けて数体がスタークへと飛びかかった。

「接近戦はそんな得意じゃねえんだけどな。」

スタークは、『《コルミージョ》』という霊子のタガーナイフの様なもので、相手を次々と斬り捨てていく。

「スターク！直接攻撃しちゃダメじゃん！——」

「——コピーされちゃうんじゃないの!?!——」

「仕方ねえだろ。ゼロ距離で虚閃撃つててののか?」

リリネットの懸念通り、偽物を通してザエルアポロへとスタークの霊圧情報が送られる。

「第二十刃のデータが入ったようだ。」

ザエルアポロの触手に垂れ下がっている肉の雫が膨れ上がり破裂すると、スタークのコピーが生み落とされた。

偽のスタークもまたスタークの方へと向かっていく。

その様子を見たロカがザエルアポロに向き直る。

「どうしても私とは一対一で戦いたいようですね。」

「お前が僕と《対等》かのように話をして、許しがたい行為だ。」

ザエルアポロはこの間も禍々しく歪んだ霊圧を放っている。

「お前のその《対等》という勘違いを、主人直々に正してやろうという慈悲だよ。」

「そうですか。では私も慈悲で元主人の間違いを正します。」

「本当にお前は、、、癩に障るやつだ!!」

「私が今度こそあなたを終わらせます。」

急に冷たく、重い霊圧が漂い始めた。

「なんだ？急に霜が、、、」

ザエルアポロが辺りの異変に気付き始めた瞬間、地面から伸びた氷柱がザエルアポロ

の腹を貫く。

「これは？」

ロカがある隊長格の卍解を再現すると、辺りに霜が降り背後にうつすらと蜘蛛のような銀色の影が現れた。

ザエルアポロの腹は超速再生によって、急速に穴が塞がっている。

ロカはさらに別の隊長格の卍解を再現すると、頭に二本の角が生え、肌が浅黒く変化した。

そして右手には巨大な斧を携えている。

ロカが巨大な斧を振り上げると、ロカの細い腕は裂け、骨は乾いた音を立てて折れてしまった。

「くっ、っ、」

すかさずロカは再生能力を持つ滅却師の霊圧を再現し、強制的に傷を癒す。

しかし、何度も裂ける腕の痛みに耐えかねたロカはさらに別の死神の卍解を再現した。

すると痛みを感じていないかのように斧を振り上げ始める。

ザエルアポロは素早い分析で、ロカが再現した死神達を言い当てた。
 「更木剣八の卍解で傷ついた体を、アルファラの再生能力で癒し、斑目一角の卍解で痛みを無くしたということか。」

虎徹勇音の卍解を持った、卍解状態の更木剣八がそこには立っていた。

ロカは腕を振り上げ、目にも留まらぬ速さで、勢いよく斧のような斬魄刀を振り下ろす。

一閃。

ザエルアポロはその場に崩れ落ちた。

スタークと対峙していたコピー達は、動きを止めるや否や、灰となって宙に舞っていく。

「自分自身が為に狂うLoca para m・aとはよく言ったものだよ、、、。」

「まさかそこまでして、、僕を討とうとするとはね、、。」

「これは主人からの命令だ、、僕を跡形もなく消せ。」

仰向けに倒れているザエルアポロは目線だけを動かし、ロカへ命令した。

「涅マユリに回収されるのは、ごめんだからね。」

「あなたはもう私の主人ではありません。今の私はネリエル様の従属官。そしてその主人は黒崎部隊長です。」

「ですのでザエルアポロ様の命令を遂行することはできません。」

「ですが、私の意思であなたを消滅させます。」

「ががくかいろう餓樂廻廊、」

ロカの背後から白い球体が浮かび、ザエルアポロの方向へゆっくりと進んでいく。

「またそれか。本当にお前は、癩に障る、」

ザエルアポロは穏やかな顔で、白い球体の怪物に呑み込まれていった。

To be continued.....

第18話 集いゆく星々の為の幻想曲

「蟹沢ほたる迎撃地」

蟹沢ほたるは目の前に立つ2人の男に目を向ける。

「檜佐木君、青鹿君あおが、」

そして蟹沢はその後ろに控えている恋次、吉良、雛森の3人を一瞥する。

「それにあの時の後輩達、」

「この面子。あの時の演習を思い出すね、。。。」

蟹沢は苦しそうな笑顔を見せた。

「蟹沢!! 本当にお前が、。。!」

京楽からの敵情報、檜佐木は信じることができなかつた。

蟹沢はあの時の演習で虚に殺された。

目の前で。

仮に何らかの方法で生き返ったとしても、尸魂界にあだなすことをするはずがない、と信じていた。

だからこそ、それを確かめるためにここへ来たのだ。

「本当に蟹沢なのか？」

蟹沢は檜佐木の言葉に目を伏せる。

「誰かが蟹沢を乗っとって、、」

そして檜佐木の言葉を遮った。

「檜佐木君。私は私。私の意思であなたと刃を交えようとしてる。」

「そうか、、分かった。」

「なら、俺も手加減はしない。護廷十三隊の隊長としてお前を止める。」

「うん、、」

蟹沢は左腰から斬魄刀を引き抜くとともに、静かに解号を唱える。

「思い起おもうてんこせ、老典。」

彼女の斬魄刀はまず二本に分かれた。

一振りには浅打の様なシンプルな刀、もう一振りは大きな魔道書の様な形に変わる。

「なんだあれ、？」

恋次は見たことのない種類の始解に目を凝らしている。

「探りを入れてみましょうか。」

雛森は斬魄刀を中段に構え、小さく振りかぶった。

「弾け、飛梅！」

蟹沢はおもむろに魔道書を前に突き出す。

「あの本は盾？」

雛森はさらに驚くこととなる。

彼女の放った火球は蟹沢の持つ魔道書に吸い込まれた。

すると魔道書は光を放ち始め、蟹沢は解号を唱える。

「弾け、飛梅！」

蟹沢の浅打は飛梅に変化し、さらに切っ先から火球を放つ。

「模倣の能力!？」

「刈れ、風死。」

檜佐木は命を刈り取る形をした鎌状の斬魄刀、風死で火球を斬り伏せた。

「鬼道系能力はダメみたいだな。」

檜佐木の後ろから恋次が前へと躍り出る。

「檜佐木さん、おれが行きます。吠えろ！蛇尾丸!!」

恋次が蛇尾丸を振るうと蟹沢に向け一直線に伸びていくが、またもや蟹沢は魔道書で蛇尾丸を防ぎ、解号を口にした。

「吠えろ、蛇尾丸。」

蟹沢の浅打は蛇尾丸に変わり恋次に向かって伸びていく。

「くそつ、物理系もかよ！」

「さてよ？つてことは攻撃しなけりや、反撃も受けねえんじや、!!」

恋次のその言葉を聞いた蟹沢は、浅打を前へ突き出すと、切っ先に赤黒い霊球を発現させる。

「グランレイ・ゼロ王虚の閃光。」

「ウソだろ!!」

咄嗟にイツルが恋次と王虚の閃光との間に割って入った。

「縛道の九十八、れいげんかつきよ霊滅割拒！」

轟音とともに、白煙が立ち込める。

「あんなのも撃てるのかよ、、ありがとな吉良。」

「檜佐木さん、どうしますか？」

イツルは自身の隊長である檜佐木に指示を問うた。

「俺が卍解する。その後は頼んだ。」

「わかりました、、。ですが斬れるんですか？蟹沢さんを、、」

「斬るしかねえだろ。」

檜佐木は隊長羽織を翻し、前へと進んでいく。

「卍解、ふしのこうじょう風死絞縄。」

檜佐木の持っていた二振りの斬魄刀を繋ぐ黒い鎖が上空で絡み合い、黒い太陽を形作った。

そして、その黒い太陽から何本もの鎖が檜佐木と蟹沢に伸びていく。

しかしその瞬間、蟹沢の霊圧が急激に上昇し、辺りを暗く冷たい空気が包んだ。

「卍解、、」

蟹沢の魔道書から「黒い霧」が溢れ出す。
こきょうろうてん
「古鏡老典。」

そして檜佐木たち全員を包み込んだ。

あたりの黒い霧が晴れると、檜佐木の卍解は解除されていた。
霊圧も減っている様子はない。

「確か蟹沢も卍解を、っ、つて、っ、」

檜佐木が辺りを見回すと、そこは忘れることのできない景色だった。

「ここは、。。。あの時の、っ、!?!」

「蟹沢がやられた演習地じゃねえか!!」

To be continued.....

第19話 神の視座にて記憶を論ず

「忘れることのできない演習地」

「蟹沢がやられた演習地じゃねえか!!」

「いきなりどうしたの? 檜佐木君。」

檜佐木が後ろを振り向くと、そこには学生用の白と赤の死覇装を来た蟹沢が心配そうな顔をして立っていた。

そして自分の服装を見てみると、

青い袴に白い道着。

学生時代の格好だった。

すると前に立っていた男、学生時代の青鹿あおがが驚いた顔で檜佐木の方を振り返る。

「檜佐木!!」

「ああ、あの時の実習だ。」

その光景は、かつて檜佐木、青鹿、蟹沢が六年生だった頃、後輩の引率として付いて行っていた対ダミー虚の実戦実習そのものだった。

「とりあえず無事終了ね。」

蟹沢の言葉に檜佐木はハツとした。

「結界組!! 応答しろ!!」

檜佐木が無線を飛ばすが、演習地を守る結界組からの応答はない。

「まずい、！ということとはもう始まる！」

その声を発したのも束の間。

蟹沢は前方数十メートルのところ巨大な虚が佇んでいるのを発見し、檜佐木の名を叫ぶ。

「檜佐木く、」

蟹沢が呼び終わる前に檜佐木は抜刀し、斬魄刀の名を呼んだ。

「刈れ、風死！」

つられるように青鹿も始解する。

「固まれ、けんくう堅空！」

くそこから数百メートル離れた地点く

意識が戻ると恋次、イヅル、雛森の3人は横並びで歩いていた。
まず声を発したのは雛森だった。

「ハハハハ？」

「この格好、学生時代のじゃねえか!？」

恋次は自身の格好を見て驚いている。

「みんな元の意識はあるようだね。」

イヅルは立ち止まって顎をさすっている。

「ここはあの時の演習地、、そして今並んで歩いてるってことは、、」

「蟹沢先輩が危ない!」

イヅルに続くように雛森が叫び、それと同時に走りだした。

3人が少し駆けけると、前方から巨大な虚がだんだんと姿を現した。

忘れるはずもない、二本の角が生え、般若のような顔をした虚。両腕は鋭い鎌のようになっていた。

その虚は大きな鎌を振り上げると蟹沢に向かって、猛スピードで振り下ろした。

キンツ

その虚の爪を、檜佐木と青鹿が蟹沢を護るように防いでいる。

「檜佐木君、青鹿君!」

「この感じ、やはり力は今のままみたいだな、!」

2人は能力は学生の頃に戻っていないことを再確認する。

「檜佐木くん、何それ? 刀の形が、?」

「蟹沢、お前はここのときの蟹沢なのか?」

「何を言ってるの? 檜佐木くん、?」

自分と青鹿は元の意識を持っているのに、蟹沢はまるであの時のまま。

檜佐木の頭は混乱していた。

すると、横から恋次が斬魄刀を振るい虚を浄化する。

「阿散井！」

「檜佐木さん！こりや一体どうなってんだ!？」

「お前たちも元の意識があるようだな。」

「とにかく、周りの虚を片付けましょう。」

雖森がそう言うのと、高く跳び上がり周囲の虚に斬りかかった。

檜佐木、青鹿、恋次、イツルも続いて虚に向け跳び上がり次々と斬り伏せていく。

「とりあえずは片付けたな。」

檜佐木が刀を下ろした時だった。

とてつもない霊圧が辺りを包む。

その霊圧とは真逆の、低く落ち着いた声が心地よく響いた。

「よかった。怪我がなくて。」

穏やかな雰囲気ではあるが、彼の本性を知る今なら、その歪な霊圧を少しながら感じ

取ることができる。

「まさか君達学生が虚を倒したのかい？」

その男こそ、

「藍染、、！」

檜佐木は風死を強く握りしめ、その男、藍染を睨んだ。

恋次は尸魂界の敵となるその男に詰め寄ろうとする。

「怪我がなかっただど？てめえが仕組ん、」

しかし恋次を遮るように雛森が鋭い口調で言葉を発した。

「あなたが画策したんじゃないですか！藍染惣右介!!」

「雛森、」

藍染は瞬時に「この者たちは使えない」と判断し、救助から殲滅へと目的を変える。

「なぜ君たちが怒っているのかは分からないが、それよりもまずこれを見てくれないかい？」

藍染は斬魄刀を鞘から抜くと、切っ先を下に向け逆さの状態で斬魄刀を把持した。

「野郎解放するつもりだ！絶対見んじやねえぞ！」

その言葉を聞き、隣に立っていた市丸ギンは曇った表情を示した。
「なんやこの子ら知ってるみたいですねえ。」

「ギン、予定変更だ。違う子を探そう。この子達はここで片付ける。」

非情にそう言い放つと、藍染は右掌の上に歪な霊圧を構築した。

「破道の九十、黒棺。」

「縛道の九十八、霊滅割拒！」

恋次は高等鬼道で藍染の黒棺を防いでみせた。

「藍染、俺はお前を倒せるよう修行したんだ。」

さすがの藍染も学生が自分の鬼道を防いだことに驚いている。

「学生で高等鬼道を使えるとは驚いたよ。」

「吠えろ、蛇尾丸！」

恋次は藍染に向け蛇尾丸を伸ばした。

藍染は片手で蛇尾丸を止めると、刃節を繋いでいるワイヤーを斬ろうと刀を振るつた。

キンツ

金属音がこだまする。

「斬れねえよ。あの頃とはもう違う!」

かつて恋次は双極の丘で藍染と刃を交えたことがあつたが、その時は成す術も無く蛇尾丸をバラバラにされてしまったのだった。

「学生なのに始解までも使えるとは面白いね。」

「縛道の九十九第二番、ばんきん 卍禁!」

雛森は手を地面につき、高等縛道を唱える。

「しよきよく 初曲、しりゆう 止繻!」

手をついた地面から幾本もの包帯のような布が藍染へと伸び、何重にも巻き付いた。

「にきよく 式曲、ひやくれんじん 百連門!」

そしてその上から錐のような太い針が何本も刺さっていく。

「檜佐木さん!今です!!」

「ああー！」

雛森が手を地面につけたままそう叫ぶと、檜佐木は風死を振り上げながら藍染へと向かっていった。

キンツ

しかし再度金属音が鳴り響く。

檜佐木の斬撃は藍染に届く前に、何者かによつて止められていたのだ。

「あなたは、！」

そうしている間に藍染を封じていた卍禁が、藍染の霊圧によつて破られていく。

「要、^{かなめ}。やはりついて来ていたのか。」

「東仙隊長、！！」

東仙は自分を隊長と呼ぶ学生の言動を訝^{いぶか}しんだ。

「隊長だど？お前、私を知っているのか？」

檜佐木はその問いに答えることなく、恋次に呼び掛けた。

「すまない、阿散井。東仙隊長は俺にやらせてくれ。」

「構わねえつすよ、俺も藍染倒すの横取りされたくねつすから。」

その言葉を聞いた檜佐木は鏝迫り合いのまま東仙に移動するよう持ち掛ける。

「場所を移しましょう、東仙隊長。」

「なぜお前に従う必要がある？」

そこで藍染が檜佐木の提案に興味を示し、話に割り込んだ。

「いいじゃないか、要。面白そうだ。」

「しかし、藍染様、私は、、、、」

「もう一度言うよ、要。いいじゃないか、面白そうだ。」

藍染は東仙に対して途轍もない霊圧を放っている。

「はっ。申し訳ありません。」

「じゃあ行きましようか。」

檜佐木がそう言うのと、東仙と共に瞬歩でその場を後にした。

イツルは藍染と少し離れたところにいたギンに斬りかかった。

そしてギンがそれを受け止め鏝迫り合いとなる。

「隊長、、、、」

「隊長て、それ僕に言うてんの？」

副隊長である自分になぜ目の前の学生は「隊長」と言ってくるのかが理解できなかった。

藍染隊長と勘違いをしているのだろうか、ギンはそんなことを呑気に考えていた。

「なぜ本当のことを僕に言ってくれなかったのです？」

その言葉を聞きギンは目の色を変え斬魄刀を解放させた。

「射殺せ、神槍しんそう。」

イズルは刀で防ぐが、ギンはそのまま神槍を伸ばし続け、かなり遠くまで吹き飛ばした。

そしてギンは吹き飛ばしたイズルの元へ瞬歩で移動する。

藍染達とかなり距離が開き、ギンとイズルは一騎打ちの状態となった。

「、、、君、さっきのはどういう意味や？」

「あなたは藍染を討つために、藍染の側にいる。そうですね？」

藍染投獄後、イヅルは乱菊や一護からギンの本当の目的を聞いていた。

ギンが藍染に付き従っていたのは、藍染を討つための芝居であり、懐から藍染を斬るためだった。

藍染はギンの思惑を知った上であえて懐においていたのだが。

本来それをこの時点で知っているのはギンと藍染の二人のみ。

しかし藍染に自分の思惑が感づかれていないと思っていたギンは、イヅルの質問にも嘘で答えていた。

「ふうん、君おもしろいなあ。そんな訳ないやないの。」

すかさずイヅルは次の質問をぶつける。

「松本さんのためじゃないんですか？」

ギンは蛇の様な鋭い目つきでイヅルを睨みつけた。

「その話どこで聞いたんや？」

イヅルはまつすぐギンを見て何も答えない。

「君なんや怖いなあ。ここで片付けとかな。」

ギンは脇差を持った右手を後ろに引き勢いをつけ前へと突き出した。

「勝負は一瞬！」

「面を上げろ、侘助。」

イツルは神槍を半身になって躲し、そこで何度も斬りつけた。

「まだまだや！」

ギンは横に避けたイツルを追う様に刀を横へ振るう。

イツルはカウンターの要領でまた数回神槍を斬りつけた。

「!?」

神槍を持ったギンの右手は突然地面へと押し付けられることとなる。

「先程僕はあなたの斬魄刀を10回斬りました。ということはその脇差が0.4kgだとして2の10乗倍で、約410kgです。」

「到底持つことはできません。」

「なんや色々と怖い子やなあ。ここら辺で早いとこ片付けなあ。」

ギンは頭を少し掻きながら小さく笑った。

しかし目は全く笑っておらず、殺気を払っている。

「ほんなら仕方ないなあ、出、」

イヅルは卍解を遮るようにギンに忠告した。

「塵にしても無駄ですよ。形作った時点で重さがのしかかる。つまりあなたは僕に照準を合わせることはできない。」

ギンは目を細め、自身の卍解を知っているような説明に耳を傾ける。

「伸縮の際、塵となつて相手を貫いたときにカケラを残す。体内に残したカケラには細胞を溶かす猛毒がある。」

自身の卍解の能力を言い当てられたギンは沈黙した。

「市丸隊長、僕は貴方を慕っていました。だからこそ、」

イヅルは今まで四人の隊長に仕えたことがある。

市丸ギン

あまが いしゆうすけ
天貝 繡助

おわとりばしろうじゆうろう
鳳橋 楼十郎

そして檜佐木修兵。

その中でも市丸ギンは特別だった。

確かに掴み所はなかったかもしれない。

しかしどこか居心地が良かった。

だからこそ、藍染の配下だと知ったときには気持ちの整理がつかなかった。

そしてギンが実は埋伏の兵であり、藍染と対峙したがあと一步のところまで届かなかったことを知ったとき、イズルには二つの感情が浮かんできた。

それはギンが藍染の配下ではなかったという安堵。

そして、一人で背負わせてしまったという自責の念。

「市丸隊長、今の僕たちなら藍染を討てます。」

「ほんまに君、何者なんや？」

「卍解、双王蛇尾丸！」

「君は卍解も出来るのか。興味が湧いてきたよ。」

本来ならあり得ない学生の卍解を目の当たりにした藍染だが、それでも全く焦る様子は見られなかった。

「余裕なのは今の内だ。解放を見なけりやいいだけだろ！」

「君は本当に私の斬魄刀の能力を知っているようだ。」

藍染は納刀すると、右手を静かに前へと出した。

「だがその言葉は、私の死神としての素の能力と渡り合えてから言うべきだと思うがね。」

「破道の九十九、五龍ごりゅうてんめつ転滅。」

藍染は五体の紫龍を発現させ、余裕の表情で口角を上げている。

しかし恋次はまったく焦るような素振りは見せていなかった。

「破道の九十九！五龍転滅!!」

「阿散井君、いつの間に五龍転滅を!？」

雛森は恋次が五龍転滅を使用したことに驚きを隠せないでいた。

鬼道の達人としても知られる雛森でも唯一まだ修得していない程の高等破道。

それを、学生時代は鬼道が大の苦手だった恋次が修得していたのだから、驚かすにはいられなかった。

恋次の放った橙の龍は藍染の紫龍とぶつかり相殺する。

「見えてるぜ!!」

五龍転滅同士の相殺で衝撃波が周囲を襲う中、恋次は藍染による背後からの斬撃を防

いでみせたのだ。

「この状況で私の瞬歩を追うとは、霊圧覚知も優れているのか。」

「成程。君の言う“私を倒せるように修行した”という意味は分からないが、実力は本物のようだね。」

「これで鏡花水月も使えないとなると、中々に面白いが厄介だよ。」

「これを使うのは君たちで二度目だ。」

藍染は斬魄刀の鋒を天に向けると、こう小さく呟いた。

「卍解、ゝ。」

T o b e c o n t i n u e d

第20話 Vice it again

「東仙隊長、」

檜佐木は心苦しうにその名を呼んだ。

檜佐木が尊敬し、慕い、憧れ、そして命を奪った男だ。

綱彌代時灘つなやしろときなだの件で、檜佐木は東仙が道を違えた理由を知っていた。

綱彌代時灘。

その男は、人の不幸や絶望、そして他人を蹂躪することを至福とするような人間だった。

東仙の親友でもあった歌匠かきようという女性は、夫である綱彌代時灘によつて殺された。

元々時灘は、綱彌代家の命令で実験的に歌匠に近づき婚姻関係を結んだ。

それは時灘が綱彌代家の命令に従ったわけではなく、幸福の絶頂にいる歌匠に真実を告げたら、

「どんなに絶望的な顔をするだろう」

という捻じ曲がった興味本位からの婚姻だったのだ。

しかし婚姻を結んだ後、時灘が歌匡に真実を告げると、彼女の反応は時灘の予想していたものとは全くの別物だった。

——あなたはまだ星を見たことがないだけよ——

彼女は時灘の迷惑を知ったうえで婚姻関係を結んだのだ。

その彼女の反応に時灘は《彼女が自分よりも高みにいる》と感じ苛立ちを覚えていた。ある時、その婚姻関係を知った時灘の親友は、友として時灘を斬るため、時灘と刃を交えた。

あろうことか仲裁に入った歌匡ごと時灘は親友を切り捨てた。

こうして時灘の妻、歌匡は命を落としたのだ。

しかし時灘は処刑されなかった。

それどころか綱彌代家は権力を持った貴族であったため、圧力によつて事件内容をねじ曲げた。

妻の不貞が原因であり、間男が妻を斬り捨てたため時灘が返り討ちにした、と。

このまま咎め無しになるだろうという雰囲気の中、これに異を唱える者がいた。後の護廷十三隊隊長となる京楽春水だ。

彼が確たる証拠を突きつけたため、時灘は無罪放免とはならず減刑するに留まったのだ。

しかし処刑とならなかったのは事実。

それに納得ができないと声を上げた人物こそ、東仙要だった。

あろうことか時灘はその東仙に対し、自身が歌匠を殺害した張本人であることを隠し、復讐がいかに無意味であるかを説き、東仙の復讐をやめさせようとした。

その言葉を聞いた東仙は、歌匠も復讐は望んでいない、と気持ちの整理をつけたのだが、

その直後に時灘は自分が歌匠を殺したと打ち明け、東仙を絶望の底へと落としたのだ。

その東仙の心を救った男こそが、大罪として名を馳せることとなる藍染だった。

「東仙隊長、正直俺は、もうあなたが間違っているとは言えません。」

「間違っているだと？」

「歌匡さんと、綱彌代のことです。」

「!!」

「なぜお前がその事を？お前も貴族の者か？」

「そうではありません。ただ、綱彌代は必ず断罪されます。」

「される、だと？いつされる？今か？」

「今ではありませんが、必ず断罪されます。」

「そんな見え透いた気休めなど私には必要ない。」

「鈴虫ベにむしこう式・紅飛蝗。」

東仙がその場に高く飛び上がり解号を唱えたと同時に、檜佐木も破道を唱えた。

「破道の五十八、一☒嵐（てんらん）！」

檜佐木から放たれた突風は、東仙の放った幾つもの巨大な刀身を左右上下に吹き飛ばす。

「まるで私の斬魄刀の能力を知っているかのような戦い方だな。」

「卍解も知っています。」

「はったりを言うな。」

「はったりじゃありません、強力な卍解だ。」

「けど、あなたでは俺を倒せない。」

「戯言を。」

東仙は刀身に手をあてがうと、霊圧を急激に上げた。

「卍解、鈴虫終式・閻魔蟋蟀^{えんまこころぎ}。」

東仙の目の前に9つのリングのような輪が出現し、刀を振るうと同時に檜佐木を取り囲むように輪が配置された。

そしてその9つの輪を中心にそれぞれ黒い球体を作り出し、檜佐木を飲み込んだ。

静寂。

聞いていた通り、何も聞こえず、何も感じず、何も臭わず、何も視えない、無のみが広がる空間だった。

檜佐木が東仙の卍解を直に体験するのは初めてだった。

——これが東仙隊長の視ていた世界——

正しくは視えていないだが、檜佐木は無明の世界に恐怖していた。

しかし、檜佐木は恐怖を前に戦いをやめることはない。

——恐怖は戦士としてかけがえのないもの——

「卍解、ふしのこうじょう風死絞縄。」

「なんだと？学生如きが卍解を!？」

檜佐木の持つ斬魄刀、かぜしに風死から大量の黒い鎖が生まれ、鎖同士が絡み合いながら上空へと伸びていく。

そして閻魔蟋蟀の黒い半球の中に、さらに色濃く、鎖でできた黒い太陽が蠢うごめいている。

さらに黒い太陽から檜佐木と東仙へと鎖が伸び絡みついた。

「なんだこれは!？」

東仙は斬魄刀で黒い鎖を斬り離そうとするが、何度斬つてもすぐに切断面が絡みつき断ち切れない。

「俺の五感全てが覚知できないようになってるのは知っています。」

東仙は驚いていた。

これまで東仙の卍解を受けた者は皆、狼狽するか、恐怖するかのどちらか。

それを今日の前に立っている学生は、淡々と話し始めただけでなく、卍解の能力まで言い当てたのだ。

「実際に、今俺が話している声は聞こえていません。ですが、あなたに俺は倒せない。」

一体この学生は何者なのか？

どこで卍解の能力を知ったのか？

綱彌代と何の関係が？

東仙はそんなことを思案していた。

「そこまで自信があるのは、この卍解の能力のせいかな？」

そして聞こえていないであろう檜佐木に問いかける。

「(様子を見てみるか。)」

「破道の七十三、そうれんそっかつい双連蒼火墜。」

東仙は直接攻撃はリスクがあると見て、まずは破道を撃ち込んだ。

結果は直撃だった。

黒い鎖が防御に入るわけでもなく、反撃に出るわけでもない。

檜佐木は大きく吹き飛ぶと、地に伏し激しく吐血した。

すると上空の黒い太陽が大きく蠢き、檜佐木に絡みついていて鎖が脈打つように動き始めた。

「なんだ、、？黒い鎖が、、？」

檜佐木の負傷部位は回復していく。

「回復の能力か。そんなもので私がお前に勝てないだど？」

東仙は、瞬歩で檜佐木の目の前に寄ると、文字通り檜佐木を斬り刻んだ。

何度も何度も。

しかしそのたびに檜佐木の体の切断面から鎖が伸び、創傷を接着していく。

絶えず斬っているからか、東仙は体に力が入らなくなり始めていた。

「おかしい、、斬れば斬るほど霊圧が吸い取られていくような感覚が、、」

不気味に思った東仙は、不意に自身に絡みついた鎖に意識を向けた。

「!!」

相手が鎖を使って回復をしているばかりだと思っていた東仙だったが、自身に絡みつく鎖の状態を感じ、檜佐木の能力に気付いたのだ。

「これは、、！」

「気づきましたか、、？」

檜佐木は東仙の斬魄刀をつかみ、片膝から立ち上がりながらそう問いかけた。

「あなたと俺の霊圧はこの鎖を通して循環している。」

「あなたが俺を斬れば斬るほど、あなた自身の霊力を削り取る。」

自分を犠牲にして相手を追い詰める、謂わば《捨て身の技》だと東仙は悟る。

「なぜ、お前はここまでできる、？？」

「それは、あなたが俺に戦いの全てを、いや、恐怖に苛まれていた弱い俺を肯定してくれたからです。」

「そのおかげで俺は、ここまで登ってこることができた。」

「一体何者なのだ、お前は？」

目の前の学生の霊圧は、まっすぐと東仙の方へ向いていた。

「その様子だと、この卍解から逃れたのも偶然ではなさそうだ。」

「東仙隊長！綱彌代は必ず討ちます！」

「どうか刀を引いてください！」

「奴なんかの思い通りに、絶望に身を染めないでください!!」

——なぜこの男はここまでして私に——

「狛村隊長だつて、今は隊長じゃないですけど、」

「狛村のことも知つてゐるのか。」

不思議な靈圧をした男、狛村。

そして、その男は東仙の一番近くにいなながら、一番遠いところにいる男。

彼は東仙にとって眩しすぎた。

「彼は純粹で真つ直ぐすぎる。」

「私とは正反対だ。彼の無垢さでは私は、」

「彼がもう少し獣のように醜ければもつと気兼ねなく話せていたかもしれないな、」

その時、檜佐木の頭にあの言葉が過つた。

——思つていたより醜いな——

東仙は正解を解くと、穏やかな表情を浮かべた。

「お前の言葉で憎しみが少しだが和らいだ。」

「そこまで言うなら藍染様を倒し、綱彌代を討つてみせろ。」

「私は少し、休むとするよ。ゆつくりと、」

そう呟くと、東仙は振り返り、檜佐木から離れていく。

「東仙隊、」

ツ!!?

東仙は瞬歩で檜佐木へと斬りかかった。

檜佐木の左肩から左腰にかけ、鮮血が噴き出す。

が、檜佐木は少しよろけたものの、すぐに態勢を立て直し風死を構えた。

「踏み込みが浅かったか、私も甘いな。」

完全に仕留めたと思っていた東仙は自身の踏み込みの甘さを省みていた。

「俺が反射的に半歩躲したんです、東仙隊長、あなたの教えです、」

「やはり、こちら側には来ないようですね、」

「私は復讐のために護廷隊に入った。」

東仙は、亡き友である歌匠の斬魄刀、《清虫》を見つめている。

「復讐を捨て、組織に迎合することは墮落だ。」

「復讐こそがあなたの正義なのです、東仙隊長。」

「その通りだ。」

「ならやはり、俺がここで斬ります。」

そして檜佐木はまた斬魄刀に手をかける。

己が尊敬する死神の実力をとうに超えていることを知っている彼は、なんとか刃を交えない方法を模索した。

しかし、相容れないときは再度自分が斬る覚悟もしていた。

檜佐木修平。

己の弱さを知る強き男。

彼はまた、道を違えた尊敬する師に対し、理解を刃で表し、命の風を死ころす。

「お前は、、、強いな、、、自分の力に溺れず常に恐怖を抱いている、、、」

檜佐木は東仙を見下ろしこう告げた。

「後は俺に任せて下さい。東仙隊長。」

檜佐木は穏やかな表情でその風を死いのちめた。

To be continued.....

第21話 DEICIDE 0 (Zero)

「正解、あんきょうりゆうすいきょうかすいげつ暗鏡流水鏡花水月。」

恋次と雛森は万一に備え、顔を背ける。

「見ても見なくてもいい。」

「これは始解を補完するための正解だからね。」

「補完だと？」

「ああ、鏡花水月に比べると少し劣るからあまり使いたくはないんだが。」

藍染は自身の斬魄刀を見つめた。

「だが、鏡花水月が使えないとなると仕方がない。」

「破道の九十、黒棺。」

恋次は咄嗟に黒棺を避け、再度藍染へと正対する。

「な、、、藍染が、、、」

すると恋次達の目の前にいる藍染は、軽く数百を超えているであろうほどに増殖していた。

「さあ、どれが本当の私かな？」

「まどろっこしい！雛森!!俺と藍染を囲め！」

その言葉を読んでいたかのように雛森は素早く鬼道を発動させた。

「四獸塞門！」
しじゅうさいもん

恋次と大勢の藍染は鬼道の城壁に四面を囲まれる。

「縛道の七十九、九曜縛！」
くようしばり

そしてその城壁を囲むように何本もの光の鎖が包み込んだ。

何重にもなった九曜縛はどんどんと収縮していく。

そして恋次と大勢の藍染は鬼道の鎖によって締め付けられる。

「硬さ勝負といこうじゃねえか、藍染！」

「双骨大砲！」
そうこつたいほう

恋次のオロチ王と狒々王をが赤く光を放ち始めた。

そして大きな爆発音と共に、爆炎の柱が空高く伸びる。

黒く立ち込める爆煙の中から藍染が飛び出した。

「そこそこに硬えじゃねえか、」

その時だった。

途轍も無い速さで伸びた刃が藍染の左腕を貫く。

「ころ死せ、かみしにのやり神殺槍。」

瞬歩で現れたギンの解号によって、藍染の左腕に風穴が空き、そこからどんと体を蝕んでいく。

藍染は顔色を変えず、自身の左腕を切斬り落とした。

「なるほど、この子達は君の差し金だったのか。」

「いつ反旗を翻すのかと楽しみにしていたが、思っていたより早かったよ。」

「だが、卍解の能力を君に教えた覚えはないが？」

「それ見たらわかりますわあ。」

「仲間だと思つてた赤い髪の子と、女の子が戦こうてはるんやから。」

「なっ、！」

その言葉を聞いて、恋次は目の前の藍染を凝視する。

「生まれ、暗鏡流水鏡花水月。」

水が流れるように、藍染の姿が空気ほやけると、雛森の姿があらわたとなる。

「ひ、雛森!」

「阿散井君!」

自分の戦っていた本当の相手を見て、お互いに言葉を失う。

その姿を見てギンが目を細めた。

「お互いに完全睡眠にやられとったみたいやねえ、、」

ギンは藍染の方へ視線を向け、話を続ける。

「けど、そのおかげで藍染隊長の卍解の能力が分かったわ。」

「始解は、その解放を見せた者を完全睡眠に陥れる能力。」

「そして卍解は、解放を見せていない者を完全睡眠に陥れる能力。」

「それじゃ逃れようがないじゃねえか!」

「いや、僕の推察が正しいければ、、」

ギンの後にイツルが続く。

「卍解を使っている間、始解は解除される、ですね?」

「その通りや。」

「君達の前で卍解を使うのは失敗だったかな。」

「それに、君の卍解の能力にまさか体を蝕む力があるとは。」

藍染は斬り落とした自分の腕に目をやると、その腕は徐々に融解されていつていた。

「13キロメートル斬魄刀が伸びる、というのは嘘だとは思っていたが、ここまで厄介な能力とは。」

「いくら藍染とは言え、崩玉と融合してなければいける!!」

隻腕の藍染を見た恋次は斬魄刀を抜き、藍染に向け飛び上がる。

藍染は片手で悠々と恋次の斬撃を防ぎ、鏑迫り合いとなった。

「吉良!!」

恋次の声に応えるように、イツルが瞬歩で移動し斬魄刀を振るう。

「軽い斬撃だ。」

藍染はイツルの斬撃を止めることなく、カウンターの要領で振り払った。

「本当に軽いですか、?」

藍染がイツルの笑みを怪訝に思うと同時に、右手が地面へと引っ張られる。

「なんだ？斬魄刀が、」

イツルはギンの方を振り返ることなく、その名を呼んだ。

「今です！市丸隊長！」

「隊長つてのはよくわからんけど、」

イツルの声とともにギンは藍染に向け斬魄刀を伸ばす。

「なっ、」

藍染の少し反応が遅れ、左足を刀が貫通する。

「市丸隊長!!」

再度イツルがギンを呼ぶ。

「死せ、かみしにのやり神殺槍。」

そのギンの解号と共に、藍染は自身の左足を斬り捨てた。

ギンは額に汗をにじませ、その様子を注意深く観察しながら目を細めている。

「あと少し、あと少しや、乱菊、！」

「砕けろ、鏡花水月。」

空間がまるで鏡が割れたように崩れ落ちる。

「な、、、キミは、、、。」

目の前には赤い髪の学生が、斬り落とした左足を押さえていた。ギンが貫いていたのは恋次の左足だったのだ。

「残念だが、ギンが見ていたのは私ではない。」

「な、正解を使っていたはず、、、。」

「いつから始解に戻していないと錯覚していた?」

言葉を失うギンの横をイツルが駆け抜ける。

「だとしたら今僕たちに見えるのが本物ということだ!」

「正解、胡蝶侘助。」
こちようわびすけ

イツルが両手で斬魄刀を振り上げると、藍染は地面に伏した。

「これは、」

「対象に、霊圧に比例して重力を与える力だ。」

「貴方程の霊圧なら立ち上がることはできないはず。」

「今だ！」

イツルは雛森の方へと振り向いた。

「弾け、飛梅!!」

雛森の放った火球は、地に伏す藍染に直撃する。

そして辺りが黒煙に包まれた。

皆が確かな手応えを感じていたその時。

その空間を切り裂くように解号が響く。

「生まれ、暗鏡流水鏡花水月。」

藍染の声を聞き、皆が凍りついた。

黒煙が晴れると、そこに伏していたのはギンだった。

そしてイツルや雛森の後ろから声が響く。

「いつから卍解を使っていないと錯覚していた？」

「ギンはずつと呼びかけていたよ、君たちにね。」

「やっぱり藍染隊長に勝つなんて、」

藍染に勝つことが如何に無謀であるかを雛森が思い知っていた時だった。

——まだ懂れているのですか？——
その声と共に、雛森の意識は一度途切れた。

目を開けると、そこはかつて自身の斬魄刀と対峙したときの森の中だった。

そして目の前に立つ巫女のような少女に問いかける。

「と、飛梅とびうめ、？ここは、？？」

「ここはあなたの精神世界です。」

「前に私が具現化したとき、あなたにイライラするって言ったことあったでしょ？」

以前、朽木響河こうがの斬魄刀、村正むらまさが斬魄刀を具現化し、死神達に対し宣戦布告した事件があった。

その際、雛森と飛梅は刃を交えていたのだ。

「あのとき言ったことは本音よ。裏切られて、明らかな敵なのにいつまでも藍染惣右介に憧れ慕い続ける。」

「今だって、藍染惣右介と呼び捨てにしているものの、心の中では藍染隊長と呼んでい

る。」

「本当に、、、どこまで憧れてるんだか、、、」

「あなたのその気持ちに折れました。まああの時に屈服はしますからね。ほんとに私の持ち主は、、、。」

「ごめんね、飛梅。」

「憧れて慕っているけど倒したい。」

「それが私の、、、あなたの新たな力となる。」

—————

「正解、かけしかついとびうめ掛詩歌追飛梅。」

雛森の周囲からは数百、数千もの炎弾が現れ同心円状に放たれると、一斉に倒れている恋次の方向へと進み始めた。

完全睡眠で自分を認識できていないはずなのに、自分に火球が迫ってきていたのだ。

「完全睡眠が効いていない?」

藍染は向かってくる炎弾を避けるが、炎弾は方向を変え、藍染に迫っていく。

「追ってくるのか。」

「破道の九十九、五龍ごりゅうてんめつ転滅。」

藍染は炎弾を相殺させるため、5体の霊圧の紫龍を発現させた。

すると、先頭を奔っていた3つの炎弾が五龍転滅へとぶつかり跡形もなく消滅させた。

「私の五龍転滅をたつた3つの炎弾で相殺させただど？」

その炎弾が数千の群れを作つて、波のように藍染へと押し寄せる。

「まだまだいきまますよ!!」

雛森は霊圧を上げると、二波目となる炎弾群を出現させ放出した。

藍染は一波目の炎弾群につかまり、途轍もない威力の炎弾をその身に受けながら叫んでいる。

「馬鹿な!!そんなことが!!たかが学生風情に、、、この私が、、、!!」

「何だ!この威力は!!なぜ、、、」

二波目の炎弾群が藍染を包み込み、轟音を立てて一輪の花のように燃え盛る。

藍染は少しでもダメージを相殺させるためにと、全ての霊圧を使い果たし、炎が収まると同時に真下へ落下した。

仰向けに倒れる藍染の視界に雛森が現れる。

「私の卍解は、憧れた対象を攻撃が追い続ける。霊圧ではなく、その魂を目標として。」
「そしてその威力は憧れの大きさに比例する。」

「つまり、、君は僕に憧れていた、、ということか、、」

雛森は穏やかな顔で藍染を見下ろす。

「おそらく、私がこの威力の卍解を放つことはもうないでしょう。」

「まるで僕を倒すためだけの、、卍解だね、、。」

藍染は雛森から目を外すと、遠く空を見つめた。

「君には理解、、できないだろうな、、私の為そうとしている事の意味が。」

崩玉、破面、王鍵、霊王。

藍染の為そうとしていたことは分からない。

霊王になりたかったのか。

霊王を殺したかったのか。

世界を創り変えたかったのか。
世界を終わらせたかったのか。

「ええ、憧れは理解から最も遠い感情ですから。」

「ふふ、、それだけは、、同意するよ。」

「私を倒す存在が学生だったのは驚きだが、、、」

「悪くはない感情だ。」

藍染は満足そうな顔をしていた。

雛森は一護から聞いたことがあった。

対峙している最中、藍染から感じたことを。

——皆と同じになりたかった——

藍染が強すぎたため、比肩する者はなく、常に孤独だったのだろう。自分と同等かそれ以上の存在を求めていたのではないのか。

藍染の反乱後、雛森はそんなことばかりを考えていたのだ。

それ故に雛森は、藍染が望む存在になれたことがこの上なく嬉しかった。

「吉良！・雛森！」

そこへ檜佐木が駆けつける。

そして地に伏す恋次とギンに目を向けた。

「阿散井！・市丸隊長！」

「君も、、、僕を隊長言うんかいな、、、」

「治療は青鹿に頼もう、あいつは回道の秀才だからな。」

檜佐木はそう言っであたりを見回した。
「つて、青鹿と蟹沢は？」

T o b e c o n t i n u e d

第22話 Can't Fear My Own Wo

rld

「藍染との戦闘地から少し離れたところ」

「堅空^{けんくう}！」

青鹿の能力により張られた空気の壁はいとも簡単に破られた。

「ぐはっ、っ、」

「青鹿君！」

吹き飛ばされ、地に伏す青鹿に蟹沢が駆け寄る。

青鹿達の前には全身が白い外殻に覆われた女型破面が佇んでいた。

「さ、さがっている、蟹沢、っ、！」

「そんな雑魚に構っていては、あなたはいずれ死ぬ。」

女型破面の非情な声に、青鹿は抗う姿を見せる。

「悪いが、俺は教師だからな、！だからお前を、！」

「撃ち込め！堅牢！」

青鹿が斬魄刀を破面へ向けると、鋒から空気の銃弾が放たれた。

空気の銃弾は直撃するも、破面はびくともしていない。

「そんな攻撃で私の鋼皮イェロを破れるとでも？」

破面は右腕を左腕で支えながら蟹沢に向けて、刀剣のような腕を放撃する。

「蟹沢！」

青鹿は蟹沢の前に瞬歩で移動すると、空気の壁を何枚にも重ね出現させた。

そして破られることを見越し、蟹沢を蹴つて後退させた後、タイミングを合わせ破道

を打ち込む。

「破道の七十三！双連蒼火墜！！」

青鹿は大きな爆発に包まれた。

破面は倒れる青鹿に問いかけた。

「なぜそこまでしてその女を守る？」

「くっ、っ、」

「藍染との戦闘地」

「ええの？彼一人で。」

「一通りの治療を受けたものの、なおも満身創痍のギンが恋次達に問う。

「仲間が危ないならボクらも行つたほうがいいんと違う？」

「いいんすよ。あれは先輩達の問題つすから。」

「イツルと雛森の鬼道による治療を受けながら恋次は答えた。

そして恋次の言葉にイツルも続く。

「僕たちが手を貸すことが必ずしも先輩達の為にはなりません。」

恋次はギンの心配を晴らすようあえておちやらけた様子で続けた。

「大丈夫つすよ！檜佐木さん、さっきの死神は、友達も少なくて毎日一人でギターかバ

イクか料理してるような人ですけど、」

「強い死神つすから。」

「必ず解決します。」

「藍染との戦闘地から少し離れたところ」

「なぜそこまでしてその女を守る?」

「くっ、、、」

受けた傷によって声を発することができない青鹿の言葉を、特徴的な斬魄刀を構えた男が代弁する。

「俺たちにとつて大事な人だからだよ。」

そこに現れたのは命を刈り取る刀を持った死神だった。

「檜佐木、、、」

「檜佐木君!」

「大事?自分を差し置いて守るほどに!?!」

破面は感情的に檜佐木の言葉を問い質す。

「ああ、かつての蟹沢がそうしたようにな。」

破面はさらに続けた。

「それで自分が死んだらどうする。」

「本望だ。」

檜佐木は躊躇うことなくそう告げた。

「何が本望、！何が大事！」

破面の怒りはさらに増長していく。

「死ぬときになつて後悔したつて遅い！」

「結局は力を持たない者は何もできない！」

感情を顕にする破面は、蟹沢へと視線を向けた。

「現にその学生の女もあなたたちの足手纏いになっている！」

檜佐木は悲しそうな目で破面に問いかける。

「だから昔の自分を作り出して、自分自身を消そうとしたのか？」

「そんなに昔の自分が許せないか？」

「蟹沢。」

檜佐木の言葉に青鹿も目を伏せる。

そして青鹿は苦しそうに蟹沢に問うた。

「蟹沢、なぜ、こんなことを、。」

破面の蟹沢は力強く言い放つ。

「それは争いをなくすためよ。」

「中央四十六室や、死神界の上流に佇む貴族たちを浄化しなければ、いつまで経っても無駄な争いは絶えない。」

「だからこそ、四十六室に侵攻するノヴァディオに加勢した。」

「尸魂界の歴史を知る檜佐木君ならわかるはず。」

檜佐木は蟹沢の言葉に言い返す言葉はなかった。

蟹沢の言う通りだったからだ。

「彼らの存在こそが害悪で罪なのよ、檜佐木君。」

「そしてそれを守るといふのなら、、貴方達も同罪！」

「刀を抜いて！私を殺さなければ、私が貴方達を殺す！」

破面の蟹沢は刀剣となった腕で檜佐木に斬りかかる。

そして両者は鏝迫り合いとなった。

「刀を引け！蟹沢！」

「どっちにしたって、あなたは選択をしなければならぬ。」

「選択、、？」

「この卍解を解くには、核を破壊しなければならない。」

「その核がお前の中にあるってのか、、」

「そう。その後ろの《私》にね。」

「なんだと、？」

その瞬間、破面の蟹沢は腕の刀をずらし、檜佐木の斬魄刀を受け流すと水平に檜佐木の腰を斬った。

しかし檜佐木は読んでいたのか、その斬撃を後退して避ける。

学生姿の蟹沢は、間合いをとって後退した檜佐木の名を呼んだ。

「檜佐木君、！」

破面の蟹沢は檜佐木に向かって叫ぶ。

「あなたは、《私》を止めるために、あなたの救えなかった《私》を斬らなければならぬ
いー。」

「斬らねえ、、、絶対に、、、！」

「斬りなさい、、、!!じゃなきゃあなたは私に斬り刻まれる!!」

破面の蟹沢は檜佐木に斬りかかるため飛び上がった。

「それでも俺は方法を探す!!!」

破面の蟹沢は、檜佐木の首元で刀を止めた。

一滴、また一滴。

白い仮面から流れ落ちる大粒の涙。

「どこまで、、、お人好しなの、、、」

檜佐木は斬魄刀を下ろしており、殺気も感じられない。

すると檜佐木の後ろに立っていた学生姿の蟹沢が檜佐木を押し除けた。

そして破面の蟹沢が持つ刀を優しく、そして力強く掴む。

「なにを、、、」

学生姿の蟹沢は掴んだ刀を勢いよく自身の胸に突き刺した。

「なっ、、、!」

自分の作り出した幻影の予想外の行動。

破面の蟹沢は理解が追いついていなかった。

すると学生の蟹沢は包み込むような微笑みで、もう一人の、未来の自分に語りかけた。

「わかるよ、、、。」

「あなたは、、、私だから、、、」

「本当は救いたいでしょ、、、檜佐木君達を、、、!」

「本当は許せないいでしょ、、、今のあなた自身を、、、」

「だからあなた^斬である私が、あなたを止めます。」

二人の蟹沢周辺の空間が揺らめき始めた。

「なんで、、、！」

学生姿の蟹沢はなおも微笑んでいる。

「理解や屈服をさせずに斬魄刀の能力を得たことが、こんな風に役に立つなんて、、、皮肉ね。」

学生姿の蟹沢は檜佐木と青鹿の方に振り返り別れを告げた。

「檜佐木君、青鹿君、またね。」

全ての空間が歪み、光に包まれていく。

光が収縮すると、檜佐木と青鹿の目の前には蟹沢が倒れていた。

――死ぬときになって後悔したって遅い――

この言葉は、責任感の強い檜佐木と青鹿を必ず追い詰めることになるだろうと分かっていた。

だからこそ、檜佐木達が蟹沢の言葉を誤解し、この先苦しまないよう、彼女は最後の力を振り絞る。

「私の後悔は、、、」

「檜佐木君や、、、青鹿君と、、、共に人生を、、、送れなかったこと、、、」

「最後まで、、、私を救おうとしてくれて、、、」

「ありがとう、、、」

「私は、、、あるべき姿に、、、戻るね、、、」

そう言い残し、蟹沢は淡い光となって天高く舞い上がっていった。

くノヴァディオ迎撃地く

「勝負がついてきたっスねえ。」

あつけらかんと言う浦原の目の前で、ノヴァディオと呼ばれる男は片膝をついていた。

「そのようですね、」

「いやあ、けど斬魄刀なしの鬼道だけでよくそこまで戦えるもんだあ！」

「斬魄刀どころか鬼道すら使っていない君が言っても些か説得力に欠けるがネ。」

すると、おちゃらけていた浦原の態度は急転し、相手を見透かすような鋭い目でノヴァディオを睨みつける。

「さすがは彼の息子です。」

「いつから気づいていたのですか？」

その言葉を聞いたマユリは嘲笑している。

「君が私の前に現れたときだよ。」

「アナタは100年前の断界での爆発で、大きくずれた時間に飛ばされたようですね。」

「それも過去に。」

「ねえ？仙波麓源ろくげんさん？」

↳過去・断界↳

――父上、これを。補肉剤です――

――こうなったらお前らもろとも死ぬのみよ――

――あと15秒で爆発を起こす――

――断界内で爆発を起こし、現世と尸魂界の時間軸をずらす――

――肉体は時流についていけなくなりバラバラだ――

――卍解、観音開紅姫改メ――

――縛道の七十九、九曜縛――

――早くそれぞれの出口へ――

——待て、、浦原、涅——

——父上!!!——

そして時流の爆発に飲み込まれた。

く流魂街く

「ここは、、?」

「父上、、?」

麓源の意識が戻ると、そこは荒野だった。

周囲に霊圧は感じない。

いや、感じる事ができなかったと言ったほうが正しいのかもしれない。

爆発によって体の器官が一部一時的な機能障害を起こしていたからだ。

そして麓源が立ち上がるうと全身に力を入れたときだった。

「あれは、、!?!」

瀨靈廷の上空に突如現れた巨大な隕石。

そしてその隕石に向かって小さな光が飛び上がっていく。

その光景を見て麓源は、今がいつの時間軸なのか理解した。

霊王護神大戦の真っ最中。

隕石は花火のように碎け、宙を舞い落ちていった。

麓源は痛む体を無理やり起こし、駆け出した。

「ということとは、父上は今あそこに、！」

To be continued.....

第23話 Re・Re : Turn Back The

Pendulum

〔東流魂街62区・花枯〕

「崩玉は手に入れたが、、、魂魄が耐え切れないか。」

仙波は瀕死の死神や滅却師、破面を集めては実験を行なっていた。

「魂魄が離散する前に再構築できれば、、、」

「再構築、、、そうだ！王印があれば!!」

涅マユリの電子記録に入っていた王印の資料。

あれを応用すればあるいは、、、、。

「王印の移遷は10年に一度、、、」

「ということは10年後か。」

どうあがいても王印無しでは、仙波の計画達成はなし得ない。

「不本意ではあるが、それまでゆっくりと力をつけることにしよう。」

しかしそれに異を唱える者がいた。

「ふざけるな!! シヤズ様の仇を打てるというから協力したんだ!」

滅却師の残党だ。

「なら行くといい。」

「今行けば確実に返り討ちだがな。」

「今急いで目的を諦めるか、耐え忍んで目的を果たすか。」

仙波は尚も実験を続けながら、その滅却師にそう告げた。

「自分で決めるといい。」

「くそつ、。」

そして仙波は自身の息子の方に振り返る。

「麓源、この10年でお前にも戦力になってもらおう。」

「はい!」

過去の様子を麓源は遠目から見つめていた。

「シヤズは負け、父上も死神達に敵わなかった。」

「戦力が、、足りていなかった、、！」

今の自分なら、未来に何が起こるかわかっている自分なら、何かができる、麓源はそう確信していた。

「尸魂界と戦う勢力を集めなければ。」

しかし、今の自分を頼るということは、一度は死神に敗れ、時流の爆発に吞まれて過去に戻る事実を曲げてはならない。

「つまり、あの敗北は受け止めなければならない、、。」

悔しいがそうするしかなかった。

「二度目は、、負けんで、護廷十三隊、、！」

「まずはこの戦争で生き残らなければ、、！」

（霊王護神大戦終結後）

あれから麓源は名前を隠し流魂街を放浪しながら、味方になり得る勢力を探してい

た。

しかし無闇矢鱈に動くことはできない。

なぜなら過去の自分は、父から得た情報だけで、三界で何が起きていたかはほとんど知らなかったからだ。

辛うじて知っていたのは綱彌代時灘つなやしろときなだの騒動くらいだった。

下手に動けば大きな時流を変えてしまう。

そう考えて、麓源自身を知る大きな流れ、つまり父が王印奪取に動くまでは情報収集や、計画の準備に徹すると決めていたのだ。

「お、兄ちゃん、聞いたかい？」

「あの鬼白峯の当主が戦死したらしい。鬼白峯家も終わりだな。」

このように、麓源はひたすら情報を集めていた。

斬魄刀と融合した男。

バウント。

思念珠の存在と、それがもたらす大きな影響。

十刃。

元三番隊隊長と猿叉刀ぼつしとう。

八代目剣八。

納谷なやえいてつ叡鉄という死神の斬魄刀。

色白で緑髪の破面。

滅却師の残党。

藍染に運命を翻弄された者。

瀟靈廷壊滅事件に関わった姉弟。

そして今得た情報である、没落寸前の貴族の存在。

これらの情報を元に、麓源は着々と準備を進めていた。

さらに分かったことがもう一つ。

父を蛆虫の巢へと收容する判断を下したのは、山本元流斎重國ではなく、中央四十六室だったこと。

その中央四十六室は諸悪の根源とも言える存在で、生き永らえるに値しない存在であること。

滅却師によって虐殺された四十六室は、総入れ替えとなったが、それでも麓源の中では、屑の集まりという認識には変わりなかった。

麓源にとって、護廷十三隊の殲滅と四十六室の蹂躪が生きる目的となっていた。

そして父が王印移遷襲撃事件が起こし、満を持して麓源は動き出す。

くノヴァアディオ新しい神アジトく

「さあ、地獄へ行きましようか。」

麓源が黒腔を抜けると、目の前には羽の生えた破面、シユリーカーと、奇抜な死神、涅槃マユリが立っていた。

「お、お前だれだ？」

シユリーカーは警戒を強める。

「シユリーカー、地獄へはどうやったら行けるのです？」

突然の問いにシユリーカーは拍子抜けしてしまった。

「も、もう俺の鎖は壊されたから俺は行けねえよ。」

「生前に罪を犯した虚を斬るしかねえんじやねえのか？」

「やはりそうですか、。。」

麓源は瞬歩で移動しシユリーカーの胸を貫く。

「て、てめえ、、、なんで、、、？目の前のやつは、、、」

完全な不意打ちだった。

それもそのはず、シユリーカーとマユリの目の前には麓源が今も立っていたからである。

「あなたは虚ベースでしたよね。斬魄刀で斬られればもちろん、、、。」

「クソツ、、！」

空間から仰々しい地獄の門が出現する。

そしてその扉が開くと、中から巨大な刀とそれを持つ腕が現れた。そしてシユリーカーはその大刀により貫かれる。

「ありがとう。シユリーカー。先に行っていますよ。」

麓源は門の隙間から地獄へと入っていった。

「クソがあああああ！嫌だあああ！」

「一体なんなんだネ、。」

く地獄く

「君は？こんなところまで来るなんて正気じゃない。」

麓源は情報で得ていたピンク色の髪をした破面と交渉を始めようとしていた。

「地獄から出て、私の元で戦いませんか？」

「君は？」

「ここで名を明かせば、何かのきっかけで、過去の自分に伝わってしまうかもしれない。」

そうすれば事実をねじ曲げることとなる。

それだけは避けなければならない。

「そうだなあ、ノヴァディオとでも呼んで下さい。ザエルアポロ・グランツ。」

「ほう、僕を知っているのか。いいだろう。面白そうだ。」

「さて、では次はアローロニーロ・アルルエリを見つけて、早く大虚の森へ行かなければ。」

「涅マユリが我々の切り札を持っていく前に。」

く大虚の森く

いつもと同じ、大きな霊圧の塊がぶつかり合っていた。

「破道の七十三、双連蒼火墜！」

赤髪の死神が放った鬼道を、破面が拳で殴り飛ばす。

「まだまだだよー！」

打ち破られた鬼道の煙に紛れて死神は斬魄刀で斬りかかった。

「一刀両断！」

死神の斬魄刀が破面の胸から腰にかけて大きく斬り傷を与え、破面の身体から鮮血が吹き出した。

「おっと、今回はここまでだ！また遊ぶでしょう、死神！」

そう言い残すと、破面は黒腔へと消えていく。

「逃したか。」

そして破面が黒腔から自身の住処へと出た時だった。

「剣八と戦いたくありませんか？」

麓源は破面に問いかける。

「誰だ？」

麓源は破面の問いに答えることなく続けた。

「私に書いて来れば剣八と戦うことができます。」

「へえ、君は？」

ノヴァアディオ
く新しい神アジトく

「これは面白いネ。」

マユリは液体の入った高さ一メートルほどの円柱状のカプセルを眺めていた。

「霊王の右足に脊髄。やはりすでに見つけていたか。あのときは他の部位を探していた、というところかネ。」

「それは我々の物です。涅マユリ。」

麓源の声が響く。

麓源の後ろには3人のフードをかぶった破面が立っている。

「間に合ってよかったです。あなたが奪って行く前に。」

「退いてもらえませんか？ここで暴れて霊王の肉体に傷はつけないのです。他のものならどれだけ研究しても構いませんから。」

「こんな物を前に退くと思うかね？」

「でしようね。」

麓源は小声で斬魄刀の解号を唱え、瞬歩でマユリの背後を取る。

麓源により羽交い締めにされたマユリの前にはザエルアポロが立っていた。

「ではな、三流の研究者！グラン・レイ・ゼロ王虚の閃光！」

マユリは羽交い締めから逃れようとするが、まるで岩のように固くやつとの思いで右手だけが自由になる程だった。

「これはまずい、い、い、」

マユリはすぐ様刀を取り出し自身に突き刺す。

パシヤツ

間一髪マユリは液体となり部屋の隅へと流れていく。

麓源は計画と違う攻撃を放ったザエルアポロを諫めた。

「あのまま撃つていけば、涅マユリは死んでいたかもしれません。涅マユリは殺さないという約束だったはずです。」

涅マユリを殺してしまえば、時の流れに矛盾が生じる。

「感動の再会だったものでついね。すまない。」

ザエルアポロは悪びれる素ぶりさえ見せない。

麓源は胸元からある機器を取り出す。

「ソレハ何ダイ?」

アールローロはその見かけない機器を指して問いかけた。

「これは血を解析しその人物がどこにいるかを把握することができ装置です。」

麓源の父、仙波逸ノ将が更木剣八と交戦した際に採取した血液が入っている。

更木剣八の存在は大きい。

護廷十三隊と交戦するにあたって、更木の居場所は重要となることを父もわかってい

たのだ。

「あの人も目の付けどころはいいんですが、少しばかり抜けているのと、すぐ熱くなるところが惜しくてね、」

麓源の父は昔から涅マユリや藍染、浦原喜助の話となると、すぐに激昂していた。

そして激昂すると、周りが見えなくなり猪突猛進状態となるのが玉に瑕きずだった。

「まあだからこそ私の策がうまく事運ぶのですが。」

「何ノ話ヲシテイルンダ？」

「あ、いえいえ、こちらの話です。今は更木剣八がどこにいるかが分かるようになっていきます。」

更木剣八の名を聞いて、今まで沈黙していたシエン・グランツが突然話し始める。

「更木剣八だつて？どこにいるんだ？僕は約束したんだ。また殺し合いをするとね！」

「今はまだダメです。計画が狂います、筋道通り進めなければ。」

「ならいつならいいんだ!!」

「100年後まで御機嫌よう、といったところでしようか。」

麓源はザエルアポロの方を向き、その言葉を伝えた。

「なぜ僕に言うんだ？」

「なににせよ霊王の欠片を持っている状態で彼とは会いたくないですからね。」

「では霊王の右足と脊髄を持って先に行つててください。」

「私はここで会うべき人がいますから。」

そして麓源は3体の破面を残して、黒腔へと姿を消した。

く寂れた小部屋く

幼い麓源はポツリと一人座っていた。

斬魄刀を折られてしまったことで父から叱責を受け、落ち込んでいたのだった。

青年の麓源は黒腔を抜け、幼い自分の目の前に現れる。しかし幼い自分はうつむいていて全く気付いていない。その様子を見て麓源は懐かしく感じていた。

当時落ち込んでいたところ、顔を上げると、目の前には黒いコートの人物が立って腰を抜かすほど驚いたのを、鮮明に覚えていたからだ。

そして幼い自分が顔を上げ、驚いた顔で未来の自分を見ている。

あの時の自分は何と言ったのだろう。

今から言おうとしている言葉は、あの時と同じ言葉なのだろうか。

そんなことを考えながら青年の麓源は言葉を発する。

「やあ、はじめまして。いや、私は初めましてではないか。」

幼い自分は警戒心を前面に出している。

「お、おまえは？」

そんな未熟な自分を微笑ましく思いながら、当時の自分から言われたことを伝えた。

「いいことを教えてあげよう。君の父上に報告するといい。」

「ここに置いてあつた霊王の一部は……」

「涅マユリが奪つて行つた。」

それを聞いた幼い麓源は薄暗い廊下を全速力で駆け出した。

「やはり若いな。」

青年の麓源は微笑しながら黒腔を開き、満足そうに中へ入つて行つた。

そして、ザエルアポロ達の前に黒腔が開き、麓源が現れる。

「遅かつたじゃないか。何をしていたんだい？」

ザエルアポロの問いに、麓源は静かに答えた。

「過去を塗り替えてきたんです。」

過去の自分が認識していた事実は変えていない。

しかし内容は変えてきた。

涅マユリに、死神側に霊王の一部が渡っていたら、戦況はかなり厳しくなっていただらう。

「ここが我々にとって勝利のターニングポイントとなる。」

これで、これから向かう未来では有利に働くはず。

私が必ず浄化する。

To be continued...

第24話 進化の定義

く仙波麓源迎撃地く

「停滞せよ、ぶんげんせつり分限摂理。」

麓源が移動すると、分裂するようにもう一人の麓源が佇んでいた。

「成る程。それは斬魄刀の能力だったのかネ。」

「余りにもお粗末な物だから義骸かと思っていたヨ。」

マユリは麓源の分身に目をやった。

「動くわけでもなく、攻撃を発するわけでもない。」

「君の父上の方がまだマシな斬魄刀だったヨ。」

麓源は不気味な笑みを浮かべる。

「それはどうでしょうか。」

浦原は斬魄刀を抜き、帽子を押さえた。

「何かまだ隠してますねえ。」

麓源は再度笑みを溢す。

「さあどうでしょう?」

「どうなんですかねえ、!切り裂き紅姫!」

麓源はすんでのところで斬撃を躲す。

その躲した隙をマユリは逃さなかつた。

「こちらがガラ空きだヨ。」

マユリの腕はロケットのように打ち出されると、その伸びた腕で麓源を斬り裂いた。麓源の体は二つに裂かれ崩れ落ちる。

「今回は以前の時のように補肉剤は忘れていませんか?」

佇んでいた麓源の分身からマユリを皮肉る声が響いた。

「なるほど。死ぬほどの致命傷を負ってもその分身から再開できるのか。」

「では、これはどうかネ?」

マユリは現れた分身を斬り付けていく。

「さあ、実験の時間だ。」

「神経信号が切断された分身体から再開するとどうなるのか。」

そう言うと、マユリは意識のある本体の麓源を斬り裂く。

すでにマユリによって腕を斬られた分身から再開した麓源は、マユリの仮説を立証する結果を呈した。

「くっ、、、腕が、、、」

「全く、、、他愛もないネ。」

「黙れ、外道が。」

「貴様が行なってきた非道の数々。」

「実験と称して滅却師を虐殺し、石田雨竜と対峙した際には部下を人間爆弾とし、、、」

「そのような外道に言われる筋合いはない!!」

麓源は動く左手で自身を貫き、別の個体から再開した。

「おっとおっと、君の認識には間違いが二つある。」

「一つ目は私は外道ではなく、脊髓に慈愛が生えて歩いているような聖人だよ。」

「そして二つ目は、私は滅却師の実験は行っていない。」

「出たら目を!!」

「石田雨竜にも、肉塊となった祖父の写真を見せていたそうではないか!!」

「君はもう少し賢い人間だと思っていたが、やはり仙波の息子だね。」

「石田雨竜との戦闘で、私が滅却師の実験写真を持っていたのが偶然だとしても言うのか
ネ?」

「あれは命令だよ。」

「四十六室のネ。」

「まあ私が滅却師の小僧と戦っていたときにはすでに四十六室は全滅していたわけだが。」

「何が言いたい!?!」

「つまり涅サンは他の人の実験の責任を負わされたんす。」

「なぜ責任を負う必要がある? 四十六室なら揉み消すこともできたはずだ。」

「そう。その通りだ。しかし揉み消さなかった。」

「奴らは私の存在が気に入らなかつたようですね。」

「君が滅ぼそうとしている四十六室は、皮肉にも君の父上と同じ考えだったということだ。」

「蛆虫の巢出身というのはどうにも高貴な存在には受け入れ難いそうでネ。」

「だからこそ、局長責任として仙波が実験をした滅却師、石田雨竜の祖父の写真を、あえて持っていたのだヨ。」

「名残惜しいが、そろそろ楽しいお喋りも終わりにしようじゃないかね。」

「卍解、金色足殺地蔵、」

マユリの持つ斬魄刀から紫色の瘴気が漂い始め、マユリの背後が見えなくなる。

そして引き戸が勢いよく開いたような音と共に、瘴気が晴れていった。

赤ん坊の泣き声と共に、新たな金色足殺地蔵が姿を表す。

「泰安^{たいあんへいていしょう}拝帝廠。」

卍解によって形作られた廟堂の中に、異形の赤ん坊が座していた。

顔は正面左右の計3つ、さらにそれぞれの目から腕が生えているが、胴体に腕は付いていなかった。

するとその異形の金色足殺地蔵がのそのそと廟堂の外へ出て、麓源の方へと向かっていった。

麓源は分身を増やし続けるが、金色足殺地蔵の目から生えた腕が伸び、麓源の分身を次々と喰らっていく。

しかし麓源の増殖の速度についていけていなかった。

「オギャアアアアアアア!!!」

金色足殺地蔵は泣き叫ぶと廟堂へと戻っていく。

「卍解が尻尾を巻いて逃げるとは。」

「これは戦略的撤退だヨ。」

金色足殺地蔵が廟堂の中へ入ると戸が勢い良く閉まった。

「まだ何かあるのか。」

「だから言っているだろう。戦略的撤退だと。」

「さあ、新たな金色足殺地蔵の誕生だヨ。」

廟堂の戸が開くと、胴体から腕が片方で4本、目から生えた手からさらに4本ずつの腕が生え、計16本の腕を持つ金色足殺地蔵が座していた。

金色足殺地蔵が恐ろしい速度で廟堂から外へ出て行く。

そしてそれぞれの腕が麓源の分身を喰らっていく。

「なるほど、」

「私の能力を知っていてその卍解を使ったのか?」

「なんだと?」

「流石の涅マユリと浦原喜助でも私の能力を知らないという訳だ。」

「何かあるようツスねえ、」

「進化せよ、分限摂理。」

麓源は浅打に手をかけると霊圧を上げた。

しかし目に見えて何かが変わったわけではなかった。

「何か変わったとでもいうのかネ？やれ、金色足殺地蔵。」

マユリの指示通り、金色足殺地蔵は麓源の分身に手を伸ばし、口に運び呑み込んだ。

すると少しして金色足殺地蔵の腕がもげ落ち始める。

「なに？」

「これが私の能力だ。」

金色足殺地蔵は体のあらゆる部位が破壊され始め、見る見るうちに体は朽ちていった。

「なるほど、細胞を破壊する毒かネ。」

マユリは顎に手を当て得られた情報から現状を分析をしている。

そして麓源はその答えとなる能力をあえてマユリに伝えた。

「そう、この斬魄刀の能力はお前の手口と同じ。敵の能力に適応するよう進化する能力だ。」

既に左足だけになった金色足殺地蔵が体をうねらせ這いながら廟堂へと戻って行く。廟堂の戸が閉まると、数秒して再度戸が開いた。

次の金色足殺地蔵の胴体に手脚は付いておらず、目から生えた手で這出した。

そして何よりその金色足殺地蔵は首が長く、その首も五分節に分かれていた。

「サア、食事の時間だよ。」

金色足殺地蔵は腕を伸ばし、再度麓源の分身を掴むと口へ運んだ。

しかし金色足殺地蔵の体は破壊されていない。

「なるほど、抗体を手に入れたということですか。」

「それだけじゃあない。」

マユリは瞬歩で麓源の背後に回り、首を断ち斬った。

「何がしたいのか理解に苦しむ。」

マユリは嘲笑いながら手を上げた。

「なぜ君が理解できないのか理解に苦しむヨ。」

「外道の考えることなど理解できるはずもない。」

金色正殺地蔵の三顔の口から毒霧が吹き出される。

「この抗体に適応する毒を持つ物を逆に破壊する毒だヨ。」

毒霧に触れた麓源の分身がどんどんと朽ちていく。

「進化し続ける能力が仇となったようだね。」

朽ちていく分身を見た麓源は焦るそぶりも見せず、斬魄刀に手をかけた。

「退化せよ、分限摂理。」

麓源が別の解号を唱えると同時に分身の崩壊が止まる。

「成る程。」

マユリは目を細めそう呟いた。

「進化するために一番必要なことが何かわかるか？」

「適応だ。」

麓源はさらに続ける。

「では適応した末に滅亡するしかない運命が待ち構えていたら？」

「敢えて退化することができれば、もはやそれは進化だとは思わないか？」

「進化できないのなら、前に、、過去の自分に戻ればいい。」

「ホウ、、」

くシユリーカー迎撃地く

「サアて、俺んこの死神はこれで最後か?」

「全くよお、、誰もいらないと思やあ、いきなり現れるんだからナア。」

「ザコ副隊に普つつ通の隊士。」

シユリーカーの前には、小椿仙太郎、虎徹清音、大勢の隊士が倒れていた。

「当初の予定とは少しズレたが、現世に行つて奴らと合流すつか。」

「こんだけやられちや霊王の方はもう無理だろ。」

「あいつの言う通り、現世から世界を壊してやるよ。」

To be continued.....

登場人物く新しい神（ノヴァディオ）・第三勢力く

ノヴァディオ
く新しい神く

○仙波逸ノ将
いつのしやう

かつて浦原喜助が尸魂界から追放された時期の、十二番隊第四席だった男。

蛆虫の巢出身の涅マユリを蔑んでおり、またマユリが認められていることに憎しみを抱く。

当時、十二番隊隊長代理をしていた現零番隊の修多羅千手丸、十二番隊副隊長代理だった涅マユリに反旗を翻すが、そこに居合わせた藍染惣右介によって阻まれ、蛆虫の巢送りとなる。

滅却師が攻めてきた際に、偶然蛆虫の巢から脱出でき、息子と共に尸魂界に対する復讐を誓う。

○シヤズ・ドミノ

星十字騎士団の一人、グレイミー・トウミューの創造によって生み出された滅却師。

しかしその実は、彼の唯一の部下であったアルファラ・シラであり、尊敬するシヤズ・

ドミノの名を語っていた。

霊王護神大戦で一護に倒された後、瀕死となっていたところを仙波逸ノ将に拾われ、共に尸魂界への侵攻を企てる。

○シユリーカー

かつて一護が死神代行になったばかりのときに交戦した虚。

また、チャドが初めて出会った虚で、ルキアと共闘し戦った。

生前に罪を犯していたことから、一護に斬られて地獄に落ちた。

その後地獄の咎人として再度姿を表す。

○仙波麓源ろくげん

仙波逸ノ将の息子。

勢いはあるが、まだまだ未熟な若い死神。

く第三勢力く

【8の紋章】

元第8十刃オクターバー・エスパーダ

ザエルアポロ・グランツ

かつて恋次や雨竜と戦い、最終的に涅マユリに敗れた破面アランカルの科学者。
マユリに敗れた後、地獄に落ちた。

【9の紋章】

元第9十刃スベール・エスパルダ

アローニロー・アルアリ

かつて虚圏でルキアと対峙したエスパルダ。

ルキアに敗れた後、地獄に落ちた。

【1000の紋章】

プリバロン・エスパルダ
十刃落ち

シエン・グランツ

元第0十刃セロ・エスパルダのときのザエルアポロ。

自身を研究者のザエルアポロと区別するため、“1000”という意味でシエンと自称する。

後に、更木剣八や痣城剣八と対峙し敗れる。

【風の紋章】

バウント（現世でいう吸血鬼）

狩矢神^{じん}

人間の魂魄を喰らい力を得る種族、バウント。

人間からの迫害を受け、魔女狩りのように仲間を殺されていった。

そのためバウントを作り出した死神に復讐するべく、バウント達を集めて尸魂界に侵攻するが、双極の丘で一護に敗れ消滅した。

【紅葉の紋章】

思念珠^{しねんじゆ}

茜雫^{せんな}

一護達の前に突然現れた謎多き死神の少女。

その正体は記憶の集合体で、現世、尸魂界を消滅させることのできる《思念珠》という存在だった。

最後は一護を救うため、自身と引き換えに世界の消滅を防いだ。

【脚の様な紋章】

霊王の右足

流魂街逆骨で発見された霊王の一部。

【骨の様な紋章】

霊王の脊髄

流魂街逆骨で発見された霊王の一部。

【蛭の紋章】

シユリーカー

かつてハヤブサみたくヒットアンドアウェイをしようとしたが、チャドに電柱で叩き落とされる。

殴られた時に発する声は『えぶ』や『ほぶ』。

【杖の紋章】

死神

おにしろねたまき
鬼白峯珠稀

鬼道の開祖であり、かつて五大貴族だった頃、最も栄華を誇っていた時の当主。夫、息子が病死で他界し、霊王護神大戦では義娘、孫を亡くしているため、現在は名家から没落し、孫の嫁と共に暮らしている。

【護廷隊の紋章】

死神

蟹沢ほたる

檜佐木、青鹿の級友。

恋次、イツル、雛森の先輩にあたり、檜佐木、青鹿実習の引率として

実習地に向かうが、虚の襲撃で命を落とす。

【焰の紋章】

燬きこ王うおう

かつてルキアが双極の丘で処刑されそうになったとき、処刑者として現れた焰の鳥のような存在。

京楽と浮竹によって破壊された。

【弓矢の紋章】

クインシー
滅却師

ナナナ・ナジャーグループ

星十字騎士団の一人。

相手の霊圧を観察把握し、相手を麻痺させることができる
『The Underbelly』の能力を持つ。

なんとも言えない奇妙な格好をしており、『チキンの足を挽ぐよりラクシヨ〜』と嬉しそうに藍染を短期間行動不能にさせた。

【ホムラ】

狗村左陣と同じ種族の少年で、本名はバイケイ。

かつて死神に襲われたところ、命を救ってくれた姉弟のうち、姉の名を借り、ホムラと名乗る。

死神と狗村左陣に強い憎しみを抱き、ノヴァディオに加勢する。

【王印の紋章】

自身をノヴァディオと名乗る男で、第三勢力の頭領的存在。

将来何が起こるかを知っているような口振りをする謎多き青年。

正体は、タイムスリップをし成長した仙波麓源。

死神達に一度敗北した経験を活かし、再度中央四十六室、尸魂界の浄化を目論む。

接続章

Extra III

～浦原商店地下・勉強部屋～

「後悔しなや。」

突然現れた金髪のおかつば頭にそう言われ、顔を手で覆われた。

～
～
～
～
～
～
～
～

「いはいは、」

一勇は横になつた摩天楼の上に立っていた。

「そう、いつもの場所だ。」

死覇装を纏つた黒い霧もやのような人影がぼつりと佇んでいた。

「融月。」

「一勇、お前ももう気づいているとは思いますが、お前の中にいるのは私だけではない。」

「まずは、、、」

黒い融月が霧となって消えていくと、灰色の靄もやが現れる。

「一勇。」

「お前は、、、？」

「私も融月だ。」

「物質の魂を使役する。それが私の司る能力。」

すると光と共に、周囲が摩天楼から一勇の通う高校の教室へと変化した。

「そこから動かず、何も触らずに私に何かを当ててみる。」

「はあ？」

「言っただろう？私の能力は物質の魂を操ると。」

一勇は聞き慣れない単語に目を丸くしている。

「物質の魂？」

「なんだ、父親から聞いていないのか？」

「お前がいつも使っているペンを想像してみろ。」

「はあ？なんなんだいきなり、、、」

「いいから想像してみろ。」

一勇は目を瞑り、いつも学校で作っているペンを頭に思い浮かべた。

「なるほど、これか。」

灰色の靄もやの目の前にある机の上にオレンジ色のプラスチック製のペンが現れる。

「どうなってるんだ!?!」

「一勇、これに触れず動かし、私に当ててみる。」

「無理に決まってるんだろ!」

「物質には魂が宿っている。その魂を引き出して使役することで動かすことができる。」

「物質の中の魂、、、?」

「時間がない。霊圧を研ぎ澄ませてみる。」

「霊圧を、、、?」

「(なんだ、、、? うっすらと何かが浮かんでる、、、)」

「視えたか? 今お前が気づいたものこそが、物質の魂だ。」

「次はお前の霊圧を伸ばして魂につなげるイメージをしてみろ。」

「(伸ばしてつなげるイメージ、、、)」

「(繋がった!)」

「今だ! 一勇! 使役してみろ!」

するとペンが宙に浮き、灰色の靄に突き刺さった。

「これは相手の攻撃方法の構築を拒絶する力。」

「攻撃方法の構築の拒絶、、、？」

そこまで聞いて一勇はこの力が何なのか勘付いた。

「これはお袋の力、、、！」

「そう！その通り！けど君が使えるのはこの拒絶の力だけなんだ。」

「まあそんなことで、灰色と僕の力は理解できたよね？」

そう告げながら橙色の霧はびゅんびゅんと一勇の周りを飛び回っている。

「次は河川敷だ。」

灰色の融月がそう言うと、辺りが白い光に包まれた。

「ちよつ、、、！一体何なん、、、」

光が収まると、そこは見覚えのある景色だった。

「ここは、、、？うちの近所の河川敷、、、？それに、、、雨？」

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:
:
:
:

Extra
IV

「ここは、、？うちの近所の河川敷、、？それに、、雨？」

そこに青い霧もやが現れる。

「あんたも融月か？」

「そうよ、一勇。」

その青い人型の霧は上空へと顔を上げた。

「あれは？」

「あなたの父から受け継いだ虚の力。そしてあの力も“融月”。

上空に佇む白い霧は歪な霊圧を放ちながら吐き捨てた。

「一勇！俺はお前を引きずり降ろして、この世界の王になる！」

青い霧もやは水色の弓矢を壺子で構築させ、白い融月に向け矢を放つ。

「一勇、あの融月を屈服させて虚の力を手に入れるの。」

一勇は青い靄の手に構築された弓を見て目を見開く。

「それは、！滅却師の弓!? あんたは、滅却師の力なのか?」

「もしかしてお前ユーハバツハか!？」

青い靄は無言のまま顔を横に振っている。

「確かにあなたは幼いころ、滅却師の頭領であるユーハバツハの残滓に触れその身に宿した。」

「いえ、正確には霊圧の表面に纏っていた。」

「ユーハバツハはあなたの内側に、つまり融月の中に入ろうとした。」

「けど、あなたの知っている《黒の融月》、そして《灰色の融月》、《白の融月》、《緑の融月》、《橙色の融月》、《私》がそれを阻んでいた。」

「まあ、あの白い融月はあなたを乗っ取るためにユーハバツハの侵入を阻んでいただけなんだけど。」

「つまりあなたの中の滅却師の力はユーハバツハではなく、私。」

痺れを切らせた白い融月は斬魄刀を振り上げる。

「ごちゃごちゃうるせえ! いくぜ一勇!! 月牙天衝!!」

白い融月は上空から一勇に向け白い月牙を放つ。

「野郎！月牙を！！」

迫りくる白い月牙の前に、青い融月が立ちはだかった。

「一勇！私の後ろに！！」

青い融月は、一勇を守るように両手を広げた。

「お、おい！！」

直撃だった。

あそこまでもろに攻撃をくらってしまつては無事であるはずがない。

「、、！！」

白煙が晴れると、青い靄の体には青い色の線状模様が浮かび上がっていた。

青い靄は何事もなかったかのように、また弓を引き絞る。

「一勇、月牙の前に飛ばさず留めるイメージで放つてみなさい。」

一勇は訳もわからず、その言葉通り月牙を放つ。

すると、月牙の斬撃は三日月状に空中に留まった。

「斬魄刀を前に向けたまま後ろに引きなさい！」

一勇が斬魄刀を後ろに引くと、三日月状の斬撃から、引いた斬魄刀の鋒にかけて、霊

圧の線が伸びる。

「そして思い切り突き出す！」

思い切り斬魄刀を突き出すと、霊圧の線は白い靄目掛けて放出された。まるで滅却師の矢のように。

その霊圧の矢は白い靄の肩を掠めた。

「クソがつ、！」

白い靄は完璧に避けたつもりだったが、その速度に対応することができなかった。

「クソがよお!!虚閃!」

放たれた虚閃は一直線に一勇へと向かっていく。

すると一勇はその虚閃に向かって飛び上がる。

「ちよつと!一勇!!」

青い靄は慌てたように一勇に手を伸ばした。

「なんだあ?一勇!気でも狂ったか!」

虚閃は一勇に直撃し、大爆発を起こす。

「ハハハハハ!!!!これで俺がこの世界の王だ!!」

爆煙が吹き飛ばされ、その渦中から霊圧の矢が何本も白い靄へと突き刺さった。

「あ？」

「こうすりやお前が油断すると思つたよ！」

一勇の肌には青色の線状模様が浮かんでいる。

「俺の急所を射抜かなかつたのは誉めといてやる。」

「もしここで俺を完全に射抜いていたら、滅却師の力で虚の俺は滅されていたからな。」

白い靄は頭の方から光となって蒸発していつている。

「仕方ねえ、まだ今はお前の馬になっておいてやる。」

「俺を呼び出すときの解号は、、、」

「忘れんな！隙を見せりや、いつでもお前を引きずり下ろすからな！」

一勇は青い靄の元へと戻る。

「一勇、彼との戦いを見てあなたには勇敢さがあるのが分かつた。」

「けど、無茶と無謀なは違うことをしっかり覚えておいて。」

「あなたには《滅却師の力》を授ける。」

青い靄は一勇の手に触れると霊圧を注ぎ込んだ。

「これはあなたが無茶できる範囲を広げられる力よ。」

青い靄は両手で一勇の手を包み込む。

「一勇、自分を大切にね。」

「自分を大切に、、、？」

「自分を大切にするっていうのは《今日できることをやり逃さないこと》なの。」

「それを忘れないで。」

「《滅却師の力》を使いたい時はこう唱えるの。」

「、、、」

「最後は《天蓋にいる融月》のところへ行きなさい。」

そう言つて青い靄は天を指差した。

「天蓋、、、？」

上空を見上げると、空にひび割れたかのような穴が空いている。

「あなたの父は虚化まで習得した。けどあなたはその先の可能性を秘めている。行きな

さい。一勇。」

「ああ！」

一勇が飛び上がり、空気中の魂を使役しながらどんどん上空へと登っていく。

そしてその天蓋と呼ばれる空間に入ると暗闇に包まれた。

「なんだ、？夜、？？」

そこは夜のように暗く、砂漠の空間が広がり、うつすらと月灯りが辺りを照らしている。

「ここが、天蓋、？」

「一勇。」

一勇が辺りを見回しながら歩いていると、黒く深い緑の靄もやが一勇の前に立ちはだかった。

「心在るが故に、。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:

Extra V

「お前、その靈圧、破面だな、？」

「虚閃光。」
セロ・オスキュラス

緑の靄もやから放たれた虚閃セロが一勇の左肩を掠める。

「どうした、呆けていたら俺に殺されるぞ。」

その言葉で我を取り戻した一勇は斬魄刀を振るった。

「月牙天衝！」

緑の靄は一勇の月牙天衝を左手で受け止め相殺させると、右手に緑の雷のような靈子を構築させ始める。

そして槍のようになった靈子を一勇に向かって投擲した。

「雷霆の槍。」
ランサ・デル・レランパーゴ

一勇は雷のような槍を避けると、一勇のはるか後ろで轟音を立てながら火柱が上がる。

その火柱を目の当たりにした一勇は動くことができなかつた。

「どうだ一勇。絶望したか？」

凶星だったのか一勇は苦悶の表情を浮かべている。

「一勇。」

緑の靄は一勇の名を呼んだ。

「絶望に負けるな。」

「お前の父と母は幾度となく絶望を乗り越えてきた。」

「親父とお袋が、、？」

「そうだ。お前の父からは戦いを通して、お前の母からは対話を通して心というものを感じた。」

「やつらの子だと言うのなら乗り越えて見せろ、一勇。」

一勇は斬魄刀を振るい、斬撃をその場に留め、そこから弓矢の要領で霊矢を飛ばす。

緑の靄は虚閃を飛ばし相殺させた。

相殺の衝撃によって砂が舞い上がる。

「ランサ・デル・レランバーゴ
雷 霆 の 槍。」

「やべっ、っ、」

舞い上がった砂によつて槍の視認が遅れた一勇は月牙天衝を何度も放ち相殺させようとするが、ランサ・デル・レランバーゴ雷 霆 の 槍の勢いは全く衰えない。

がむしやらにあらゆる能力を使った一勇はすんでのところ、槍の進行方向をずらすことに成功する。

「もしかして今のは、砂を、、？」

「となりや、試してみるしかねえ！」

「（一勇の顔つきが変わった。希望を見いだしたか？）」

「月牙天衝！」

一勇は緑の靄ではなく、その真下の地面に向けて月牙を放つ。

「何をしている一勇。」

そして月牙は地面に直撃し、大量の砂を巻き上げた。

一勇は砂煙の外から滅却師の矢を放つ。

「そんな砂の煙幕で不意が突けると思ったのか？」

緑の靄はまるで攻撃を予測していたかのように矢を躲した。

「そんなことでは俺は倒せんぞ、かず、、、なに？」

緑の靄には一勇の放った矢が突き刺さっていた。

「なるほど、使役した砂で一度躲して通過した矢の方向を変えたのか。」

「なら最後にこれを防いでみる。」

緑の靄は胸を貫かれたまま、雷の槍を構築する。

ランサ・デル・レランパーゴ
「雷 霆の槍。」

今までにないほどの巨大な霊圧を放っている。

「これで最後だ、一勇。」

放たれた槍は轟音を立てながら一勇に迫るが、一勇の体がオレンジ色に光ると、槍は一勇に辿り着く前に崩壊していった。

「なるほど、攻撃の構築の拒絶か。」

緑の靄は戦闘を終えるかのように霊圧を落ち着かせ、胸に刺さる霊子の矢を分解し

た。

「一勇、ここまです。お前は絶望に立ち向かい、俺を上回った。」
「お前に俺の能力を授ける。」

そう言うとき緑の靄は一勇の方へ歩み寄る。

緑の靄が手を一勇に差し伸べると大きな光が二人を包む。

「なっ、、、」

一勇が自身の胸元を見ると、大きく穴が穿たれていた。

「てめえ、、、何しやが、、、」

「一勇、お前の体を見てみる。」

「こ、これは、、、！」

「これが俺の、そしてお前の新しい力だ。」

「俺の能力を呼び出すときの解号は、、、」

「さあ、戻れ。」

「元の世界へ。」

心あるが故にお前に全てを。

T o b e c o n t i n u e d

E x t r a
VI

《現世派遣部隊》

部隊長 六車九番隊隊長

碎蜂二番隊隊長

同隊大前田副隊長

八番隊行木副隊長

九番隊小椿副隊長

四番隊山田三席

十三番隊鏑面さびつら五席

五番隊阿散井十四席

「一体なんのための現世派遣なんだ？尸魂界で迎え討つんだろ？」
六車が腕組みをして京楽に問いかける。

「滅却師が現世で何か動きを起こそうとしている。」

「そうなんすか!？」

大前田は思わず声を上げた。

「そうなんだ。バウントの古賀クンと一緒に来た滅却師の女の子達がいるだろう？」

「あの娘たち、前に滅却師の仲間から誘われたらしいんだ。」

「ユーハバツハを復活させるってね。」

京楽は碎蜂を一瞥する。

「それで、隠密機動に調べてもらったら、」

「七緒ちゃん、資料を。」

七緒は手に持つ資料を各人に配り始めた。

「行き渡ったかな？まず上から二つが滅却師の娘たちが言ってた、誘ってきた滅却師さんだよ。」

「ミニーニャ・マカロンとジゼル・ジュエル、」

行木はその名を読み上げる。

「そして、そこと繋がっているのがナナナ・ナジャークープ。」

「こいつ、、今回の敵の中にいる、、！」

「このナナナと組んでるのが、キルゲ・オピーという滅却師だ。」

資料の《キルゲ・オピー》まで視線を進めた瞬間、皆が凍りついた。

なぜならその下には、死神側に多くの犠牲者を出した滅却師の名があつたからだ。

「ジェラルド、、ヴァルキリー、、！」

「なんでこいつが、、」

「皆は霊王の心臓を知っているかい？」

「心臓？」

六車は目を細めた。

「そう。このジェラルドという滅却師はユーハバツハから能力をもらわず、霊王の力からその能力を得ているようなんだ。」

「けどこいつ、ユーハバツハにやられたんだろ、？」

ジェラルドと交戦した死神からはそう聞いていたし、檜佐木の書いた《瀨霊廷通信特別号》にも、そう記してあった。

「どうも霊王の心臓の力で生きてる可能性があるみたいなんだ。あの娘たちの話では。」
「だからもしもの時はこの滅却師を迎え撃って欲しくてね。」

「ではなぜ私たちなのさ？」

「これまで沈黙していた碎蜂が口を開く。

「このジェラルドっていう滅却師は攻撃を受けると強化、肥大化、再生するんだ。」

「つまり、できるだけ少ない手数で終わらせたい。」

「そこで、致死性の高い能力を持つ者を選出させてもらったんだ。」

「涅局長曰く、致死力と言えば碎蜂隊長が一番らしい。」

「碎蜂隊長なら上手くいけば二撃で終わらせることができるからね。」

その話を聞いて、六車は自身の招致に疑問を抱いていた。

「それで言ったら俺の正解なんて一撃とは程遠いだろ。」

「六車くんには、もし核が露出した場合壊れるまで殴って欲しいんだ。」

六車はその説明に納得しながらも、もう一つの疑問、端に立つ新戦力に目をやった。

「で、なんで蓼花と錆面が？」

「彼らは副隊長たちと協力して周りの雑兵を倒して欲しいんだ。」

そして京楽は小声で一人呟いた。

「それと切り札として控えていて欲しいからね。」

そして申し訳なきように花太郎が尋ねる。

「あ、あのう、、、なんで僕が、、、？」

「花太郎くん、君は重要だ。」

「ジェラルドが攻撃を受け強化した場合、その傷を吸い取って欲しいんだ。」

「そうすれば強化を防げるかもしれない。」

「は、はいっ！」

重要と言われた花太郎は、思わずピンと背筋を伸ばした。

「じゃあ六車くん、現世は頼んだよ。一護君にも伝えておくからさ。」

「出撃は敵さんが攻めてきたその瞬間からだよ。」

「尸魂界は僕たちに任せて。」

「来やがった！行くぞでめえら！」

六車の掛け声と共に穿界門が開く。

その時だった。

碎蜂の前に隠密機動が現れ、膝をつく。

「ご報告申し上げます！」

「現世にて滅却師の霊圧を感知！現在外世部隊と交戦中！」

「クソっ！早えな！行くぞ！」

六車はそう言い残すと我先に穿界門へと入っていった。

「頼むぜ一護、！」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:
:
:

第5章 救世

第1話 No one can change my world

（現世）

「アデイクシオン・シヨット！」

「あんた達を許可するわ！」

「へえ、、、やるじゃん。」

一勇と竜燕を逃すために織姫とチルツチは、滅却師のジゼル・ジュエルと戦っていた。そしてそこへ加勢に入った完現^{フルプリンガー}術士の毒ヶ峰リルカと獅子河原萌笑。

ジゼルによってゾンビにされた者たちを、リルカがぬいぐるみに封じ込めて無力化し

たのだ。

その様子を見たジゼルは、めんどくさそうな顔で霊子で弓矢を構成し、矢を引き絞った。

キンツ

ジゼルの放った矢は斬魄刀によつて斬り伏せられた。

「間に合ったか。」

ジゼルの前に立ちほだかったのは、九番隊隊長六車拳西を始めとする現世派遣部隊だった。

すかさず碎蜂が抜刀しながら瞬歩でジゼルの方へと向かう。

「待て！斬るな！そいつの返り血を浴びれば終わりだ！」

その言葉に碎蜂は瞬歩で退き間合いを取った。

大前田が六車に大声で問いかける。

「ならどうすんすか!!？」

答えを探す六車の横に若い死神が並んだ。

「要するに血を出さずに攻撃できればいいんですね？」

「鏗面、。。。」

横に立ったのは、かつて綱彌代時灘の件で生み出された産絹彦禰うぶぎぬひこねもとい、鏗面彦禰だった。

「僕ならそれができます。」

「任せてください、六車隊長。」

その言葉に六車は部隊長として頭を悩ませた。

隊長格にも匹敵する滅却師をまだ若い五席の死神に任せていいものか、と。

しかし今太刀打ちできる死神は彦禰しかいないことも事実だった。

「全く、、、五席のガキに任せるしかねえ俺たちが情けねえぜ。」

「いけるか？ 鏗面。」

「はい。」

「お前がやられて修兵に卍解でお灸据えられちゃ敵わねえからな。」

六車は彦禰の肩に手を乗せ力を入れた。

「絶対勝てよ。」

「任せてくださいい！」

六車達は、一護の靈圧がする方へと飛び上がっていく。「ちよつと、先には行かせないつて。」

ジゼルは飛び上がっていく六車達に弓矢を向ける。

「破道の七十三、双連蒼火墜！」

彦禰の放った鬼道は一直線にジゼルに直撃し黒煙が立ち込めた。

そして黒煙が晴れると共に、少女のような声が響く。

「ねえ、横から攻撃するのやめてくれない？」

ジゼルの体には青色の線模様が浮かび上がっている。

「ほんとムカつくんだけど。」

先に行く一行を見ながら彦禰は斬魄刀に手をかけ、自身の刀を解放させる。

「斬りて染めるな、血不染道！」

かつてその身をもって自分を救ってくれた恩人。

その恩人の言葉、

血に染まらない道

彦禰もそれを実現したいと強く願っていたからか、はたまたただの偶然か、彼の斬魄刀はそれを体現したかのような能力を有していた。

「さっきごちやごちや話してたけど、ガキのあんたが時間稼ぎの生贄かあ。」

「時間を稼ぐつもりはありませんが長引くと思います。」

その瞬間、彦禰がジゼルの背後へと回り、刀を振るった。

「あゝあ。斬っちゃったねえ。そんな近くで。」

「そんな近くで斬ったら血が、、、あれ？」

ジゼルは斬られたにも関わらず笑みを浮かべている。

ジゼルの血を浴びた者はジゼルの言いなりとなるゾンビとなってしまうからだ。

しかし笑みを浮かべていたジゼルの顔が徐々に強張っていく。

「血が、、、傷が、、、ない!？」

「僕の斬魄刀は敵の体をすり抜けるため、外傷を与えません。」

「しかし、すり抜けた時に、相手の脳に対して微弱な電流を流すことで斬られたような痛みを覚えさせる。」

「これが僕の斬魄刀、血不染道ちぶぞめみちです。」

「あなたが退くまで斬り続けます。」

「健気な少女を斬り続けるってこと？？？ひどいねえ、やっぱり死神は。」

「少女ですか？どこにいるんです？」

彦禰の悪意ない言葉に、ジゼルは頭の血管を浮かび上がらせた。

「君は絶対に僕のゾンビにせずうつつと可愛がつてあげるよ。」

く石田病院・総合受付前く

「俺は黒崎一勇、死神代行だ！」

「その仮面は、、虚化か。」

「虚閃!!」

一勇は切っ先から虚閃を放つ。

ユーハバツハは右手を前に出し、一勇の放った深緑色の虚閃を防いだ。

「ジ・オールマイティ全知全能の能力は流石に使えないか。」

「次はこちらの番だ、一勇。」

「ザンクト・ホールゲン大聖弓。」

ユーハバツハの前に巨大な弓が出現し、何本もの矢が一勇を襲う。

「拒め！融月！」

一勇から橙色の光が広がると、その光の範囲内に入った矢が蒸発するように宙へと消えていった。

「なんだその能力は？一護にそんな力はなかったはずだが。」

一勇はそのまま攻撃へと移る。

「使役せよ、融月！」

一勇の解号と共に、院内のあらゆる物がユーハバツハへと向かっていき、次々に体へと張り付いていった。

その隙を突くため、一勇は更なる攻撃を繰り出す。

「滅せ、融月！」

一勇が斬魄刀を振るうと、その場に斬撃が留まり、刀を引いて押し出すと、巨大な霊

庄の矢が放たれた。

しかしユーハバツハは、霊子を操り張り付き物を吹き飛ばし、滅却師の歩法、飛廉脚で巨大な矢を悠々と躲して見せた。

「ほう、私の滅却師の力もすっかりと受け継いでいるということか。」

「お前の力じゃない。これは融月の、俺自身の力だ！」

「詠み入れろ、融月！」

「破道の八十八、飛竜撃賊震天雷砲！」

一勇の左手から発せられた鬼道が融月へと吸い込まれていく。

「行くぜ！月牙天衝！」

鬼道の雷を纏った強力な月牙がユーハバツハを襲う。

——始解は各能力の上澄みだけ

——いいっすか？各種族の力を最大限引き出すには

——卍解が必要っす

——そこから深淵へとアクセスすることができます

——けど注意して下さい、最深までいけば

「大丈夫だ、浦原さん。」

突然、かつての特記戦力の一人、浦原喜助の名が出たため、ユーハバッハはどういうことか一勇に尋ねた。

「何の話だ？」

「お前になら始解だけでいけるって話だ。」

ユーハバッハは目の前の若い死神が発した大きい言葉に微笑した。

「今の言い方だと、まるでお前が卍解に至っているかのように聞こえるぞ、一勇。」

「ああ。」

「そう言ってるんだよ！ユーハバッハ!!」

To be continued.....

第2話 お前の希望は背後に迫る

（現世）

「血は出ないからキミはゾンビにならないかもしれないけどさあ。」

「この数の聖兵ソルダートをどう処理するの？」

ジゼルの背後に現れた100をゆうに超える滅却氏の雑兵が彦禰に襲いかかろうとした時だった。

「三火三水双びさんかさんすいならて連なれ。」

「焱森双連えんびようそうれん！」

解号と共に、彦禰の後ろから熱気と水気を帯びた霊圧が広がった。

「三火三水双連大砲！」

赤髪の少女から放たれた三つの巨大な火球と、水球が滅却師達をなぎ倒していく。

「彦禰！私も加勢する！」

「莓花さん！」

く現世・六車サイドく

「良かったのか？阿散井の娘を戻して。」

碎蜂が柄にも無く冷や汗を流しながら六車に問う。

「仕方がねえだろ、、あいつらはまだ若い、、」

「だが、悔しいが奴らの卍解は大きな戦力となる。」

「んなこたあわかってるよ。」

「じゃあなんだ？隊長副隊長が揃っていないながら、三席にも満たっていない席官に、俺たちじゃ勝てないかもしれないから残ってくださいって言うってか??」

「これは俺たち隊長格の意地だ。」

「それよりもこいつをどうするか考えることにしようぜ。」

六車達の前に仁王立ちしていたのは、滅却師のジェラルド・ヴァルキリーだった。

く現世・彦根サイドく

二人の若い死神を前にジゼルは苛ついていた。

「ムカつくなあ。こんなガキンチョ達に僕の相手が務まると思われたのかあ。」

「あの六車って隊長さん、僕のゾンビだったくせにさ。」

何かぶつぶつと独り言を言っているジゼルをよそに苺花は彦禰のもとへ駆け寄る。

「彦禰、今六車隊長達のところにも滅却師が！」

「しかもかなり手強いやつみたい、、！」

複数人の隊長格を相手取って劣らない相手……

思い当たる滅却師は一人しかない。

「ジェラルド・バルキリーですか。」

「だから、早く終わらせよう、、!!」

そう言い終えると苺花は若い死神とは思えないほどの霊圧を放ち始める。

——躊躇わず卍解を使え——

彦禰は六車に言われた言葉を思い出した。

苺花は十五席とは思えないほどの霊圧を発している。

「卍、、、、」

苺花が卍解を発動させようとした矢先に、彦禰は六車の言葉と真逆の判断を下す。

「苺花さん、卍解は、、なるべく使わない方向でいきましょう。」

「、、、、かつ、、、、なんでよ!」

苺花に集中していた霊圧は空中へと霧散した。

「もしかするとメダリオンを持っているかもしれません。」

「戦況的に見て、苺花さんの卍解が奪われるのは今後の戦況に大きく響きます。」

彦禰は自身の持つ斬魄刀に目をやった。

「僕の卍解は始解が使えないと効果が発揮できませんから相手に使われたところで問題はありませんが。」

「ただそれでも奪われるのは痛いです。」

しかし苺花も食い下がる。

「でもさ！早く倒さないと六車隊長達が！」

「六車隊長達ならきつと大丈夫です。だから今は僕を信じてください。」

苺花は一呼吸置くと、ムスツとした表情で霊圧を降下させた。

「はいはい、分かったって、錆面五席。」

「怒らないでくださいよ。」

彦禰はいつものとおりわかりやすく怒りを露わにする苺花に苦笑を浮かべる。

「怒ってないって!!」

苺花はふいっとそっぽを向いた。

「苺花さんは分かりやすいですから、気づかないのは一勇君くらいですよ。」

「はあ？なんで一勇が、」

「ほらっ！来ますよ！」

彦禰はそう言う上空へと飛び立った。

「わかつてる、よ、よ!!!」

そして二人は迫りくる滅却師の雑兵を次々と斬り捨てていく。

「ふうん、」

その様子を表情を変えずに凝視するジゼル。

「ちよつと貸して。」

ジゼルは後ろに控える滅却師の持つ軍刀を奪い取ると、自らの腕に切れ込みを入れた。

「これでぶっかけちゃえばいいんだ。」

ジゼルの挙動を注意深く観察する彦禰に莓花が声をかける。

「なに見惚れてんのよ、彦禰。」

「女の子なら血をかけられても満更じゃないって思ってたんでしょ？」

「え？」

莓花の斜め上に行く質問に彦禰は呆気に取られてしまった。

「あんたも一勇みたいになっちゃったわけ？」

「すぐ鼻の下伸ばしてさ。」

しかし彦禰は莓花の言葉に、まるで頭上に疑問符を浮かべたような顔になる。

「莓花さん、あれは女の子ではありませんよ?」

その言葉にいち早く反応したのはジゼルだった。

「何言ってるの? 同じ女性が《女の子》って言ってるんだからさあ。女の子に決まってるじゃん。」

「あなたは女性ではありません。」

「何を根拠にそんな酷いこと言ってるの? ありえなくない。」

「莓花さんがいる前で言うのは憚られますが、その、僕は鼻が利くのですが、」
「なんとというか、男独特の匂いがするので。」

「このマセガキが。」

額に怒りの血管を浮かべたジゼルは飛廉脚で彦禰の背後に回ると自身の血を振り撒いた。

「つく、く、く! 瞬歩でも避けきれ、く、く!」

しかし彦禰の前に円状の水の盾が現れる。

「彦禰! 油断しすぎ!!」

「莓花さん!」

ジゼルの血は莓花が出現させた水の盾に吸収され、水と共に地面に染み入っていつ

た。

「ほんつとにムカつくなあ!!」

一度は声を荒げたジゼルだったが、「ふう」と深く息を吐き、怒りを抑え込んだ。

「はあい、ここでお姉さんからムカつくガキンチョ達にクイズを出してあげるよ。」

突然のクイズに彦禰と母花は呆気に取られる。

「ナジャークープとボクたちは繋がってたわけだけど、そのナジャークープはノヴァ
デイオ一行でした。」

「そこでナジャークープはノヴァデイオからある恩恵をもらってました。」

その言葉に彦禰の眼光が鋭くなる。

「では問題です！ボクももらっているその恩恵とはなんでしょぅうか？」

そして彦禰がある答えを紡ぎ出した。

「魂魄の境界の除去、、ですか、、」

「せいかうい♪」

ジゼルは血が流れる腕の傷口に口を当てると、じゅるじゅると音を立てて血を啜った。

そして口元から血液を滴らせながら解号を唱える。

「黄泉^{よみがえ}孵^{ソズンビ}れ、死者^{ソズンビ}！」

倒れていた死神が次々と立ち上がると、続いて上空の空間が裂け、巨大虚^{ヒュージホロウ}の軍勢がポトポトと地に落ちる。

そして立ち上がるとまるでゾンビのように一心不乱に彦禰達に襲いかかった。

「これでも卍解使うなって、、？ 錆面五席、、」

「ギリギリまで始解でいきましよう、、」

「痛^{つうてんふせつ}点^{てん}付^ふ設^{せつ}！」

彦禰が後退しながら刀を振るうと、鋒から紫色に光る霊圧の欠片が放出され、前方横

一列に配置された。
「血^{ちぶぞめみち}不染^{つうせん}道^{れんどう}・痛^{つうせん}線^{れん}連^{れん}道^{どう}！」

横一列に配置された欠片は線となり、半透明で紫色の壁を出現させる。

しかし死神や虚のゾンビ達はその壁を何事もなく通り過ぎる。

「ちよつと！何も起きてないじゃん!!」

その様子を見た苺花が彦禰に詰め寄った。

「あれ？普通なら激痛で走れないはずなんですけど、、」

彦禰は《おかしいな》と言わんばかりに首を傾げている。

「だ、か、ら!!あれはゾンビなんだって!!」

苺花は鬼の形相で彦禰の胸ぐらを掴み上げた。

「ゾンビ？」

「あんた！現世にいてゾンビも知らないってどういうことなの!!」

「生物の授業で習いましたっけ？」

「習うか!!」

苺花は彦禰の襟元を放す。

「あいつらは痛みを感じないの!!」

「そうなんですか。」

彦禰は《へえ》と感心した表情を浮かべている。

「しかも噛まれたり、血を浴びたら、そいつもゾンビになるの!!」

「なんと。」

「では、僕の血不染道とは相性が良かったり悪かったりですね。」

彦禰は始解を解除すると静かに納刀した。

「破道の七十三、双連蒼火墜！」

彦禰の放った鬼道はゾンビ達に直撃するが、何事もなかったかのように立ち上がった。

「なるほど、厄介ですね。」

苺花は何か手がないか思案していた。

そして先程一度は死神のゾンビ達を封じ込めた者の存在を思い出す。

「そうだ！さっきの人形！毒ヶ峰さんなら！」

苺花は後方にいるリルカの元へと瞬歩で移動する。

「毒ヶ峰さん、さっきの人形にあいつらを!!」

「無理よ。さっきアイツの解放で死神が甦るときに人形は破られた。」

「今はもう入れる器がない。」

「じゃあどうすれば、。」

わかりやすく落ち込む苺花にリルカは声をかけた。

「だから今はって言ったでしょ？」

「そろそろ来るはずよ。」

「ほら。」

プーーーーー、プーーーーー

クラクションの音と共に黒塗りの高級車が猛スピードで後方から迫ってくる。

そして急ブレーキでけたたましく停車した。

後部ドアから出てきたのは、金髪にスーツを着た若い男性で、次に運転席から出てきたのは、長身で色黒な女性だった。

「あつぶなっ!!電柱に当たりそうだっただろ!事故なんて会社のイメージ下がるじゃないか!」

スーツを着た若い男性、雪緒・ハンス・フォラルルベルナが怒りの声を上げる。

そして運転手である色黒の女性、ジャッキー・トリスタンも負けじと言い返した。

「だから当ててないだろ!」

「それにさあ、もう少し丁寧に止められないかな?」

「うるさいね、急いでたんだから仕方がないだろう。」

ナジャークープから貰った、ノヴァデイオの資料に載っていたからだ。

「現世の主要人物の中にいた、」

黒崎一護、石田雨竜、浦原喜助、握菱鉄裁、、、

その次に記されていた名前。

観音寺美幸雄^{みさお}、通称ドン観音寺。

「藍染と対峙して生き残り、痣城剣八を打ち負かした人間、、、！」

「私のことを知っているようだなバッドガール!!」

「スピリッツ・アー・フォーエバー・ウィズ・ユー!!」

T o b e c o n t i n u e d

「私たちには目もくれないようね。」

その様子を見たリルカは自身の後方に立つ助っ人の方へ振り返り声をかける。

「雪緒！ちゃんと持ってきたんでしようね!？」

「持ってきたんじゃない、買ってきたんだよ！」

「全く、いい歳の大人がおもちや屋に行つてぬいぐるみを買ひ漁つてさあ、、、この借りは高くつくからね。」

雪緒はネクタイを直しながら、沸々と怒りをたぎらせている。

「いや別にあんたが買つてると思えば何も恥ずかしいことじゃないさ。」

ジャツキーは暗にぬいぐるみがお似合いだと鼻で笑つてみせた。

「ジャツキー、、、今月は滅給だからね、、、。」

ぐだぐだとやりとりをしている2人を見て、イライラが頂点に達したりルカは語気鋭く叫ぶ。

「そんなことはどうでもいいから早く出しなさいよー！」

雪緒は苛つきながらもジャツキーにトランクを開けるように促した。

「雪緒、あんたなんかしたでしょ。」

「僕は動きたくないからね。あのおっさんに戦ってもらうことにしたよ。」

「靈庄の強弱のベクトルを真逆できるバフを展開するフィールドにしたのさ。」

「いつのまにゲームの中に、、！」

「まあつまり、今この中で最強なのが、あのおっさんって訳。」

「ゴーーーーールデンキャノンボオーーーーール!!」

「なんなの!この靈庄は!!」

ジゼルは凄まじい爆炎に包まれる。

く 現世某所 く

「おいおい、滅却師のやつやられそうじゃねえか。」

「つと、、、ここらへんでいいか？」

「全くヨオ、なんで滅却師のためにこんなことしなきゃなんねえんだ、、」

「――これはもしもの時の保険です――」

「――私が浄化できなかつた時、滅却師が代わりに――」

「――あなたに託します――」

「――あなたに強い死神があたると思いませんか――」

「――頼みましたよ――」

「あいつにや地獄から引きずり出されるわ、かと思えば地獄に行く切符にされるわ、滅却師の手助けをするよう言われるわ。」

「使いつ走りだな。」

「さてと、道は繋いだぜえ？」

「現世発、霊王宮行きのプライベートル車をよお。」

く現世・銀城サイドく

「なんだっけか、お前滅却師の四天王の的なのに入ってなかったんだろ？」

銀城が振るった刀を右肩に乗せ、眼前の敵である滅却師、キルゲ・オピーに尋ねた。

「四天王じゃなく、親衛隊だよ。」

「うるせえぞ月島。重箱の隅突くみてえに。」

「別に重箱の隅ではないけどね。」

銀城は月島の突っ込みみペースを乱しつつもさらに続けた。

「まあ、その親衛隊でもねえくせにやるじゃねえか。」

「だが、そこまで頑張って何になる。」

「お前の反応を見る限り、一護でユーハバツハが復活したのはミスだったっぽいしな。」

その様子を見た月島がまた口を挟む。

「一護が乗っ取られてるつてのに、随分と余裕そうだね。」

「ああ、そこは浦原の野郎がサクツと何とかするだろ。」

「確かに陛下復活の依代が黒崎一護だったのは誤算でした。」

「しかしそれは、石田竜燕の方が虚に対する抗体を持っていると考えていたためです。黒崎一護にも無いわけではない。」

そしてキルゲは恍惚の表情で両手を広げた。

「それに陛下はこれから本体のところへ行き、本来のお力を取り戻した後、世界をその手に収めるのです。」

「そんなことすりゃ、ノヴァディオとかいう奴らとも敵対することになるんじゃないかねえのか？」

銀城の問いに対し、キルゲは不気味に微笑し答えた。

「彼らは、いや、ノヴァディオの頭領は尸魂界の貴族や中央四十六室を潰せればそれでい

いのです。」

「ですから彼自身で潰す方法と、我々に頼る方法、二つを進めてきたのです。」

それこそがノヴァディオと滅却師が協力する理由だった。

そしてキルゲは霊圧を極限まで上げ、自身を禍々しい天使のような形へと作り変える。

「これから陛下が現世から霊王宮へと向かわれる。」

「早くお供しなければ。」

T o b e c o n t i n u e d

第4話 血に染まらぬ道の先

〔石田病院・総合受付前〕

「成程。そのお前の言い草、卍解に至っているということか。」

一護の身体を乗っ取ったユーハバツハは笑みを浮かべている。

一護の中にある卍解の記憶——朽木白哉と戦ったとき初めて卍解を解放する前の口上。

それと同じだったからだ。

「使ってみせよ、卍解を。完膚なきまでに叩き潰して『絶望』を与えてやろう。」

「必要ねえよ……切り札つてのはピンチの時までとっとくもんだろ!？」

——一勇、俺の力を使え——

「分かつてる!虚閃!!」

一勇は融月を振るい黒い斬撃を飛ばす。

「卍解を使うつもりはないか。それとも一護とは違い、ただのはったりだったか?どちらでもいいが、私は容赦はせんぞ。」

ザンクト・ホールゲン
「大聖弓!!」

ユーハバツハの目の前に巨大な弓が現れると、霊圧の矢が何本も射出される。

——一勇、僕の拒絶の能力を——

「おおー!」

一勇が左手を前にかざすと、ユーハバツハの放った矢がはじけ飛び、霊圧の塵となった。

「何やらよくわからんが、厄介な技を持っているな。」

霧散する橙色の霊子を見たユーハバツハは目を細める。

「まるでお前の母親のような力だ。」

その言葉を聞いた一勇は少し目を見開くと、口角を上げた。

「その感じだと、浦原さんが言ってた『全知全能』って能力はないみたいだな!」

「どうだろうな。」

「さあ、正解なしでどこまで耐えられるか試してみようではないか。我が息子よ。」

〈銀城サイド〉

「この滅却師は、彼らとの大戦のときに一護を足止めしてたやつだ。」

その滅却師——キルゲ・オピーに対峙し刀を構える男、銀城空吾は面倒くさそうに返事をした。

「あー、そうなのか？」

「用意されてた資料読んでなかったのかい？」

「ああ、なんか写真だけは見たな。」

月島は「はあゝ」とタメ息をついて呆れている。

「まあでも、お前を行かせりや面倒なことになるってえのはよくわかった。」

そう言うのと銀城は前へと歩み出た。

霊圧を上げている。

フルブリンガー
完現術士のものよりも、死神のものが色濃く溢れ出る。

「その力、使う気になったんだ。今さら一護への罪滅ぼしかい？」

「うるせえよ月島。」

月島は踵を返し、後退した。

「存分にやりなよ。」

「言われるまでもねえよ。」

「何ですか？その力は？我々の情報にはありませんでしたか？」
ダーテン

銀城は神妙な面持ちで解号を口にした。

「罪を償え、はりつけぼしち磔柱。」

銀城の斬魄刀の柄は十字架を思わせる形へと変化している。

「お前は今から懺悔の時間だ。俺は牧師じゃねえけど文句言うなよ。」

「生憎ですが懺悔は必要ありません。私は陛下を絶対神として信仰してマスいから。」

く 蓼花・彦禰サイドく

ドゴーーン

ドン・観音寺が放ったゴールデンキャノンボールがジゼルに直撃した。

彼のゴールデンキャノンボールは雪緒の創り出した “強さが逆転するゲーム空間”
 によつて途轍もない火力となっていた。

揺れ響く爆音と砂煙が収まると、そこにはボロボロになった、そして体全体から青色

の線状の模様が浮かび上がったジゼルが立っていた。

「クソっ……こんなオッサンに……」

勝機が薄いと考えたのか、ジゼルは残る霊圧をすべて飛廉脚ひれんきやくに注ぎ、素早く近くのアパートの屋上へと移動した。

「首を洗って待ってなよ、オッサン……！絶対ボクのゾンビにしてあげるからさあ！」
そう言葉を残してジゼルはその場を去っていった。

「ボハハハハハ！バッドスピリットガールよ！私に恐れをなしたか!!」

両腕を胸の前でクロスさせ、不気味に笑う不気味な格好の男。

彦禰は彼の前へと行き、一礼して謝辞を述べた。

「ありがとうございます……」

「いいんだ！これもヒーローの務め!!ボハハハハハハ!!」

あつけにとられる彦禰の肩を蓐花が引っ張った。

「ほら、六車隊長のところへ急ごう……!」

く六車サイドく

「くそっ……攻撃当てても効きやしねえし、体もデカくなりやがる……」

六車達はジェラルド・ヴァルキリーの攻略法を見いだせずにいる。

「私の武撃決殺も効果がないとはな……」

「効果がないどころか、相手は体バカでかくなりやがったけどな。」

無敵とも思える相手を前に大前田がヤケクソ気味に声を上げる。

「隊長！前ってこいつどうやって倒したんすか!!」

「莫迦者……記録を見ておけと言っただろうが……」

碎蜂に続いて六車が答えた。

「こいつを倒したのはユーハバツハだよ……!」

「山田の斬魄刀の能力じゃ相手の身体は元に戻らねえみたいだし、どうしたもんか……」

万事休す、といった状況に現れたのは彦禰と莓花だった。

「六車隊長!」

「彦禰……!お前、あの滅却師は!?!」

「ドン・観音寺さんという方が追い払ってくれました!戦況はどうですか?」

「今からボコボコにしてやるところだ……!」

六車から出た言葉は明らかな虚勢だった。

戦況を見ればこれから倒せるような状況ではないことは彦禰にも分かっていた。

だからこそ……

「六車隊長、僕に一つ試させてもらえませんか？」

「何？」

「相手の身体は大きくなるんですよね？そしてその体はそのまま動いていると。であれば僕の能力が効果的かもしれませんが。」

六車は若い隊士の提案に眉を顰^{ひそ}める。

彼は檜佐木から彦禰の卍解の能力を簡単にだが聞いていた。

聞いていた能力が本当であれば、確かに彦禰の卍解は相手が生き物であれば効果は絶大だ。

しかしそうなれば、相手の攻撃はいやが応にも彦禰に向かうことになる。

六車は難しい選択に迫られていた。

「つたく……俺たち大人は何人も揃って情けねえなあ……」

「お前ら!!これから彦禰を命かけて守れ!!」

「六車隊長……!!」

「頼んだぞ、彦禰!」

「はい!!」

無邪気な雰囲気が一変、彦禰から深くドス黒い霊圧があふれ出る。

「皆さん、下がっててください……」

「卍解……」

彦禰は卍解の解号とともに、垂直に右手で持った斬魄刀の切っ先に左手を当てると、上から下へと刃元まで左手を押し込み、掌を貫通させた。

彼の血で染め上げられた斬魄刀は次第に上からドロドロと溶け、彼の手を覆っていく。

まるでかつて初代剣八として恐れられた死神の卍解のようだった。

「はいせんどうじゆふこういん？ 染道呪符神印。」

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:

第5話 新芽の開花

「卍解、
はいせんどうじゆふこういん
 ? 染道呪符神印。」

——斬りて染めるな

ちぶぞめみち
 ——血不染道

碎蜂は一度だけ彼の始解を見たことがあつた。

在校任官の視閲式でのことだ。

真央霊術院の学生でありながら、護廷十三隊への入隊を上申された青年。

さびつらひしね
 錆面彦禰

十二番隊長檜佐木修兵が目にかけている隊士。

かつて綱彌代つなやしろときなだ時灘と呼ばれた男により起こつた禍乱。

綱彌代の配下としてその禍乱の中心にいた少年こそ錆面彦禰であつたと知るのは、彼

が護廷十三隊に入隊してから数年が経ったときだった。

錆面彦禰……かつての名は産絹彦禰^{うぶきぬ}。

彼が十二番隊長檜佐木修兵より上申されたときは、すでに錆面姓であった。

件の禍乱の後、死神になりたいと願ったその少年のため、総隊長の京楽春水が新たな苗字と戸籍を与えたのだ。

その名は錆面。

西流魂街の第六十四地区——錆面^{さびつら}。

綱彌代から解放された少年が生きていくと決めた場所。

その命名はさながら、治安の悪さにおいて比肩する地区無しと謳われた北流魂街第八十地区「更木」で名を馳せた型破りな死神のようだった。

錆面彦禰。

彼の始解は相手の体をすり抜ける刀。

出血もなければ外傷も負わせない。

しかしそれは、すり抜けた際に痛み^{いたみ}の感覚のみを神経に伝達させる鬼道系の斬魄刀であつた。

つまり、何度でも同じ場所を攻撃することが可能な斬魄刀ということだ。

相手を圧倒する実力さえあれば、相手の命を奪うことなく敵を無力化することができる。

碎蜂の能力は始解が式撃決殺、卍解が一撃必殺。

敵を殺さずに無力化するなど、檜佐木の卍解と似た“甘い”能力だと感じたことを碎蜂は覚えていた。

そんな“甘い能力”の卍解。

六車が期待を寄せるからには、それなりに特殊な能力を持った卍解だと彼女は推察していた。

彦禰の手に斬魄刀はなかった。

解号と共に彼が掌を刀に突き刺したかと思うと、柄の根本まで貫き、瞬く間に刀身は暗赤色にどろどろと溶解したのだ。

「ごきますよ。」

彦禰がそう言うと、右手から約50センチメートル程の“暗赤色の針”が滴り出た。

彦禰の周りには赤黒い瘴気のようなものが円状に広がっている。

「呪符神印。」

彼はそう唱えて針を自身の左腕に刺して引き抜くと、続いてジェラルドの右腕に向け

て素早く放った。

赤黒い針がジェラルドの右腕に見事命中し刺さったが、皮膚が硬いせいも深くは刺さっていない。

しかし彦禰に焦る様子はない。

「はいせん？ 染!!」

彼の号令とともにジェラルドの右腕はみるみる内に赤黒く、そして炭のように黒くなっていった。

「なんだあれは・・・？」

訝しそうに彦禰の正解を見ている碎蜂に、六車が解説をした。

「奴の能力は、敵に対して自分に刺した場所と同じ場所に刺せば、その部位の血液と、その中に流れる霊子の循環を止めて急速に壊死させることができる。」

「部分的な式撃決殺に似てるかもしれないねえな。」

彦禰は敵の右腕が壊死したことを確認すると、振り返って大声で叫んだ。

「壊死させた部分を破壊してください！ 乱装らんそうてんがい天傀てんがいされては意味がありません！」

その声に反応したのは碎蜂だった。

「大前田!!」

「分かつてますよオ!!」

明らかに疲労の表情が見える碎蜂がそう叫ぶと、大前田が彼女の背後に位置した。

「おい……いけんのか?」

六車の問いに対し碎蜂は気丈に振る舞っている。

「吹き飛ばされたくなければ下がっている……」

「卍解……雀蜂雷公鞭じゃくほうらいこうべん……!」

碎蜂の右腕に纏われた金属製の雷管が発現し、程なくして雀蜂雷公鞭が射出される。

射出された誘導弾は、一直線にジェラルドの右腕へと煙を吹きながら向かっていった。

直撃とともに鳴り響く轟音、そして大爆発。

煙が晴れると、そこには変わらずジェラルドの巨大な腕が残っていた。

「くそつ、火力が足りないってのかよ!」

この戦闘で碎蜂が撃った卍解は今日だけで既に4発。

彼女の卍解の火力は凄まじい反面、通常3日に1発が限度であった。

そのため無理をして放った彼女の卍解にはいつもの威力の10分の1程の威力にも満たなかった。

「足りねえのかよ……なら俺が……!」

「ダメです! 僕の卍解は近づいたり触れたりすると霊子の腐敗が感染します!」

「クソっ……!」

苦い表情を浮かべる六車とは対照的に、彦禰は落ち着いていた。

「莓花さん!! 出番ですよ!」

彦禰は振り返つてにこやかに莓花に呼び掛ける。

「分かつてるつて!……つたく! 指図しないでよ彦禰!!」

「技術もへつたくれもない力技で吹き飛ばしてください!!」

「あんだ言い方つ!! つたく……」

いつもの通り、彦禰の悪気のない物言いに呆れながらも、莓花は二振りの斬魄刀を重ね合わせるように振り上げた。

「いくよ焱焱双連……えんびようそうれんキツイかもしれないけど踏ん張りどころよ……!」

「卍解!!」

「いちびいっすいっかすいせい火壺水 火水成!」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d.
:
:
:

第6話 Bloom of Deathberry

「卍解、いちびいっすいっかすいせい一火壺水一火水成！」

〜浦原商店地下〜

「え!?!これが本当の卍解じゃない!?!」

「そのとおり。おんしの卍解は本当の名前ではない。親子揃って本当の名を教えてもらえんとは。」

「しかしおんしは父親恋次とは、ちと違っておる。」

「名前を教えてもらえんわけではなく、おんしが斬魄刀の力を見誤っておるから名前が違うんじゃない。」

「だがこれが功を奏してか、面白いことになる可能性がある。」

「さて、これからおんしには特別授業。霊王宮に来てもらう。」

「あそこに行くのか・・・、葦花、頑張るのだぞ・・・」

「父ちゃんも母ちゃんもあそこで生き残ってきたんだ。大丈夫だ・・・多分。」

「嫌だ——！行きたくない……」

▽▽▽

▽▽

▽

「私の力は“水”と“火”。」

——本当にそう？

くくおいおい、拗ねんなよ！

「何？そうじゃないっていうの？」

くくまあ、合つてると言えば合つてるし

——合つていないと言えば合っていない

くく俺は別にいいんだけどよ、こいつがなア

——莓花、あなたは私の力を見誤っている

——だからこそ、二振りで一つと成る私達の本当の力が出せていない

くくまあ、そりや確かにそうだ

くく始解はそこまで深い力じゃねえからよかつたけどな

くく正解は違う、俺たちの本質を理解しなきゃいけないえ

——莓花、この力は貴女のどういう想いから生まれていると思う？

「火は父上……水は……母上？」

くくそうそう、惜しいんだけどなア

——貴女の両親への印象が貴女の力の源になっている

くく熱く、力強い“火”のような父親

——冷静で、それでいて固い意志を持つ “氷” のような母親

〳〳いや、難しいんだぜ？この能力は結果を見ればお前の印象で当たり前なんだ

——始解では一振りが “火”、もう一振りが “水”

〳〳けどそれはな、 “結果そうなってる” だけなんだ

「本当の私の力は “火” と “氷” ……？」

——そのとおり

〳〳解放したときに、俺の炎にあてられて氷が溶け、水として出力される

〳〳結果は変わらねえが、その根源を知ってるのと知らないのとじゃ

——大違い、というわけです

——貴女の中にはいつも、 “父” “母” “貴女” の3人がいた

〳〳お前達は別々じゃねえ、家族、一つなんだ

——そして、貴女の中に私達1つが入ればきつと・・・

くくだからよ、今のお前の卍解はお前の中の“一つ”しか出力できてねえんだ
——理解はできた？

（霊王宮）

「こいつは面白いNe!」

「全くだヨ。私のように改造ではなく、元来複数の種類を持つ卍解。」

「総隊長殿に解剖研究の進言をしてみるとするヨ。」

兵主部は鼻息荒く興奮しているマユリを嗜めた。

「やめておけ、少なくとも隊長3人を敵に回すことになるぞ。」

「目覚めたか？ 苺花。」

「はい・・・!」

「いちびいっすいっつかすいせい
「一火壺水一火水成、これは本物でないが故に、本当の名を知ればおんしの卍解には複数

の種類ができることになる。」

「そう！つまりは複数の正解ということだヨ！なんとも素晴らしい！君と君の斬魄刀を直ぐにでも研究したいところだが、」

「今はやめておくことにするヨ。」

「流石に隊長格3人を相手にするのは骨が折れる。」

マユリがやれやれと莓花から離れていくと、その先には複数の人影があつた。

「父上！母上！白哉叔父様！……と平子隊長。」

「……と平子隊長つて何やねん!!」

「ほんでマユリお前え！俺も隊長格カウントせえや！俺かてなあ、莓花は自分ところの隊士やぞ?!体張つてお前の研究止めるっちゅうねん!!ボケエ!!」

平子は他3人を差し置いて、長尺で喋り続けている。

「おやおや、平子隊長殿も数に入れた上での発言だヨ？その上で骨が折れるのは3人と言つたまでだが？」

鮮やかな皮肉に、平子は頭の血管を浮かび上がらせながら斬魄刀に手をかけた。

「よっしや逆撫……奇跡の時間や……！あの妖怪顔面蒼白の知能指数と俺へのリスベクト度を逆にせえ……！一生研究ができひんよえになあ！」

「平子隊長落ち着いてくださいよ。」

恋次が冷めた顔で平子を嗜める。

「うっさいねん阿散井！おれ先輩や言うて……」

「もういいか？平子や。」

「なんやねん兵主部のおっさん。あんたが今から話しづらいこと喋りそうな雰囲気やから面白おかしくわちやわちやしたったつちゆうのに。」

「言いつらいこと……そうだな。」

「おそらく梅花は次の戦闘で大きな戦力となる。最前線での戦闘も考えておけ。恋次、ルキア。」

「それはどういう意味でしょうか……？」

ルキアの顔は娘を心配する母の顔になっていた。

「まず梅花の卍解は攻撃力に特化しておる。しかもさっき言ったように卍解には何種類かある。」

「さらに特徴的なのが、梅花の卍解は………」

▽▽▽▽▽

▽▽▽

▽

「正解、いちびいっすいっかすいせい「火壺水」火水成！」

苺花の斬魄刀に変化はなく、彼女自身の姿形にも変化は全くみられない。

彼女は両手で二振りの斬魄刀を胸の前で重ねて突き出すと、その先に空気中の水分が集まり始める。

数センチメートル程の小さな水の小球は一気に氷へと凝固すると、鋒付近から勢いよく射出された。

その氷の小球は火花の様なものを線状に発しながら猛スピードでジェラルドの右腕へと迫っていく。

着弾すると氷塊は右腕にめり込んだ。

「当たったー！」

大前田が声を上げるが何も起こらない。

…と思つた矢先、一瞬間の間、約1秒程経ってジェラルドの右腕は大爆発を起こす。飛び散る肉塊や血飛沫。

大きく爆発したことで、血は高く舞い上げられ雨の様に降り注いだ。

血煙が晴れると、ジェラルドの右腕は跡形もなく消し飛んでいた。

それどころか肘付近を中心として、肩や脇腹、手先までキレイに吹き飛んでいた。

「すげえ!!!」

大前田は思わず歓声を上げた。

「なんて威力だ……」

碎蜂は目を見開き、その威力に驚愕するばかりだった。

万全の状態で撃つたとしても、恐らく自身の卍解は苺花のものには敵わない……

そう思わされる程の威力だった。

苺花はまた霊圧を急激に上げている。

——特徴的なのが、苺花の卍解は……

「まだまだいくよ！」

「二火式水一炎？成」

T o b e c o n t i n u e d

第7話 Gear

莓花の卍解によって右の肩から脇腹、右腕が吹き飛んだ滅却師のジェラルド。

ジェラルドの肉体を吹き飛ばした莓花に周囲が驚愕している中、彼女はさらに霊圧を上げている。

「阿散井の娘、すげえっすね……」

大前田が絞り出したような声でそう呟いた。

力を消耗していたとはいえ自隊の隊長でも吹き飛ばせなかった相手をまだ100歳ほどしかいていない若い隊士が大ダメージを与え、さらに隊長格の霊圧を放っていることに、大前田は驚きを隠せなかったのだ。

碎蜂は大前田の言葉には応えず、途轍もない霊圧を放っている若者の背を見つめていた。彼女は悔しきとも、安堵ともとれないような表情を浮かべている。

そして碎蜂は莓花のある変化に目を凝らしていた。

莓花の背に羽のように浮かぶ2本の刀。

一本は氷のような物でできた半透明な刀で、もう一本は炎でできた刀だった。

「あれが阿散井の娘の正解の能力か…?」

「まだまだいくよ!」かにすいいちえんすいせい「火式水」炎?成!」

苺花の新たな解号とともに、手に持つ2本の斬魄刀の鋒からそれぞれ炎の球体と水の球体が発せられる。2つの球体は苺花の頭上に並行して浮いていた。そしてさらに彼女の背に浮かんでいた2本の刀、炎と水の刀からも同じように球体が発せられ、頭上へと上がっていく。

炎と水の球体計4つが一つに集まり融合しながらさらに上へと上昇していく。苺花が左手に持つ斬魄刀を振り上げると、一つになった球体を冷気で凍らせた。

「待ってください!苺花さん!!」

彦禰が慌てた様子で苺花を制止するが、彼女は全く気づいていない。

「いちえんすいせい炎?成・みぞれはなごめん曇花雨炎!」

凍った球体は水蒸気を上げながら雲のように平らに広がっていきジェラルドの頭上を覆った。

「いけえ!!」

苺花の大声と共に平らに広がった雲からジェラルドにみぞれ曇が降り注ぐ。

光を反射してダイヤモンドダストのように幻想的な景色を生み出すが、その刹那、轟

音とともにジェラルドの体が至る所で大爆発を起こす。

「なっ、なんだ!？」

爆風による砂煙を左手で遮りながら、拳西が目を細めて叫ぶ。

煙が晴れるとジェラルドの体上部の至る所が抉られ、焼きただれていた。

「蓼花さん!!まだ霊圧を腐敗させてないから逆効果ですよ!!」

「ええ!?!先に言つてよ!逆に強化させたってことでしょ!？」

「あれだけ説明したから、状況から判断して分かってくれていると思つてましたけど

……」

彦禰は呆れたように肩を落とす。

「なによ!あいつを吹っ飛ばせばいいんでしょ!?!私はまだまだいけるから!」

「阿散井隊長みたいに勢いで乗り切ろうとするのは悪い癖ですよ!」

彦禰は斬魄刀を構えながらジェラルドへと近づいた。

「ああ!父様に言いつけてやる!」

「いいですよ。僕はお母様の方に報告しますから」

「せつこい!!」

蓼花と彦禰が言い争いをしている間にジェラルドの抉られた部位はポコポコと肉が隆起し、さらに巨大になっていく。

「おいおい…倍近くになりやがったぞ……?」

拳西はさらに巨大化したジェラルドを見上げている。

「ほら! 苺花さんの判断ミスで相手が強化されたじゃないですか!!」

苺花を諫めながら隣へと着地する彦禰。

「次はちゃんとやるってば……」

不貞腐れながら肩をすくめる苺花。

「頼みますよ…! 手を先にと思いましたが、足を先にしましょう!」

彦禰は斬魄刀を居合の形に構え直す。

「呪符神印・圍繞腐柵!」

斬り抜いた広範囲の水平な斬撃がジェラルドの両足をすり抜け、ドス黒い紫色の斬痕が宙に残存する。

「苺花さん! 吹き飛ばすのは膝下までですよ!?! 再生しますから!」

「分かっているって!!」

「一炎? 成…氷罰火牙鉄炮!」

苺花の四振りりの刀から大規模な氷が発せられ、ジェラルドの両足を呑み込み凍らせる
と、続いて巨大な火球が射出された。

火球は直撃すると凍ったジェラルドの膝下を粉々に吹き飛ばす。ジェラルドは達磨

落としたのように体が地に落ち、うつ伏せとなって倒れた。

「やった！」

思わず彦禰が叫ぶ。

「太腿の靈子は腐ったまま！その先の足は再生できません！」

大前田が期待を込めた表情を浮かべて呟く。

「強え……これならあの化け物に勝てる……！」

「莓花さん、大丈夫ですか？」

彦禰が声をかけると、莓花は息が上がった様子で額の汗を拭いた。

「大丈夫……だって……！」

「莓花さんの正解は体に負担がかかるのでしょうか？」

彦禰は彼女の体への負担を懸念していた。

「ハア……いけるってば……！」

▽▽▽

▽▽

▽

霊王宮で卍解を修得した苺花。彼女の前に立つ3人の死神が彼女の卍解について説明をしていた。

「よいか苺花。おんしの卍解は恋次やルキアと同じ系統の一撃に特化した卍解ではない」

「その通り。どちらかという和黑崎一護の卍解に近い代物だよ」

白塗りの派手な格好をした禍々しい死神は何が嬉しいのかニヤついている。

「黒崎一護は卍解を発動させる際、その大きな霊圧を発するためには衝撃波を放っている。これは朽木六番隊長の報告からも判明していることだ」

「マユリが言うには、それと同じことがおんしにも起きておるらしくてのう。それが先ほど放った火球やらだ」

「さらに！興味深いのがイチカガールの卍解にHa！ギアがあるってことSa！」

「『ぎあ』ってなんですか？」

「段階的な身体能力や霊圧の強化。喜べ苺花。おんしの憧れる黒崎部隊長と同じ…いや、それをも超える卍解になる」





深呼吸をする苺花。彼女の背後に浮かぶ炎と氷の刀は2本ずつの計4本に増えていた。

「さて…もう一段階“ギア”を上げましょうか…」

「いくよ、彦禰…！」

く 石田総合病院く

「どうした、一勇？へばっているように見えるが卍解を使わなくていいのか？」

「ーまだだ、一勇」

融月が一勇の心に語りかける。

「使いたいのには山々だけど、親父相手じゃ使えねえだろ！」

一護の体に乗っ取ったユーハバツハにそう吐き捨てる。一勇は鬼道を発動させた。

「詠み入れろ、融月!!縛道の八十一！断空だんくう！」

縛道で発生させた半透明の長方形の盾が一勇の斬魄刀の鋒に付着し、盾となる。

その盾で四方から迫り来る霊圧の矢を次々に防いでいく。

「その言い方は見過ごせんで、一勇。」

「まるで一護の体に傷をつけることができないから卍解を使いたくないと……私に傷をつけることができるから卍解を使いたくないと聞こえるが?」

「しつけない……だからそうだって言ってるんだろ!」

「一勇もう少し、もう少しだ、一勇」

「一勇まだ少し滅却師の力が足りていない」

「つたく、めんどくせえ卍解だな!!マジで!」

「一勇は左手で斬魄刀の刀身に触れた後、自身の胸へと左の手のひらを当てた。

「滅し護れ! 静血装!」
ブルート・ヴェーネ

「どうした? 卍解を残す割には防戦一方か!」

「ユーハバツハは不敵な笑みを浮かべている。」

「ギアを上げるとこだ……黙って待ってるユーハバツハ!」

「一溜まり切った、いくぞ一勇」

To be continued……

外伝

The Rain Dragon and The Thunder Witch ①

これは雨の竜と雷の魔女の物語。

〜技術開発局〜

「なんでよ!!約束と違うじゃない!!」

ゴスロリのような格好をした女性が叫んでいた。

「全く、、五月蠅い女だヨ。こっちは修復作業で手一杯だというのに。」

「あんたが石田雨竜にも会えるっていうから協力したんでしょ!」

「いやいや、会えるかもしれないと言ったまでだよ。それに君に決定権はなかったはずだが。」

「だがまあその度に作業を止められても困る。」

「会いに行きたければ会いに行けばいい。」

「ただし、」

く現世、サカモトコーヒー空座町店く

「黒崎が井上さんにプロポーズ!!!」

「ああ。そうだ。」

雨竜とチャドはコーヒーチエーンでコーヒートを飲んでいた。

「阿散井に散々言われて覚悟が決まったらしい。」

「阿散井君、さすがは朽木さんを落とすただけはあるな。」

「医大を卒業したら結婚するそうだ。」

「どんどんと周りが決まっていくな。」

「そういう茶度君はどうなんだい？」

「俺は、今はボクシングに全てを捧げたいんだ。」

「そうか。いいね、打ち込めるものがあるっていうのは。」

「石田こそどうなんだ？ 医学部生なら引く手数多だろう。」

雨竜は少し考えた。

「まあないわけではないけど、。。。」

「見え透いて分かるんだ。医者としての僕を見ているってね。要は将来の収入や地位だ

よ。」

「医者抜きで僕を見てほしいんだけどね。」

すると雨竜達の席の横に誰かが立ち止まった。

「石田雨竜だな？」

石田が目をやると見たことのあるような人影が。

「君は、、!!」

そこには白いワンピースを着、頭には髪飾りをつけた美女が立っていた。

「チルツチ・サンダーウィッチ！」

「外国人の知り合いか？」

「知り合いも何も、ブリバロン・エスパーダ十刃落ちで僕と戦った破面だよ！」

「なに!?!」

チャドは霊圧と警戒心をあげる。

「何しに来た？」

「あたしと勝負しな！」

「勝負つて、君それ義骸だろ？」

「それに霊圧もかなり制限されてるようだが。」

「涅の糞野郎が制限してるからね。」

意外な名前が出てきたことに驚いた。

「なぜあいつが？」

「あんた知らないの？あたし達数体の破面は奴の部隊として囚われてる。」

「自由なんてあったもんじやない。あんたに会いに来るのにも大変だったんだから。」

警戒していたチャドだが2人のやり取りを聞き自分がお邪魔虫だと悟った。

「石田、、おそらく俺は邪魔だな。」

「ちよつ、茶渡君！」

チャドはコーヒを一気に飲み干した。

「金は置いておく。」

「なんだそのグツは!？」

「あんたこつち見なさいよ!どうなの?あたしと殺り合うの?殺らないの?」

「ちよつと君!なんてことを大声で!!」

「なによ、あたしはあんたを殺りたいって言ってるだけじゃないの!」

勘違いされそうなことを連呼するため、雨竜な恥ずかしくなり一刻も早くこの場を離れたかった。

「お、お会計お願いします!」

雨竜はチルツチの手を引き強引に店を出た。

「最近の若い子は大胆だねえ。」

「いつまで手握ってんのよ!」

チルツチは雨竜の手を振り払う。

「ああ、すまない。」

「なんか調子狂うわ。」

「で、勝負よ。勝負!」

「あたし、尸魂界なら全力出せるからあんた来なさいよ。」

「なんで行かなきゃいけないんだ!それに僕は忙しいんだよ!」

「何が忙しいってのよ。一日中弓の弦でも引いてるっての?」

「僕は医学部生なんだ!今の時期は毎日病院で研修だし、君の相手をしてる暇なんてな

い。」

パン屋での午前勤務を終えた織姫は試作品が入った袋を持ち、機嫌よく歩いていたところだった。

反対の歩道に歩く雨竜を見つける。

「あれ？石田君だ、、、それと？」

織姫は反対側に移り、バレないよう女性と歩く雨竜の後をつけることにした。

「わざわざ来たのにあたしの相手をしてる暇がないって？」

「あんたが暇かどうかなんか関係ない。あんたを殺れりやそれでいいのよ！」

過激な言葉が聞こえ、織姫は顔を真っ赤にする。

「あわわわわ、凄いことになってるよ、、、！石田君の彼女さん肉食系なのかな、、、!？」

「明後日！絶対来なさいよ。十二番隊隊舎だからね！じゃあそれだけだから！」

〈黒崎家〉

「なに!? 石田が外国人彼女!?!」

「うん! すごく積極的で顔立ちもすごく整ってて、、! でも十二番隊隊舎って言ってたから死神なのかな?」

「けど石田君も今忙しいから会えてないみたい。だから、、」

「やれてないとか、、、 なんとかか、、」

織姫は恥ずかしくなりゴニョゴニョと小声になる?

「とにかく! このままじゃ石田カップルが破局しちゃう!」

「よっしゃ! そういうことなら!」

一護は伝令神機を取り出すと、ポチポチとボタンを押している。

「一護くんなんかノリノリだね。」

「あいつのそういうところ中々見れないからな!」

そういうと耳元に伝令神機を当てた。

「おう！恋次か！実は石田の野郎が十二番隊に、、、」

「じゃアルキアにも伝えといてくれ！おう！じゃあな！」

「面白くなってきたな。」

ピンポーン

「はーい。」

一護が玄関戸を開けると、白と緑の縞模様のハットを被り甚平を着た男が立っていた。

「浦原さん！」

「いや、先程仕入れの帰りに凄いものを見ましてね。」

「石田のことじゃねえだろうな。」

「あら、もう知ってたんですか？」

「遠くからだったもので顔までは見えなかったんですが。」

織姫が嬉しそうに浦原に伝える。

「美人外国人死神です！」

「なるほどなるほど話は大体わかりました。」

「ではアタシも協力させていただきますすよお！」

「なんかみんなノリノリですね、。」

織姫はいつも以上に一護や浦原がやる気だったため苦笑いしていた。

く十三番隊長執務室く

「直接聞いたが教えてもらえなかった。やはり涅隊長から情報を貰えなさそうだ。ルキアと恋次が作戦会議をしていた。」

「阿近に聞いてみるか。」

く十二番隊技術開発局く

「おう、阿近。十二番隊に外国人顔っているか？」

「いや、居ないっすよ。金髪とかならまだしも。」

「そもそもそんな死神いないでしょ。」

「なんでまたそんな？」

阿近はそんなよくわからないことを聞いてくることに疑問を抱いた。

「どうも石田とその外国人美女死神ができてるみたいですよ。」

「石田つてえと、あのこつち側の滅却師ですよね？」

「まさか死神と結ばれるとは。」

く十二番隊隊舎前く

「来ないじゃない！あのメガネ!!!」

く浦原商店く

一護、織姫、ルキア、恋次は映像を食い入るように見ていた。

『いた！あんたちよつと！』

またもやコーヒーサカモトで話をする雨竜とチルツチ。

『また君か。』

『あんたあたし待ってたのよ！一日中！』

浦原は音量を上げている。

「うまく作動してますね。これが昨日のやり取りです。」

『怖気付いたの？』

『あたしに殺られるのが怖くて逃げたんだ！』

「ヤ、ヤラれる!!!?」

織姫は突然の言葉につい復唱してしまった。

『なんだと!?!』

『前にもう完膚なきまでにしたはずだが?』

浦原も石田の真の姿に言葉を失っている。

「石田サン、、完膚なきまで、、。」

『あの時はちよつと倒れただけでしょ?』

『なんなら今ここでやってもいいのよ?』

『ここ喫茶店だぞ?他の人に迷惑がかかるだろう!』

「石田、そういう問題じゃないと思うが、、。」

「どうやら尸魂界でのデートは石田サンがすつぽかしたようですね。」

「ちなみにこれが彼女サンの写真です。」

「わあ!やっぱり美人さんだ!」

「義骸に入っているせいか、靈圧はほとんど感じられませんでした。」

「どうすればいいんだろうな。石田が忙しいのは避けられないし。」

ガラガラッ

扉が勢いよく開いた。

「そういうことなら俺が一肌脱いでやろう。」

「親父！」

「俺があいつに頼んでみるわ。」

一心は瞬歩でその場を後にした。

く空座総合病院く

「もしもし、わたくし石田雨竜の父親の石田竜弦と申します。」

「実はお願いがありまして、息子の研修病院を変更していただきたいのです。」

「わたくし事で恐縮なのですが、再婚を考えておりまして、新しい母親となる女性と少しでも仲良くなるには息子は時間が必要だと考えております。」

「今の研修病院だと往復で4時間かかります。その時間を新たな母との交流の時間にしてあげたいのです。」

「ええ、はい。黒崎医院というところが受け入れてもいいと言ってくれています。」

「息子には言わないでください。きっと気を遣いますから。」

「はい、ありがとうございます。それでは失礼します。」

竜弦は電話を切ると、またいつもの冷たい口調にもどった。

「これでいいのか？」

「いい親父に見えたぜ。本当に演技だったのか？」

一心は竜弦をからかっている。

「うるさい、早く帰ってくれ。」

〳黒崎医院〳

「なぜ僕がここに？」

「いや、俺一護もいるしよお、研修生に教える練習もしたいなあと思ってたら雨竜君がいたから。」

「そいやあ雨竜君、彼女いんの？」

二階の部屋でモニタリングをしている一護は一心の距離の詰め方にブーイグを飛ばしていた。

「親父早えよ！不自然すぎんだろ！」

「いや、そのような人は、、、。」

「まあもしなんかあったら言ってくれよ。融通は利かせるからさ。」

「竜弦のやつも孫の顔が見たいだろうからな。」

「明日からうちでの研修頼むよ。」

く 尸魂界く

「黒白の羅、二十二の橋梁 六十六の冠帯 足跡・遠雷・尖峰・回地・夜伏・雲海・蒼い
隊列 太田に満ちて天を挺れ」

「縛道の七十七、天挺空羅。」

「副隊長各位に送ります。こちらは阿散井恋次。」

「今から言うことを各隊隊士に伝達願います。」

「石田雨竜は明日何も予定が無く、黒崎医院にいる。繰り返します。石田雨竜は明日何も予定が無く、黒崎医院にいる。よろしく願います。」

く十二番隊隊舎く

「聞いたか？」

「さっきの阿近副隊長からのやつだろ？石田雨竜が明日暇だってなんでわざわざ流したんだろうな？」

「あんたたち！」

「それ詳しく聞かせなさいよ。」

「お前は、、淫骸部隊の、、！」

く黒崎医院く

「雨竜君、今日は最初だし、受け付けを頼むよ。」

カラント

出入り口の扉が開いた。

「本当にいた。黒崎のところに。」

「なんで君ここが！」

「あんたのこと聞いてきたのよ！」

「あたしと勝負しなさい！」

「しないと云ってるだろう！」

雨竜はバンツと受付を叩き立ち上がった。

「お、来たかつ！」

雨竜と女の子の声が聞こえてきたため、一心はすぐさま受付の方へ向かう。

「雨竜君、今日はもう閉めるから上がって。」

「え？」

「お嬢ちゃん、雨竜君連れてつていいぞ。存分に楽しんでくるといい。」

「ですつて、早く来なさいよ！」

チルツチは受け付けに在る雨竜の腕を引つ張り外へ引きずり出していった。

「なんか真咲を思い出すなあ。」

「ほんとになんなんだ君は！」

「あんたが約束破るからでしょ！」

「約束した覚えはない！」

「勝負はしない。というより勝負にならない。」

「この前は負けたけど今回はそうはいかない！」

「なら僕の矢を止められらるか？」

雨竜は弓矢をチルツチに向けた。

「今の君にはできない。義骸だからね。」

雨竜は弓矢を収めると足早にチルツチの元から離れていった。

チルツチは近くにあつたベンチに座りこんでいた。

「くそつ、せつかく現世まで来たのに。」

「あれ？あれって石田君の彼女さんじゃ、」

「こんにちは。」

「誰よあんた。」

「私は井上織姫っていうの。石田君の友達だよ。」

「尸魂界から来たんだよね？何番隊なの？」

「なんで知ってんの？まあ一応、十二だけど。」

「一応って？」

「あんた知らないの？あたし達の存在を。」

「あたし達は涅槃部隊って言って、元十刃なの!!」

チルツチは少し苛立っていた。

「破面さん、、、？」

「そう、破面105番チルツチ・サンダーウィッチ。」

織姫は泣きそうな顔をしている。

「そっか、、、大変だよね、、、。」

「種族を越えた恋、、、。」

「けどあたしはそんなの関係ないと思う!」

「チルツチさんが石田君を好きなら一緒にいるべきだと思う！」

「は、はあ？な、なんであたしがあいつのことを好きになんなきゃいけないのよ！」

「辛いよね。うん、でも当たっていけばきつと響くよ！」

「大丈夫！私たちもフォローするから！」

ピコン

「あ、一護くん、石田くんと一緒にいるってき！」

くコーヒーサカモトく

「やっぱりここか。」

「黒崎、、！」

一護は雨竜の対面の席に腰をかけた。

「石田！お前うまくやってんのか？」

「何がだ？」

「外国人彼女だよ。」

「はあ？何を言ってるんだ？」

「わざわざ会いに来てるだろ？尸魂界から。」

雨竜は一護が誰のことを言っているのかようやくよく理解した。

「彼女のことか。」

「やっぱりもう付き合ってるのか！」

「そういう意味の彼女じゃない！」

「お前まさか体目当てってことか？」

「なぜそうなる！そんな訳ないだろ！」

「びっくりしたぜ、、、。」

ピ
コン

「おつ、織姫も今その彼女さんといえるらしい。」

一護は何かを思いついたように身を乗り出す。

「そうだ石田！今から遊園地いこうぜ！」

「織姫と2人で行く予定だったんだが、お前も一緒に彼女サービスしろよ！」
突然の提案に雨竜はもちろん、

「嫌だね。まず彼女でもないし、」

その答えを聞いた一護はケータイを取り出し電話をかけ始めた。

「ああ、親父か？石田の件だが、彼女と遊園地行くの渋ってたんだ。」

「ほい、親父が変われって。」

『あ、もしもし雨竜君？遊園地に行かなければ研修評価は最低にするから。』

「そんな、！」

「じゃあ楽しんで！がはははは！」

プープープー

く織姫・チルツチサイドく

「石田に会えるのか？」

「うん！会えるよ！だから今から行こう！」

「必ず勝負の約束を取り付けてやる。」

「はあ、なんで僕が遊園地に、、、。」

く後半へ続くく

The Rain Dragon and The Thunder Witch ②

「一護くん！」

「織姫！」

「来たな、石田雨竜！」

「チルツチ・サンダーウィッチ、ゝ！」

とりあえず4人は遊園地に入って何に乗るかを決めることにした。

「さあ、何から乗ろうか！」

一護がそんなことを言っているそばで喧嘩が始まっていた。

「早く勝負しなさいよ！根性なし！」

「何だ?! こっちはわざわざ来たんだぞ?! なんだその言い方は!!」

織姫と一護は顔を見合わせる。

「これはお化け屋敷だな。」

「うん！」

「で、なんで僕がこの女となんだ？」

「何すんの？これから？」

雨竜とチルツチは2人並んでポカンと口を開けている。

「これは、勝負だよ！先に怖がったほうが負け！ね？一護くん！」

「そ、そうだ！根性試しだ！」

根性試しという言葉聞いてチルツチは鼻で笑った。

「ふん、そんなのやるまでもない。この根性なしが負けるに決まってるでしょ？」

「何だと？僕に負けたくせによく言えるな！」

織姫が言い争う2人の背中を押し、入口へと押し込んだ。

「はいはい、先に入って！」

「何名様ですか？」

織姫がドンツと2人の背中を押す。

「2人ずつです！」

一護と織姫は恋人繋ぎでスタッフに手を挙げてみせる。

「カップル様ですね。ではそちらの2名様も恋人繋ぎをお願いします。」

「何だって!？」

「はい!早くする!」

織姫と一護によって無理やり手を繋がせられる。

「ではバンダナで結んで固めさせていただきます!」

「これが解けずに出て来られれば景品がありますので!」

「それでは行つてらつしやうい！」

雨竜はチルツチに聞こえないよう小さく呟いた。

「和風か、ゝ。」

実はこの男、和風のホラーが大の苦手だったのだ。

「(まずいな、ゝ、なんとか悟られないようにしないと。さすがに男が怖がるのも、ゝ)」

「ゝ、え！ねえつてば！」

「うあああああ！」

「きやつ、な、何？ああああんたビビってんの？」

「き、君こそ声が震えてるぞ！」

「当たり前でしょ！あたしはこういうの経験ないの！だから仕方ないの!!」
そんな2人を嘲笑うかのように女性の不気味な笑い声が響いた。

ふふふふつ

あはははつ

「何今の女の声！」

「知らないよ!!」

え、それって、

あたしのことお？

2人は恐る恐る同時に振り返った。

「うぎやああああ！」

「あんた何とかしなさいよ！誇り高き滅却師なんですよ!!」

「うるさいな！君こそ最初の威勢はどうしたんだ！それでも破面か！！」

「てかあんた手汗すごいだよ！」

「それは君の手汗だろ！！」

「あ、あの、」

お化け役のお姉さんも流石に止めに入るが、

「うるさい！！」

出てきた雨竜とチルツチはぐったりとしていた。

「おう！お前ら早かったな！」

「こいつが走って逃げるもんだから！」

チルツチが雨竜の背中を叩く。

「なんだと？君悲鳴をあげながら僕の背中に隠れてただけじゃないか!!」

「よし、いい感じだな。じゃあ次はジェットコースターだ!」

「へ？」

「どこまで上がんのよ!これ!」

「うるさいな!そんなのあそこまでに決まってるだろ!」

「これ脱線とかしないんでしょうねえ!!」

「だからうるさいし知らないって!!」

「うわあああああああ!」

「うぎやあああああ!」

大したことないジェットコースター。

子供たちも悠々と乗っているにも関わらず、大の大人カップルが悲鳴をあげていた。

「おえ、吐きそう、」

雨竜は手を膝に当て今にも吐きそうな様子である。

「あたしたち飲み物買ってくるね！一護くん行こ！」

腕組みをしたチルツチが雨竜をこれ見よがしにからかっている。

「あんたやつば大したことないわね！これくらいで吐きそうだなんて。」

「じ、自分だつて思いつきり叫んで、怖いって言つてたじゃないか、！」

「あんたらの所為でしょうが！」

「あのシロアリみたいなやつが変な液体で足元滑らせて落ちちゃったから高いところ怖

「なくなったのよ！」

かつて雨竜とチルツチが戦った時、ペッシユが吐いた無限インフィナイト・スリックの滑走によつて足を滑らせ高所から転落した。

そのときのことトラウマになっていたのだ。

雨竜はあの時の戦いを思い出す。

「――二度と元には戻れないわ――」

「――自ら腕を焼ききると同じことよ――」

「あの時、捨てた体の一部は治ったのか？」

「治るわけではないでしょ。もう破面としては中途半端よ。」

「これも全部あんたの所為。特にあんたが鎖結を射抜いたのが大きいのよ!?! 責任とりなさいよーほんと、」

チルツチはうつむいて話を続けた。

「その所為で今や骸部隊とか言われて、自由もなくてこき使われて。」

「こんな風に自由にできるあんたが羨ましいわ。」

「自由なもんか。いつも何かに追われて、、。」

「なんだっけ？医者？」

「そんなのどうでもいいじゃん、あんたがやりたいって思うならやればいいし、やりたくないならやらなきゃいい。」

「それが選べる自由が羨ましいって言うてるの。」

「あれえ？ケンカ？」

そこに絵に描いたようなチンピラ達が現れる。

「外人さんじゃん！めっちゃ美人！こんなメガネ君じゃなくて俺たちと遊ぼうぜ！」

男の1人がチルツチの腕を強引に掴み引つ張った。

「何よあんたたち！」

「(義骸だから力が全く出ない、、、)」

「その子から手を離せ。」

「おいおい、なんだよ。彼氏君いきがるじゃん！」

「ぐふおつ」

雨竜の掌底が男の顔面にクリーンヒットした。

男は血の滴る手で口元を押さえている。

そして地面には赤く染まった齒が3本転がっていた。

「次のやつは4本折るぞ。」

「ひ、ひふひよう!!ほぼえへろ!!」

男たちは一目散に逃げていった。

「な、何カツコつけちゃってんの!？」

「あんたに助けてなんて頼んでないでしょ!」

「あんなやつあたしの力で、」

「僕のせいで力がなくなっただら? 責任を取れと言われたからそうしただけだ。」

「お待たせ〜!」

織姫と一護が4人分の飲み物を買って帰ってきた。

「ありがとう井上さん!」

「石田俺にはねえのかよ。」

「なんで君に言わないといけないんだ!」

チルツチは一護と言い合いをしている雨竜を見つめていた。

「カツコつけないでよ、。。。」

「尸魂界」

遊園地から1週間。

織姫は地獄蝶と護衛隊士ともう1人、大事な友人と共に尸魂界へと走っていた。

「ついた!!」

織姫たちは女性死神協会と看板が掲げられた部屋にたどり着いた。

ガラガラツ

「ごめんなさい!」

慌ただしく部屋に入った織姫は開口一番に謝罪した。

「リルカちゃんも来てくれることになったんで、迎えに行ったら遅くなっちゃいました!」

「いいのよお、座って座って!」

松本乱菊が手をひらひらと振り、2人に座るよう促した。

「では、女性死神協会定期会議を始めます。」

伊勢七緒が参加者全員の着席を確認し、定期会議なるものを始めた。

実際は定期会議と言う名の井戸端会議のようなものだった。

まず発言したのは織姫とリルカが来る前から隣を気にしていた乱菊だった。

「で？この娘って破面の娘よね？」

「チルツチさんって言って石田くんの彼女さんです！あたしが誘いました！」

「誰が彼女よ！」

チルツチは織姫の言葉に激しく反応した。

「石田さんってあの滅却師の!？」

彼女という言葉に虎徹勇音もかなり驚いている。

「恋次は朽木、一護は織姫、石田は破面ってなんか、」

乱菊が下を向いて体を震わせていた。

「燃えるじゃないの!!」

「あんた頑張んなさいよ！」

乱菊は隣に座るチルツチの背中を思い切り叩き鼓舞した。

「痛つ、なんなのこの流れ!!」

「でも実際難しいんじゃない。」

虎徹清音が顔を曇らせている。

難しい理由はみな分かっていた。

「涅隊長よね、。」

「というより、まず四十六の決定を経て作られた部隊ですから、また四十六室の許可が必要なのでは？」

次々と2人を阻む問題が見つかっていく。

「そこはお任せください。私がなんとかしてでも京楽隊長に許可を得させます。」

「七緒どうしたの？　こういうのはいつもお堅いタイプなのに。」

七緒は乱菊の質問に答えず肩をすくめモジモジしていた。すると思いもよらぬところからフオローが入ったのだった。

「わかるわ。禁断の恋って応援したくなるわよね。」

ウエーブのかかった長い黒髪。太い眉毛に分厚い唇。

浅黒く彫りの深い顔。そして割れた腹筋。

その女性？の破面は、分かるわ、と言わんばかりに頷いている。

「ちよつと待ってくれ。こいつは男ではないのか？」

「やあね！　ルキアちゃん！　あたしもレディみたいなもんよお！」

「けど、許可が降りてもあの涅のところから連れ出すのは至難の業よお？」

ガラガラッ

突然扉が開くと、逆光で2人の黒いシルエットがそこに立っていた。

「心配ない。」

「そこは儂らに任せろ！」

「碎蜂隊長に夜一殿！」

「夜一様と私にかかれば破面1人くらい連れ出すことなど造作もない。」

前任、現任隠密機動総司令官の頼もしい言葉にわあつ、と歓声が上がります。

チルツチただ1人を除いては。

「あたしの中には監視装置や電撃装置があるから無理よ。」

「もしかしたらこの様子も見られてるかも、。。。」

すると碎蜂と夜一の背後から浦原喜助が顔を出した。

「心配いりませんよお。アタシが今無効にする電磁波を出してますから。」

「あと体内の装置に関しても問題全くなしです!!」

すると浦原は腰巾着からビー玉の様なものを取り出した。

「まずこの義魂丸を飲みます。すると2日かけてあなたの魂や記憶がこの中に入ります。移動が完了すれば意識はなくなります。」

「そしたら次にあなたのそのポロポロな肉体を燃やし、義魂丸を取り出します。」

「あとは義骸に義魂丸を入れれば自由の身です！」

「ちなみにこの義魂丸は義骸に入ると溶け出し一体化する様になってますから！」

「まあただ、霊圧はほとんど残らず人間とほぼ同じになります。」

さすが浦原喜助、すぐ壁を越えてきたな、と誰もが思っていた。

「ならもう許可とかいらさないんじゃない？」

クールホーンが腕組みをして七緒に問いかけた。

浦原がその質問に答える。

「いえ、石田サンは外世部隊の副部隊長ですから、しっかりと通すところは通しておいた

方がいいでしょう。」

人数や情報が増えややこしくなってきたところで七緒が総括確認に移る。

「では確認しますね。」

- ① 京楽隊長が四十六室から許可をもらう
 - ② 碎蜂隊長と夜一さんがチルツチさんを連れ出す
 - ③ 2日間他隊の隊舎で匿いながら義魂丸への転移を待つ。
 - ④ 義骸に入る
 - ⑤ 石田さんと結ばれる
- 以上です。」

「ちよつと待つて！なんであいつと結ばれることになってんの!？」

「あんたあのメガネのこと好きなんでしょ!？」

それまでだんまりを決め込んでいたリルカがチルツチに問いかけた。

「見てたら分かるよ。そつくりだから、…。」

「な！あんた達がそういうこと言うから、、、そういう感じに、、、」

「お主赤くなつとるではないか、初心よのお。」

「あたしをからかうな！」

く 黒崎医院く

「石田、お前あの娘のこと気になってんだろ？」

「な、な、何を言うかと思えばなんだって？」

「お前でもそんなにテンパることあるんだな。」

「お前をお前のまま見てくれるんじゃないか？」

雨竜はうつむき自分に言い聞かせる様に呟いた。

「相手は破面だぞ？」

「関係ないだろ。お前とその娘がどうしたいかが重要だろ？」

「僕たちがどうしたいか、」

「まずはお前がどうしたいかだな。」

く 四十六室く

「ですから！涅隊長の非人道的な骸部隊はやめさせるべきです！」

「知っておるぞ。涅の破面と石田という滅却師が相思相愛なのであろう？そんな仮想敵

同士で、もし尸魂界に害を与える存在となったらどうするつもりだ!？」

「却下!!」

「ごめんよ、、七緒ちゃん、、」

①京楽隊長が四十六室から許可をもらう

×

夜一と碎蜂は十二番隊隊舎裏門付近の草むらに隠れていた。

「こうなったら許可なしでも連れ出すしかない。」

「行くぞ碎蜂！」

その時スピーカーから大音量でマユリの声が響く。

「君たちが来ることなど知っているヨ。」

「な！門が閉まっていく!!」

②碎蜂隊長と夜一さんがチルツチさんを連れ出す

×

「今まで通り自由な外出時間に出て、それから外に留まればいいのよ！」

乱菊が半ばヤケクソの様に叫んだ。

「碎蜂隊長と夜一さんが見つかってからチルツチさん外出できなくなったそうです。」

③他の隊舎で匿いながら義魂丸への転移を待つ。

×

〜黒崎医院〜

「行くのか？石田。」

「ああ、涅に勝つたことがあるのは僕くらいらしいからな。」

雨竜は手に滅却師クインシー十字を携えている。

「他に勝てる人がいればいいんだが、僕しかないなら僕が行くしかないじゃないか。」

「石田、、、」

〜涅槃部隊詰所〜

「なんか、よくわかんないことに巻き込まれてたなあ。」

チルツチは遊園地や女性死神協会のことを思い出していた。

「まあでもあれが普通の人間とか死神の感情なんでしょうけどね。」

「破面や虚にそんな感情なんて普通はない。まあそれが少ししれただけでも面白かった
ちや面白かったかな。」

なにやら外がざわめいている。

「何か騒がしいわね。」

そこへ、チョビ髭と顎髭を蓄え、バンダナの様な仮面をつけた男の破面が駆けつけた。
「ニーニャ!! 何をしている! プリンシ白馬ペ・アス王子ール様が来ているぞ!」

「はあ?」

く 技術開発局 く

「なんだと?」

マユリは思わず阿近の言葉を聞き返した。

「ですから石田雨竜が破面を解放するよう抗議しに来ているそうです。」

「しかも応援を連れて。」

マユリが十二番隊隊舎前へ赴くと乱菊、勇音、雛森、清音、七緒などをはじめとする女性隊士達が集まっていた。

そして雨竜がその先頭に立っている。

「なんのつもりだね、君たち。」

「お前の骸部隊とやらを解放してもらおう。」

「知っているヨ。君はあの女の破面に惚れているそうだね。」

「破面と結ばれようとは、先祖もさぞ泣いていることだろう。」

「私は滅却師の先祖のことを思っ^て止めて^いるんだヨ？むしろ感謝してほしく^いくらいだが。」

「御託はいい。涅マユリ。」

「滅却師の誇りに懸けて僕は彼女を救う。」

「ホウ、。。。」

石田のその言葉に女性隊士達のボルテージが上がっていく。

「いいぞ〜！石田〜!!」

「全く、こちらは時間に追われているというのに、。。仕方がないネ。」

「掻き巻れ、正殺地蔵。」

マユリが始解の解号を言い終わった時にはすでに雨竜は消えていた。

「（速いつ、飛廉脚か）」

頭上に現れた雨竜の放った矢を間一髪で交わした。

「残念だったネ。あの時と同じ攻撃が聞くとでも思ったのかネ？」

そして瞬歩で雨竜の背後に移動し、斬魄刀を振り下ろす。

「なにつ、、、？」

雨竜は両腕の神経系を斬られ腕が動かなくなってしまう。

「これで勝負はついた。早く引き上げてもらお、、、」

マユリは腕に力が入らないことに気づく。

「これは、、、アンチセンス完全反立か、、、！消えていたとばかり思っていたが、、、！」

「どうだい？君の麻痺を自分で経験してみるのほ。」

「これで勝負はついた。早く彼女を解放してもらおうか。」

「ふん、、、好きにするといいいヨ。元々あの女は役に立たなかつたからネ。丁度いい。」

マユリは斬魄刀を握ったまま動かなくなった腕を治すため技術開発局へと戻っていった。

「やったー！やるじゃん石田!!」

乱菊が渾身のガッツポーズをしていた。

そこへ自体を聞きつけたチルツチが十二番隊から裸足で駆け出て来る。

「あんたなんでここまで、」

「これで自由だろ。自分で選ぶんだ。」

「でも四十六室とかいう奴らの許可はもらってないんでしょ?」

「私が許可しよう!」

声を上げたのは貴族の少女、阿万門ナユラだった。

「もう障害は何もないはずだ。」

「だそうだ。それでどうするんだい？チルツチ・サンダーウィツチ。」

雨竜はチルツチの方に向き直った。

「このボロボロの体には嫌気がさしてたところだし、仕方ないから入るわよ、、、義骸に、、。」

「あたしこれから行くところないんだけど。」

「現世に行こう。」

「現世かあ、、、あくあ！破面の力どころか霊圧も無くなってただの人間に成り下がるなんてさー！」

「力が無くなってもいい。僕が君を守るよ。」

2人はあの時とは全く逆の表情をしていた。

「何それ。」

「まったく、人間の男ってのはみんなそんな風なのかしら？」

く終わりく

The name of our daughter

〽朽木邸・当主の間〽

「それで、決まったのか？」

恋次は正座で、お腹の大きなルキアは足を崩し、白哉の前に座っていた。

「いえ、それがまだ話し合い中で、」

白哉は義妹夫婦に貸し出していた字画の記載された書籍や、朽木家歴代の名簿を自身の横へと移動させ、積み重ねた上で整えている。

「字画や、伝統から離れることも悪いことではない。」

「お前たちにとって、娘が将来どうなつて欲しいかを考えてみる。」

〽朽木邸・廊下〽

「どうなつて欲しいか、かあ、」

「俺は勢いのある漢気のある子に育つてほしい！」

「莫迦者！娘だぞ！」

（現世・空座町）

阿散井夫婦が現世の歩道を歩いていると、偶然にも、尸魂界でも有名なデコボコカッブルと出会う。

「おう、石田。彼女との調子はどうだ？」

「阿散井、なんで君が先輩面してるんだ、？？」

ルキアは初対面である雨竜の彼女の方に正対し、姿勢を正した。

「初にお目にかかる。私は、」

「知ってるわよ。朽木ルキアと阿散井恋次でしょ？虚夜宮に乗り込んできた。」

「で、なんで君たち夫婦が現世に？デートかい？」

「違えよ！お前らと一緒にすんな！」

恋次は煽るようにニヤニヤしている。

そしてその煽りにまんまと引つかかったのがチルツチだった。

「だ、だれがこのメガネとアートを、！こつちから願ひ下げよ！」

「なんだと!?今回は君が服を見たいつていうからついて来たんだろ!」

思いもよらない展開に恋次は少しばかり罪悪感を覚え、話題を変えた。

「まあまあ、それより石田！」

恋次は、チルツチと口喧嘩をする雨竜を肩を組むように引き剥がすと、女性陣と距離をとりひそひそ話を始めた。

それを見たルキアも同じ女性としてチルツチに悩みをぶつける。

「実は子供の名前で悩んでいてな、お主達に子供ができたらどうやって名前をつける？」

チルツチは驚いた様子で少し間を置くと、真剣な面持ちでアドバイスを始めた。

「あんた達二人の要素から取ってみるのは？」

「私達二人の要素、か。」

ルキアは顎に手を当て二人の名前を組み合わせ始める。

「恋、キア、、、ル、、、恋、、、、」

「別に名前じゃなくてもいい。あんたなら氷とか雪とかさ。あんたの旦那の能力は知らないけど。」

それを聞いてルキアは恐る恐る、将来雨竜達の間生まれくるであろう子供の名を

口にした。

「ならお主達は、、滅、、破、、？」

「物騒すぎんでしょ。例えば、、あいつの竜に私の要素を加えるとかさ。」

「なるほど、、！」

「まあ、あいつとの子供だなんて方に一つもないけどね。」

「子供ってウザそうだし。」

チルツチは雨竜の背後に近寄り、襟元を掴むと強引に歩き始めた。

「まあ色々考えてみたら？」

「おつ、おい！襟を掴むな！しわがつくだらう！」

引きずられていく雨竜を眺めながら、恋次はつい心の内を吐露してしまう。

「あいつも尻に敷かれてんだなあ、、かわいそうに、、。」

「あいつも？」

「い、いや！なんでもねえ！そ、それより！もう帰ろうぜ！」

恋次は話を逸らすように穿界門を開き、中へと駆け込んでいった。

「尸魂界」

恋次は雨竜からのアドバイスをもとに、考えを巡らせていた。

「結局石田の考えも朽木隊長とおんなじだよなあ、」

ドンツ

「痛っ、誰だ、っ、つて！」

恋次がぶつかった相手は、恐らく誰もが一番ぶつかりたくない死神だった。

「更木隊長!!」

目の前の男はこれまでに経験したことのないような殺気を放っている。

「阿散井、てめえしっかり前見て歩け。」

「も、申し訳ねえっす! 更木隊長にぶつかるなんて!」

「莫迦野郎、そうじゃねえ。」

「てめえの女が腹に子供抱えてんだ。夫のてめえがしっかり進む道を見とけつつつてんだらうが。」

「更木隊長、っ、!」

すると剣八の後ろからスキンヘッドが顔を覗かせた。

「で、何をそんなに悩んでたんだ？恋次。」

「いや、生まれくる娘になんて名前をつけようか悩んでたんすよ、。」

恋次が神妙な面持ちでそうこぼすと、剣八が即答した。

「なつてほしい姿を名前にすりゃいいだろ。」

「だから俺は自分を剣八と名乗った。」

——八千流、俺が唯一人こうありたいと願う人の名だ——

——お前にやる——

「悩んで決めりゃいいじゃねえか。」

「名前つてのは親が初めて子に贈るもんだろ。」

そう言うのと剣八は、ルキアから動線を外し歩き始める。

「行くぞ。」

ルキアと恋次は目を丸くして、鬼と呼ばれる死神の背中を見ていた。

「更木隊長、丸くなったってのはほんとみてえだな、。」

く朽木邸・ルキアの部屋く

恋次とルキアは向かい合って座っていた。

「俺は、、！俺の思う娘になってほしい姿は、、！」

「は、恥ずかしいから一回しか言わねえぞ！」

恋次は一呼吸おくと勢いよく話し始める。

「真つ直ぐに育って欲しい！壁にぶち当たろうが何度も立ち上がって生きていつて欲しいんだ!!その、、あいつみたいに、。」

ルキアは微笑みながらその人物を言い当てた。

「一護のようにか、？」

「ああ、そうだよ！悪いかよ！」

ルキアは穏やかな顔をしながら続ける。

「そうか、、なら割れたな。」

「私は織、、井上のように人に優しく、強くあつて欲しい。」

ルキアはそう言うのと、祝言の際織姫から貰った壁に飾つてある白無垢に目をやった。

——苺の花模様——

恋次もつられて、その白無垢に目をやった時だった。

「あー」「あー」

二人の声が部屋の中でこだまする。

「いいこと思い付いたぞ。」

妙案が浮かんだ、と言わんばかりに恋次は嬉しそうな顔をしている。

「まさか一緒ではあるまいな？」

そうやり取りをしながら、二人は筆を取り白紙に殴り書いた。

「よし、せーので見せるぞ!？」

「せーの!!」

恋次が掛け声をかけたが、ルキアは紙をひっくり返さなかった。

そして恋次だけが名前を見せることとなる。

ペラッ

《莓花》

「これなら一護の要素も入ってるし、井上の要素も入ってるだろ！」

ルキアはその名を見て、目を閉じて柔らかく微笑んだ。

「流星は私の夫だな。」

そう言い、ルキアも紙を裏返す。

ペラッ

《莓花》

「一緒だな。」

恋次とルキアはお互いを見つめ合い、微笑んだ。

「読み方は、」

「いちごばな」「いちか」

「たわけっ!! 訓読みにするなっ!!」

く 終わり く

外伝く剣術大会く

戦力外副隊長達の憂鬱①

く一番隊隊舎く

「四番隊副隊長、虎徹清音！

八番隊副隊長、行木理吉！

七番隊副隊長、伊江村八十千和

九番隊副隊長、小椿仙太郎！

「以上四名の者を今年度剣術大会役員に命ずる。」

一番隊副隊長伊勢七緒の凜とした声が隊舎内でこだまする。

「ありがとう七緒ちゃん。みんな休んでいいよ。」

「休め。」

七緒の号令とともに四名の副隊長は休めの姿勢を取り、総隊長の京楽春水が話し始めた。

「今年もこの時期だねえ。去年は色々あったからあつという間な感じがするよ。」

「で、例年役員は五席以下が務めるのが慣習になってただけど、今年は副隊長四人にやってもらうことにしたんだ。」

「な、なぜ副隊長が、、？」

清音が恐る恐る京楽に尋ねた。

「理由は簡単。四十六室のお偉いさん方や上級貴族が視閲に来るからだよ。」

「なぜか定期的に僕らを脅かす敵が現れるだろう？どうもそれに対抗する戦力が護廷隊にあるかどうかを確認したいそうなんだ。」

「今回の役員には責任が伴う。だから副隊長四人にやってもらうことにしたんだよ。」

「じゃあそういうことで、頼んだね。」

く 一番隊隊舎廊下く

「うそだろ、、こんな重責、、」

仙太郎が頭を抱えながら歩いている。

「とうよりこのメンツって、、」

理吉は京楽に呼ばれた時から頭に浮かんでいた考えを口に出した。

「言うな理吉！」

理吉の考えを悟った仙太郎は声で理吉を制するが、

「いえ！言います！これ完全に僕ら剣術大会戦力外つてことですよね！」

その言葉に皆肩を落とす。

「くうく、く、分かつちやいたが言われると堪えるぜ、」

「ただ下命された以上、任務を遂行するしかありません、」

八十千和はメガネを指で押し上げている。

「まずは役割を決めましょう。」

くくくくく

『いいかい？今回四十六室からのお達しは3つだ。』

『一つ。出場チームは

一く六番隊選抜

七く十三番隊選抜

零番隊選抜

外世部隊選抜

副隊長三席合同選抜

四席以下の新戦力選抜

の6チームで、1チームの出場は7人。』

『二つ。外世部隊には必ず全種族を選抜すること。』

『三つ。全力を出して戦っても相互に被害を与えない戦場を設けること。』

~~~~~

「零番隊に交渉しに行かなきゃいけないんですよね、、、」

理吉は嫌そうに小さな声でそう呟いた。

「でもいくら零番隊と言えども四十六室のお達しなら承諾してくれるでしょ!」

清音も半ばヤケクソのようになっている。

「じゃあお前が行ってこいよ!」

しかし行きたくないのは皆同じ。

仙太郎がすかさず清音に突っ込んだ。

「なんであたしが行くのよ!この脇臭口臭おとこ!」

「んだと!?この鼻くそおんが!」

「ここは公平にくじといきましよう！」

く現世・黒崎医院く

「剣術大会だあ？」

「黒崎さん達は外世部隊として出てもらいたくてですね、、」

理吉は正座で一護の前にかしこまっていた。

その横には十三番隊隊長のルキアも座っている。

「剣術大会は勝ち抜き方式だが、一護達が出るのはこれではない。」

「護廷十三隊から外世の人員に対して不満が出てな、、」

「不満？」

一護は眉を潜めて復唱した。

「護廷十三隊の隊長である私が言うのもなんだが、正直言って外世部隊の戦力は高すぎる。」

「二人一人が隊長格と言っても過言ではない。」

「そこで、護廷十三隊で大会を行い、そこから選抜して外世部隊と戦うことになった。」  
「まじかよ、、、めんどくせえ、、、」

くワイハンス・エンタープライズく

プルルルルル

ピッ

「何だい？僕は今すごい忙しいんだけど。」

『申し訳ありません、社長。今受付にボクシング元ヘビー級世界チャンピオンの  
茶渡泰虎さどやすとら様がいらつしやっています。』

「はあ？」

ガチャツ

「すまん、、、忙しいところに、、、」

チャドは申し訳なさそうに肩をすくめながら、社長室に入ってくる。

「なあに？ボクシング再開するからまた大会を主催してくれって話？」

「ム、大会を主催は近いな、、、ボクシングではないが、、、」

「で、そのゴツイおさげのおっさんはだれなのさ。」

チャドの左斜め後ろにたたずむ巨漢に目がいったのだ。

「八番隊第三席副官補佐、えんじょうじつつかさ円乗寺辰房である。」

「で、その死神の円乗寺さんがなんでうちの会社に来てんの？」

「うむ、吾輩の上官である行木副隊長から、暴れても被害の出ない戦場を用意できないかと相談を受け、吾輩調べたところ、黒崎部隊長列伝第四巻第四章第七話、題名《ローディング・トウ・ライ》において、黒崎部隊長は完現術師フルプリングの集団《XCUTION》に属する雪緒・ハンス・フォラルルベルナなる者が構築した仮想戦場で鍛錬を積んだと記載されていたのだ。さらになんと！その集団にはかつて黒崎部隊長と共に尸魂界に侵攻した吾輩の好敵手、茶渡泰虎も所属しているとのことではないか！そこで吾輩は現世へと渡り、茶渡泰虎を通じてここへ参ったのである。」

「長いよー！どういふことか簡単に説明してよー！」

雪緒はチャドの方に向き直り説明を求めた。

「ム、、、すまん、、、俺もよく理解できないんだ、、、」

「つまり、ワイハンスプレゼンツで尸魂界剣術大会会場を雪緒のゲームにさせてくれっ

ていとかい。」

「月島、、！」

「さつき一護から連絡があつてさ。雪緒のところに会場設営について説明下手な死神が交渉に行つてゐるって聞いてね。」

「な、、！お主は黒崎部隊長列伝第四章第二巻第六話、題名《ナツクル・ダウン》において登場した月島秀九郎、、！」

「なんなんだい？この死神は、、！」

く霊王宮く

「勝手にやってくれ給えヨ。」

「まあそう言うなマユリや。楽しそうではないか。」

「俺も護廷十三隊の小僧たちの力を見るのは悪かねえと思うぜ？」

「チャンボクの作った斬魄刀をしっかりと使つてるかも見たいしNe！」

「俺もいいぜ。岩鷲の野郎に直接鍛錬つけれるかもしらねえしな。」



「じゃああたしは大会の炊き出しでも作るとしようかね！」

「では、、！」

仙太郎は曇った顔から笑顔へと変わった。

「うむ、マユリは儂が説得するわい。おんしらの実力を測るのも一興よ。」

〜一番隊隊舎〜

「悪いねえ、みんな集まってもらつて。」

「誰かに剣術大会の総大将をお願いしたいんだ。」

「朽木隊長はどうだい？」

「無理だ。我が隊は、ワカメ大使饅頭の販売で多忙となる。」

白哉は悪びれる様子もなく、淡々とワカメ大使饅頭販売計画を発表した。

「じゃあ、碎蜂隊ちよ、」

「我が隊も、夜一さ、、、黒猫饅頭の販売で手一杯だ。」

「うーん、アシド君は遠征訓練の件があるし、僕は総隊長の仕事があるし、勇音ちゃん  
は副総隊長の仕事があるし、、」

京楽の反応を見た平子は冷や汗をかき始めた。

「おい、これいつものパターンちゃうんか、、！」

「平子隊長頼むよ！」

「うおおおおおい!!ちよい待てや!!」

「俺いつつもやんけ!綱彌代んときも、仙波んときも、思念珠搜索んときも!つてこのやりとりもう飽きたわ!」

「そうかい、じゃあ頼むよ。」

「全然オツケーしてへんわ!!俺絶対やらへんからな!!!」

く五番隊隊舎隊長執務室く

ガチャツ

「失礼します。剣術大会の選手表をお持ちしました。」

「なんでいつつも俺やねん、、なんでいつつも俺やねん、、俺就職決まった後の単位全部取り切ったヒマな大学生ちゃうねんぞ、、なんでいつつも俺やね、、」

「隊長、、私も全力でサポートしますから、、例えば私が倒れることになったとしても、、隊長をお助けしますから、、!!」

雖森は心強い面持ちで自身の右手をぐつと握って見せる。

「も、桃おく、、、 お前は最高の副隊長や、、、」

平子は立ち上がるとやる気に満ちた表情を浮かべた。

「目が覚めたで!! 隊長が副隊長にここまで言わせたらアカン! 俺に全部任せときつ!!」

ドサツ

「も、桃? なんや、、、 これは、、、」

「剣術大会一式書類です。では全部お任せしますので作成お願いしますね! 総大将!!」

ガチャツ

「おい、ちよつと待つ、、、」

バタンツ

「コラア! 桃お!! 戻って来んかい!!!」

まんまと雛森に嵌められた平子は地団駄を踏んでいる。

「あいつ真面目すぎやから仕事のサボり方伝授したつたらもうマスターしよつたな、、、」

「ほんま桃のやつ、副隊長やつとつた頃の俺に似てきよつたで、、、」

## く十一番隊隊舎く

「み、皆さま、お集まりいただきありがとうございます。」

「今回剣術大会使役に任命されました七番隊副隊長伊江村です、。」

「今回の剣術大会は、護廷十三隊を二つに分けることになりました。」

「つきましては、七く十三番隊までの皆さまの中から総大将を決めていただきたく、。」  
「更木だろ。」

九番隊隊長の六車拳西がそう意見する。

「なんで俺がそんな面倒臭えことしなきゃなんねえんだ。」

指名を受けた更木は心底嫌そうな顔で部下にその責をなすりつけた。

「一角、てめえがやれ。」

「いやいやいやいや！こういうのって隊長がするもんつすから！」

拳西は次のターゲットに目をやると躊躇うことなく指名した。

「じゃあペーペーだし、阿散井夫婦でやれ。」

しかし恋次も黙って引き受けるつもりはない。

「なんで俺たちなんすか！こういうのって古株の隊長がするもんでしょ!？」

「では、六車隊長ということになりますね。」

ルキアもどうにかして総大将を回避しようと拳西に指名返しする。

「俺は一回リセットされてんだから一番の古株じゃねえよ。」

「そうだ、修平、お前やれ。どうせ暇だろ?」

「なんすか！ヒマって！俺は編集長も兼ねてんですよ!？」

そこに恋次が口を挟む。

「けど、檜佐木さんじゃなあ、。」

「おいつ!!」

「古株とか新人とか強いとかより、すっかりした人がいた方がいいんじゃないすか？」  
恋次のその言葉に一同の目がある人物へと集まる。

「.....」

く十番隊隊舎廊下く

「た〜いちよつ♡」

金髪美女の松本乱菊が、廊下を歩く日番谷冬獅郎の目の前に飛び出る。しかし冬獅郎は目をくれることもなく、乱菊を避けて歩き続けた。

「ちよつとお！無視しないでくださいよお！」

「あ、そつか！今は隊長じゃないですもんね！日番谷総大将♡」

「うるせえ、、、！」

順調に進む大会準備だが、役員の副隊長4人はまだ知らなかった。まさかこの後、途轍も無くめんどくさいことが待ち受けていようとは。

T o b e c o n t i n u e d . . . . .

外伝く戦場に咲く蓮華草く

戦場に咲く蓮華草①

………  
を守るために兄様は行かなくちやならねえ。

兄様は護廷十三隊だからだ。

私は兄様に憧れた。

——質問方法を変更する——

気づくと私の腹部は貫かれ、兄様を見下ろせるほどの高さまで持ち上げられていた。

その時胸に渦巻いていたのは、《助かりたい》ではなく、《兄様を助きたい》という思

い。

その時、自分の無力さを心の底から恨んだ。

だからこそ私は自分を鍛えるため、真央霊術院に入学した。  
そしていつか兄様の傷を癒すことのできる四番隊に、。

けど、入学して初めて気づいた。

私の名が背負っている重圧と責任を。

く真央霊術院く

「3組担任の青鹿<sup>あおが</sup>だ。」

「三組だからと言って何も自分を卑下することはない。」

「席官には、五組出身の者も無数にいる。」

学院の組分けは試験によって決まる。

1組が最も優秀で、そこから順々に下がっていく。



——大前田って、あの大前田?——

——親父と兄貴は優秀だけど、あいつは——

——大前田って鈍臭いよな——

そんな声は少なくなかった。

だがその声は、、間違っではいなかった。

く 鬼道の授業く

「次!大前田!」

「は、はいっ!」

「破道の三十一、しゃつかほう赤火砲!」

ポンッ

「なんだそれは!?!練習してきたのか!?!」

「す、すみません!!」

く魂葬の授業く

「次！大前田！」

「は、はいっ！」

希代は緊張した面持ちで、現世にいる整プラスと呼ばれる霊を成仏させる行為、魂葬に挑戦した。

ポンッ

斬魄刀の柄で霊のおでこをポンと押すと、突然霊が痛がり始める。

「いのででででで!!痛いー!!」

「大前田！力が入りすぎだ！」

「す、すみませんっ!!」

く歴史の授業く

「では、この何度斬られても倒れない不死身の称号として知られる名は?……、大前田。」

「#@&パチ、です。」

「なんて？」

「#@&パチ、です。」

「最初を濁すな！」

「カ、カンパチです、、か？」

「そうそう、出世魚とかけて誉高き名前、、つて莫迦者!!」

「剣八だ!ケ・ン・パ・チ!」

ポンッ

「ああ〜!」

「嬉しそうに納得するな!」

「全く、、ここまでできない新入生も珍しい、、」

〜白打の授業〜

「今日からお前達に白打を教える四楓院夜一じゃ。」

「すげえ、、!四楓院先生だ、、!」

「思ったより背ちつちやいんだな。」

「うへへ〜」

男子達は思い思いの感想を述べている。

「儂は講釈垂れるのが苦手だな。実戦で教える。早速相手を組め!」

希世があたふたしている間に、大方周りの学生がペアを作り終えていた。そして希代の前で男子学生が顔を曇らせていた。

「げっ、大前田かよ、」

そしてその男子学生は希代と間合いを取って構える。

「組み手一本目、始め！」

夜の掛け声と共に、相対する学生達は一斉に各々の技を繰り出した。

「はっ！」

バンツ

男子学生の拳が希代の左肩に直撃する。

「きゃっ、」

希代は体勢を崩し、その場に尻もちをついてしまう。

「おいおい、、軽く打撃しただけで倒れちゃったら訓練ならねえじゃんか、、」

周りの学生達が止まることなく攻防を続けているのを見て、男子学生はため息をついた。

「はあ、、大前田じゃ練習にならねえよ。」

「い、いめんさい、、」

希代が授業を終えて学生寮に帰っている途中だった。

「大前田!!!」

ある人物から突然名を呼ばれた希代は胸が締め付けられるような感覚に陥った。

「は、はいっ!!」

希代の後ろに立っていたのは、鋭い目つきをした女学生。

名は四賀田しがたくよ郁代。

一年生は二年生の先輩に付き、死神の基本を学ぶ。

希代が付いた先輩は、その学年でも上位20名に名を連ねる四賀田しがたくだった。

「あんた今日もポカばかりしたようね。」

四賀田は希代を睨み付ける。

「あなたの指導をしてるせいで、私は同期におちよくられてばかりよ。」

「は、、、はい、、、」

「〃はい〃 じゃなくて 〃すみません〃 だろうが！」

「すみません、、、」

オドオドしている希代を見て、四賀田は苛つきを募らせる。

「鈍臭い奴見てるとイライラすんのよ。」

「あんたも知ってると思うけど、付きの先輩は指導後輩の評価をつけて担任に提出する。」

「5段階評価で基本的には4。酷くても3。」

「2や1は見たことも聞いたこともない。」

「2や1は死神としての適性に欠けるといいう評価。そんな評価がつけば学院としても対処せざるを得ない。」

そこまで聞いた希代は最悪の事態に体をこわばらせる。

「それって、、、」

「あんたにはこの学校を辞めてもらう。」

To be continued.....

## 戦場に咲く蓮華草②

「あんたには辞めてもらう。」

「そ、それだけは、、、私頑張りますから、、、」

希代は何とか勇気を振り絞り食い下がった。

「頑張る頑張るって口だけで具体的に何も無い奴ほんと嫌いなもの。」

「具体的に、、、？」

四賀田は嘲笑うように無理難題を口にする。

「鬼道の九十番代とか、始解習得とかさ。」

「そうだ！この一年で始解を習得したら評価を5で上げてあげる。」

四賀田は両手を合わせて明るくそう告げるが、その表情は一変する。  
「でも無理なら辞めてもらうから。」

始解。

かつては護廷十三隊入隊後に始解を習得するのが通例だった。

しかし靈王護神大戦、綱彌代時灘の事件、仙波の襲撃を受け、護廷十三隊の強化を方針とする四十六室の指示で、靈術院のカリキュラムにも始解習得が組み込まれることとなった。

しかし、実際に学生が始解を習得するのは極めて稀で、この取り組みが始まってからまだ一人しか始解習得に至っていないかった。

むしろその学生が特別だと言ってもいいだろう。

学院では月に一回始解習得の授業が行われる。

つまり卒業するまで70回ほど挑戦しても習得できた学生は唯一人。

それを入りたての一年生が取得するなど、実質辞めろと言われているようなものだった。

「そ、そんな、、始解なんて、、」

もちろん希代も始解習得の難しきは理解していた。

現二番隊副隊長で、兄の大前田希千代も護廷十三隊に入ってから始解を習得していたし、習得した日には大喜びで帰ってくるや、家族でお祝いをしたことがあったからだ。

しかし四賀田は無慈悲に突き放す。



「やらなくても結構。辞めてもらうだけだから。」

「はい、じゃあ今日はここまで。じゃあね。」

実質退校宣告を受けた希代は自室に戻って一人涙を流し絶望していた。

「せつかく、、、護廷十三隊に入れたのに、、、うぐっ、、、」

そうしてひとしきり泣き、疲れ果てた希代はいつの間にか寝入っていた。

↳翌朝・学生寮共用自習室↳

「せ、先輩、、、よろしいでしょうか、、、?」

希代は四賀田に対し、完全に萎縮してしまっていた。

しかし勇気を振り絞った希代の問いかけに四賀田の返事はない。

「あ、あの、、、せん、」

「聞いているから早く要件喋れ。イライラさせんな。」

四賀田はいつも以上にイライラしていた。

「昨日の訓練での鬼道の評価を頂きたいのですが、」

「忙しいから後でやるって言ってるでしょ!? 何回言わせんの? もうここに置いとけ。」

今日は月に一度の始解習得の授業だったため、四賀田はもちろん、全生徒、特に高学年になるにつれピリついた雰囲気は漂っていた。

「あんたもそんな鬼道の評価を気にするより始解習得に必死になった方がいいんじゃないの?」

四賀田が始解習得に集中する中、別のことを持ち出してきた希代が腹立たしくて仕方なかったのだ。

四賀田はイラついた様子で鞆を机に叩きつけると、椅子を思い切り押し戻し、共用自習室を後にした。

### く始解習得の授業く

異様な光景だった。

講師を務める夜一の前には、全校生徒が立っていたからだ。

「今日の訓練は、2年以上は分かっとるじゃろうが、1年生のために説明しておく。」  
すると夜一は左手で支えていた黒色の平べったい人型の板を掴むと自身の前へ置いた。

その人型の板は、生徒達一人一人の目の前に置いてあるものと同じものだった。

「これは潜神体せんしんたいと言つて、浅打をこれに挿すと斬魄刀との精神世界へと入れる。」

「これは言わば正規の方法ではない。精神にも大きな負担をかけることとなる。」

「そこでお前達の負担を考えて、この授業は月に一回のみ。」

「斬魄刀はお主らに課題を課すかも知れんし、対話を持ちかけるかも知れん。それは千差万別じゃ。」

「まあそもそも挿しても何も起こらんことがほとんどじゃがな。」

夜一はゴホンと咳払いをすると話を続けた。

「始解は斬魄刀との対話が条件とされていたが、真に必要なのは理解。」

「対話してもお互いに理解していなければ意味はない。」

「まあ詰まりはじゃ。上手くいけば始解を会得できるかもしれんということだ。」

「そんな無茶な、。」

毎年のことながら1年生たちはざわめく。

するとそれを予想していたかのように夜一はニヤリと口角を上げた。

「お前たちの先輩で習得に成功した者がおるぞ。」

その言葉を聞いた高学年の生徒達が口々にある青年の名を呟く。

——錆面彦禰——  
さびつらひしね

「さあ、心の準備ができた者から浅打を潜神体に挿せ。」

「では、、始めっ!!!」

夜一の掛け声とともに生徒達は各々のタイミングで斬魄刀を潜神体に突き刺し始める。

その様子を見た希代も遅れまいと刀を突き刺した。

-----

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.

——希代——

「だれ、？」

——、れよ——

——、よ——

## 戦場に咲く蓮華草③

——希代——

「だれ、、、？」

——あなたが強くなりたいと願う理由は何——

「えっ、、、それは、、、」

「守りたいから、、、」

——誰を——

「私の大事な人達を。」

——どうやって——

「四番隊に入って、傷を癒して、」

——そう、わかった——

——また会いましょう——

—————

「あ、起きた！」

「四楓院先生——！大前田起きました！」

希代が目を開くと視界には真っ白な天井と、左の方には担任の青鹿の顔があった。

声のする方へ顔を向けると、入り口付近にいる夜一が振り返ってこちらに向け歩き始めていた。





青鹿は混乱する希代に代わって間接的に夜一に説明を求めていた。

「左様。意識を失うというよりは、精神世界へ入り込み意識が斬魄刀との対話と集中している、という方が正しい。」

「その状態とはすなわち、斬魄刀と何らかの意思疎通を図っている状態とも言える。」

「しかし、その状態で意識を奪われることはない。」

「皆平衡感覚を保ち、意識を持ったまま精神世界へと入る。」

「意識がなければ精神世界には入れない、、、。」

青鹿は一人呟いた。

「その通りじゃ。だからこそ、何が起こったのかを聞いておかねばならん。」

「声が、、、声が聞こえたんです、、、。」

「うっすらと、、、遠くで、、、私の名前を呼ぶ声が、、、。」

「あとは、、、思い出せない、、、。」

起きたときは鮮明に覚えていたのに、ほんの数分で記憶がほとんどなくなっていた。

「あれ、、、何で、、、？」

「待つてくください、、、絶対に、、、思い出しますから、、、」

「無理に思い出す必要はない。また一ヶ月後に知ればいい。」

夜一は苦悶の表情を浮かべる希代の頭に手を置いた。

「急ぐことはない。」

その言葉に希代は小さく返答する。

「急がないと、、、いけないんです、、、」

「ん？何か言ったか？」

「いえ、、、」

夕刻・学生寮自習室

「あ、あの、、、先輩、、、」

「鬼道訓練の評価を、、、」

希代はいつものことながら四賀田に怯えながら話しかけた。

すると四賀田は思い切り机を叩き立ち上がった。

「うるっさい!!!」

「なに!? あんた始解の訓練のことで調子乗ってんの!?」

「ふざけんなっ!!!」

四賀田は勢いよく席を立つと苛立った様子で部屋を後にした。

希代は呼び止めることもできず、四賀田の後ろ姿を見つめることしかできなかつた。

すると、、、

「大前田さん。」

「はっ、はいっ!」

突然名を呼ばれて、少し驚いてしまった。

声の下方へ振り返ると、そこには茶髪でセミロングのいかにも穏やかそうな女学生が立っていた。

「四賀田は怖い？」

「あ、あなたは、、、？」

「私はなまきさきあけみ薙崎朱美、3年生。」

「、、、!!」

学院内のことに疎い希代でも知っている名だった。

3年生にしてすでに席官入りが固いと言われている女学生だ。

「お、お疲れ様です、、、」

「まあ、とりあえず座ろつか。」

希代が恭しく頭を下げると、薙崎は椅子を引き、希代に座るよう促した。

「四賀田はね、私が2年の時に付いてた後輩なんだ。」

「私もさう、一年の時はよく怒鳴られて、寮に戻っては泣いて。これを繰り返してたなあ。」

薙崎は明るい口調ではあったものの、若干苦笑い気味だった。

「頭も要領も悪くて、私は普通の人が普通にできることができないんだっていつも悩んでた。」

「それで私、半年経っても全く成長しない上に、人と話すのも怖くなつて一ヶ月程休学してたの。」

「それでなんとか復帰したんだけどさ、一発目の授業がその先輩との組手で、そりやもうコテンパンにやられてね。」

「さらにみんなの前で怒鳴られて、、私その場で倒れちゃったの。」

「恥ずかしいよね！今でも情けないよ!!」

薙崎は無理に笑っているようにも見えた。

「で、そのとき組手の指導にあたってた6年の先輩が慌てて救急室に担いでくれて。」

「その先輩は《何かあったの？話してみて》って言ってくれて、、」

「その先輩に悩みを相談したんだ。」

「そしたら特別にその先輩が私の付きの先輩になってくれるってことになって。」

「その先輩はもう卒業後に席官入りが内定してて、始解も習得済みだったから時間もあつたしね。」

始解習得と聞いて、希代はピンときた。

「その先輩つてもしかして、、、」

「そう、錆面先輩。」

「私は錆面先輩に付いた後半の半年で、5年生と同じ実力が付いてたの。」

薙崎は穏やかな顔で遠くを見つめていた。

「自分自身に驚いたわ。そして安心した。」

「私も咲ける花だったんだ、ってね。」

そして薙崎は希代の方に顔を向ける。

「その時に錆面先輩がよく言ってた言葉がね、、」

――血に染めて力で押し倒すのは簡単――

――本当に難しいのは論ずこと――

――そして前者は相手の為にならず、後者は相手の為になる――

——誰でも平等に強くなれる——

——その機会を奪うようなことはしてはならない——

「指導も同じなんだってさ。」

「だから私は四賀田に論しながら指導した。」

「四賀田が間違えるたびに、否定することなく論し、その意味を考えさせた。」

「自分で言うのもなんだけど、四賀田は学びやすい環境にいたと思う。」

「だからこそ、四賀田は優秀になり、、、勘違いをしてしまった。」

「安心して。四賀田も最初はあなたと同じで分からないことだらけだったから。」

「四賀田には私からも遠回しに言っておくから。」

すると薙崎は何かを紙片に書き始める。

そして書き終えると席を立ち、紙片を希代に差し出した。

「六番隊区画のこの広場に行ってみて。」

それは住所番地と公園名が書かれたものだった。

「あそこは貴族街で綺麗だし、きっと気分も晴れるはずよ。」

「くれぐれも無理はしないように！じゃあね。」

「あ、ありがとうございます、、！」

希代はもらった紙片に目を通す。

「何で読むんだろう、、。」

「ごうごうだに公園、、かな、、？」

To be continued.....



## 戦場に咲く蓮華草④

く六番隊区画く

薙崎に渡された紙片に書かれた公園に来て、公園の長椅子に座って一人俯き色々なことを考えていた。

そうして俯いて地面に目をやっていると、不意に細長い影が視界に入ってきた。

「やお嬢ちゃん。一人で浮かない顔をしてどうかしたかね？」

「あなたは、？」

希代が顔を上げると、後ろで結った長髪の白髪に、白い無精髭を生やした、いかにも貴族というような和装をした好老翁が立っていた。

そしてその好老翁は左腰に斬魄刀を差していた。

「儂は香合谷こうごうだにという。お主は？」

「私は大前田希世です、。。。」

すると香合谷は右手を顎に当て考える素振りを見せる。

「ふむ、浮かない顔をしておるが、側に置いてある斬魄刀を見るに、」  
「鍛錬で思い悩んでおるのか？」

凶星だった。

今しがた悩んでいたのは、どうすれば始解を習得できるか、ということだったのだ。  
「そうなんです、私はパパ上や兄様のように才能がありませんから、」。

希代は悲しそうに再度俯いた。

「お嬢ちゃん。よく聞きなさい。」

「儂も昔は護廷十三隊におつてな。十一番隊で凌ぎを削つておつた。」

「これでもそこそこに名は知れておつたんじゃよ。」

香合谷は希代の隣に腰を下ろした。

「儂も昔は、強さを追い求め、自分の才能の無さに嘆き、お主の様にいつも悩んでおつた。」

「じゃがな、年を食つた今じゃからこそわかる。」

「人が悩む程度の才能の差なんぞ、努力でなんとでもなるとな。」

「人々は皆、更木剣八や藍染惣右介は別格だと言うが、そんなことはない。」

「更木は卯ノ花殿に負けたときも、旅禍の小僧に負けたときもひたすら剣を振るつておつたし、藍染も常に学び、試行錯誤し、力をつけていた。」

「努力する姿を見ずして結果だけを見ると、別格だと思い込んでしまう。」

「事実、儂の教え子で、一番出来の悪く、才能のかけらもない奴が、唯一教え子の中で儂を超えた。」

「奴は、誰よりも現状を分析し、足りないところを認め、効率よく鍛錬できるよう毎日試行錯誤しておった。」

「学院高学年では優秀優秀と言われておったが、4年までは、まあくどうしようもならんほどじゃった。」

「お嬢ちゃんもそうだと思わんかね？」

「は、はあ、。」

更木剣八や藍染惣右介、卯ノ花烈といった次元の違う存在の話に、希代は素直に同意することができなかつた。

「まあ時期に分かる。」

話を終えた香合谷は立ち上がると希代の前に立った。

「よし一つ鍛錬という名の遊びをしよう。」

「あ、遊びですか？」

「哀れなじじいの頼みと思うて聞いておくれ。」

「は、はい、」

「儂の前に立つておくれ。」

突然のことの連続で混乱する希代は言われるがままに正対する形で立ち上がった。

「両手を前に。」

香合谷と希代同時に両手を前に出す。

「そして儂と手を握る。」

「えっ、、？」

突然香合谷に手を握られた希代は驚いてしまった。

「さあ、力勝負じゃ！」

そう言われた希代は、少し理解するのに時間がかかって、慌てて力を入れる。

「どうしたお嬢ちゃん！その程度か!？」

圧倒的な力の差によつて、香合谷に尻餅をつく形で優しく倒された。

「では次は、、」

尻餅をついた希代を起き上がらせると、再度手を握ったまま正対した。

「儂が力を入れた瞬間に半身になって引いてみる。」

「いくぞっ！」

香合谷が力を入れた瞬間、希代は言われた通りに半身となって香合谷を引いた。すると香合谷は思っていた以上に大きく前方へ倒れ込んだ。

「い、いてて、、、どうじゃ？お嬢ちゃん。」

「これを応用すれば、相手の力より少し強い攻撃ができると思わんかね？」

「相手の力に自分の力を足すのじゃ。」

「これならば自分より強い相手とも戦える気がせんか？」

「まあもちろん、霊圧差で攻撃が入らんこともあるが。」

すると香合谷は近くにあった鉄棒へと歩いていく。

「ほれ、これの下をくぐってみよ。」

希代は言われた通り自分より少し高いくらいの鉄棒をくぐり抜けた。

「どうじゃ？くぐるのはつらいか？」

「い、いえ、、、つらくはないです。」

「そうか、、、濃はつらい。お主より体を屈まねばならんからな。」

「つまりお主は少ない労力で相手の懐に潜り込める可能性を秘めておる。」

「相手よりも強い力が使えて、少ない労力で懐に潜り込める。」

「こう聞くと、お主は十分強くなる可能性を秘めてないかな？」

「自分が強くなれば、人に頼らずとも大事な者を守る。」

「それはつまり大事な者を自分の手で守れるというわけだ。」

香合谷はそう言うのと、羽織を正して希代に背を向ける。

「まあ、始解習得はそう遠くないかも知れんぞ？」

そして歩き出すと同時に、背に立つ希代に対して手を揺ら揺らと振って見せた。

「じゃあな、四番隊入隊希望の大前田希世ちゃんよ。」

く真央霊術院く

「では、今月も始解習得の授業を始める。」

「準備が出来た者から、始めっ!!」

夜の掛け声で一斉に学生達が斬魄刀を潜神体に突き刺す。

――

――希代――

――あなたが強くなりたいと願う理由は何――

「大事な人を守りたいから、！」

――どうやって――

「私自身が強くなって、皆んなを守る！」

――そう――

すると真つ暗闇だった周りに、突如花が咲に始める。

「この花は、？」

――あなたは兄を尊敬しているのね――

「兄様を、？」

――だからこそ――

――これが私――

「どういう、」

「――また会いましょう、希代――」

――

目を覚ますと、また真つ白の天井と青鹿の顔があつた。

「桃色の、花、？」

T o b e c o n t i n u e d . . . . .



## 戦場に咲く蓮華草⑤

〔真央靈術院〕

〔桃色の花、〕〕

希代は木刀を持ったまま斬魄刀とのやり取りについて考え込んでいた。

〔兄様を尊敬しているから、桃色の花、？〕〕

希世が自分の世界に入り込んでいる中、他の学生達は顔面蒼白となっていた。

それもそのはず、護廷十三隊隊長格でも体が竦むような人物が訪れていたからだ。

「きよ、今日は、更木十一番隊隊長が来てくださっている。」

剣八、一角、弓親と十一番隊の猛者を前に、青鹿は緊張で声が裏返っている。

「四楓院先生の口添えで、更木隊長が直々に稽古をつけてくださるそうだ。」

直々にと聞いて泡を吹いて倒れる学生もいた。

「い、これは望んでもできるようなものではないぞー！」

「立候補制だ！」

青鹿は流石に指名することが出来なかった。

しかしもちろん誰も挙手することもなく、

沈黙と、えげつない霊圧が流れるのみだった。

そして一分程経ったとき、ついに剣八が口を開いた。

「誰も来ねえのか？ ったく根性のねえ奴らだ。」

「こんな柔らけえ綿の棒で叩いたところで痛くも痒くもねえだろうが。」

しかし誰一人としてピクリとも動かない。

「チツ、つまんねえ。おい、てめえら帰る、」

誰も出てこないことに痺れを切らした剣八は学生に背を向け帰ろうとしたときだった。

「ま、待つてくださいい！」

「わた、、わたわた、、わたしが!! やります!!」

やっと上がった女学生の声に、剣八は不気味な笑みを浮かべ、振り返る。

「ほお？面白え。そこら辺の男共より根性あんじゃねえか。」

「てめえ名前は。」

とてつもない霊圧が希代のみならず、学生、青鹿を包み込む。

「お、おおおおおお大前田希代です！」

「震えてんじゃねえか！嬢ちゃん！」

一角が笑いながらにチャチャを入れた。

「テメエうるせえぞ!!」

「すいませんっ!!」

更木の怒号に辺りは静まり返る。

「大前田、、、。そうかよ。」

「行くぜ。大前田。」

その勇氣ある女学生に敬意を表してか、劍八は両手で黒い綿の棒を構えた。

「負けて当たり前だと思ふな。俺を殺す気で来い。」

その瞬間、剣八はとてつもない靈圧を放ちながら希世に斬りかかった。もちろん攻撃のスピードはいつもに比べて、かなり手加減したものではあったのだが。

——相手の力に自分の力を足すのじや——

希代は頭の中で香合谷の言葉を反芻していた。

「受け流す、、！」

「(そうすれば更木隊長の力は私のもの!)」

パンツ

鮮やかな胴。

棒の当たった高い音が道場に鳴り響きこだまする。

希代は更木の胴を打ち抜き背後で残心を残していた。

香合谷の言葉を受けてからの訓練では、常に相手の力を自分のものにするよう心がけ

ていた結果が、運良くここ一番というときに發揮できたのだ。

「まじかよっ、、！」

予想だにしていなかった出来事に、一角は文字通り開いた口が塞がらなかつた。そして弓親はというと、悔しそうに自身の親指を噛み締めていた。

「悔しいほどに美しい、、！」

パーーーーン

再度、棒の当たる音が響き渡る。

「気、抜いてんじゃねえよ。」

「斬魄刀なら霊圧差で効いてねえ時だつてあるだろうが。」

希代の顔面左半分は炭によつて真っ黒になっていた。

パン、パーーン、パン

「おら、実戦なら死んでんぞ。」

剣八は黒い綿の棒で希代を叩き続けた。

3分の訓練で、希代は全身真っ黒になり果てていた。

しかし更木に一太刀浴びさせた希代の功績は、瞬く間に尸魂界に轟いていく。

「ああの更木に一太刀浴びせた女学生がいるらしいー」

「次期剣八か!?」

「図らずも希代は始解習得訓練での出来事と併せて、学院内でも一躍目を引く存在となった。」

〈真央霊術院・付近の山林〉

夜一がいつもと違う軽装で学生の前に立っていた。

「今日は隠密機動の訓練じゃ。」

「皆も知つてあると思うが、儂は元隠密機動総司令官じゃ。」

「儂が一人一人直々に教えてやつてもよいのじゃが、あいにく儂は一人しかおらんのでなあ。」

「今日は元隠密機動、もしくは儂が稽古をつけたことがある者達を呼んできた。」

すると、特別講師達は瞬歩で続々と学生の前に現れる。

そしてその顔ぶれに学生達は驚愕することとなる。

それもそのはず。

そこに現れたのは、

現隠密機動総司令官兼二番隊隊長、碎蜂

二番隊副隊長、大前田希千代

六番隊隊長、朽木白哉

六番隊副隊長、四楓院夕四郎

九番隊第五席、西堂榮吉郎

元十二番隊隊長、浦原喜助

元二番隊副隊長、大前田希ノ進

だったからだ。

「四楓院夜一、貴様よもや《もしくは儂が稽古をつけた》とは私のことではあるまいな。」

そう問いただしたのは六番隊隊長で、唯一隠密機動の経験がない朽木白哉だった。

「なんじゃ心当たりがあるではないか。」

そこに悪意なく割って入ったのは夜一の弟の夕四郎だった。

「なるほど!! 朽木隊長は姉様のお弟子様だったのですね!!」

「夕四郎、貴様隊舎に帰ったら覚えておけ。」

「では、番号順に分かれて各講師につけ！」

番号順で分かれた結果、希代は碎蜂の班となった。

碎蜂が集まった班の学生に冷たく言い放つ。



「いいか。説明についてこれない者は置いていく。」

その言葉に皆緊張で体を強張らせた。

「ではまず、基本からだ。」

「これからお前たちに空蟬うつせみを教える。」

「そこのお前、前へ出ろ。」

一番前にいた希代は碎蜂に歩法説明の相手に指名される。

「は、はいっ!」

「お前、名は。」

「はい!大前田です!!」

——大前田です——

——大前田で——

——大前田——

「お、大前田だと、?」

碎蜂は少し離れたところで歩法の教養をしている部下の大前田を一瞥する。

まさかそんなはずはない。

碎蜂はそう自分に言い聞かせて平静を装った。

「貴様、下の名は、？」

「希代です！」

「ま、ま、まれ、？」

碎蜂は鏡花水月にかかっているのかと辺りの霊圧を探るが、もちろん藍染の霊圧は感じ取れない。

そして碎蜂の瞳孔が大きく開く。

「お、大前田、希、代だと、？」

「は、!!」

T o b e c o n t i n u e d . . . . .